鹿角市文化財調査資料74

特別史跡
大湯環状列石

発掘調査報告書(20)

2004－3

秋田県鹿角市教育委員会

序

特別史跡大湯環状列石は昭和６年に発見されて以来、縄文時代の精神文化を解明できる遺跡として多くの研究者の研究材料として取り上げられてきました。また、発見と同時に重要さが認識され保存・保護された史跡は、この環状列石を作り上げた人々ばかりでなく、現代に生きる人々の拠り所として心の奥底に根付き、縄文との会話を求めて多くの方々が訪れています。

鹿角市教育委員会が主体となり開始した発掘調査も、本年度で第20次調査となり、この間に少しずつですが縄文人の精神文化を紐解いてきました。平成10年度からは調査成果をもとに史跡の第Ⅰ期環境整備事業を進め、現在、縄文の雰囲気を醸し出すまでになっております。

平成16年度は発掘調査も21年目を迎えます。人生に例えると成人という一つの節目を過ぎました。これからは新しい史跡の解明と環境整備に新たなる志を持ち、その第一歩を踏み出したいと存じます。

本報告書は、平成15年度に実施した調査成果をまとめたものであり、縄文文化の研究資料としてご活用していただければ幸いに存じます。

終わりに、発掘調査並びに環境整備に際し、多大なるご協力とご指導を賜わりました文化庁、秋田県教育委員会、関係機関各位に心から感謝を申し上げるとともに、今後につきましてもご協力とご指導を賜りますようお願い申し上げます。

平成16年３月

鹿角市教育委員会

教育長　織　田　育　生

例　　言

1．本報告書は、平成15年度に国並びに秋田県の補助を得て実施した特別史跡大湯環状列石発掘調査の成果をまとめたものである。調査の概要については現地説明会、大湯ストーンサークル館「縄文に学ぶ」において公表してきたが、本報告書を正式なものとする。

2．本報告書の作成並びに執筆については生涯学習課主事　三浦貴子が行ったほか、大湯ストーンサークル館主査　藤井安正、同館主任　花海義人が加わった。

3．出土資料等の鑑定・分析については、下記の方々に依頼・委託した。

旧地形および出土岩石鑑定
石器類の石質鑑定……鎌　田　健　一（秋田県立小坂高等学校　教頭）

出土炭化材の樹種同定……山　谷　昌　久（鹿角市立十和田中学校　教諭）

4．土層や土器等の色調の記載には『新版　標準土色帖』（日本色彩研究所）を使用した。

5．遺物の実測、拓本、トレース等の一連の作業は、調査員の指導のもとに調査補助員、整理作業員が行った。

6．本報告書に掲載した図版には縮尺スケールを付した。なお、写真図版については任意の縮尺とした。

7．本報告書に掲載した地形図は、建設省（現国土交通省）国土地理院発行の『花輪』を使用した。

8．本報告書に使用した用語については統一するように努めたが、数度にわたり使用されるものについては簡略している。なお、図版並びに写真図版で下記のような記号を使用した。

ＳＩ…竪穴住居跡　　ＳＫ…土坑　　ＳＫ(F)…フラスコ状土坑　　ＳＫ(T)…Ｔピット

ＳＸ(ｆ)…焼土遺構　　Pit…柱穴状ピット

▨…遺構確認面下の土層　　▒…焼土・柱痕・礫群・磨面・須恵器断面

9．発掘調査並びに報告書作成にあたり、下記の方々よりご指導・ご協力・ご助言をいただきました。心から感謝申し上げます。（敬称略・順不同）

阿部義平、遠藤正夫、本中　眞、坂井秀弥、岡田康博、平澤　毅、葛西　励、熊谷常正
小林達雄、沢田正昭、冨樫泰時、安村二郎、成田滋彦、鈴木克彦、高田和徳、田中哲夫
村越　潔、岡村道雄、中村良幸、佐藤智雄、戸村正己、児玉大成、桐生正一、井上雅孝
金野寛子、安達尊伸、田中倫久、滝本　学

本 文 目 次

序

例　言

本文目次

図版・写真図版・表目次

第Ⅰ章　遺跡の環境

1　遺跡の位置と立地 …… 1

2　大湯環状列石周辺の遺跡 …… 3

3　遺跡の層序と周辺の地形 …… 5

第Ⅱ章　調査の概要

1　調査要項 …… 12

2　調査の方法 …… 13

3　調査の経過 …… 13

第Ⅲ章　G_4区の検出遺構と出土遺物

1　竪穴住居跡 …… 16

2　柱穴状ピット …… 26

3　焼土遺構 …… 31

4　土　坑

(1)　Tピット …… 35

(2)　土　坑 …… 37

(3)　フラスコ状土坑 …… 43

5　礫　群 …… 44

6　遺構外出土遺物

(1)　土　器 …… 44

(2)　石　器 …… 72

(3)　土製品 …… 82

(4)　石製品 …… 83

第Ⅳ章　G_4区歴史時代検出遺構と出土遺物 …… 86

第Ⅴ章　自然科学的調査

1　炭化材の樹種同定 …… 88

第Ⅵ章　分析と考察

1　鹿角市内発見の後期住居跡の特徴について …… 90

2　トレンチ掘り調査の利点から ……109

3　G_4区検出第1号竪穴住居跡の堆積状況について ……109

4　遺跡全体の旧地形と遺構の選地について ……112

5　G_4区遺物集中域の土器破片分布状況について ……115

第Ⅶ章　調査のまとめ ……120

参考文献 ……125

報告書抄録 ……126

写真図版 ……127

図版・写真図版・表目次

図 版 目 次

第１図　遺跡の位置と立地 …… 1
第２図　調査区位置図 …… 2
第３図　大湯環状列石周辺の遺跡 …… 4
第４図　G_4区基本層序(1) …… 7
第５図　G_4区基本層序(2) …… 8
第６図　G_4区基本層序(3) …… 9
第７図　G_4区基本層序(4) …… 10
第８図　G_4区基本層序(5) …… 11
第９図　G_4区遺構配置図・地形復元図 …… 15
第10図　G_4区第１号竪穴住居跡実測図 …… 17
第11図　G_4区第１号竪穴住居跡内ミニチュア土器出土状況コの字状施設実測図 … 18
第12図　G_4区第１号竪穴住居跡出土遺物分布　19
第13図　G_4区第１号竪穴住居跡出土土器実測図 …… 20
第14図　G_4区第１号竪穴住居跡出土土器拓影図(1) …… 21
第15図　G_4区第１号竪穴住居跡出土土器拓影図(2) …… 22
第16図　G_4区第１号竪穴住居跡出土土器拓影図(3) …… 23
第17図　G_4区第１号竪穴住居跡出土土器拓影図(4) …… 24
第18図　G_4区第１号竪穴住居跡出土石器実測図・土器片利用土製品拓影図　25
第19図　G_4区第２号竪穴住居跡実測図 …… 27
第20図　G_4区柱穴状ピット実測図(1) …… 28
第21図　G_4区柱穴状ピット実測図(2) …… 29
第22図　G_4区第１号竪穴住居跡柱穴状ピット実測図 …… 31
第23図　G_4区焼土遺構実測図(1) …… 32
第24図　G_4区焼土遺構実測図(2) …… 34
第25図　G_4区Ｔ－ピット実測図 …… 36
第26図　G_4区土坑実測図 …… 38
第27図　G_4区第１号土坑出土土器拓影図 … 39
第28図　G_4区第１号土坑出土石器実測図 … 39
第29図　G_4区第８号土坑出土剥片接合状況(1)　40
第30図　G_4区第８号土坑出土剥片接合状況(2)　41
第31図　G_4区第８号土坑出土剥片実測図 … 42
第32図　G_4区フラスコ状土坑実測図 …… 43
第33図　G_4区礫群実測図 …… 45
第34図　G_4区土器破片出土分布状況 …… 46
第35図　G_4区48ライントレンチ出土土器拓影図(1) …… 47
第36図　G_4区48ライントレンチ出土土器拓影図(2) …… 48
第37図　G_4区48ライントレンチ出土土器拓影図(3) …… 49
第38図　G_4区48ライントレンチ出土土器拓影図(4) …… 50
第39図　G_4区遺構外出土土器実測図(1) …… 53
第40図　G_4区遺構外出土土器実測図(2) …… 54
第41図　完形土器出土状況 …… 54
第42図　G_4区遺構外出土土器拓影図(1) …… 55
第43図　G_4区遺構外出土土器拓影図(2) …… 56
第44図　G_4区遺構外出土土器拓影図(3) …… 57
第45図　G_4区遺構外出土土器拓影図(4) …… 58
第46図　G_4区遺構外出土土器拓影図(5) …… 59
第47図　G_4区遺構外出土土器拓影図(6) …… 60
第48図　G_4区遺構外出土土器拓影図(7) …… 61
第49図　G_4区遺構外出土土器拓影図(8) …… 62
第50図　G_4区遺構外出土土器拓影図(9) …… 63
第51図　G_4区遺構外出土土器拓影図(10) …… 64
第52図　G_4区遺構外出土土器拓影図(11) …… 65
第53図　G_4区遺構外出土土器拓影図(12) …… 66
第54図　G_4区遺構外出土土器拓影図(13) …… 67
第55図　G_4区遺構外出土土器拓影図(14) …… 68
第56図　G_4区遺構外出土土器拓影図(15) …… 69
第57図　G_4区遺構外出土土器拓影図(16) …… 70
第58図　G_4区石器出土分布状況 …… 72
第59図　G_4区剥片出土分布状況 …… 72
第60図　G_4区遺構外出土石器実測図(1) …… 74
第61図　G_4区遺構外出土石器実測図(2) …… 75
第62図　G_4区遺構外出土石器実測図(3) …… 76
第63図　G_4区遺構外出土石器実測図(4) …… 78
第64図　G_4区遺構外出土石器実測図(5) …… 79

第65図　G₄区遺構外出土石器実測図(6) …… 80
第66図　G₄区土製品分布状況 …… 82
第67図　G₄区遺構外出土土製品実測図・拓影図 …… 84
第68図　G₄区石製品出土分布状況 …… 85
第69図　G₄区遺構外出土石器品実測図 …… 85
第70図　G₄区焼土遺構実測図 …… 87
第71図　市内遺跡確認住居(1) ……101
第72図　市内遺跡確認住居(2) ……102
第73図　市内縄文中期末葉～後期末葉住居の相関図 ……104
第74図　参考住居跡 ……107
第75図　G₄区第１号竪穴住居跡堆積土状況・遺物出土状況 ……111
第76図　G₄区48トレンチ遺構外出土遺物分布 ……118
第77図　全調査区遺構分布図・旧地形復元図

写真図版目次

ＰＬ１　第８号土坑出土剥片 …… 42
ＰＬ２　炭化材分析試料 …… 89
ＰＬ３　大湯環状列石全景 ……127
ＰＬ４　G₄区全景、G₄区遺構確認状況、48トレンチ礫群 ……128
ＰＬ５　第１号竪穴住居跡 ……129
ＰＬ６　G₄区54トレンチ、72トレンチ、第１・２号竪穴住居跡、遺物出土状況、作業風景 ……130
ＰＬ７　ピット、フラスコ状土坑、Ｔ－ピット、土坑遺構確認状況 …131
ＰＬ８　ピット、Ｔ－ピット、土坑、小ピット群、柱痕確認状況 ……132
ＰＬ９　ピット、遺物出土状況、56トレンチ、礫群、現地説明会風景 ……133
ＰＬ10　第１号竪穴住居跡出土遺物 ……134
ＰＬ11　第１号土坑出土遺物 ……135
ＰＬ12　第８号土坑出土遺物 ……136
ＰＬ13　遺構内外出土遺物(1) ……137
ＰＬ14　遺構外出土遺物(1) ……138
ＰＬ15　遺構外出土遺物(2) ……139
ＰＬ16　遺構外出土遺物(3) ……140
ＰＬ17　遺構外出土遺物(4) ……141
ＰＬ18　遺構外出土遺物(5) ……142
ＰＬ19　遺構内外出土遺物(2) ……143
ＰＬ20　遺構外出土遺物(6) ……144

表　目　次

第１表　大湯環状列石周辺の遺跡 …… 4
第２表　G₄区柱穴状ピット一覧表 …… 30
第３表　石材一覧表 …… 81
第４表　市内で検出された竪穴住居一覧(1) …… 91
第５表　市内で検出された竪穴住居一覧(2) …… 92
第６表　市内で検出された竪穴住居一覧(3) …… 93
第７表　市内で検出された竪穴住居一覧(4) …… 94
第８表　市内で検出された竪穴住居一覧(5) …… 95
第９表　市内で検出された竪穴住居一覧(6) …… 96
第10表　市内で検出された竪穴住居一覧(7) …… 97
第11表　市内で検出された竪穴住居一覧(8) …… 98
第12表　市内で検出された竪穴住居一覧(9) …… 99
第13表　市内で検出された竪穴住居一覧(10) ……100
第14表　住居平面形態の分類 ……103
第15表　炉の種類分類 ……105
第16表　参考住居一覧 ……106
第17表　後期初頭～中葉住居の共通事項一覧 ……108
第18表　調査区全域土器破片出土状況 ……119
第19表　G₄区48ライン土器破片出土状況 …119

第Ⅰ章　遺跡の環境

1．遺跡の位置と立地

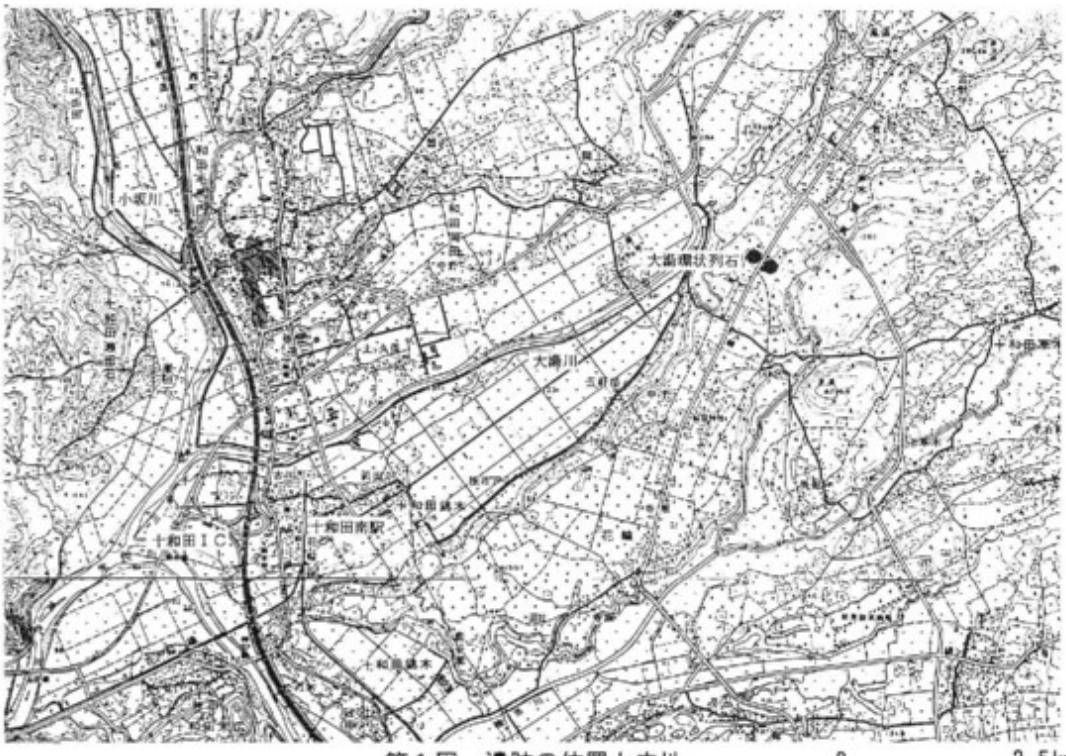
鹿角市は、秋田県の北東部に位置する。日本文化の原点である縄文文化を育んだ落葉広葉樹林が奥羽山脈中に広がり、そのなかに所在し紺碧の神秘的な湖面をもつ十和田湖、名湯といわれる八幡平温泉郷への南玄関口として全国的に周知され、数多くの人々が往来している。

鹿角市のある「鹿角盆地」を一望すると、至るところに複雑な段丘地形が形成されていることがわかる。これらの段丘は、十和田湖の度重なる火山活動と盆地を貫流する米代川とその支流によって浸食されたもので、特に盆地東側に多くが形成されている。

この舌状台地には、縄文時代をはじめとする遺跡が点在し、その数は平成元年の時点で416ヶ所が確認されている。

特別史跡大湯環状列石は、鹿角市の北東部に位置する。大湯川と豊真木沢川の浸食によってつくりだされた全長5.6km、幅0.5～1.0km、標高150～190mの通称「中通台地」と呼ばれる台地のほぼ中央に位置している。

史跡に立つと、鹿角盆地を取り囲む四方の山並みを見渡すことができ、環状列石構築と大き



第１図　遺跡の位置と立地　　0　2.5km

F6区
F1区
F5区
D区
D1区
F4区
F3区
F2区
G区
D2区
D3区
D5区
D4区
E4区
D8区
万願寺遺跡
G2区
D6区
D7区
G1区
C1区
E1区
B2区
B4区
B1区
B3区
A1区
A2区
A3区
0
200m

第2図　調査区位置図

な関りをもつ天体の動きを手に取るように感じることができる。また、史跡のある台地斜面には環状列石を構築した人々も手に掬い口に含んだであろうと思われる湧水が至るところに点在しているほか、彼らの重要な糧であったドングリやクルミ、きのこ、あけび等が自生している。

万座環状列石と野中堂環状列石を中心とする地域は、平成10年度から平成14年度にかけて第Ⅰ期環境整備事業が実施され、列石と関連のある遺構や旧地形の復元、植栽により現在は縄文の雰囲気を醸しだし、日本文化の原点をつくりあげた縄文の人々と会話のできる場所、憩いの場として多くの人々が来跡している。

発掘調査区は、万座環状列石の西側台地縁辺部（G_4区）であり、史跡公有化以前はタバコ畑や栗林・杉林であった。　　（藤井安正）

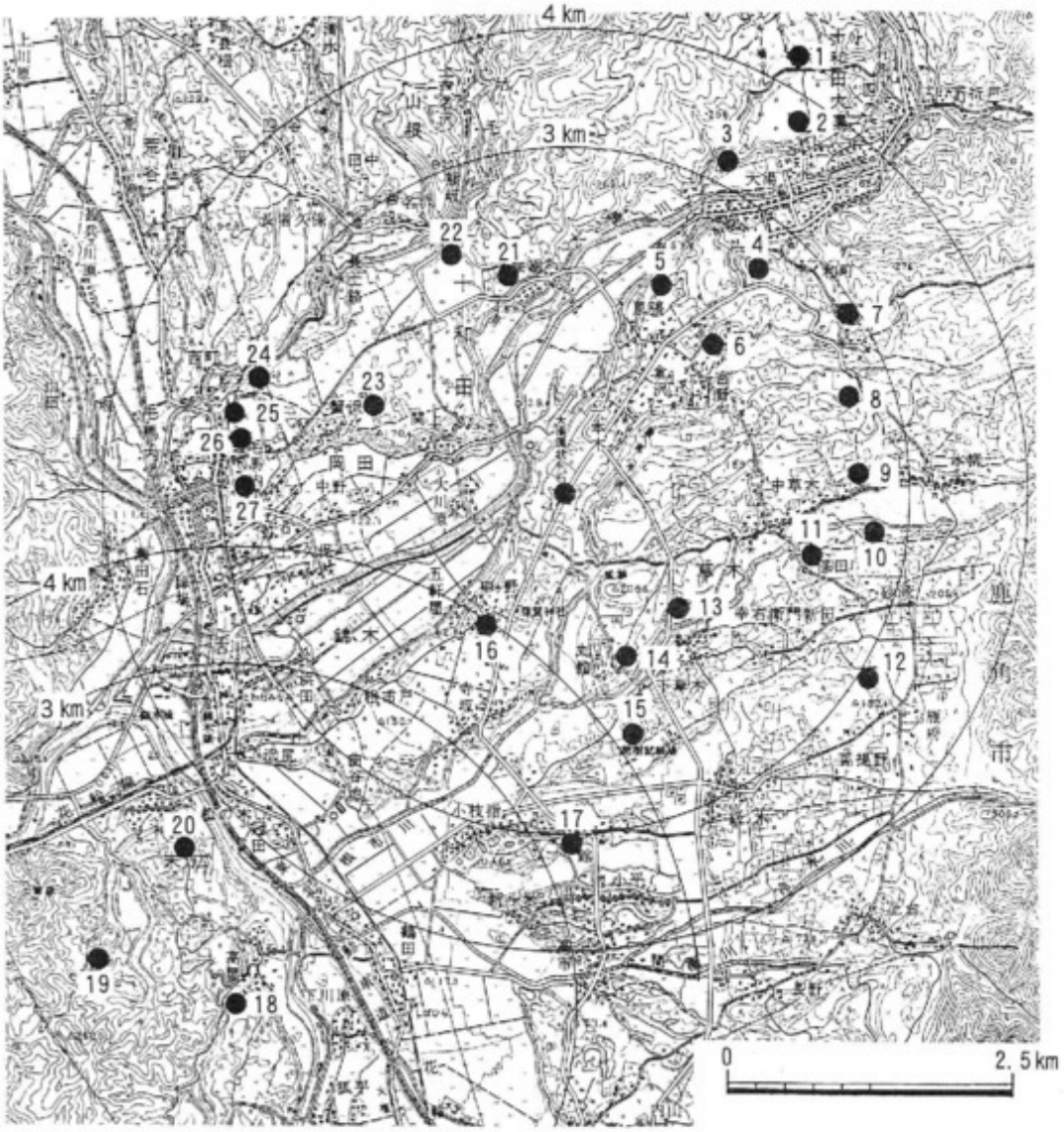
2．大湯環状列石周辺の遺跡

鹿角市内には、平成元年の時点で416ヶ所の遺跡が発見されている。これらの遺跡は、盆地東側に発達した舌状台地に多く集り、その中でも大湯環状列石周辺はその密度が高い。

大湯環状列石を理解するうえで、この環状列石を作り上げた人々のムラの存在（どこにあるのか）が課題として残されており、鹿角市教委では列石から離れた場所にそのムラを想定している。第３図に加筆した円は、大湯環状列石と市内で環状列石が確認されたもう一つの遺跡である高屋館跡を中心とした半径３kmと４kmのラインである。ラインの設定については、高屋館跡環状列石の構築は大湯環状列石より先行するものであるが、その大半は重複する時期が設定できることから個々の環状列石の影響力を受ける範囲をこの中間地点までとした。さらに、大湯環状列石に使用されている石材はいずれも水磨され、角が取れているものであり、このような石を採取できる場所は原産地（諸助山）の山間を抜ける安久谷川より、さらに下流である大湯川との合流地域（大湯温泉街）であることから、この２点を加味していくと、大湯環状列石を中心として広がる領域は半径３～４kmと想定でき、この範囲に環状列石を創り出した人々のムラが存在するものと考えられる。

第３図は、大湯環状列石周辺の遺跡分布状況である。列石と時期の同じくするものに限ったためその数は少ないが、この中で発掘調査が行われた遺跡や列石との関連が注目される遺跡についてその概要を記する。

黒森山麓遺跡群(1)は、大湯環状列石の北側4.5kmの地点に所在する。昭和45年に調査が行われ、竪穴住居跡５軒が確認されている。平面形は円形を基調として、第５号竪穴住居跡以外には石組複式炉が設けられ、発見当時は北限の複式炉として注目を浴びた。また、第４号住居跡からは正立の状態で石棒が出土した。なお各住居内からは縄文時代中期後葉の土器破片が出土している。遺構外から出土した土器には後期のものも含まれており、広い範囲を調査すること



第３図　大湯環状列石周辺の遺跡

第１表　大湯環状列石周辺の遺跡

番号	遺跡名	摘　　要	番号	遺跡名	摘　　要
1	黒森山麓	縄文中期末葉の集落	15	土木	縄文中期～後期、遺物包含地
2	下内野Ⅱ	縄文中期末葉の集落	16	申ケ野Ⅴ	縄文後期、遺物包含地
3	下内野Ⅲ	縄文後期・配石遺構	17	平元館	縄文後期・平安、遺物包含地
4	小清水	縄文後期・配石遺構	18	高屋敷跡	縄文後期・中世、環状列石
5	上屋布Ⅱ	縄文後期・遺物包含地	19	板橋Ⅱ	縄文後期・遺物包含地
6	堤尻Ⅰ・Ⅱ	縄文後期・遺物包含地	20	上ノ野Ⅳ	縄文中期～後期、遺物包含地
7	和町Ⅰ	縄文後期・遺物包含地	21	吹越Ⅱ	縄文後期・遺物包含地
8	根市	縄文後期・遺物包含地	22	下砂沢	縄文前期～後期・弥生、配石
9	松舟	縄文後期・遺物包含地	23	竹林	縄文後期・遺物包含地
10	崩原	縄文後期・遺物包含地	24	湯坂Ⅱ	縄文後期・遺物包含地
11	保田Ⅱ	縄文後期・遺物包含地	25	寺ノ上Ⅲ	縄文後期・遺物包含地
12	高屋館	縄文後期・遺物包含地	26	寺ノ上Ⅰ	縄文後期・遺物包含地
13	草木A	縄文後期～晩期・遺物包含地	27	柏崎館跡	縄文後期～晩期・中世、包含地
14	丸館Ⅳ	縄文後期・遺物包含地	摘要は平成元年分布調査より。　太字は発掘調査実施遺跡		

によって後期の集落を検出する可能性が高い。

下内野Ⅱ遺跡(2)は、大湯環状列石の北側４㎞の地点に所在する。台地南側縁辺部に立地している。携帯電話の電波塔建設に先だって約100㎡ほどを調査し、住居跡６軒、フラスコ状土坑７基を検出した。住居の構築時期は縄文中期後葉を中心とする時期である。遺構外からの出土土器に後期初頭から前葉の土器破片が多量に混入していた。調査期間中に土器分布観察を行ったところ広い範囲に土器の散布が見られたことから天戸森遺跡のような大規模な遺跡である可能性が極めて高い。黒森山麓遺跡と同様に広い範囲を調査することによって後期の集落を検出する可能性が高い。

下内野Ⅲ遺跡(3)は、下内野Ⅱ遺跡の西方0.4㎞の地点に所在する。昭和60年頃に周知の遺跡として登録されたもので、遺跡発見届では配石遺構となっている。平成元年に鹿角市教育委員会が行った市内遺跡詳細分布調査では、大湯環状列石の構築石材と同じ石英閃緑玢岩が引き抜かれ畑境に山積みとなっていた。

小清水遺跡(4)は、大湯環状列石ののる台地の付根にあたる。平成元年度の遺跡詳細分布調査では、縄文後期土器破片とともに石英閃緑玢岩がリンゴの木の更新のため引き抜かれ畑境に山積みとなっていた。環状列石の存在をうかがわせるとともに、大湯環状列石の石材の原産地である諸助山（露頭場所）の中間地点にあたることから石材の集積地とも考えられる。下内野Ⅲ遺跡・下清水遺跡とも隣接地で、配石遺構の存在が極めて高い遺跡であり、環状列石の成立過程を考察する上では重要な遺跡である。

上屋布Ⅱ遺跡(5)、堤尻Ⅰ・Ⅱ遺跡(6)、中ケ野Ⅴ遺跡(16)は大湯環状列石と同じ時期であり、同じ台地上に位置する最も近い遺跡であり、関連が注目される。

草木Ａ遺跡は、豊真木沢川を挟んだ台地先端に所在し、昭和49年に広域農道建設に先だって調査された。この調査で遺構は検出されなかったが後期後半の土器が出土している。調査地点の後背は平坦な畑が広がっており、集落の存在を想定することができる。

高屋館跡(18)からは大湯環状列石とほぼ時期を同一とする環状列石が発見されている。環状に配置された配石遺構と、これを囲み規則的に配置された建物跡で構成されるもので、環状列石の研究に欠かせない遺跡となっている。

下砂沢遺跡(22)は、工業団地造成に伴って発掘調査が行われた。大湯環状列石とは大湯川を挟んだ台地の北側縁辺部に位置する。配石遺構２基とともに後期土器破片が数点出土した。

（藤井安正）

３．遺跡の層序と周辺の地形

遺跡の層序

遺跡の層序は下記のとおりである。層序の分層についてはこれまでの基準によった。

第Ⅰ層は、大湯浮石層までの黒色土（耕作土）で層厚10cm～45cmを測り、遺跡全体を覆っている。

第Ⅱ層は、大湯浮石層で地質学上「十和田ａ降下火山灰」と呼ばれる。色調は明黄褐色～淡黄褐色を呈し、層厚５cm～18cmを測る。本来は遺跡全体を覆う層であるが耕作により一部消失している地域もある。色調や粒径によって分層することができる。Ⅱａ層は粒子の極めて細かな火山灰で所謂「パウダー」状である。Ⅱｂ層は粒径0.5cm～４cmを測る浮石（軽石）層で、下位に進むにしたがってその粒径は大きくなり、降下火山灰の特徴を示している。

第Ⅲ層は大湯浮石層～地山漸位層（第Ⅳ層）までの黒色土、黒褐色土から構成される層である。色調・混入物・堅さによって分層することができる。Ⅲａ層は黒色土で混入物をほとんど含まず、同色・同質であるⅢｂ層と比べ、堅くしまっている。Ⅲａ層の層厚は５cm～10cm、Ⅲｂ層の層厚は３cm～10cmを測る。Ⅲｃ層はチョコレート色を呈した極暗褐色土で、層厚は５cm～21cmを測る。万座環状列石周辺及び同北側（F_3区)で確認された環状配石遺構は本層が構築面となる。Ⅲｄ層は黒褐色を呈する層で、調査区に入り込んだ沢地に厚く堆積している。層厚は10cm～40cmを測り、地山粒を含んでいる。遺物包含層であるとともに縄文時代後期初頭～前葉の遺構確認面でもある。

第Ⅳ層は地山直上の暗褐色土層で、地山ブロックを多量に含み、層厚は10cm～37cmを測る。

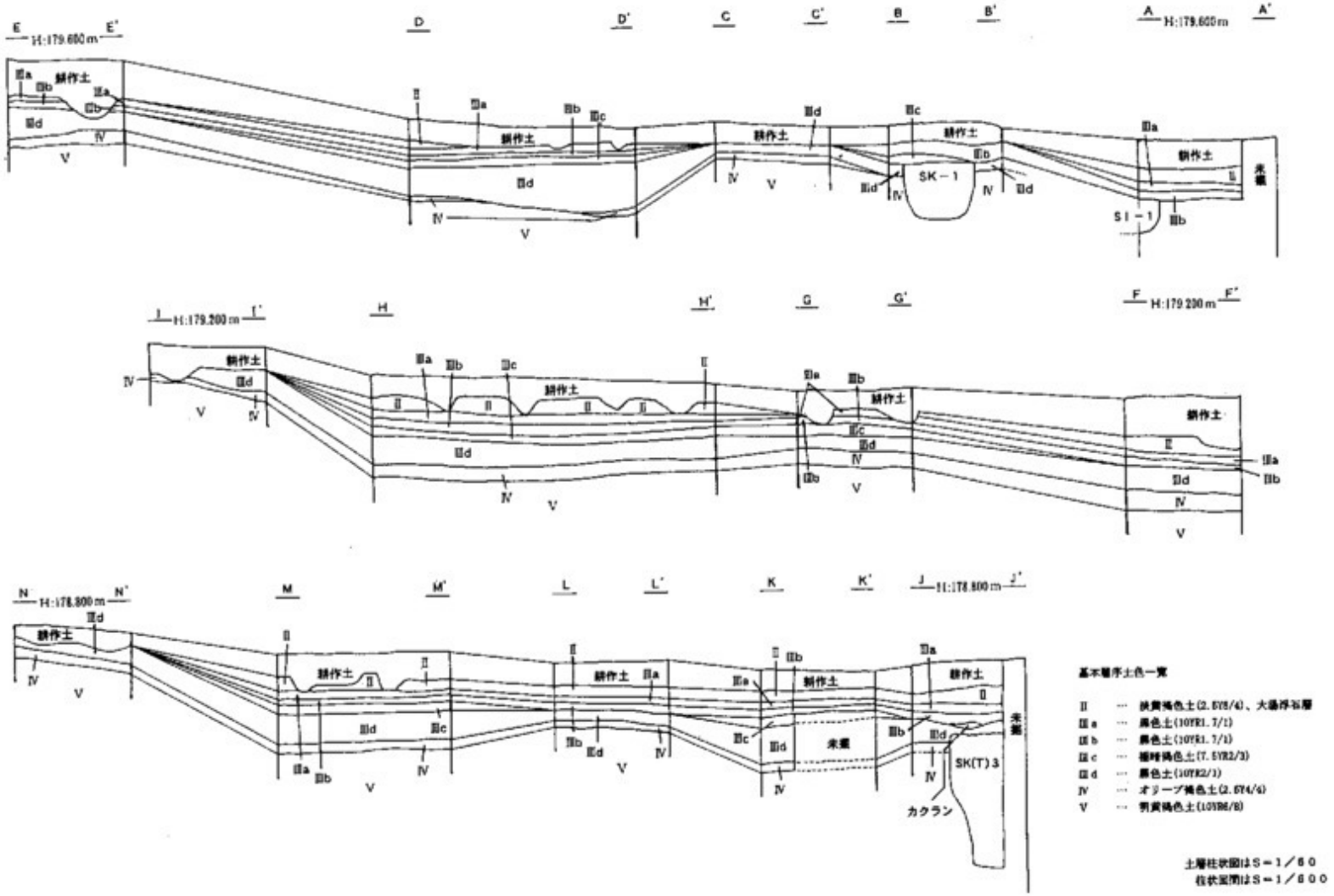
第Ⅴ層は地質学上「申ヶ野火山灰」と呼ばれる黄褐色土層で、十和田火山の火砕流にあたる。

周辺の地形と自然

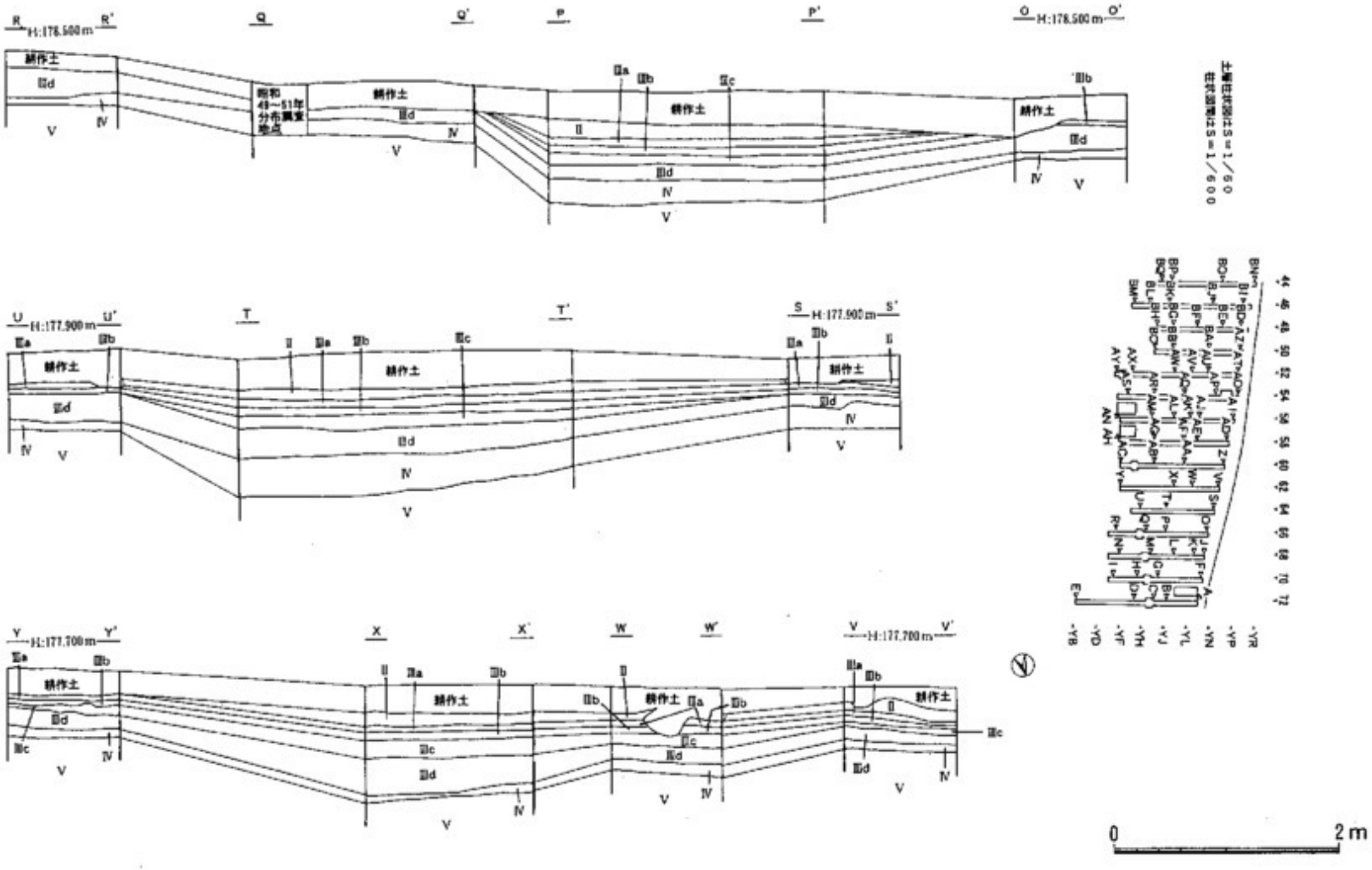
大湯環状列石の所在する通称「中通台地」は、長さ5.4km、幅0.5～1.0km、標高190m～150mで、南東に向けて緩やかに傾斜する。台地は十和田（湖）火山を起源とする火砕流が、大湯川と豊真木沢川の浸食によって形成されたもので水田面との比高差は約40mを測る。

遺跡の層序第Ⅴ層は「申ヶ野火山灰層」と呼ばれるもので、黄褐色を呈するもので遺跡隣接地の崩落部の観察では層厚1.0mから2.5mを測る。第Ⅴ層下には「鳥越火山灰層」といわれるシラス層が続き、発掘調査で確認されるフラスコ状土坑やＴピットといった掘り込みの深い遺構はこの火山灰層に達するものもある。

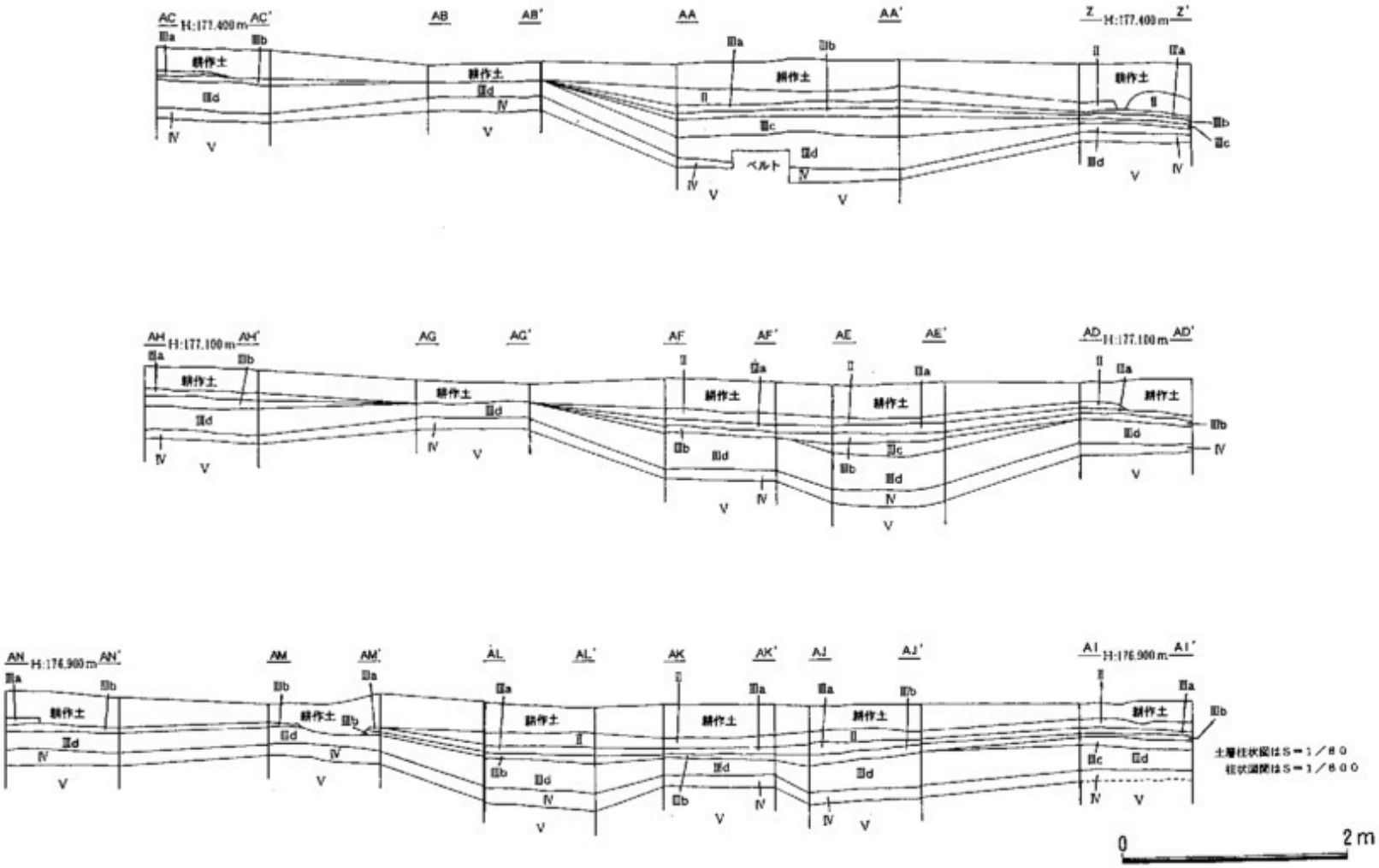
台地斜面は下位の水田面まで約45度の傾斜をもち、起伏が見られる。沢地の至る所では湧水がみられ、万座環状列石の北西側斜面の湧水はこの中でも最大の湧出量を誇っている。近年「水場遺構」の確認例が全国的に増えているが、本遺跡と関連ある水場遺構の確認される可能性が極めて高い地域である。また斜面のほとんどは杉が植林されているが、所々にクリ、ドングリなどと言った落葉広葉樹が残され、春・秋のシーズンにはバッケ（ふきのとう）やゼンマイ、きのこが自生し、山菜を取る人々の姿を目にする。また周辺の自然環境と史跡内に植栽された樹木が一体化してきており、ニホンカモシカやサルが出現することもある。（藤井安正）



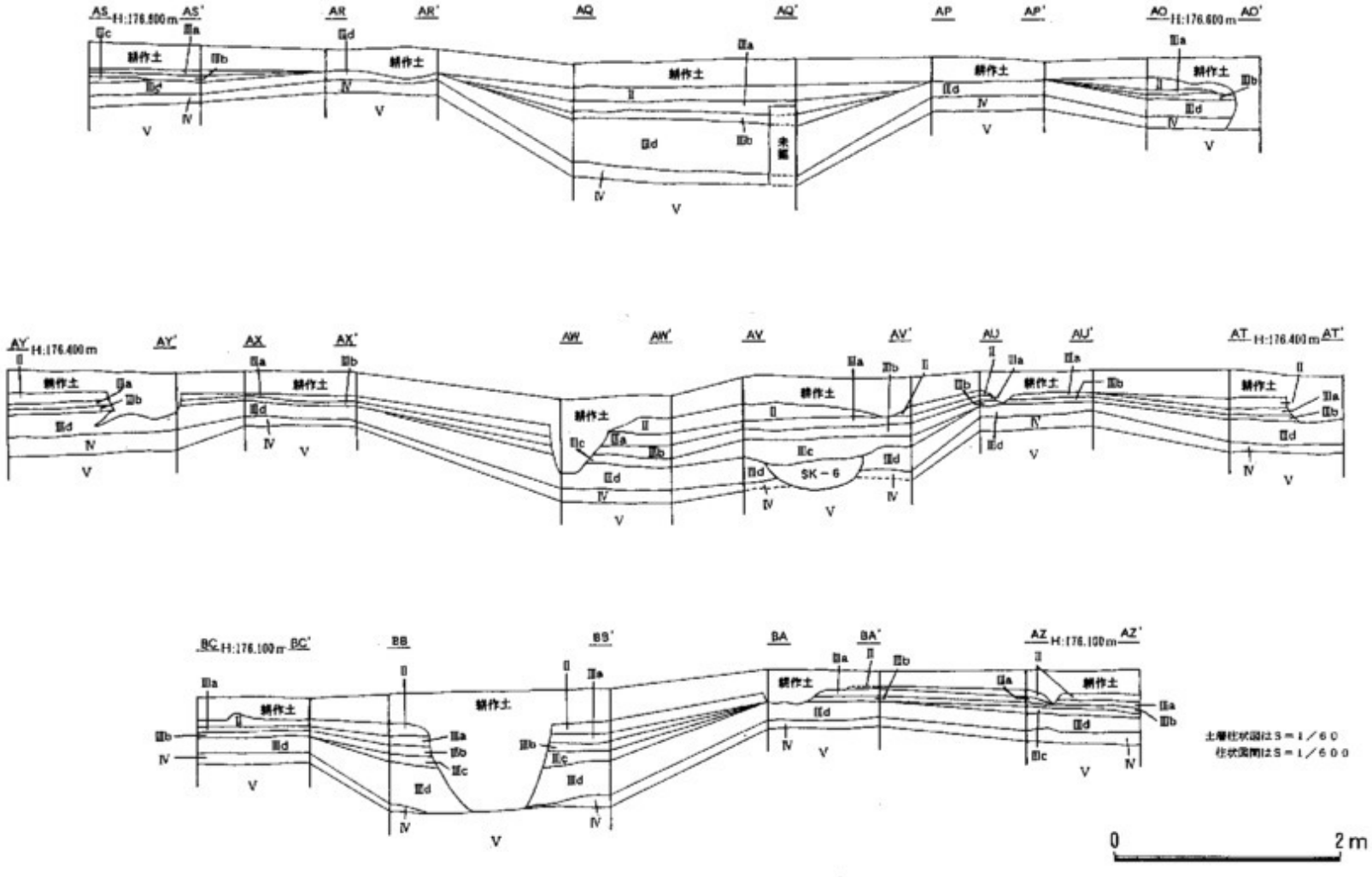
第４図　Ｇ₄区基本層序(1)



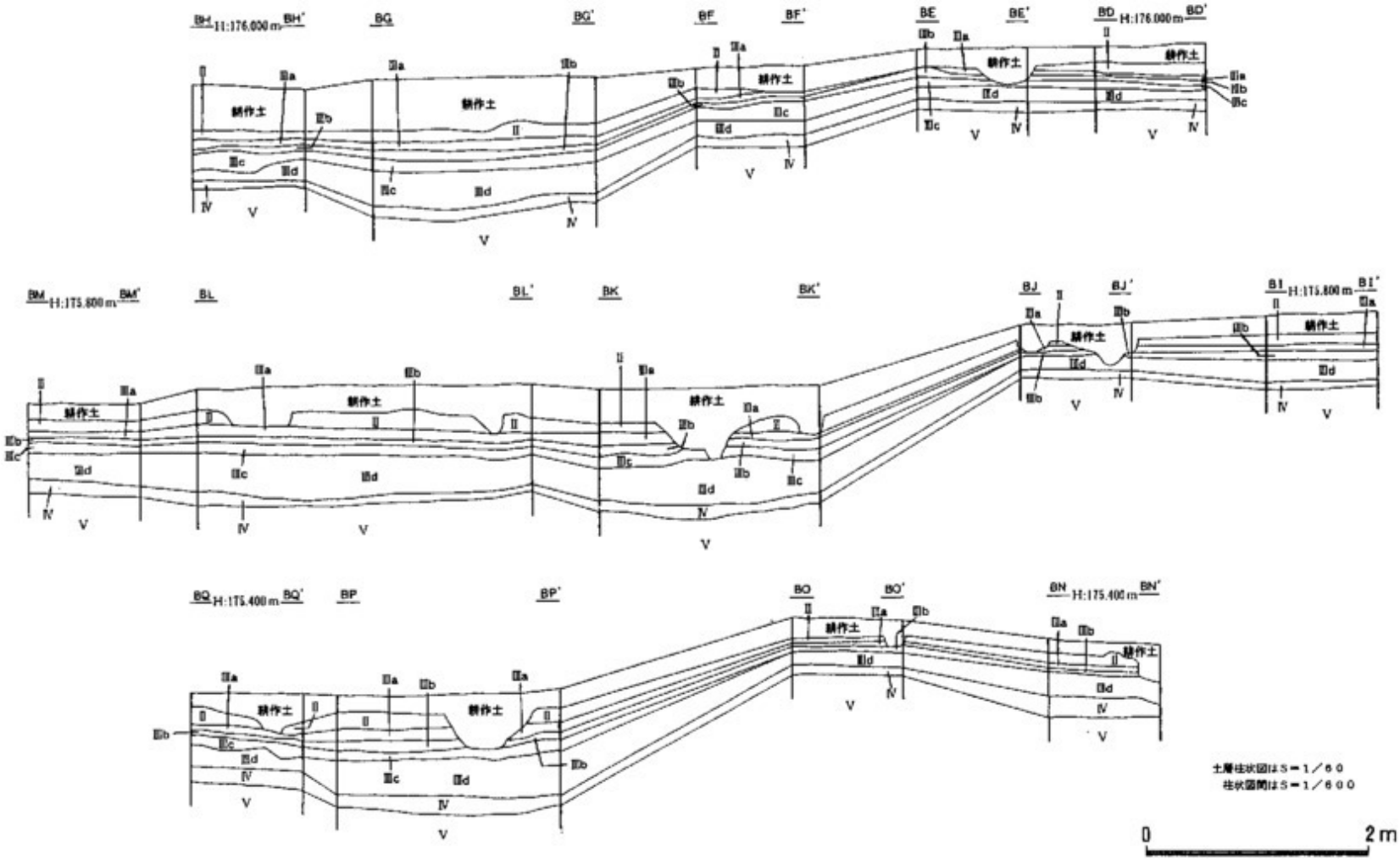
第5図　G₄区基本層序(2)



第6図　G₄区基本層序(3)



第7図　G₄区基本層序(4)



第８図　G₄区基本層序(5)

第Ⅱ章　調査の概要

1．調査要項

1．遺　跡　名　特別史跡大湯環状列石（遺跡番号：123）

2．調査の目的　第19次発掘調査で確認された竪穴住居跡の分布範囲と遺構・遺物の分布状況及び旧地形を把握する。

調査によって得られたデータは、環境整備の資料とする。

3．調　査　地　秋田県鹿角市十和田大湯字万座29－２ほか（調査地名　G_4区）

4．発掘調査面積　1,485㎡（調査対象面積8,344㎡）

5．調査期間　調査期間　平成15年５月12日～平成15年10月３日

整理報告書作成　平成15年10月１日～平成16年３月31日

6．調査主体者　鹿角市教育委員会

7．調査担当者　鹿角市教育委員会生涯学習課

秋　元　信　夫（文化財班　班長）

三　浦　貴　子（文化財班　主事）

8．調査参加者　調査指導　武　藤　祐　浩（秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室学芸主事）

調　査　員　鎌　田　健　一（秋田県立小坂高等学校　教頭）

山　谷　昌　久（鹿角市立十和田中学校　教諭）

調査補助員　松田隆史、柳沢和仁、廣瀬康裕、川又庸好

石井崇吉、田中辰美

調査作業員　三浦茂雄、高嶋　剛、大森勝次、石川三郎、赤坂繁昭

高村サツ、柳沢勝江、宮沢カヨ、柳舘愛子、児玉フデ

苗代沢ノブ、兎沢サツ子、木村千鶴江、宮沢トミエ

田中栄子、柳沢千晶、柳沢ヤス、木村キン、関イサ

柳沢恵美子、田中美千栄、成田由紀子、中澤節子

佐藤良子

整理作業員　福島美紀子、田中栄子、柳沢千晶、黒沢文子

9．事　務　局　鹿角市教育委員会　生涯学習課

生涯学習課長　三　上　　豊

文化財保護班長　秋　元　信　夫（調整）

主　　事　上　田　　学（事務）

主　　事　三　浦　貴　子（調査）

10. 協力機関　文化庁文化財部記念物課、秋田県教育委員会、独立行政法人奈良文化財研究所、筑波大学、國學院大学、盛岡大学、秋田県埋蔵文化財センター、秋田県立博物館、株式会社シン技術コンサル、大湯ストーンサークル館

2．調査の方法

調査区内のグリッドについては、第１次発掘調査以来のN－49°－Wを基準線とし、万座環状列石内に打設した基準杭より延長し５m単位の方眼を設定した。グリッドの名称はアルファベットと算用数字を組み合わせ、西側の杭をもってグリッド名とした。

調査は遺跡の保存を第一義に、遺構の分布状況や旧地形が読み取ることができるようにトレンチを設定した。なお遺構の分布を確認するため、一部については面的な調査を行った。トレンチ名については便宜上、北側のものから１号とした。

Ⅱ層以下については人力により分層発掘とし極力上面で遺構の確認に努めるようにしたが、後世の撹乱が及んでいる地域や遺構確認のしづらい地域では第Ⅳ層、Ⅴ層まで掘り下げ確認した地域もある。

確認された遺構については、発見順に番号を付した。遺構の精査については後に追調査ができるように配慮し、半裁するに留めた。遺構の実測図の作成についてはグリッド杭を利用し、簡易遣り方測量を行い、縮尺1/20、1/10で図化した。なお、現地で作成した実測図については報告書作成段階に記録写真、調査員メモをもとに修正を加え、トレースを行っている。

遺物の取り上げについては、基本的に出土ポイント、レベル測量を行い、基本層序と対比できるようにしたほか、袋詰めに際しては出土地点や層位を書き込んだ遺物カードを同封した。なお、完形土器及び復元可能な土器、重要遺物については写真による記録も行った。

写真撮影については、小型一眼レフカメラ２台とデジタルカメラを使用し、調査の過程や遺物出土状況などを記録した。　(三浦貴子)

3．調査の経過

特別史跡大湯環状列石第20次発掘調査は平成15年５月12日より開始し、現地調査が終了したのは10月３日である。

５月12日、調査作業員に事務連絡及び本年度の調査の目的、方法を説明。その後、調査区北側のトレンチより遺物を残しながら掘り下げ、遺構確認を行う。翌日、黄褐色が充填された落ち込み（第１号住居）を確認し、この周辺への必要のない立ち入りを禁止する。また、同トレンチ東側において土坑と思われる落ち込みを確認する。同月23日、２トレンチの台地縁際より後期中葉の完形の壺形土器が出土。同月27日より掘り下げの完了したトレンチより遺物分布状

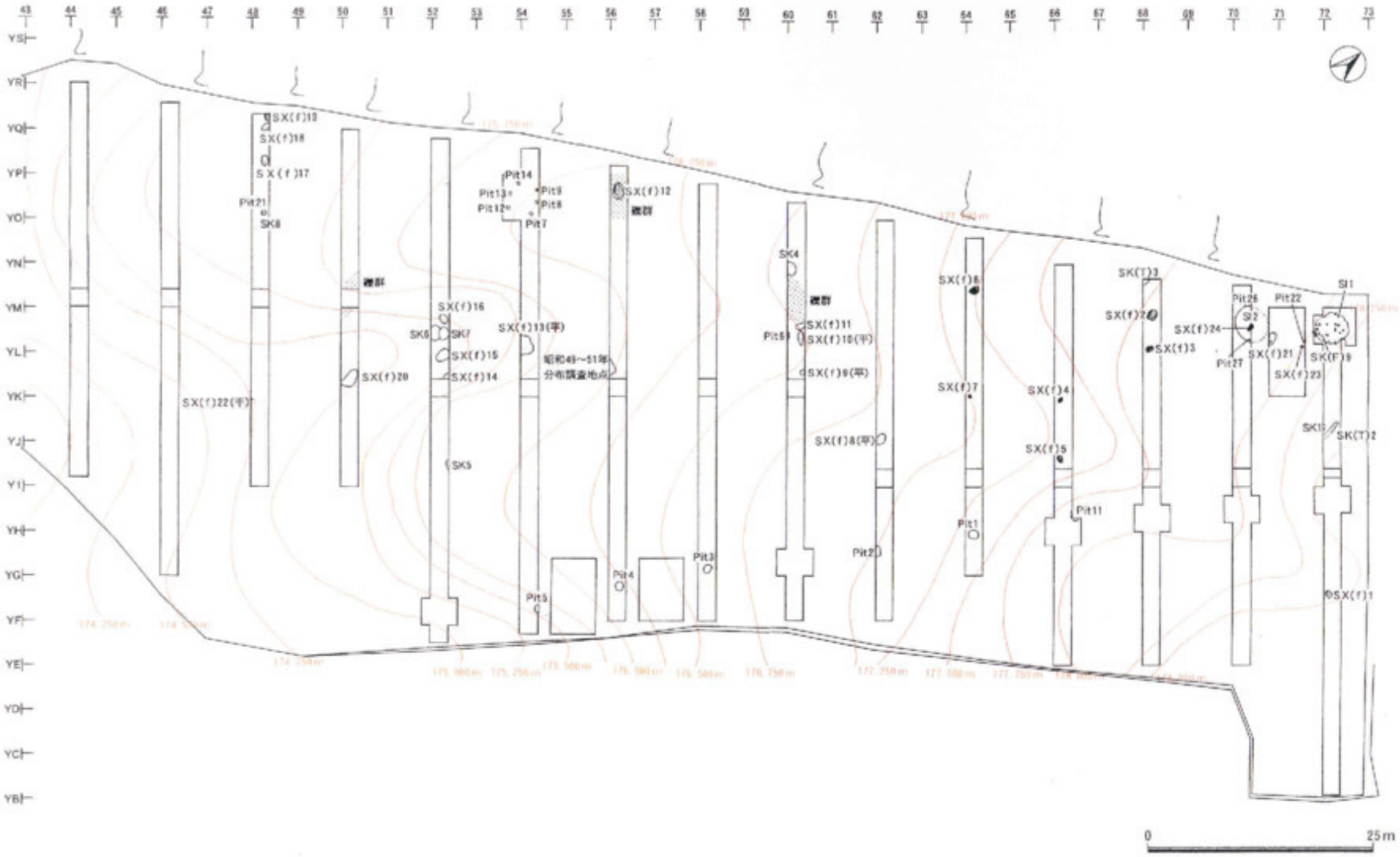
況を作成しながら取り上げ、６月３日からは遺構の実測図作成と写真記録を開始する。
これまでの調査によって、調査区中央に沢状地形が存在し、これが南側へ向かっていること、遺物はこの沢がほとんど埋まりきった時点に投棄されていることが判明しだした。

同日、５号トレンチで確認されていた径1.5m程の黒色土の落ち込みを精査したところ、柱穴状ピットであることが判明した。６月17日、６号・８号トレンチ東側より同規模・同性格と思われる落ち込みを確認する。柱穴状ピットが直線状に繋がる例としてF_2区があり、これを考慮しながら調査を継続し、７月17日までに４号トレンチ中央の拡張部、９号・10号トレンチ東端部より各一個の柱穴状ピットを確認する。７月末日までにトレンチの設定・調査は15号トレンチまでに及び、柱穴状ピットが等間隔に配置されていること、焼土遺構が沢を境界に台地の縁辺地域に偏って存在することが判明した。

８月、山背（ヤマセ）がこの鹿角地域にも訪れる。このような状況は９月まで続き、作物の不作が懸念され始める。さらに降雨量も少なく遺構や土層観察に難渋する。９月５日・６日、特別史跡大湯環状列石環境整備事業検討委員会が開催され、指導と助言を受ける。同月21日より１号トレンチで確認していた落ち込みを精査、その結果、住居跡と認定する。22日鎌田調査員が調査に参加し、調査区の至る所に熱を帯びた石が点在すること、環状列石周辺と比べ石英閃緑玢岩が少ないことが判明した。

９月24日までに15本のトレンチ、３箇所の拡張部を設定。その結果、竪穴住居跡２軒、Ｔピット２基、土坑６基、フラスコ状土坑1基、柱穴状ピット15個、焼土遺構24基、沢状地形１箇所を確認。確認した遺構の精査・記録、遺物の取り上げなどすべての作業が終了したのは10月３日である。

10月29日には山谷調査員が現地を訪れ、出土炭化物の樹種同定に必要なサンプリングを行った。なお、10月11日には現地説明会を開催、12月10日には大湯ストーンサークル館講座「縄文に学ぶ」において本年度の調査成果を発表した。　　（三浦貴子）



第９図　G₁遺構配置図・地形復元図

第Ⅲ章　G_4区縄文時代検出遺構と出土遺物

G_4区において確認された縄文時代の遺構は、竪穴住居跡２軒、柱穴状ピット15個、焼土遺構19基、Tピット２基、フラスコ状土坑1基、土坑６基、礫群３ヶ所である。また、遺構内・外より復元可能土器６個体、縄文土器破片638点、須恵器破片１点、石器59点、剥片52点、土製品10点、石製品３点の出土があった。

1．竪穴住居跡

第１号竪穴住居跡（第10図～第18図、第１表、PL10）

〈位置と確認〉調査区北端のYM－72グリッドに位置する。Ⅲd層上面で円形のプランを確認した。

〈重複関係〉第９号フラスコ状土坑と重複し、本遺構が古い。

〈平面形・規模〉平面形は円形で、南西側にややふくらんでいる。規模は3.7×3.6mを測る。

〈堆積土〉５ブロックに区分され、人為堆積である。堆積土下位では、地山粒や焼土粒を含むやや軟弱な黒褐色土が確認され、上面から中位にかけては約40cmの厚さでにぶい黄橙色の地山土が充填されていた。住居東側の一部では、かたくしまる黒褐色土が、壁際から中央部にかけて床面を覆うのが確認され、土中から１個体の復元可能土器がつぶれた状態で出土した。（第13図２）

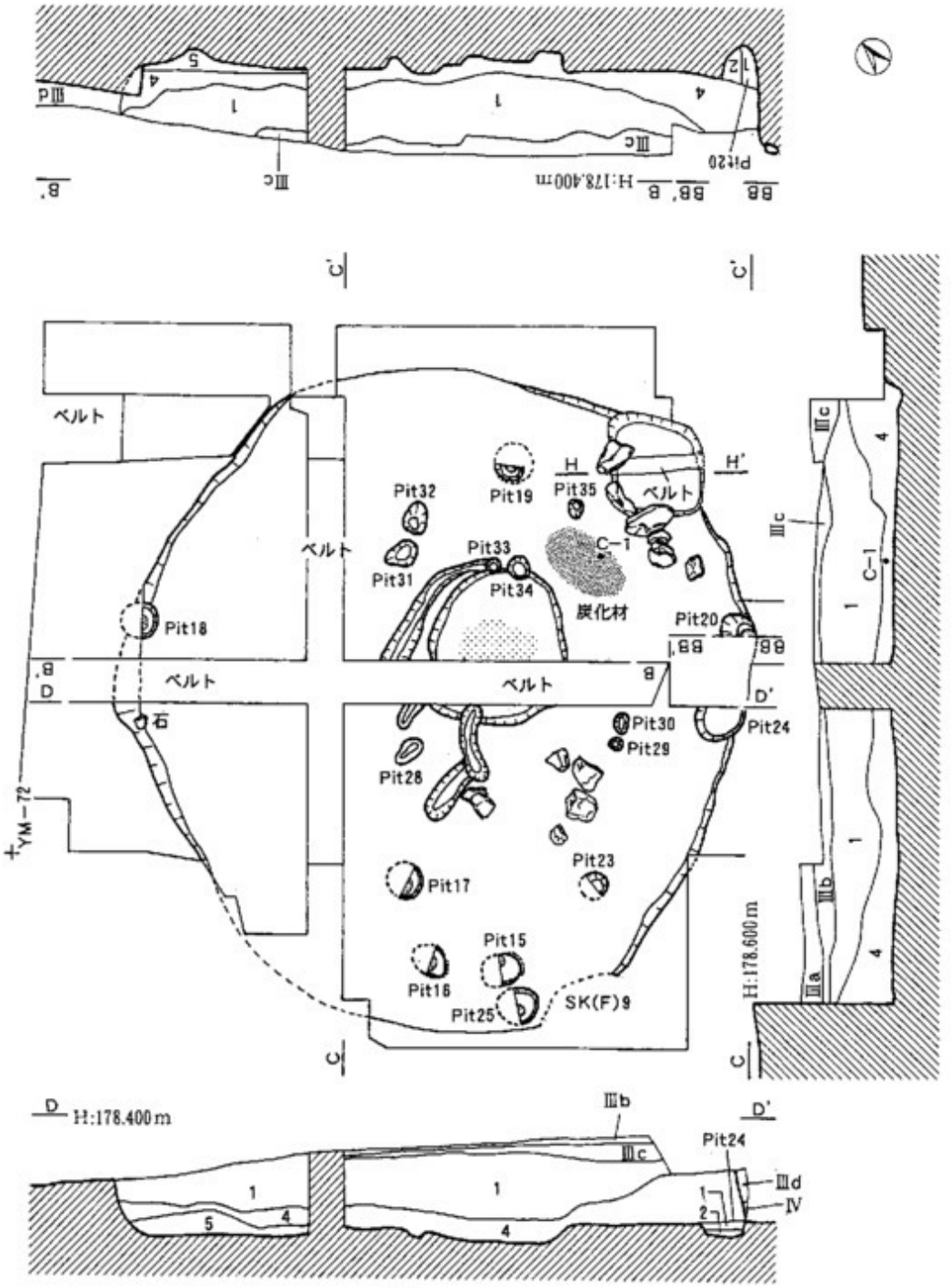
〈床面・壁〉Ⅴ層面を床面とし、全体的に平坦であるが、北東側と北西側は貼り床を施し、床面を作り出している。東側床面から、30×50cmの範囲で炭化材が検出された。一部を採取、分析したところ、コナラ材であることが判明した。（第Ⅴ章参照）

壁は緩やかに立ち上がり、壁高は、南西側、北西側で36cm、北側34cm、南東側30cmを測る。

〈柱穴〉住居内より17個のピットが確認され、住居内四方と壁際に位置するピット15、16、18～20、24、25が主柱穴と考えられる。

〈炉〉中央よりやや東側において、深さ５～10cmの円形の掘り込みを確認した。掘り込みの周囲に炉石とみられる石は確認されず、掘り込み内の堆積土中にも焼土や灰は検出されなかった。しかし、掘り込みの底部には、著しい焼け跡が確認された。また、南側床面では、強い火力を受けて破損したとみられる石が散乱していた。円形の掘り込みの近くに、この石と同規模の溝状の掘り込みが確認されたことから、炉と判断した。炉の規模は75×85cmである。炉石の石材は、石英閃緑玢岩、石英安山岩、凝灰質泥岩である。

〈付属施設〉東側の壁際で、10～30cm大の扁平な石が３個、壁に向かって「コ」の字のように配置された状態で確認された。これは、F_1区（第６次）の調査で検出された第403、405、



SJ-1
1．にぶい黄褐色土(10YR7/4)　地山粒多量混入、やや軟弱
2．にぶい黄褐色土(10YR5/3)　地山粒少量混入、一部角礫混入部あり、軟弱
3．黒褐色土(10YR2/2)　地山粒少量混入、かたくしまる
4．黒褐色土(10YR2/3)　地山粒少量混入、やや軟弱
5．黄褐色土(10YR5/6)　地山粒多量混入、しまる、SJ-1の貼り床

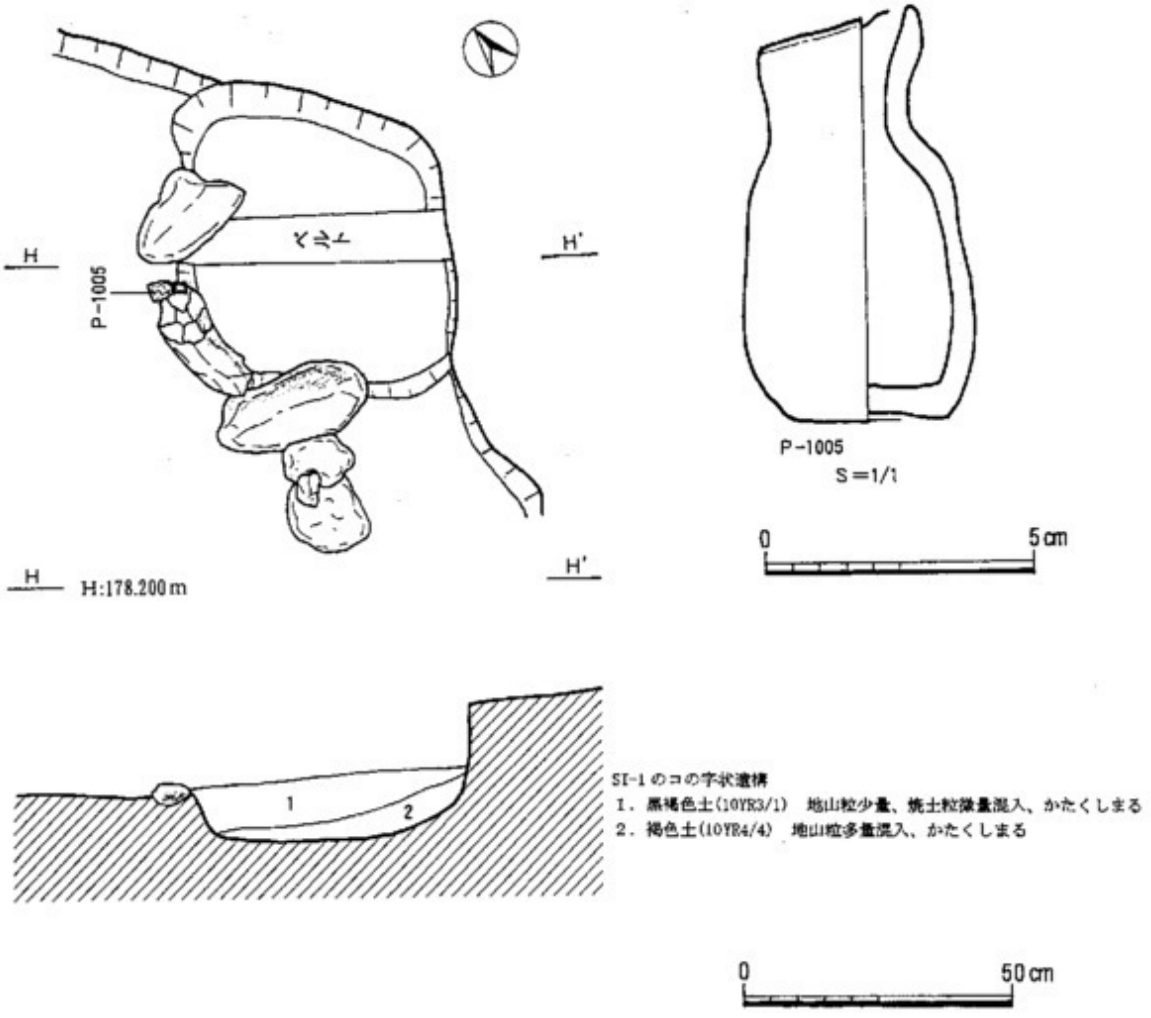
Pit20
1．黒褐色土(10YR3/1)　地山粒少量混入、軟弱
2．褐色土(10YR4/4)　地山粒多量混入、しまる

Pit24
1．褐色土(10YR4/6)　地山粒多量混入、やや軟弱
2．黒褐色土(10YR3/2)　地山粒少量混入、かたくしまる

C−1…分析試料採取ポイント

0　1m

第10図　G₄区第1号竪穴住居跡実測図



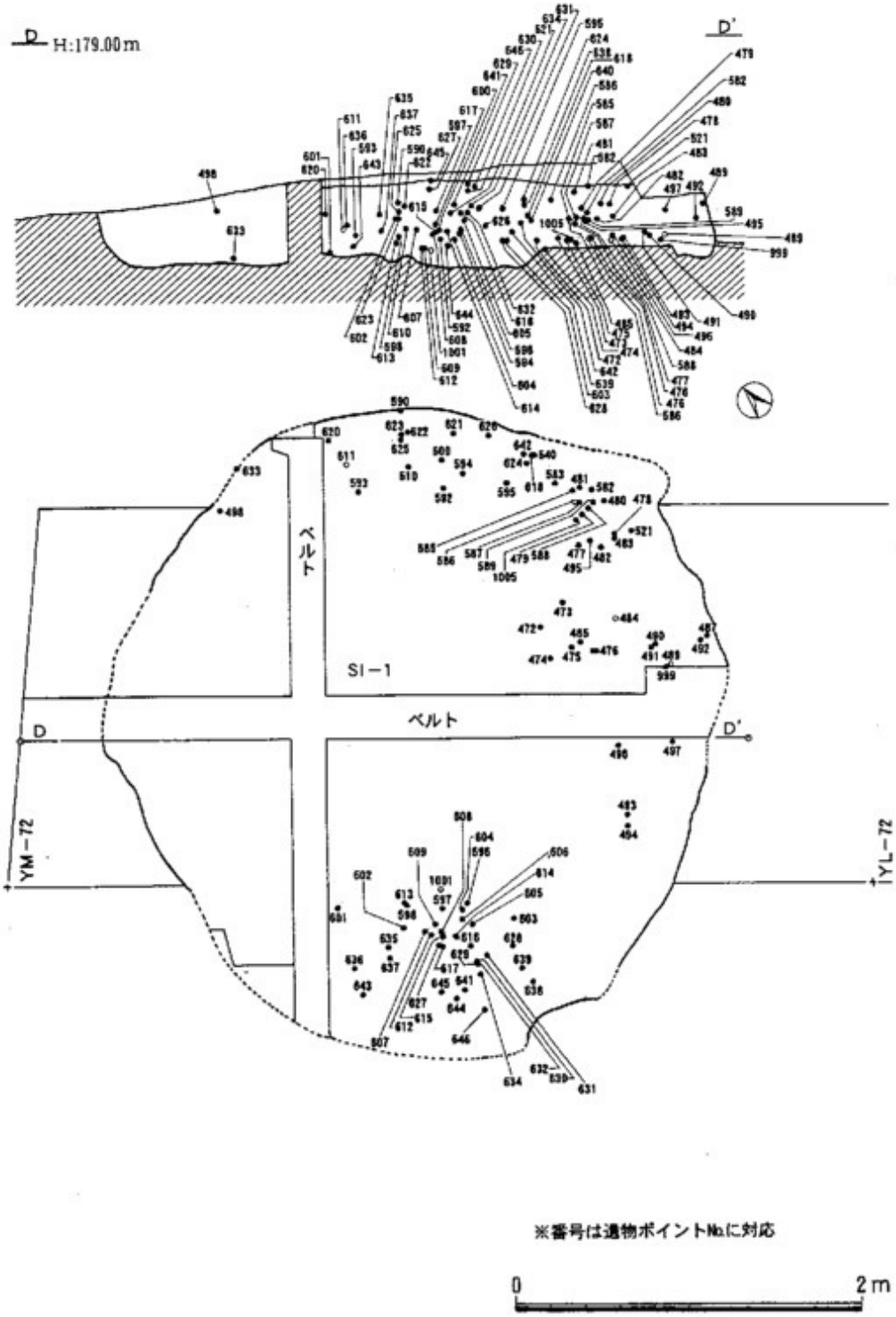
第11図　G₄区第１号竪穴住居跡内ミニチュア土器出土状況、コの字状施設実測図

408号竪穴住居跡に付属する「コ」の字状施設と同様のものと考えられる。

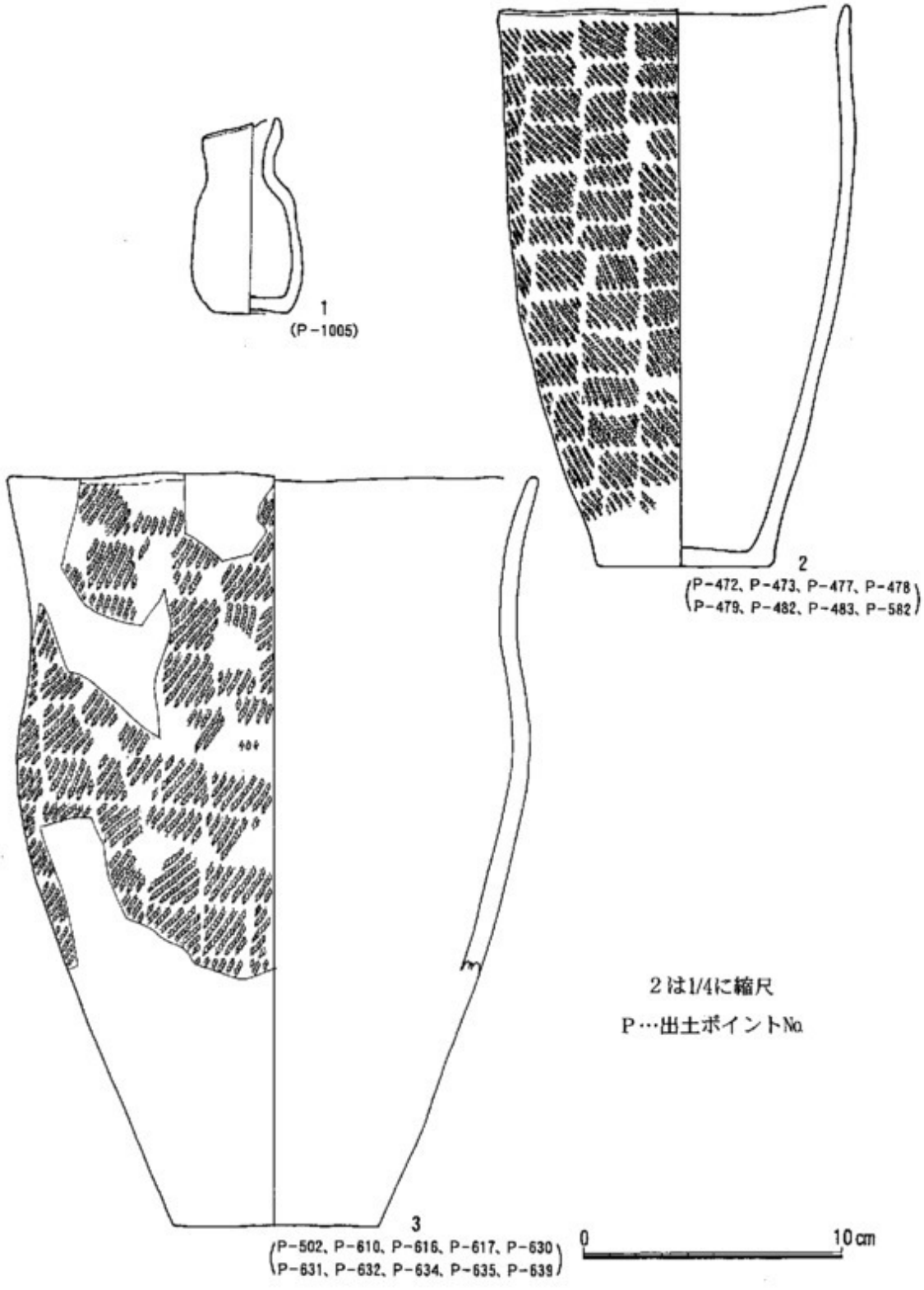
施設内には焼土粒が微量確認されている。「コ」の字状施設付近で壺形のミニチュア土器が出土している（第13図１）。

〈出土遺物〉床直より縄文時代後期の土器破片３点、覆土中より復元可能土器２個体、土器破片75点、掻器４点、石刀破片１点、凹石２点、剥片１点、土器破片利用土製品１点が出土した。（第13図～18図、PL10）

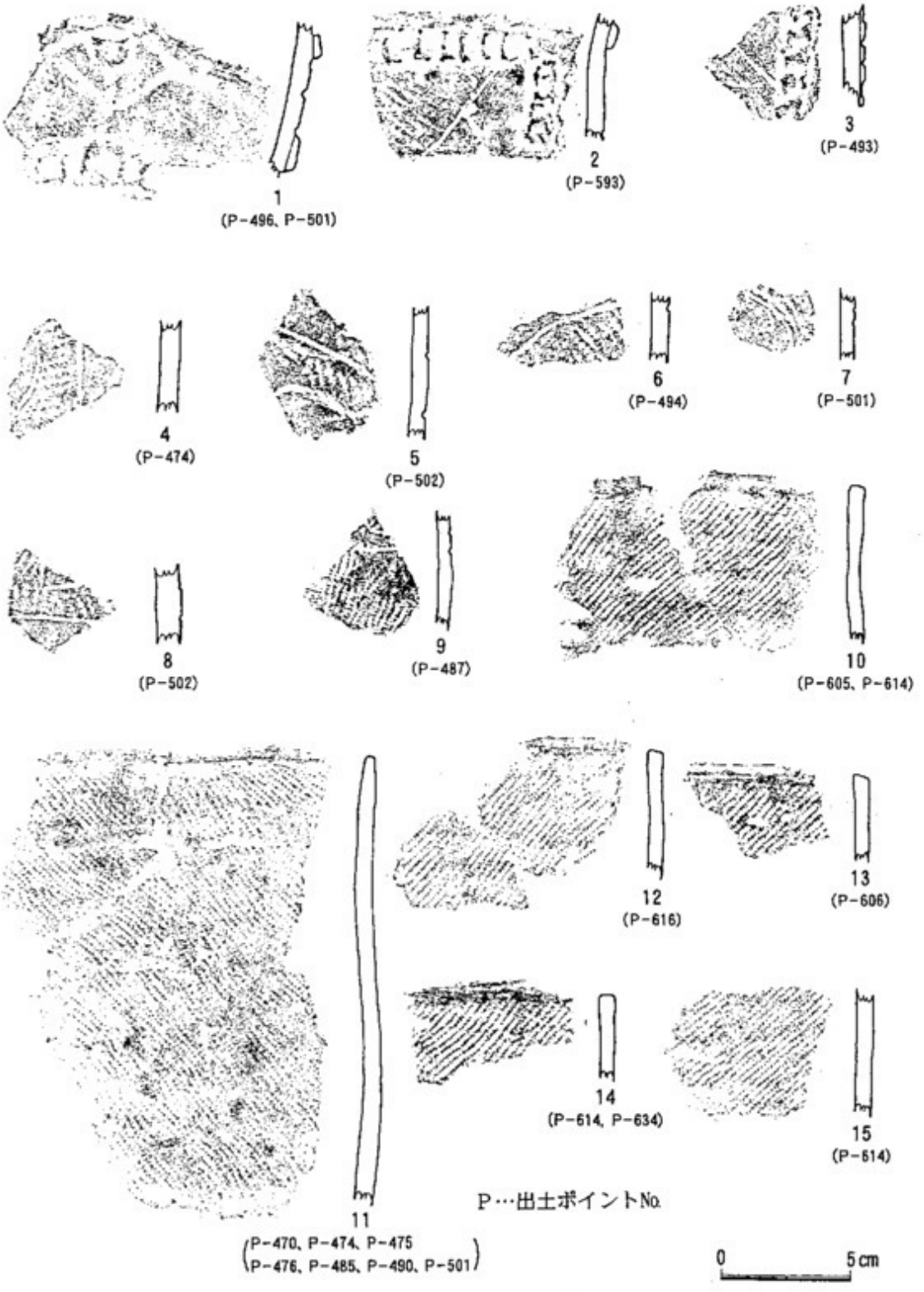
第13図１は、壺形のミニチュア土器で、器高7.7cm、口径3.1cmを測り、色調はにぶい橙色である。２は、LR縄文が全体に施文されている深鉢形土器で、二次火熱をうけ、上半部にススの付着がみられる。器高44.4cm、口径27.5cmを測り、色調は明赤褐色である。３は南西壁際の堆積土中から出土した。LR縄文が全体に施文されている深鉢形土器で、器高30.4cm（推定



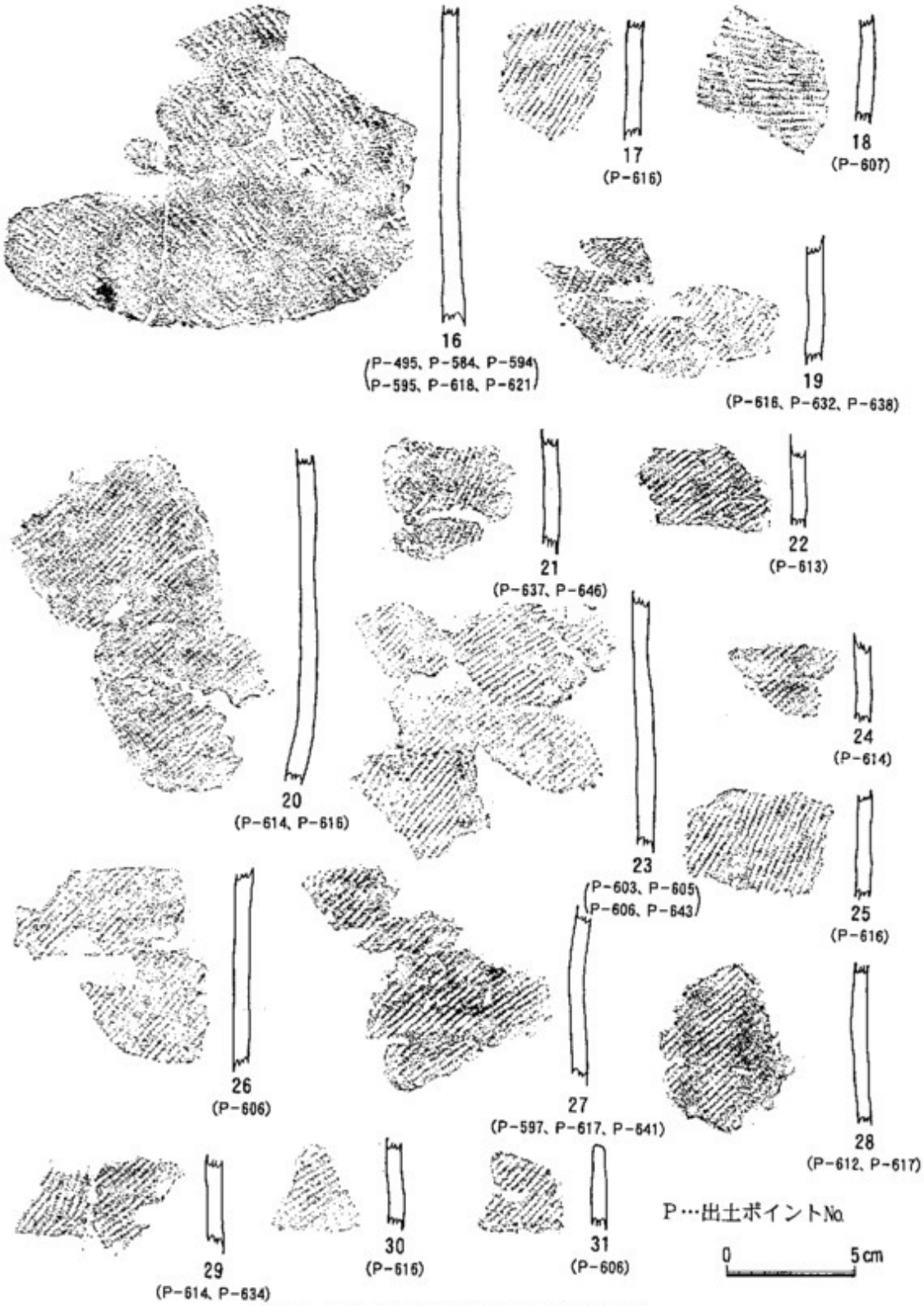
第12図　G₄区第１号竪穴住居跡出土遺物分布



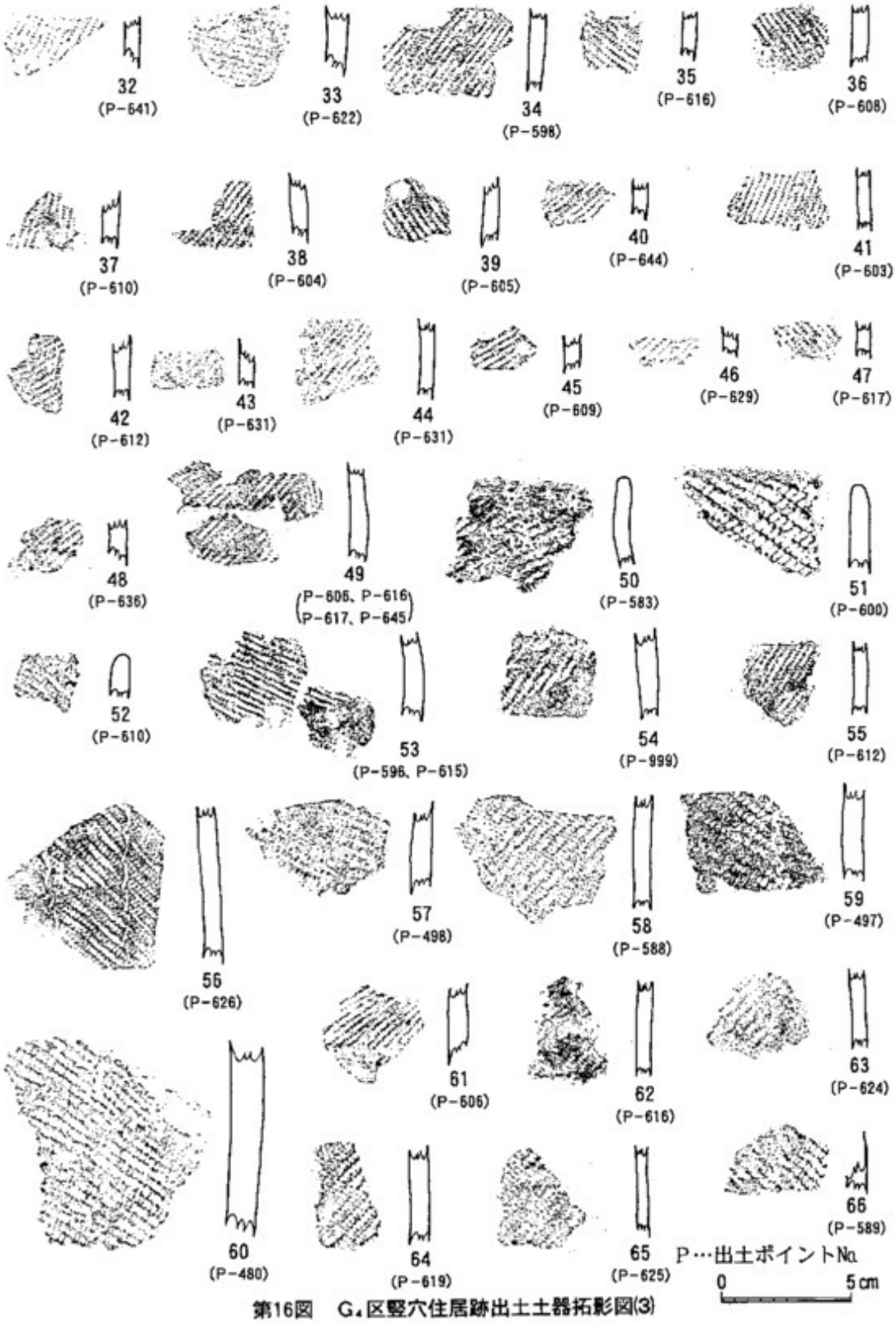
第13図　G₄区第1号竪穴住居跡出土土器実測図



第14図　G₄区竪穴住居跡出土土器拓影図(1)



第15図　G₄区竪穴住居跡出土土器拓影図(2)



第16図　G4区竪穴住居跡出土土器拓影図(3)

値)、口径20.8cmを測る。胎土にはやや大きめの砂粒を含み、色調は暗褐色である。

第18図３の石製品は、東側の堆積土中から出土した。表面を丹念に研磨しており、石刀の破片であると思われる。石材は、石墨片岩である。５は凹石で、円礫の平坦な面に使用痕がみられる。石材は石英閃緑玢岩である。７は土器破片利用土製品で、土器破片を打ち欠き、側縁部を研磨し、整形している。８の凹石は、北東側の壁際から出土した。扁平な礫の三面に使用痕がみられる。先端部が破損している。石材は、砂質凝灰岩である。

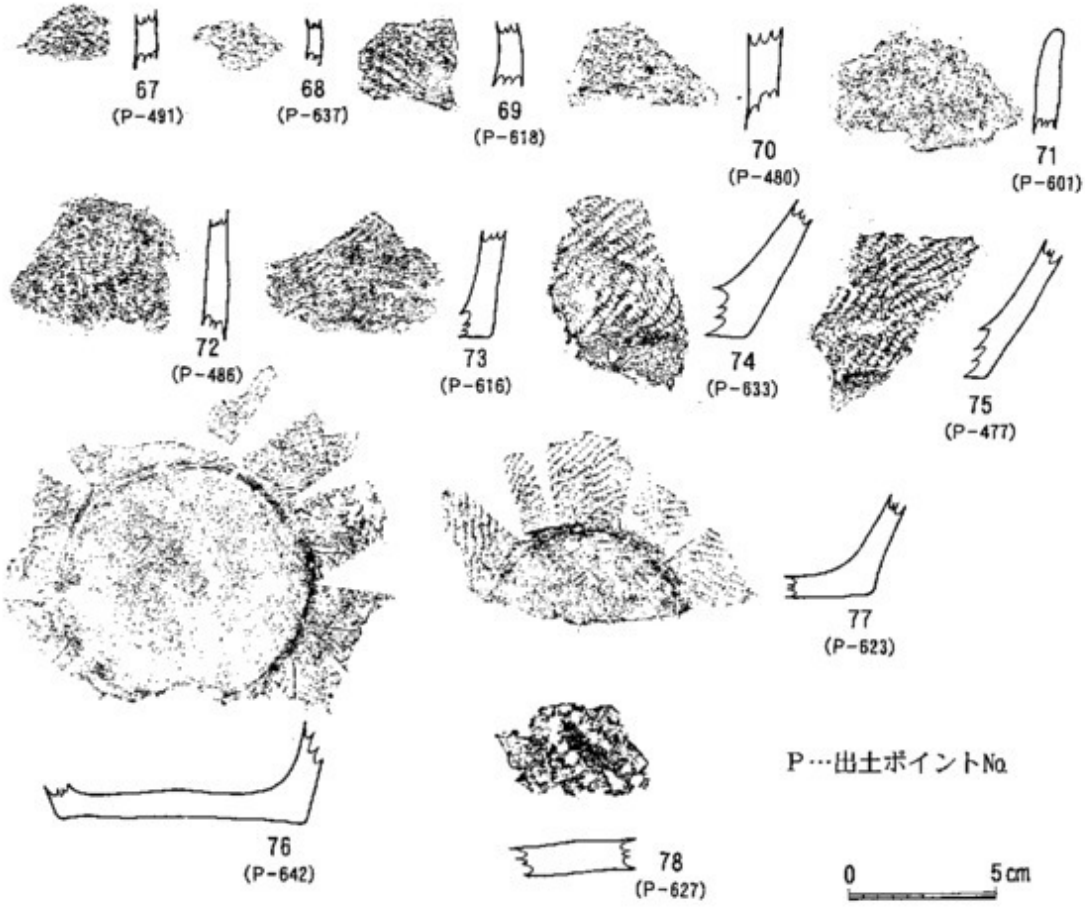
〈構築時期〉基本層序を含む土層断面から縄文時代後期前葉と考えられる。

第２号竪穴住居跡（第19図）

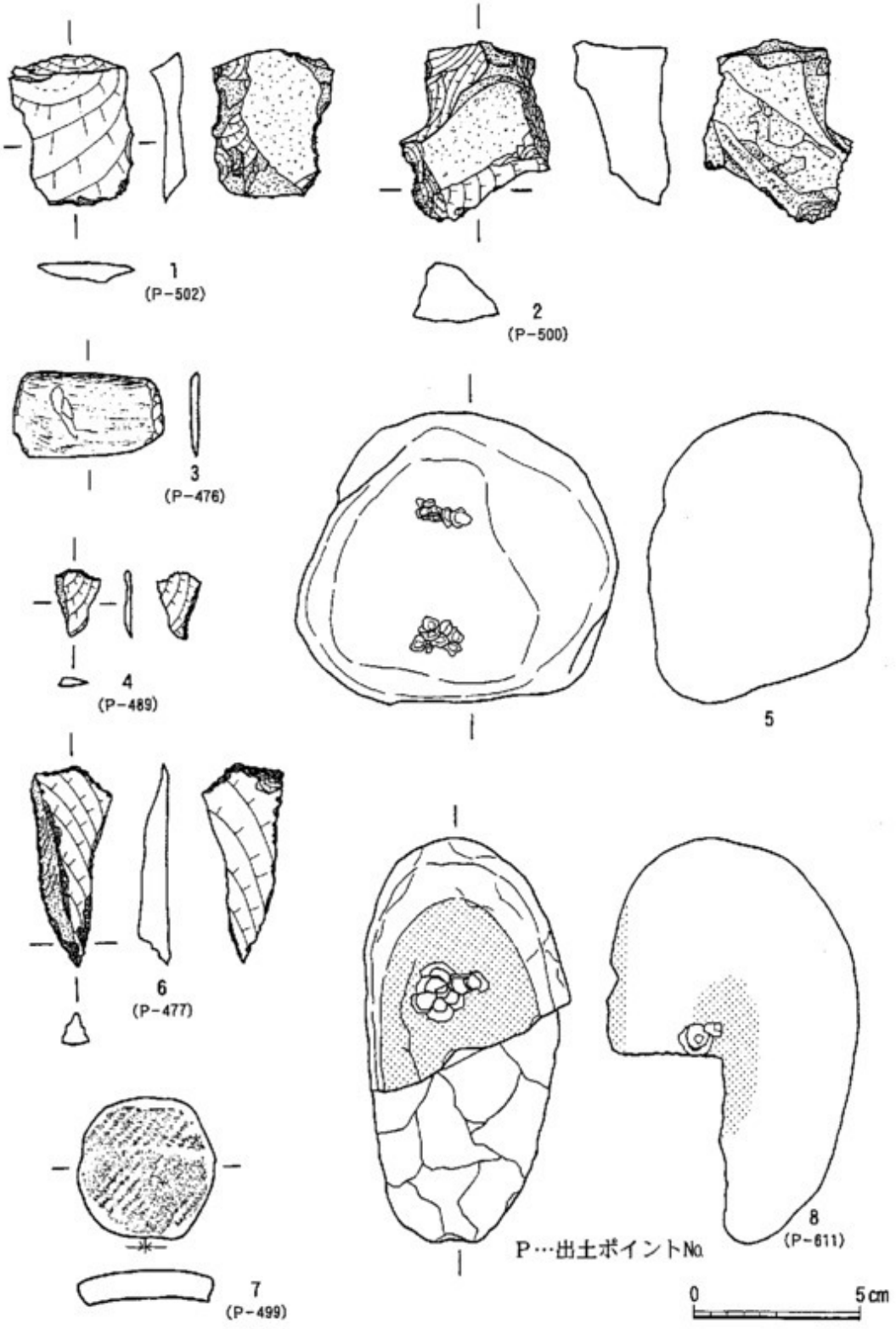
〈位置と確認〉調査区北端のYM－70グリッドに位置する。Ⅳ層上面でプランを確認した。基本層序を含む土層断面から、構築面はⅢd層上面であることが判明している。

〈重複関係〉第24号焼土遺構と重複し、本遺構が古い。

〈平面形・規模〉未発掘部があるため詳細は不明であるが、推定される規模は、4.2×3.6mである。



第17図　G₄区竪穴住居跡出土土器拓影図(4)



第18図　G₄区第1号竪穴住居跡出土石器実測図、土器片利用土製品拓影図

〈堆積土〉２ブロックに区分され、人為堆積である。

〈床面・壁〉Ⅳ層を掘り込み、床面としている。壁高は、北西側が10cmと低く、南東側の壁高は26cmを測る。

〈柱穴〉確認された主柱穴は、ピット26、27である。ピット26は北西側の壁面からわずかに外側に、ピット27は南東側の壁際に構築されている。

〈炉〉住居内ほぼ中央で、円形状に並ぶ複数の石を確認した。石は激しく焼けており、石に囲まれた堆積土中に最大厚８cmの焼土層が確認されたことから、石囲炉と判断した。炉は、一部原型を留めていないが、残存する炉石の配置から、円形の石囲炉であったと考えられる。

〈出土遺物〉覆土中から復元可能土器1個体と土器破片14点が出土した。

〈構築時期〉基本層序を含む土層断面から縄文時代後期前葉と考えられる。

２．柱穴状ピット（第20図～第21図、第２表）

G_4区からは15個の柱穴状ピットが検出された。いずれの柱穴状ピットからも遺物は出土しなかった。

第１・２・３・４・５・11号柱穴状ピット

調査区北東部から南部にかけて直線状に点在する６個の柱穴状ピットを確認した。平面形は概ね円形で、径は90～130cm（推定値）、深さは80～142cmを測る。すべての柱穴状ピットで径22～49cmの柱痕を確認した。第２、４号ピットでは、径32～41cmの柱痕の近くに径18～19cmの小さい柱痕を確認した。大小２つの柱が同時に存在したか、重複していたかは不明である。また、第２号ピットでは、遺構の上位面の精査時の平面確認では柱痕が柱穴の中心からやや北東寄りに観察されていた。しかし、柱穴下位の精査時には、柱痕は下位の断面上のみに確認されるだけであった。このことから、柱に使用された木が、下位から上位部に行くに従い、北東方向に曲がった木材を使用していたものと考えられる。柱穴の中心から北東方向に曲がっていたためと思われる。

これら６個のピットの構築時期は、基本層序を含む土層断面から縄文時代後期と考えられる。

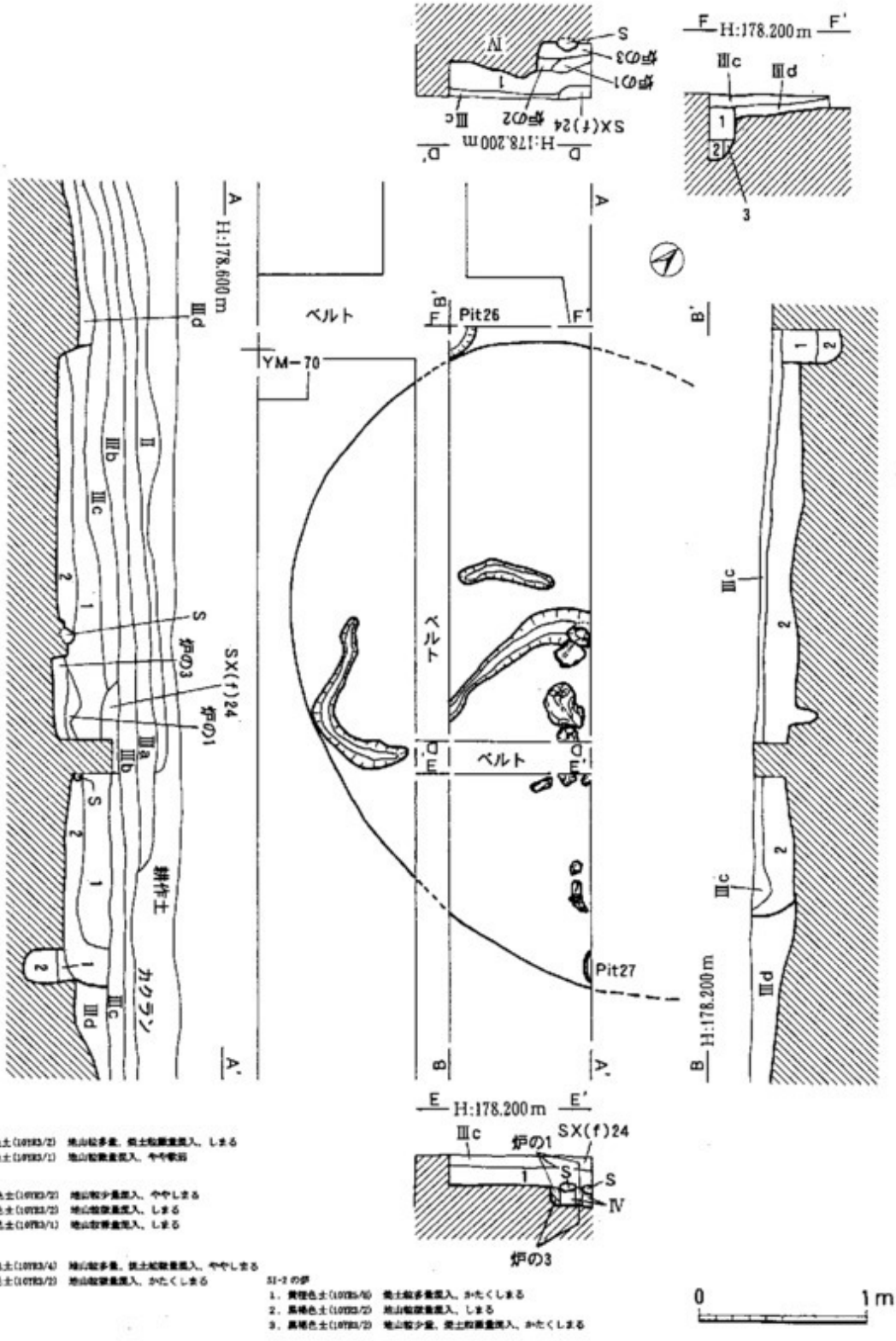
第６号柱穴状ピット

調査区中央やや北東寄りのYM－60グリッドに位置し、Ⅲd層上面で確認した。平面形は未掘部に一部およぶため不明であるが、径95cm、深さ59cm（推定値）、柱痕径41cmの円形の柱穴と判断される。

構築時期は、構築面から縄文時代後期前葉と考えられる。

第７・８・９・12・13・14号柱穴状ピット

調査区西部YP－54グリッドで確認した。平面形は円形で、径は28～47cm、深さは42～54cm



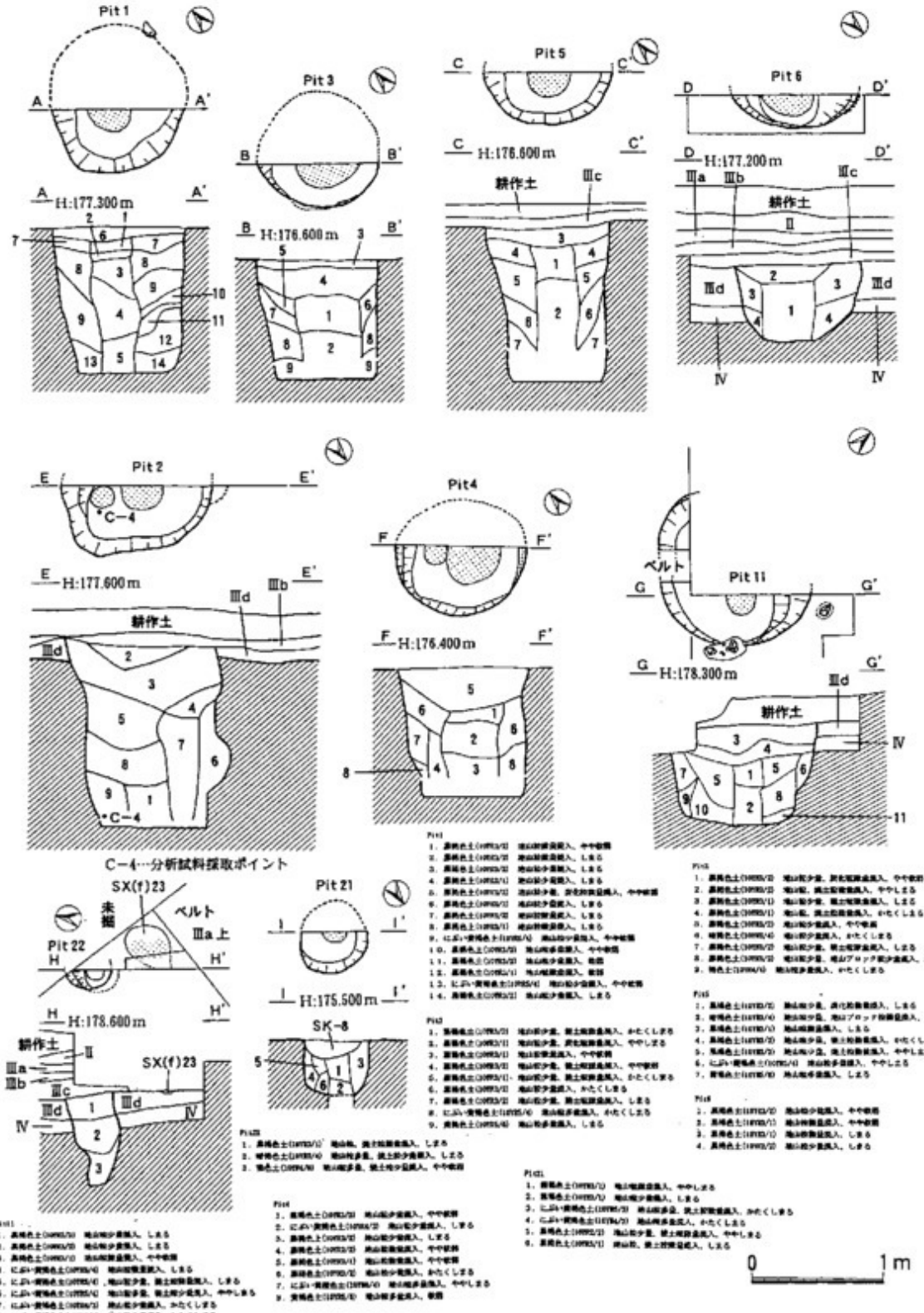
Pit27
1．黒褐色土(10YR3/2)　地山粒多量、焼土粒微量混入、しまる
2．黒褐色土(10YR3/1)　地山粒微量混入、やや軟弱

Pit26
1．黒褐色土(10YR3/2)　地山粒少量混入、ややしまる
2．黒褐色土(10YR3/2)　地山粒微量混入、しまる
3．黒褐色土(10YR3/1)　地山粒微量混入、しまる

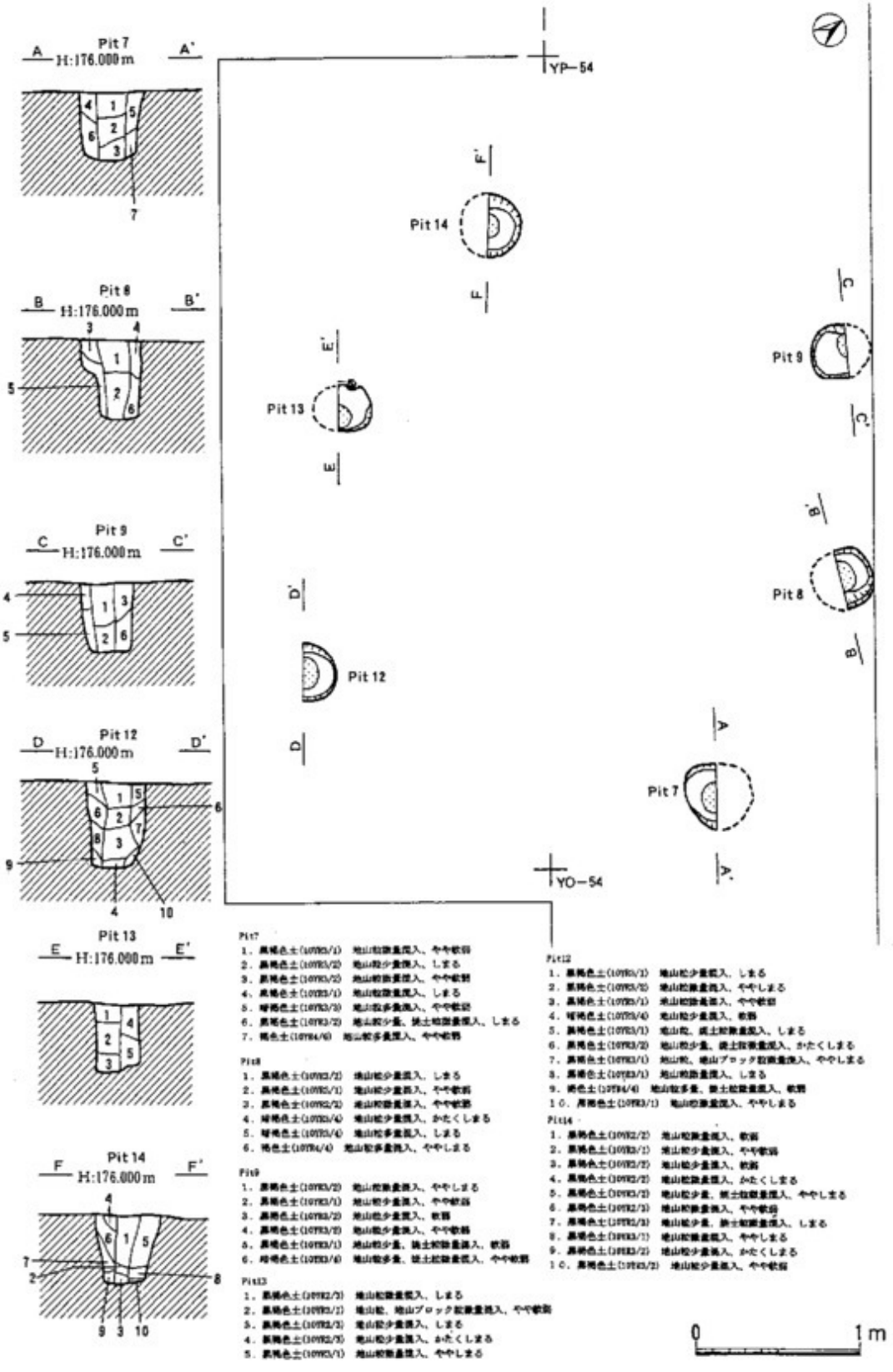
SI-2
1．暗褐色土(10YR3/4)　地山粒多量、焼土粒微量混入、ややしまる
2．黒褐色土(10YR3/2)　地山粒微量混入、かたくしまる

SI-2 の炉
1．黄褐色土(10YR5/6)　焼土粒多量混入、かたくしまる
2．黒褐色土(10YR3/2)　地山粒微量混入、しまる
3．黒褐色土(10YR3/2)　地山粒少量、焼土粒微量混入、かたくしまる

第19図　G₄区第２号竪穴住居跡実測図



第20図　G₄区柱穴状ピット実測図(1)



Pit7
1．黒褐色土(10YR3/1)　地山粒微量混入、やや軟弱
2．黒褐色土(10YR3/2)　地山粒少量混入、しまる
3．黒褐色土(10YR3/2)　地山粒微量混入、やや軟弱
4．黒褐色土(10YR3/1)　地山粒微量混入、しまる
5．暗褐色土(10YR3/3)　地山粒多量混入、やや軟弱
6．黒褐色土(10YR3/2)　地山粒少量、焼土粒微量混入、しまる
7．褐色土(10YR4/6)　地山粒多量混入、やや軟弱

Pit8
1．黒褐色土(10YR3/2)　地山粒少量混入、しまる
2．黒褐色土(10YR3/1)　地山粒少量混入、やや軟弱
3．黒褐色土(10YR3/2)　地山粒微量混入、やや軟弱
4．暗褐色土(10YR3/4)　地山粒少量混入、かたくしまる
5．暗褐色土(10YR3/4)　地山粒多量混入、しまる
6．褐色土(10YR4/4)　地山粒多量混入、ややしまる

Pit9
1．黒褐色土(10YR3/2)　地山粒微量混入、ややしまる
2．黒褐色土(10YR3/1)　地山粒少量混入、やや軟弱
3．黒褐色土(10YR3/2)　地山粒少量混入、軟弱
4．黒褐色土(10YR3/2)　地山粒少量混入、やや軟弱
5．黒褐色土(10YR3/1)　地山粒少量、焼土粒微量混入、軟弱
6．暗褐色土(10YR3/4)　地山粒多量、焼土粒微量混入、やや軟弱

Pit13
1．黒褐色土(10YR2/2)　地山粒微量混入、しまる
2．黒褐色土(10YR3/1)　地山粒、地山ブロック粒微量混入、やや軟弱
3．黒褐色土(10YR3/3)　地山粒少量混入、しまる
4．黒褐色土(10YR3/3)　地山粒少量混入、かたくしまる
5．黒褐色土(10YR3/1)　地山粒微量混入、ややしまる

Pit12
1．黒褐色土(10YR3/1)　地山粒少量混入、しまる
2．黒褐色土(10YR3/2)　地山粒少量混入、ややしまる
3．黒褐色土(10YR3/1)　地山粒微量混入、ややしまる
4．暗褐色土(10YR3/4)　地山粒少量混入、軟弱
5．黒褐色土(10YR3/1)　地山粒、焼土粒微量混入、しまる
6．黒褐色土(10YR3/2)　地山粒少量、焼土粒微量混入、かたくしまる
7．黒褐色土(10YR3/1)　地山粒、地山ブロック粒微量混入、ややしまる
8．黒褐色土(10YR3/1)　地山粒微量混入、しまる
9．褐色土(10YR4/4)　地山粒多量、焼土粒微量混入、軟弱
10．黒褐色土(10YR3/1)　地山粒微量混入、ややしまる

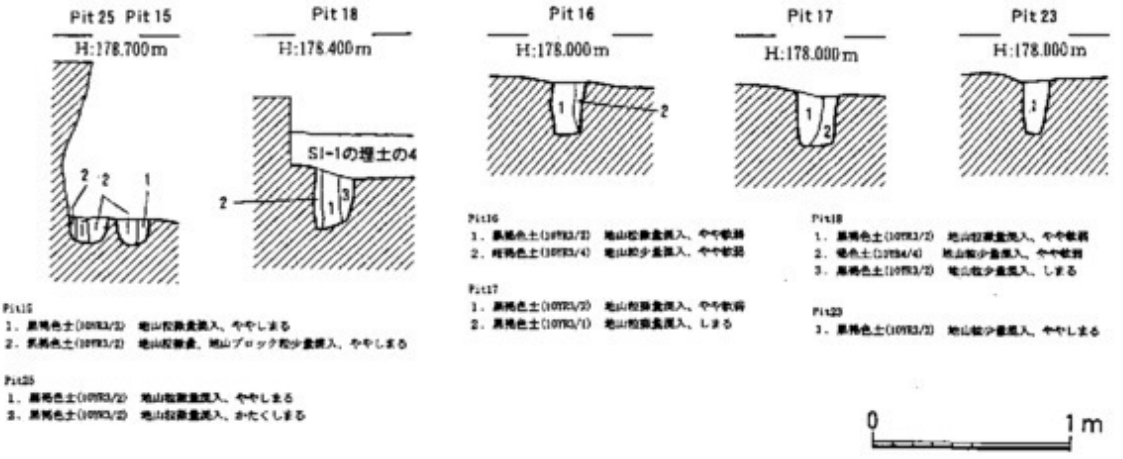
Pit14
1．黒褐色土(10YR2/2)　地山粒微量混入、軟弱
2．黒褐色土(10YR3/1)　地山粒少量混入、ややしまる
3．黒褐色土(10YR3/2)　地山粒少量混入、軟弱
4．黒褐色土(10YR3/2)　地山粒微量混入、かたくしまる
5．黒褐色土(10YR3/2)　地山粒少量、焼土粒微量混入、ややしまる
6．黒褐色土(10YR3/3)　地山粒微量混入、ややしまる
7．黒褐色土(10YR3/3)　地山粒少量、焼土粒微量混入、しまる
8．黒褐色土(10YR3/1)　地山粒微量混入、ややしまる
9．黒褐色土(10YR3/2)　地山粒少量混入、かたくしまる
10．黒褐色土(10YR3/2)　地山粒少量混入、やや軟弱

第21図　G₄区柱穴状ピット実測図(2)

第２表　G_4区柱穴状ピット一覧表

(新旧関係は旧→新で表記。表記のないものは新旧関係不明)
(　) 内は推定数値

ピット番号	グリッド	規模 (cm) 長径 × 短径 × 深さ	重複関係 旧→新	構築面	柱痕径(cm)	備考
1	ＹＨ～ＹＩ－６４	118 × 110 × 116		不明	32	
2	ＹＨ－６２	114 × 不明 × 142		Ⅲｄ上	大 32 小 18	
3	ＹＨ－５８	93 × 91 × (93)		不明	49	
4	ＹＧ－５６	102 × 90 × (101)		不明	大 41 小 19	
5	ＹＧ－５４	98 × 不明 × (115)		Ⅲｄ上	41	
6	ＹＭ－６０	95 × 不明 × (59)		Ⅲｄ上	41	
7	ＹＰ－５４	47 × 40 × 42		不明	19	
8	ＹＰ－５４	39 × 38 × 48		不明	20	
9	ＹＰ－５４	38 × 38 × 43		不明	14	
10	欠番	× ×				
11	ＹＩ－６６	130 × 不明 × (80)		Ⅲｄ上	22	
12	ＹＰ－５４	36 × 不明 × 54		Ⅲｄ上	20	
13	ＹＰ－５４	(36) × (28) × 42		不明	16	
14	ＹＰ－５４	38 × 38 × 43		不明	14	
15	ＹＭ－７２	24 × 17 × 13		SI-1中	6	SI-1　南半部内
16	ＹＭ－７２	22 × 16 × 27		SI-1中	12	SI-1　南半部内
17	ＹＭ－７２	21 × 20 × 28		SI-1中	13	SI-1　南半部内
18	ＹＭ－７２	22 × 19 × 32		SI-1中	9	SI-1　北半部内
19	ＹＭ－７２	22 × 21 × 21		SI-1中	7	SI-1　北半部内
20	ＹＭ－７２	不明 × (18) × 24		SI-1中	8	SI-1　北半部内
21	ＹＰ－４８	59 × 52 × 不明	Pit-21 → SK-8	不明	18	
22	ＹＭ－７１	(36) × 不明 × 71		Ⅲｄ上	－	
23	ＹＭ－７１	15 × 14 × 26		SI-1中	－	SI-1　南半部内
24	ＹＭ－７２	不明 × 26 × 9		SI-1中	－	SI-1　南半部内
25	ＹＭ－７１	23 × 20 × 12		SI-1中	7	SI-1　南半部内
26	ＹＭ～ＹＮ－７０	不明 × 不明 × 36		Ⅲｄ上	－	SI-2　西側
27	ＹＭ－７０	不明 × 不明 × 31		SI-2中	－	SI-2　内側
28	ＹＭ－７２	19 × 10 × 8		SI-1中	－	SI-1　南半部内
29	ＹＭ－７２	8 × 7 × 8		SI-1中	－	SI-1　南半部内
30	ＹＭ－７２	12 × 8 × 8		SI-1中	－	SI-1　南半部内
31	ＹＭ－７２	21 × 13 × 10		SI-1中	－	SI-1　北半部内
32	ＹＭ－７２	19 × 13 × 11		SI-1中	－	SI-1　北半部内
33	ＹＭ－７２	8 × 8 × 10		SI-1中	－	SI-1　北半部内
34	ＹＭ－７２	14 × 12 × 10		SI-1中	－	SI-1　北半部内
35	ＹＭ－７２	11 × 8 × 不明		SI-1中	－	SI-1　北半部内



第22図　G₄区第１号竪穴住居跡柱穴状ピット実測図

を測る。すべての柱穴で径14～20cmの柱痕を確認した。６個のピットはほぼ同規模であり、６本柱の建物跡の可能性が考慮された。しかし、周囲の未掘部にも同規模のピットが存在する可能性があり、今回検出された６個のピットのみで建物跡が構成されるか判断をし得なかったため、６本柱建物跡とは判断しなかった。

第21号柱穴状ピット

調査区南西部YP－48グリッドで確認した。第8号土坑と重複し、本遺構が古い。径52cm、深さ50cm（推定値）、柱痕径18cmを測る。

第22号柱穴状ピット

調査区北部YM－71グリッドに位置し、Ⅴ層上面で確認した。構築面は、基本層序を含む土層断面からⅢd層上面である。ピット上面の平面形は円形で、底部に近づくにつれ小さくなっている。径36cm（推定値）、底部径14cm、深さ71cmを測る。柱痕は確認されなかった。

構築時期は、基本層序を含む土層断面から縄文時代後期前葉と考えられる。

３．焼土遺構

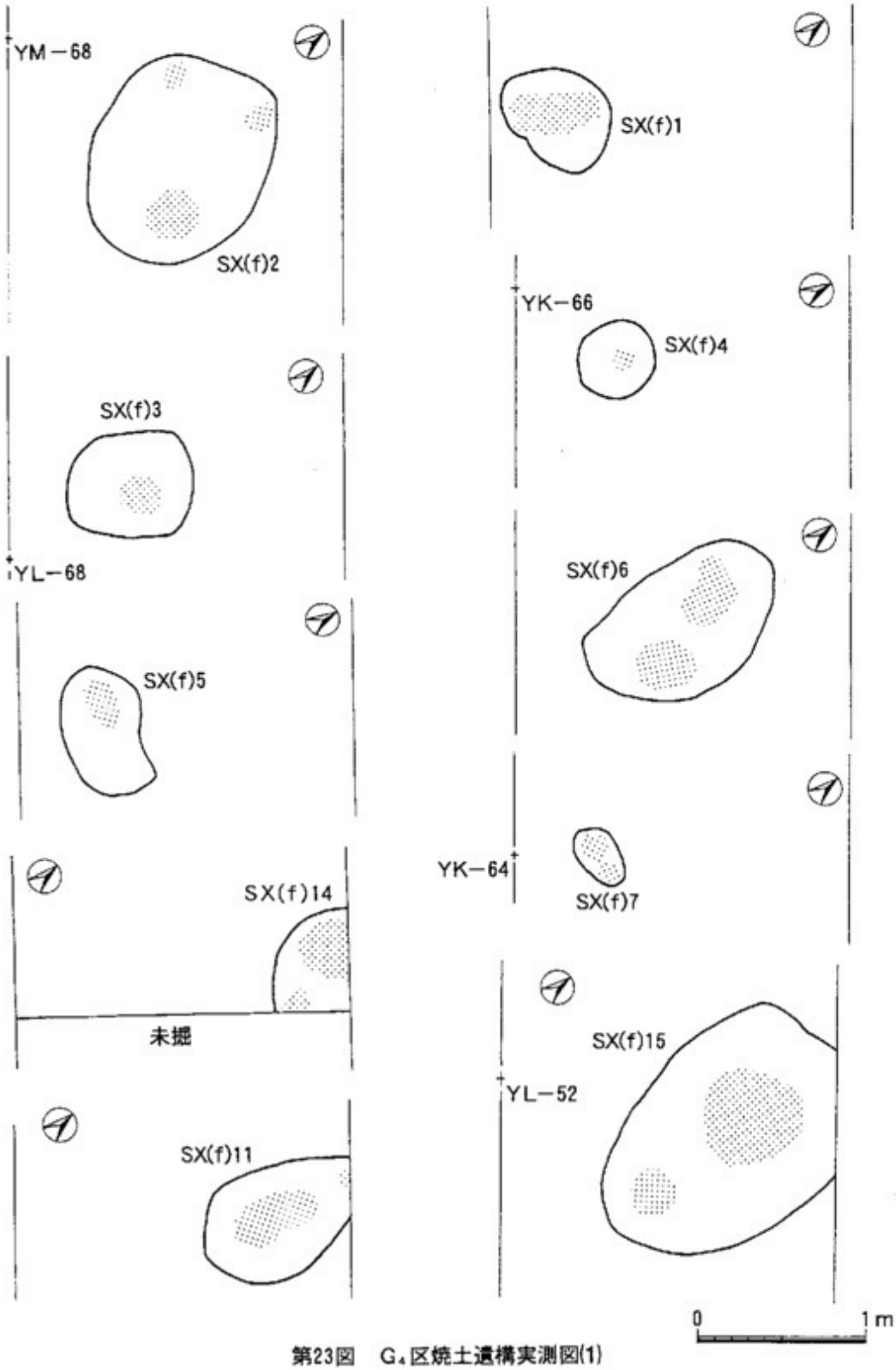
G₄区では19基の焼土遺構が検出され、ほとんどが調査区北部、西部、南西部で確認された。

第１号焼土遺構（第23図）

調査区北東部YG－72グリッドに位置し、Ⅲd層下位で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は72×54cmを測り、中央に54×25cmの焼土を確認した。遺物は出土しなかった。

第２号焼土遺構（第23図）

調査区北部YM－68グリッドに位置し、Ⅲb層上面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は134×103cmを測る。焼土は34×30cmを測る。遺物は出土しなかった。



第23図　G₄区焼土遺構実測図(1)

第３号焼土遺構（第23図）

調査区北部YM－68グリッドに位置し、Ⅲb層中位で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は77×64cmを測り、中央に27×22cmの焼土を確認した。遺物は出土しなかった。

第４号焼土遺構（第23図）

調査区北部YK－66グリッドに位置し、Ⅲb層中位で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は46×45cmを測る。焼土は中央やや北寄りにあり、15×13cmを測る。遺物は出土しなかった。

第５号焼土遺構（第23図）

調査区北東部YJ－66グリッドに位置し、Ⅲb層上面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は80×51cmを測り、西寄りに31×17cmの焼土を確認した。遺物は出土しなかった。

第６号焼土遺構（第23図）

調査区北部YN－64グリッドに位置し、Ⅲb層下位で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は126×77cmを測る。焼土44×26cmを測る。遺物は出土しなかった。

第７号焼土遺構（第23図）

調査区北部YJ－64グリッドに位置し、Ⅲc層中位で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は39×24cmを測る。焼土は18×16cmを測る。遺物は出土しなかった。

第11号焼土遺構（第23図）

調査区中央やや北寄りYM－60グリッドに位置し、Ⅲb層中位で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は104（推定値）×67cmを測る。焼土は52×28cmを測る。焼土の一部は未掘部に広がると思われる。遺物は出土しなかった。

第12号焼土遺構（第24図）

調査区西部YP－56グリッドに位置し、Ⅲc層中位で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は212×131cmを測る。焼土は58×49cmを測る。遺物は出土しなかった。

第14号焼土遺構（第23図）

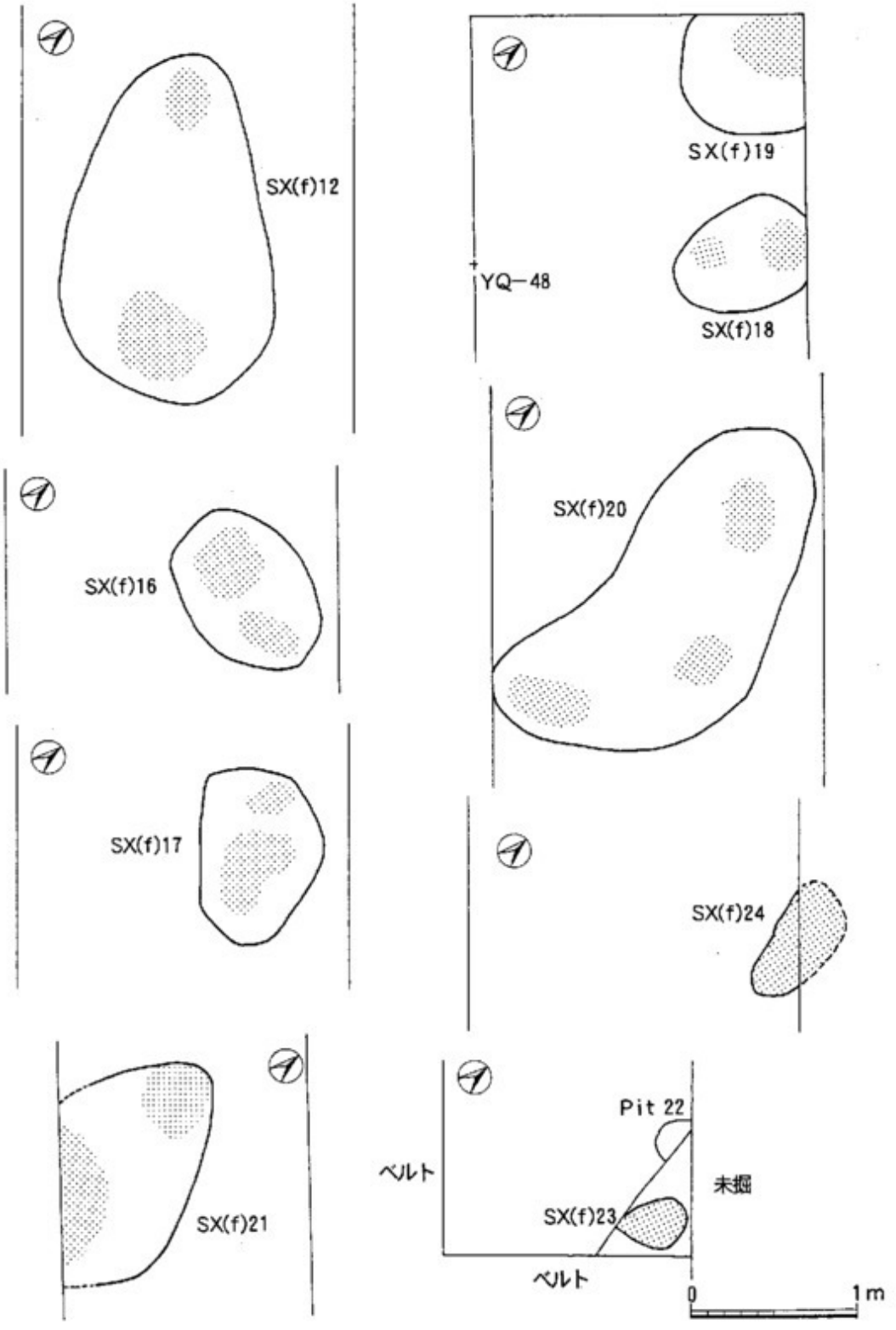
調査区南西部YL－52グリッドに位置し、Ⅲb層上面で確認した。焼土および焼土粒を確認した範囲は61×46cm（推定値）を測る。焼土は36×29cm（推定値）を測る。焼土は未掘部に広がると思われる。遺物は出土しなかった。

第15号焼土遺構（第23図）

調査区南西部YL～YM－52グリッドに位置し、Ⅲb層上面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は171（推定値）×118cmを測る。焼土は63×56cmを測る。遺物は出土しなかった。

第16号焼土遺構（第24図）

調査区南西部YM－52グリッドに位置し、Ⅲb層上面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は108×76cmを測る。焼土は45×41cmを測る。遺物は出土しなかった。



第24図　G₄区焼土遺構実測図(2)

第17号焼土遺構（第24図）

調査区南西部YQ－48グリッドに位置し、Ⅲb層中位で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は108×75cmを測る。焼土58×34cmを測る。遺物は出土しなかった。

第18号焼土遺構（第24図）

調査区南西部YQ～YR－48グリッドに位置し、Ⅲb層上面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は88×62cmを測る。焼土は32×27cm（推定値）を測る。遺物は出土しなかった。

第19号焼土遺構（第24図）

調査区南西部YR－48グリッドに位置し、Ⅲb層上面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は96×90cm（推定値）、焼土は46×45cm（推定値）を測り、未掘部に広がると思われる。遺物は出土しなかった。

第20号焼土遺構（第24図）

調査区南西部YL－50グリッドに位置し、Ⅲb層上面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は243×110cmを測る。焼土は52×26cmを測る。遺物は出土しなかった。

第21号焼土遺構（第24図）

調査区北部YM－70グリッドに位置し、Ⅲd層中位で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は155×111cm（推定値）を測る。焼土は85×28cm（推定値）を測る。焼土は未掘部に広がると思われる。遺物は出土しなかった。

第23号焼土遺構（第24図）

調査区北部YM－71グリッドに位置し、Ⅲc層下位で確認した。焼土は43（推定値）×29cmを測る。遺物は出土しなかった。

第24号焼土遺構（第24図）

調査区北部YM－70グリッドに位置し、Ⅲc層中位で確認した。第２号竪穴住居跡と重複し、本遺構が新しい。焼土は76×38cm（推定値）、焼土厚は12cmを測る。

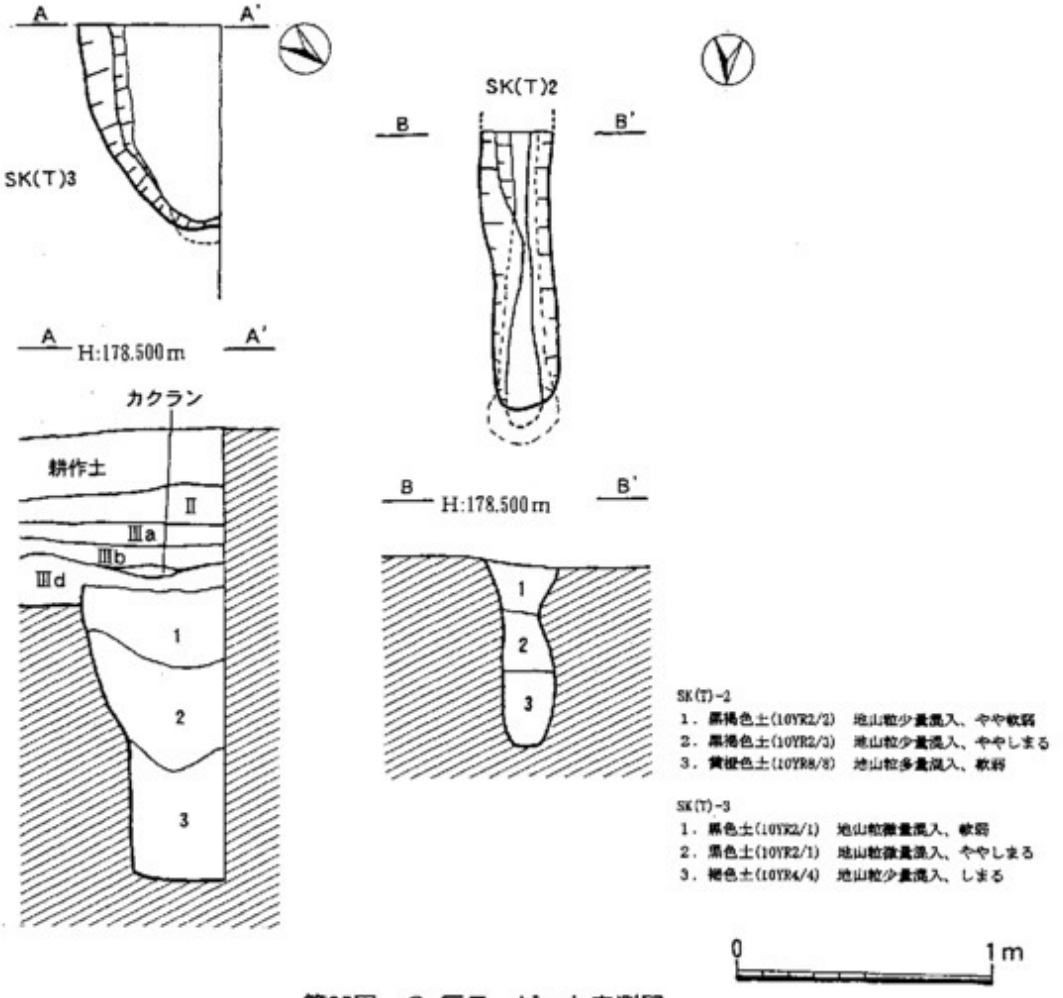
構築時期は、遺構確認面および土層断面から縄文時代後期中葉と考えられる。

4．土　坑

(1)　Ｔピット

第2号Ｔピット（第25図）

調査区北部ＹＫ－72グリッドに位置し、Ⅳ層上面において確認した。構築面はⅢd層下位である。本遺構南側半部は未発掘としたため、長軸は不明である。短軸は40cm、確認面からの深さは75cm（推定値）を測る。遺構の北側先端部は、土坑上部に比べ、底部が北側に広がっている。横断面は「Y」字状を呈し、深くなるにつれて徐々に狭くなっている。堆積土は３ブロッ



第25図　G₄区Ｔ－ピット実測図

クに区分され，人為堆積である。

D₂区（第５次）の調査で，北西側の台地縁辺部から北東方向に入り込む沢に沿ってTピット群が構築されていたことが確認されており，本遺構もその一部と考えられる。

本遺構から遺物は出土しなかった。

構築時期は構築面から縄文時代後期と考えられる。

第３号Ｔピット（第25図）

調査区北部ＹＮ－68グリッドに位置し，Ⅳ層上面で確認した。構築面はⅢd層中位である。本遺構は，北東側の一部のみ発掘したため，全体の規模を確認するには至らなかった。深さは117cm（推定値）を測り，大型のピットであることが窺える。遺構の北東側の先端は，底に近づくほど北東側に広がっている。横断面は「Y」字状で，深くなるにつれてわずかに狭くなる。

堆積土は３ブロックに区分され、人為堆積である。ピット内より遺物は出土しなかった。
構築時期は、構築面から縄文時代後期と考えられる。

(2) 土　坑

第１号土坑（第26図～第28図、PL11）

調査区北東部YK－72グリッドに位置し、Ⅳ層上面で確認した。構築面はⅢd層上面である。平面形は円形で、規模は長軸64×短軸62cm（推定値）、深さ52cmを測る。底面は平坦で、外反しながら垂直に立ち上がる。堆積土は7ブロックに区分され、人為堆積である。土坑上面で10～23cmの石が３個、土坑の淵に並ぶように確認され、そのうち２つは同一の石が割れたものであることが判明した。石の平坦な面には、わずかに凹がみられ、まわりに赤い付着物が確認された。鑑定の結果、種類は同定できないものの、赤色顔料であることが判明した。石材は２つが石英安山岩、１つが石英閃緑玢岩である。

遺構内より、縄文時代後期の土器破片７点が出土している。第27図２、３、４は同一個体であり、LR縄文が施文されている土器である。

構築時期は、基本層序を含む土層断面から縄文時代後期前葉と判断される。

第４号土坑（第26図）

調査区北西部YN－60グリッドに位置し、Ⅲd層下面で確認した。構築面はⅢd層上面である。平面形は、北西方向に長軸をもつ楕円形で、長軸方向は、N－66°－Wである。規模は長軸156（推定値）×短軸136cm、深さ38cmを測る。底面は鍋底状で、地山まで掘り込まれ、壁は底面からやや垂直に立ち上がる。堆積土は７ブロックに区分され、人為堆積である。土坑下位で炭化物の多量混入を確認し、板状の炭化材が検出された。分析の結果、板状の炭化材はクリ材であることが判明した。（第Ⅴ章参照）

構築時期は、基本層序を含む土層断面から縄文時代後期前葉と判断される。

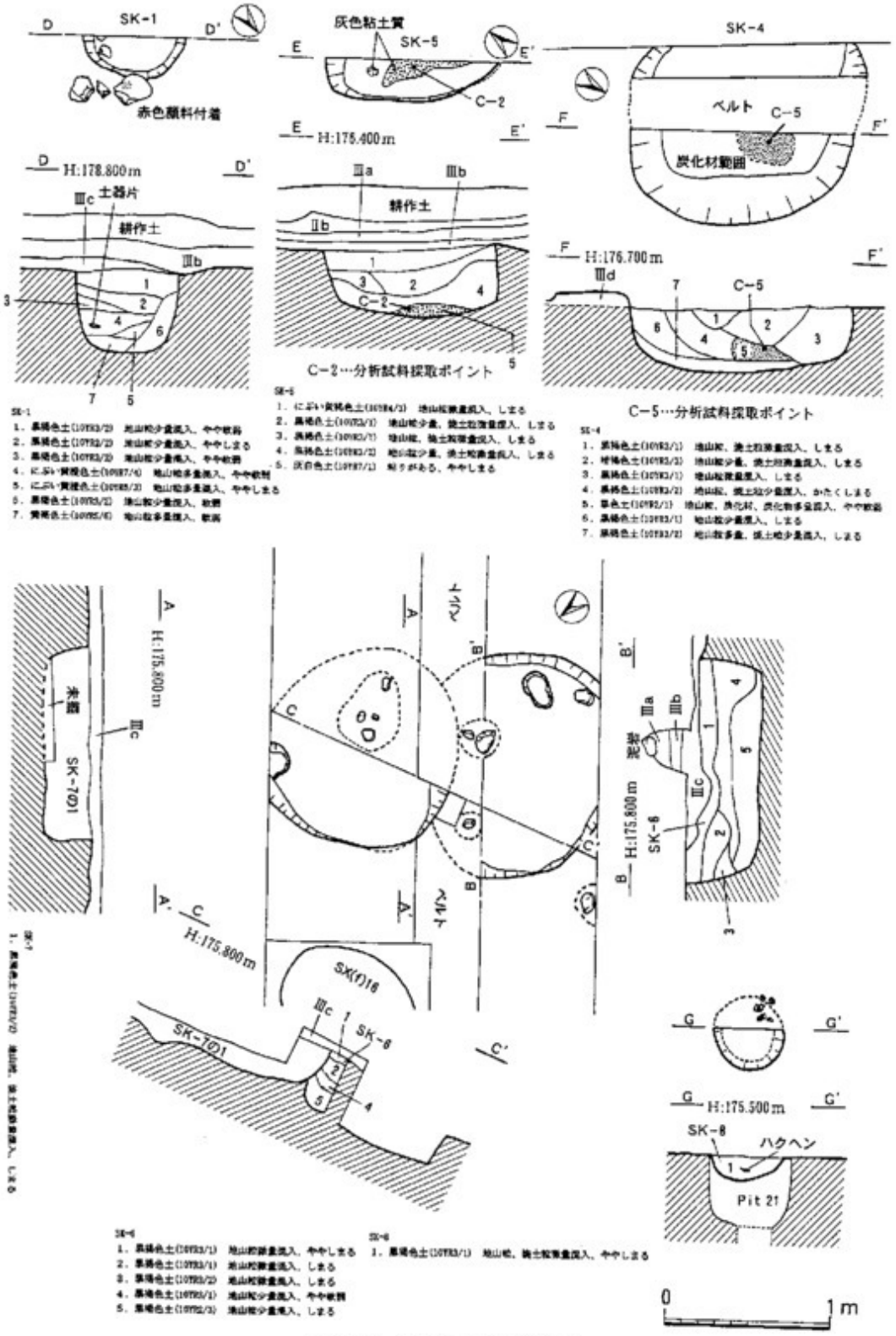
第５号土坑（第26図）

調査区南部YJ－52グリッドに位置し、Ⅲd層中位で確認した。構築面はⅢd層上面である。遺構の一部のみ発掘したため、遺構全体の平面形・規模は不明である。深さ43cmを測る。底面は平坦で、壁は底面から垂直に立ち上がる。堆積土は５ブロックに区分され、人為堆積である。土坑底部から、５～10cm大の灰白色土の塊が確認され、分析の結果、粘質土が加工されたものと判断された。（第Ⅴ章参照）

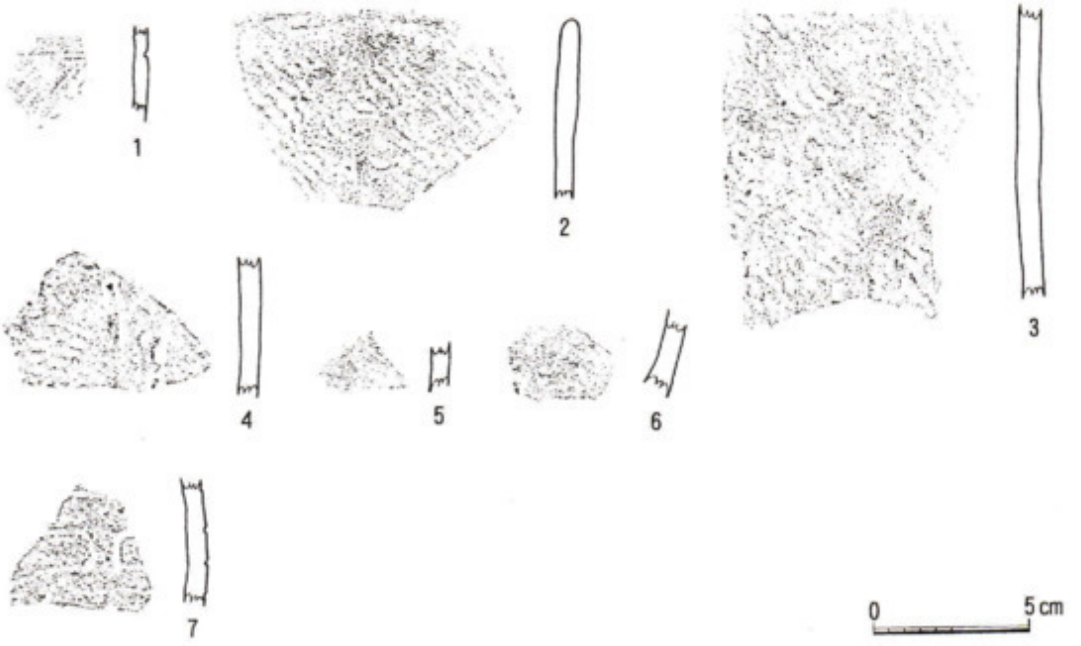
構築時期は、基本層序を含む土層断面から縄文時代後期前葉と判断される。

第６号土坑（第26図）

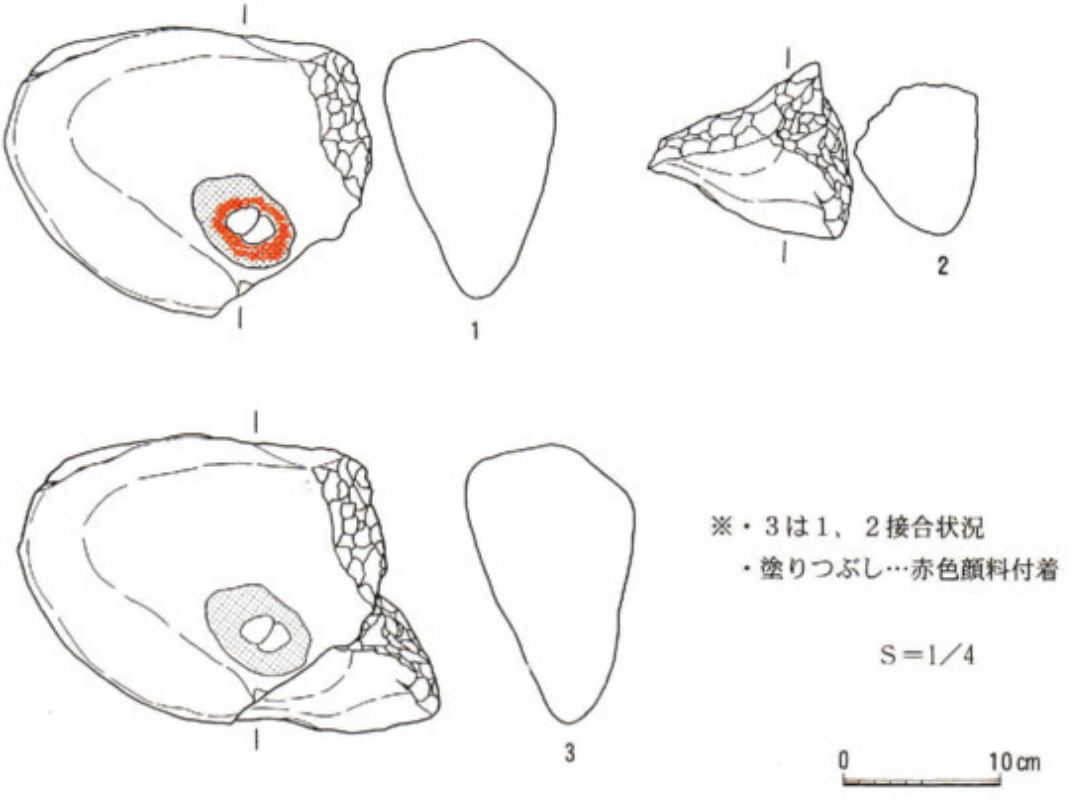
調査区南西部YM－52グリッドに位置し、Ⅳ層下面で確認した。構築面はⅢd層上面である。



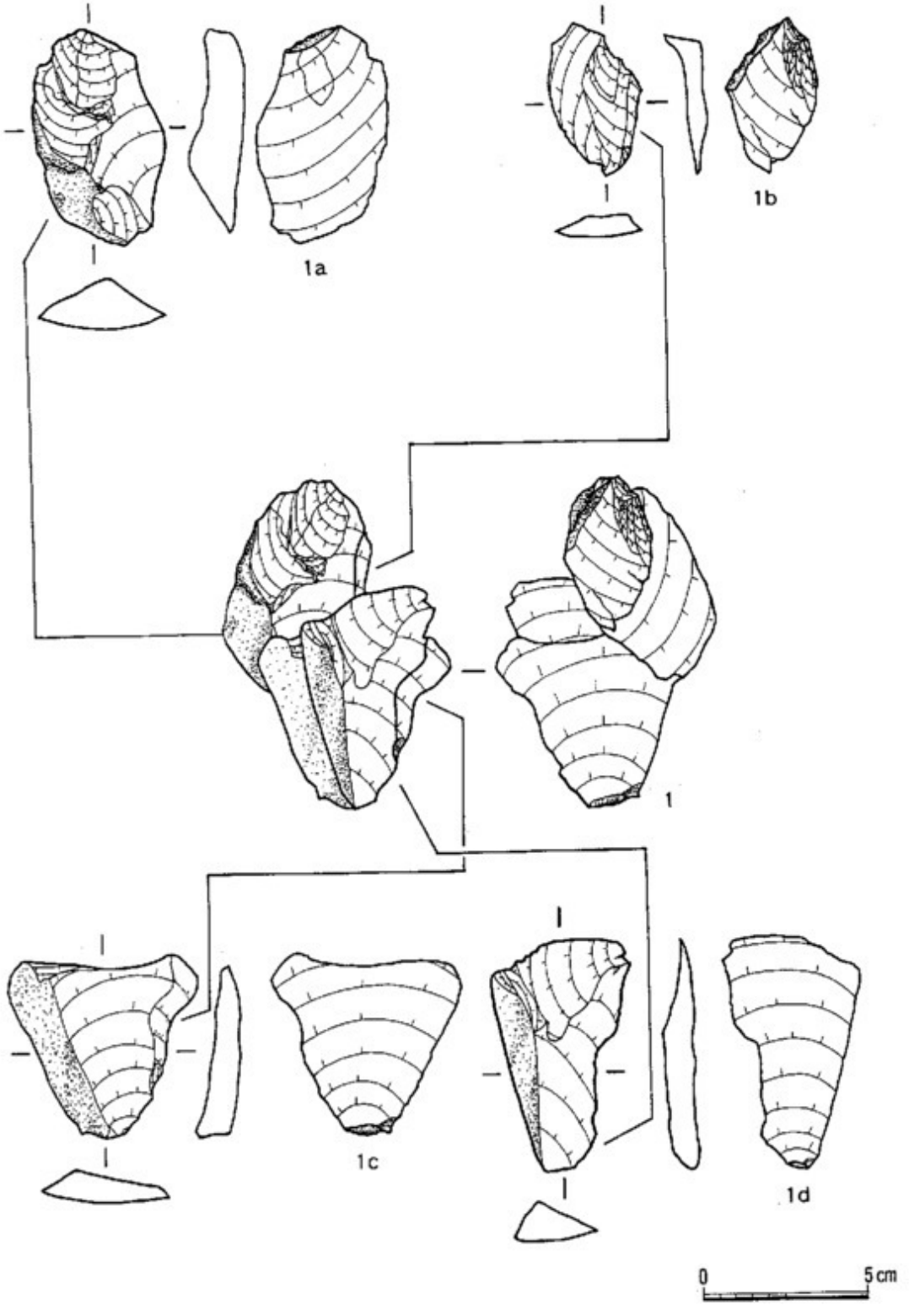
第26図　G₄区土坑実測図(1)



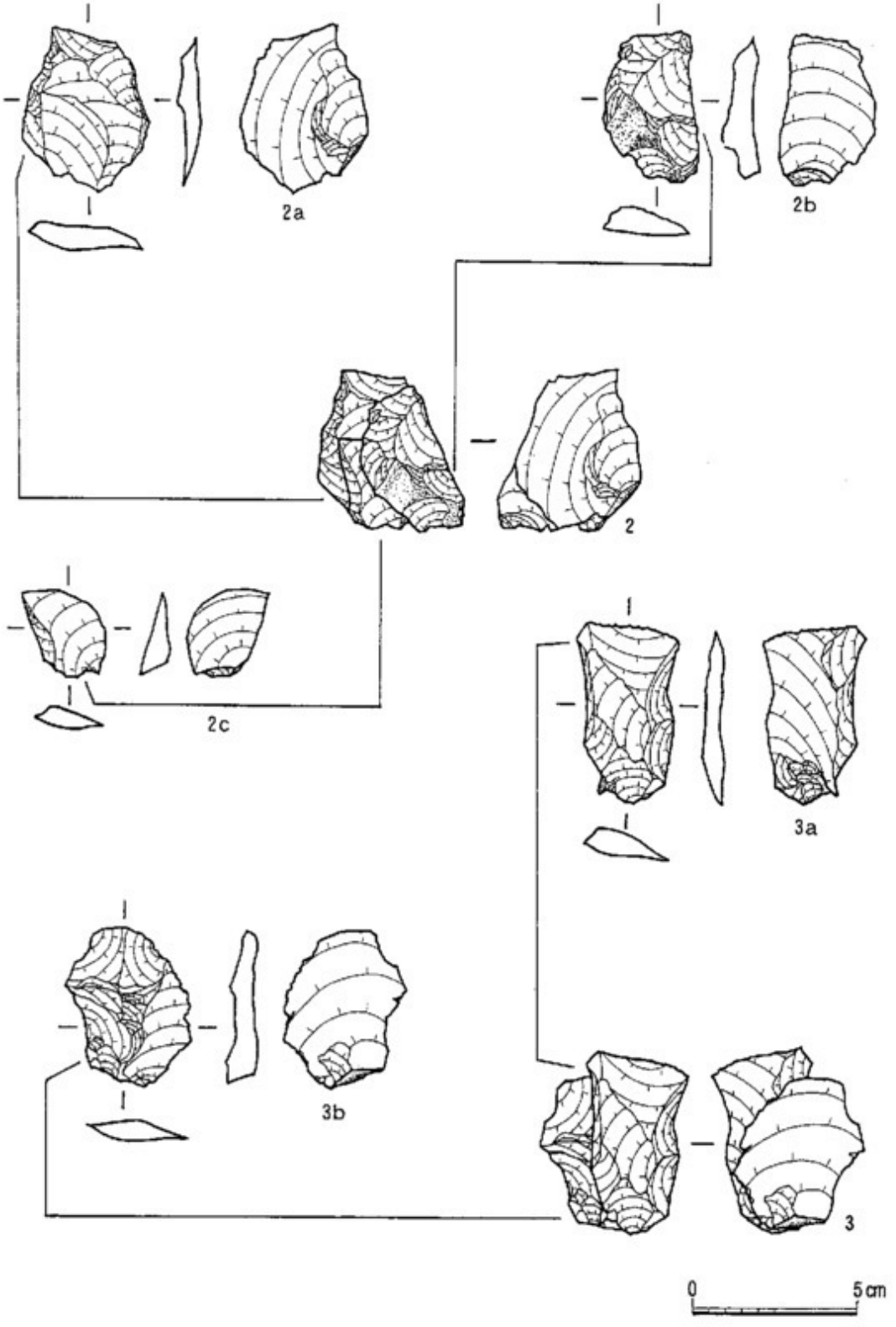
第27図　G₄区第１号土坑出土土器拓影図



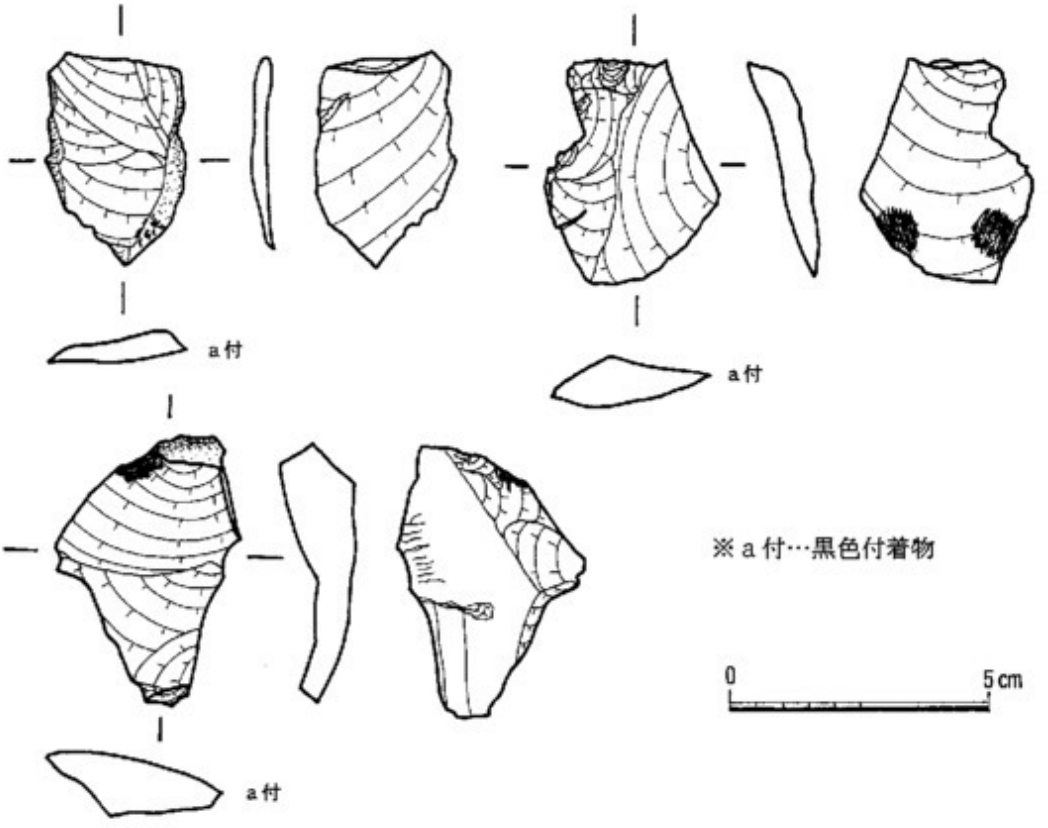
第28図　G₄区第１号土坑出土石器実測図



第29図　G₄区第８号土坑出土剥片接合状況(1)



第30図　G₄区第８号土坑出土剥片接合状況(2)



第31図　G₄区第８号土坑出土剥片実測図

PL１　第８号土坑出土剥片

第７号土坑と重複し、本遺構が古い。平面形は、北西方向に長軸をもつ楕円形で、長軸方向は、N－15°－Wである。規模は長軸143×短軸120cm（推定値）、深さ45cm（推定値）を測る。底面は平坦で、壁は底面から垂直に立ち上がる。堆積土は5ブロックに区分され、人為堆積である。

構築時期は、基本層序を含む土層断面から縄文時代後期前葉と判断される。

第７号土坑（第26図）

調査区南西部YM－52グリッドに位置し、Ⅳ層下面で確認した。構築面はⅢd層上面である。第６号土坑と重複し、本遺構が新しい。平面形は、やや歪な円形で、規模は長軸123×短軸119cm（推定値）、深さ42cmを測る。底面は平坦だが、北東側の一部には浅い掘り込みが確認された。壁は底面から垂直に立ち上がる。堆積土は２ブロックに区分され、人為堆積である。図示されているのは1層のみであるが、北東側底部の掘り込み部に褐色土が堆積している。

構築時期は、構築面から縄文時代後期前葉と判断される。

第８号土坑（第26図、第29図～第31図、PL１、12）

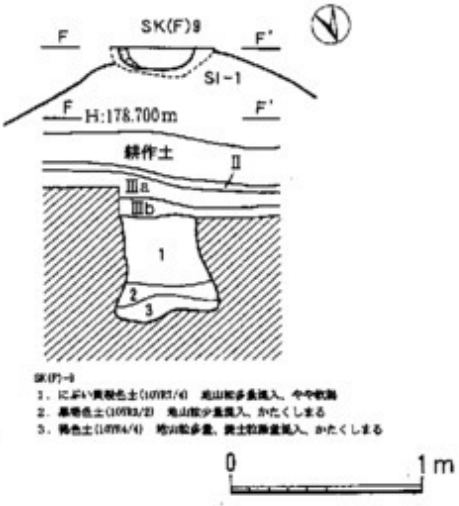
調査区南西部YP－48グリッドに位置し、Ⅳ層上面で確認した。第21号柱穴状ピットと重複し、本遺構が新しい。平面形は円形で、規模は長軸45×短軸42cm、深さ15cmを測る。底面は鍋底状で、壁は底面から緩やかに外反して立ち上がる。堆積土は１ブロックに区分され、人為堆積である。

土坑内より35点の剥片が出土した。そのうち３組９点が接合した。また、３点の剥片にアスファルトとみられる黒色の付着物が観察された。石材は、硬質頁岩22点、珪質頁岩12点、黒曜石１点である。

(3) フラスコ状土坑

第９号フラスコ状土坑（第32図）

調査区北部YM－71グリッドに位置する。構築面はⅢc層上面である。第1号竪穴住居跡と重複しており、本遺構が新しい。径は長軸が40cm、短軸は不明である。底部径は長軸が54cm、短軸は不明である。深さ55cmを測る。堆積土は3ブロックに区分され、人為堆積である。堆積土上位ににぶい黄橙色土が充填されていた。本遺構から遺物は出土しなかった。



第32図　G₄区フラスコ状土坑実測図

構築時期は、基本層序を含む土層断面から縄文時代後期中葉と考えられる。

5、礫　　群（第33図）

調査区西部から南西部にかけて拳大の礫が集中する区域が3ヶ所確認された。５～10cm大のの礫が大半を占めるが、なかには20cmを超えるものもみられる。火を受けた痕跡がみられる礫も観察された。礫群より、５点の礫石器が出土している。礫群を構成する石材は、凝灰岩が60％と多く、泥岩20％、石英安山岩10％、安山岩５％、砂岩５％と続く。

また、南西部から北東部にかけて延びる沢の底とみられるＶ層面上に、礫の集中する区域がみられるが、自然堆積であることが判明している。　　（三浦貴子）

6．遺構外出土遺物

(1)　土　　器（第39図～第57図）

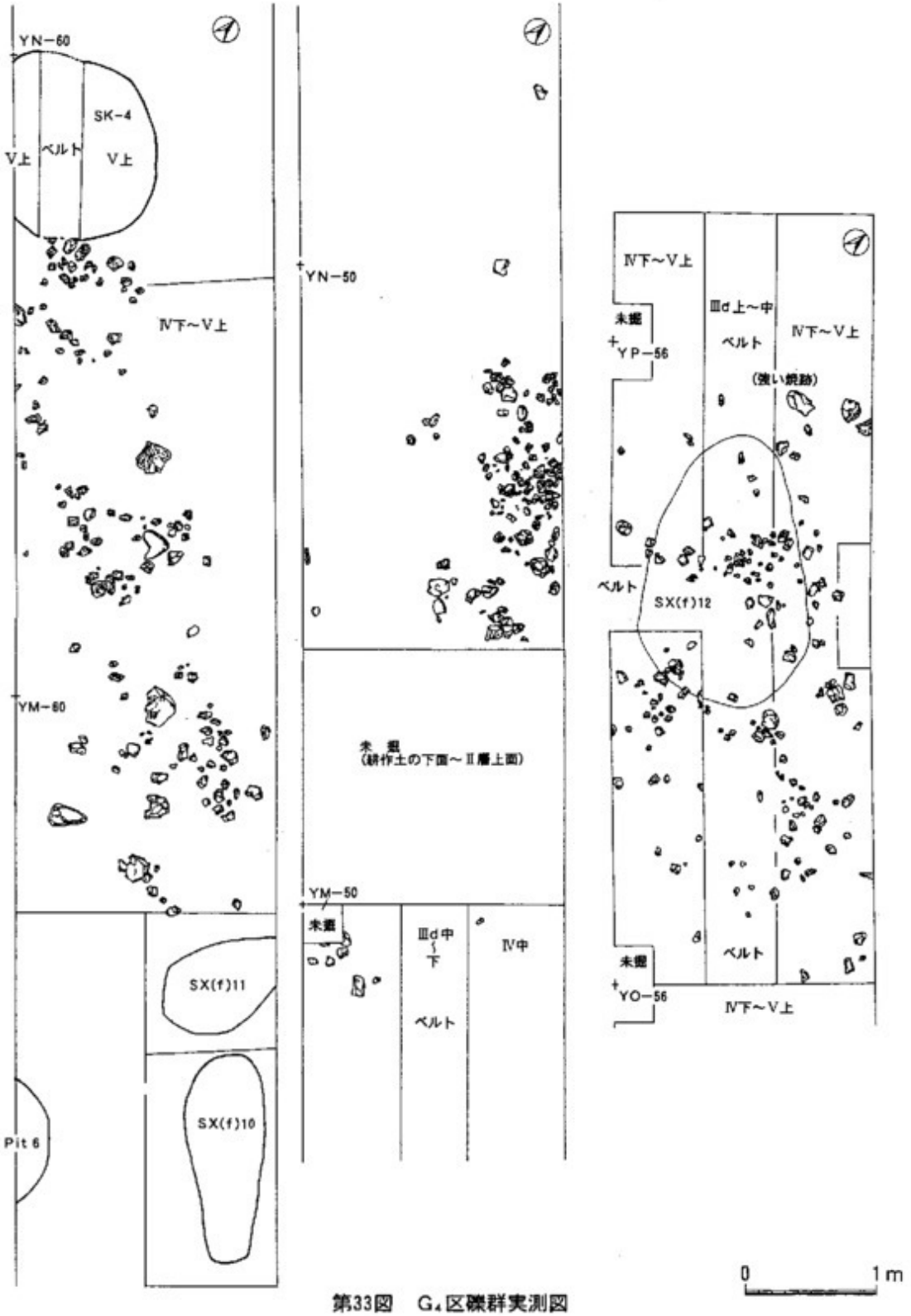
G_4区遺構外からは完形土器・復元土器５点とともに多数の土器破片が出土した。これらは縄文時代の時期に位置づけられるものであるが、その大半は後期のものが占めている。
なお、須恵器破片１点が出土しており、この項において説明を加える。

各時代の土器分布状況をみると早期土器群はＹＯ－62グリッド、前期土器群は調査区の北側（ＹＭ－70）に集中する。また、後期土器群及び第Ｖ群土器は調査区中央から台地縁際から出土するが、特に調査区北側の台地縁（住居域の台地縁）、調査区中央（YL－60グリッド）、南側（YL－48グリッド）に集中する。

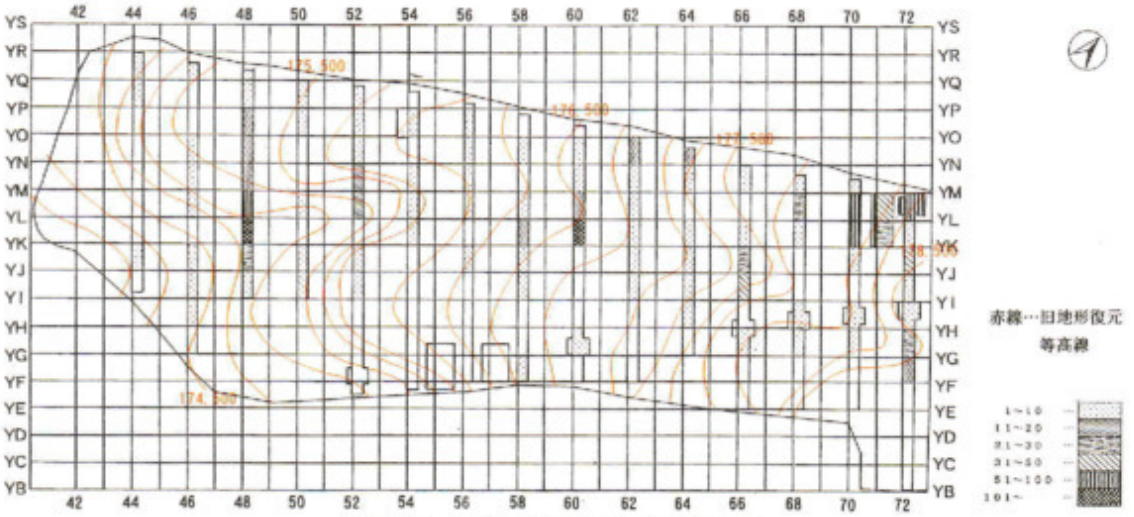
調査区を横切るように入り込んだ沢との関連を観察すると遺物集中地域である調査区中央と南側は沢の中に位置する。

第76図はＹＭ－48～ＹＪ－48グリッドから出土した土器破片（第35図～38図）の平面並びに垂直分布図である。平面的には特徴のない分布を示しているが、垂直分布では縄文時代後期初頭～前葉の遺物包含層・遺構確認面である第Ⅲd層より上の層に集中する。また土器が廃棄された後雨水により移動したものであれば沢底にある程度集中して良いはずであるし、水磨されて文様がはっきりとしないなどといった現象が起こりうるはずであるが、これらの傾向はこの図や土器観察から読み取ることができない。このことから土器は沢がある程度埋まりきった状況のもとに廃棄されたものと判断することができる。

遺構外から出土した土器については、時期ごとに群分し、文様によって分類した。なお分類に際してはこれまでに刊行した報告書を基本とした。



第33図　G₄区礫群実測図



第34図　G₄区土器破片出土分布状況

第Ⅰ群土器　早期の土器（第42図１～9、12）

１類：貝殻文、貝殻沈線文の土器（第42図１～8）

ＹＯ－62グリッドからの一括資料である。尖底の深鉢形土器の胴部破片で貝殻腹縁文が施文されている。胎土に砂粒を含み、焼成は非常に良好で堅固である。色調は橙色を呈する。

２類：縄文が施文された土器（第42図９）

口唇部が半円状を呈する平口縁の尖底または丸底の深鉢形土器と想定される。無節縄文が横位方向に回転施文される。胎土には植物繊維を含み、焼成は良好である。色調は灰褐色を呈する。

３類：羽状縄文の土器（第42図12）

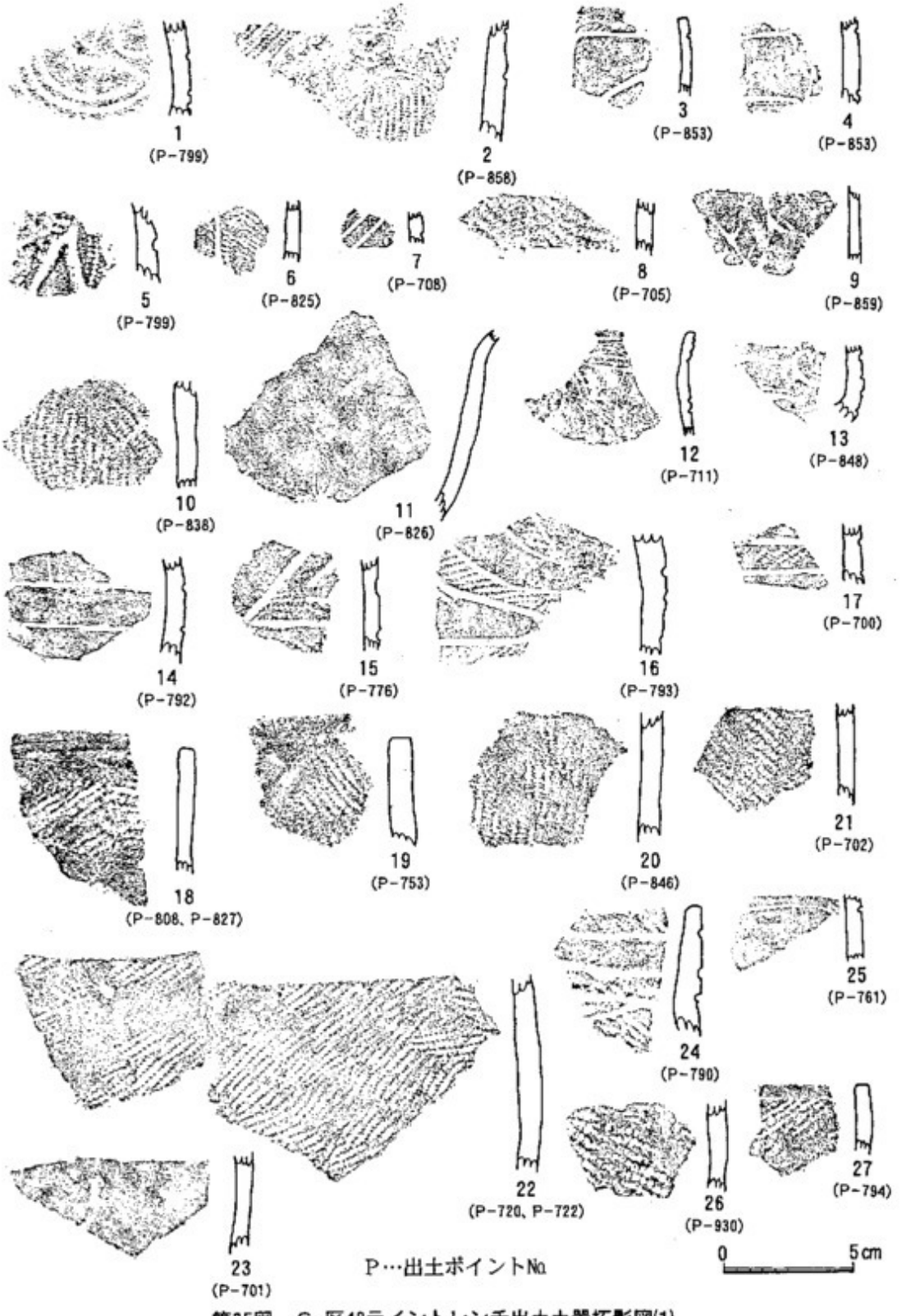
胎土にはきめの細かな粘土を用い、焼き上がりが軽く感じる土器である。羽状縄文が施文される。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。

本群１類土器は寺の沢式、２類・３類は早稲田５類・表館(1)遺跡第Ｘ群土器に相当するものと考えられる。

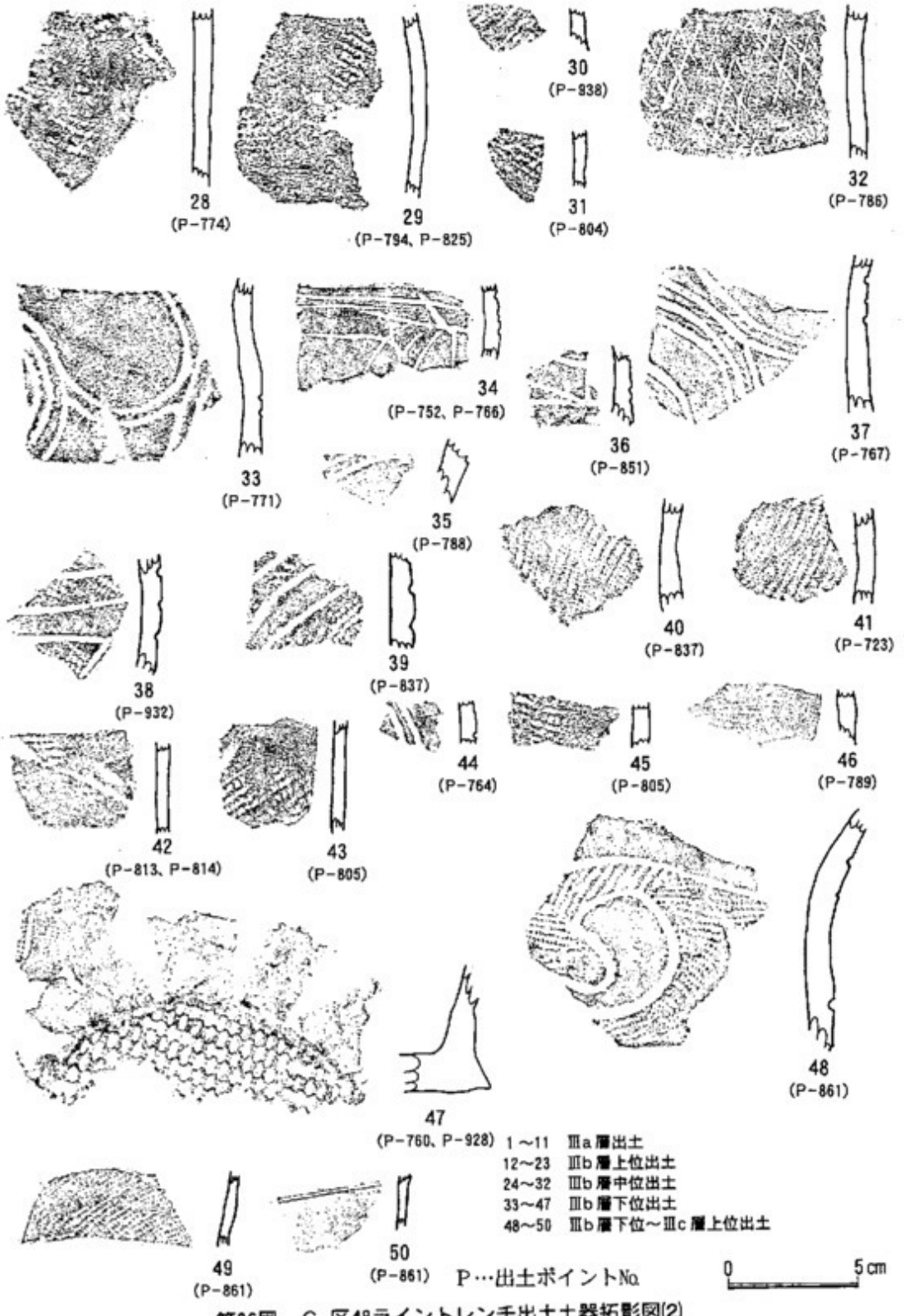
第Ⅱ群土器　前期の土器（第41図５、第42図10～11、13～20）

１類：単軸絡状体の圧痕文が施文された土器（第41図５、第42図13～20）

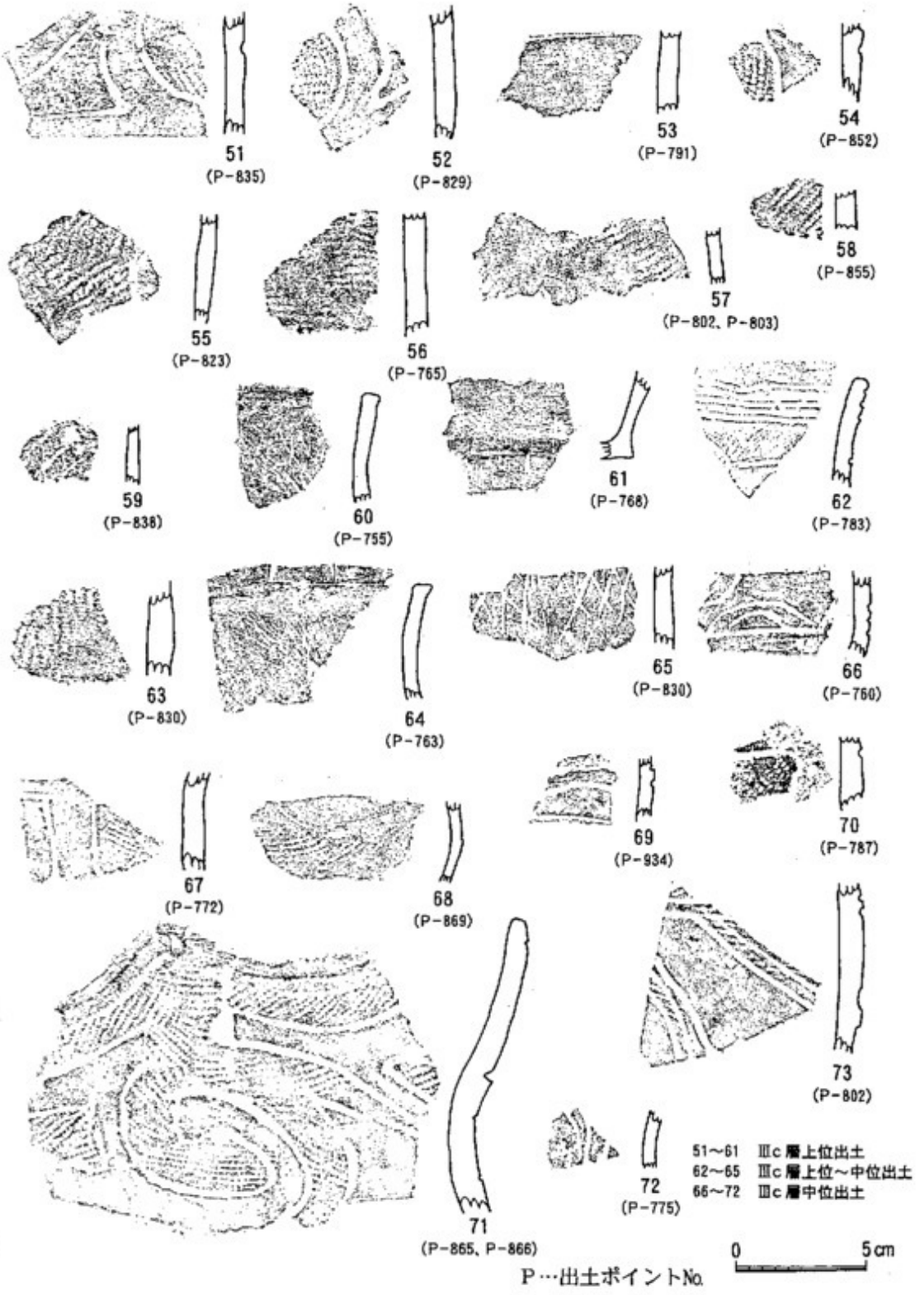
ａ：13は幅の狭い口頸部文様体に単軸絡状体による平行圧痕文が３条、胴部には木目状撚糸文が施文されている。平口縁を呈する深鉢形土器と想定される。14～20は胎土・焼成・色調から同一固体と考えられる胴部破片である。胎土に砂粒のほか、少量の植物繊維を含む。焼成は



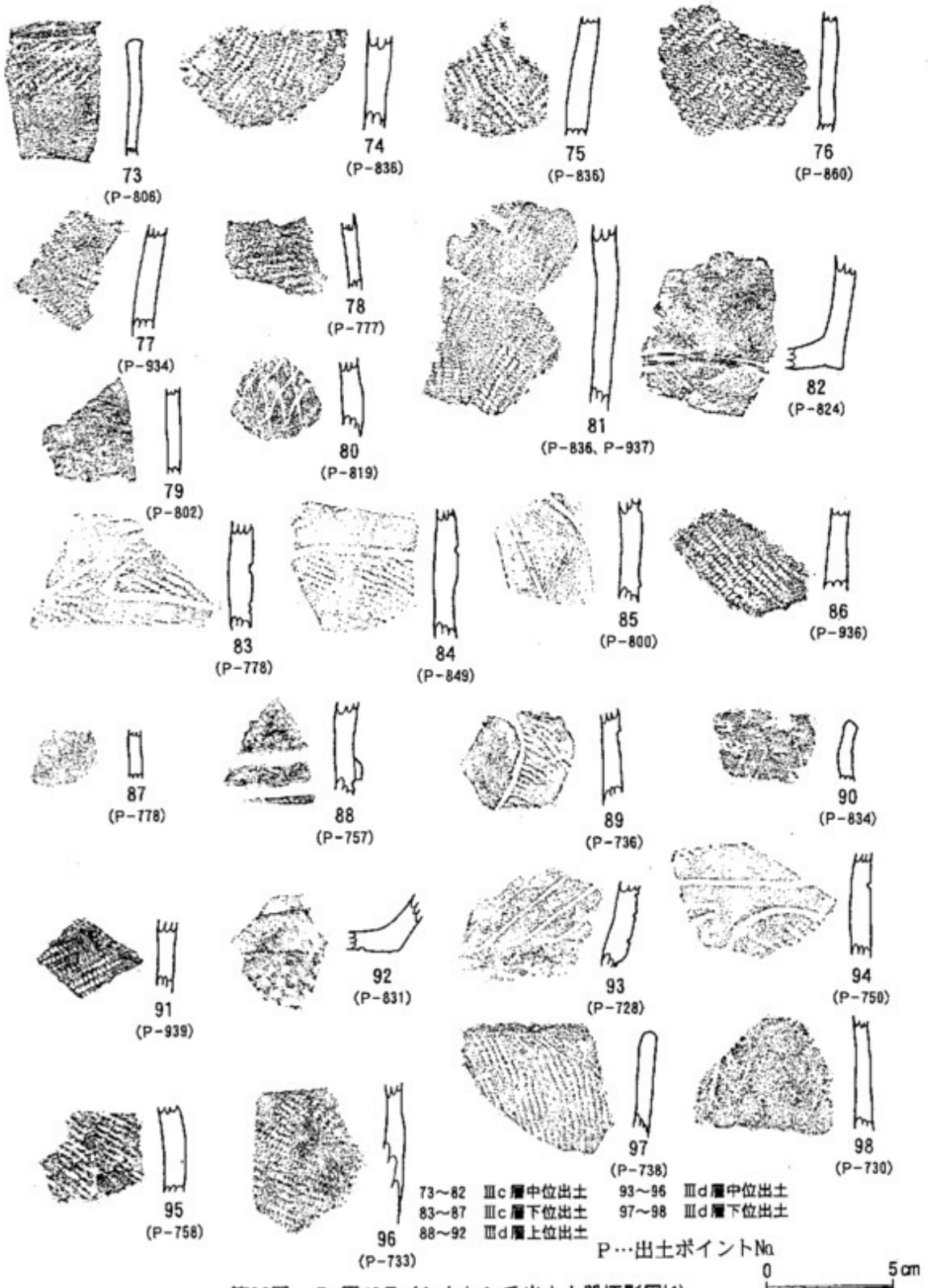
第35図　G₄区48ライントレンチ出土土器拓影図(1)



第36図　G₄区48ライントレンチ出土土器拓影図(2)



第37図　G₄区48ライントレンチ出土土器拓影図(3)



第38図　G₄区48ライントレンチ出土土器拓影図(4)

良好である。

b：第40図５は平口縁を呈する深鉢形土器で、YM－70グリッドより出土した。口頸部は厚みを持ち、単節縄文が傾位に力強く押圧されている。胴部から底部にかけて木目状撚糸文が施文されている。器高27.5cm、口径19.4cmを測る。胎土に砂粒のほか、少量の植物繊維を含み、焼成は良好、色調はにぶい橙色を呈する。

２類：結節羽状縄文が施文される土器（第42図10～11）

結節の羽状縄文が施文されている土器である。胎土に砂粒を含み、焼成は良好で、色調は暗褐色を呈する。

本群１類土器は前期末葉の円筒下層d式土器、２類もこの範疇に入る土器である。

第Ⅲ群土器　後期初頭から前葉の土器

１類：隆線文、隆沈文が施文された土器（第43図21～27）

隆線文、隆沈文が主文様となる土器を一括した。深鉢形土器や壺形土器がみられる。隆線文、隆沈文上に縄文や刺突文が付加されるものもある。23、24は隆線文上に押圧が見られ、方形文を区画するのだろうか。胎土に砂粒を含む。焼成は良好なものが多く、色調は浅黄橙色、黒色、灰白色、灰黄褐色を呈する。

２類：沈線文が施文された土器

a：主文様が縦位方向に展開する土器（第43図28～第44図55）

本類には隆線文、隆沈文が区画文として施文されたものも包括した。深鉢形土器や大型の壺形土器が主体となる。文様帯は胴部２/３まで及ぶものがある。主文様として弧線文、楕円形文、円形文、直線文が施文される。28、29は縦位区画文間に幅の広い弧線文を施文している。胎土に砂粒を含む。焼成は良好～不良とバラつきをみせる。色調は浅黄橙色、橙色、灰白色、にぶい褐色、明赤褐色等を呈する。

b：主文様が横位方向に展開する土器（第39図１、第44図56～第45図80）

深鉢形土器、鉢形土器、壺形土器が主体となる。文様帯は胴部下半まで及ぶものもある。主文様として曲線文、入組文、弧線文が横位方向に展開する。胎土には砂粒を含む。焼成は良好～不良で、色調は橙色、黄橙色、灰白色、黒褐色、褐色を呈する。

第39図１は山形口縁を呈する大型の深鉢形土器で文様帯は胴部中程まで及んでいる。口縁部文様帯には楕円形・円形文、胴部には入組文が施文されている。口径約28.8cmを測る。胎土に砂粒を含む。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色を呈する。

３類：帯縄文が施文された土器

a：主文様が縦位方向に展開する土器（第45図81～86）

深鉢形土器が主体となる。口縁部形状や文様帯の範囲については不明である。区画された文様帯内に縦位に曲線文、巴状入組文を配置したもので、弧線文や直線文が付加される。同類bと比べ沈線は細く、その間隔は狭い感じを受ける。沈線間にはＲＬ・ＬＲ縄文が施文・充填される。胎土には砂粒を含む。焼成は良好である。色調はにぶい黄橙色、浅黄橙色、橙色を呈する。

b：主文様が横位方向に展開する土器（第45図87～第49図162）

深鉢形土器、壺形土器が主体となる。深鉢は波状口縁、平口縁を呈する。文様帯は胴部中程から最張部まで及ぶ。主文様として横位に展開する入組文が施文される。沈線間にはＲＬ・ＬＲ縄文が施文・充填される。同類ａと比べ沈線、沈線間とも幅広くなる。胎土には砂粒を含む。焼成は良好～良であるが、稀に焼成のあまいものもある。色調は浅黄橙色、にぶい黄橙色、灰白色、褐灰色、明褐灰色等を呈する。

４類：幅の広い帯縄文（第49図163～166）

幅の広い帯縄文で、縄文の節が本群１類～３類と比べ細かなものを一括した。深鉢形土器、壺形土器がみられる。163は口縁部破片で縄文充填後、短い沈線が付加されている。

164から166は曲線文・弧線文が施文されている。胎土に砂粒を含む。焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈する。

本群土器１類は東北地方北部の前十腰内式に比定されるが、特に本類23、24は牛ケ沢遺跡、門前貝塚の出土土器に類似する。２類は十腰内Ｉａ式、３類は広義の十腰内Ｉｂ式に比定され、いわゆる大湯式は３類の中に包括される。４類は後期前葉と中葉の土器様式を持つものである。

第Ⅳ群土器　後期中葉の土器（第40図２～３）

１類：幅の広い帯縄文の土器（第40図３）

幅の広い帯縄文を施文した土器を一括した。これまでに出土したものを観察すると広口の壺が主体となるほか深鉢形土器も見られる。文様帯は胴部全域に及び口縁部は無文となる。第40図３は平口縁の小型の広口壺で、胴部に幅の広い帯縄文により波状文（V字先端に円文）が施文されている。沈線間にはLR縄文が充填されている。器高13.6cm、後掲7.6cm、底径3.8cmを測る。胎土に細かな砂粒を含む。焼成は良好で、色調は褐灰色を呈する。

２類：沈線文系の土器（第40図２）

沈線文系の土器を一括した。これまでに出土した同類のものをみると圧倒的に注口土器が多く、稀に深鉢形土器がみられる。第40図２は胴部の辺が丸みを帯びた注口土器で、入組文が施

文されている。器高9.7cm、口径6.7cm、底径5.9cmを測る。胎土には細かな砂粒を含む。焼成は良好で、色調は褐灰色を呈する。

本群土器は東北北部の十腰内Ⅱ式土器に相当するものである。なお、器形が朝顔状に開き装飾突起を有し、アメーバ状の磨消縄文によって施文されたタイプの土器は本地域からは出土しなかった。

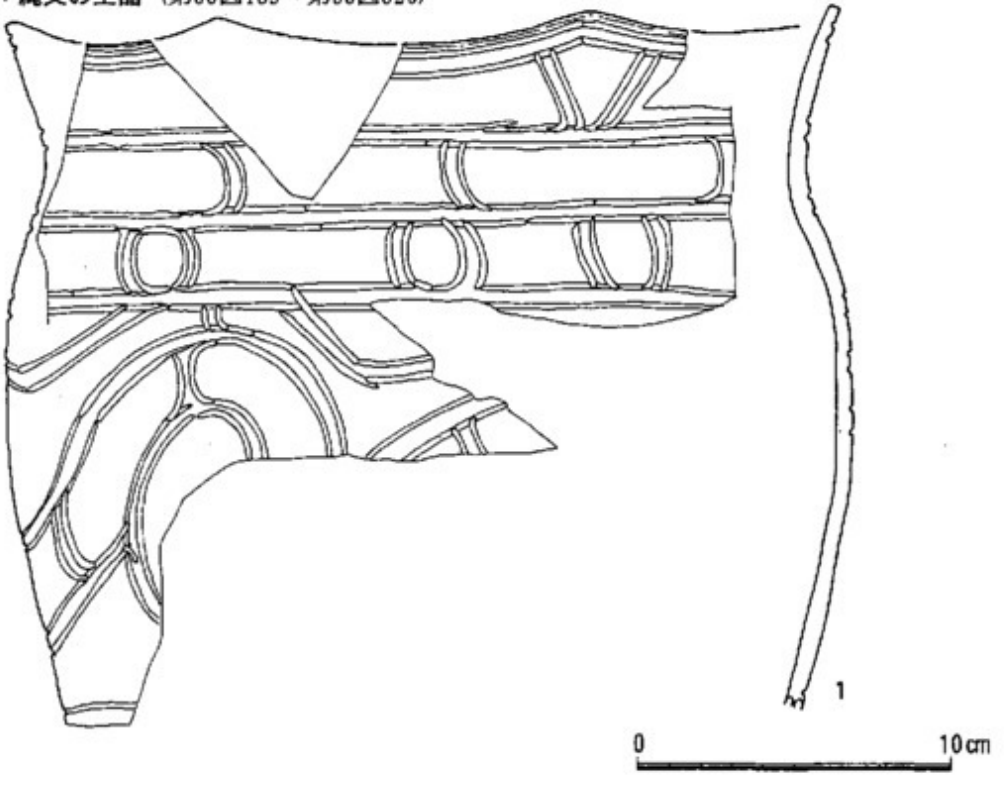
第Ⅴ群土器　後期初頭から中葉の土器

数量的には本群土器の占める割合が高い。本群には無文、縄文（無節・単節・複節）、撚糸文の土器を一括した。

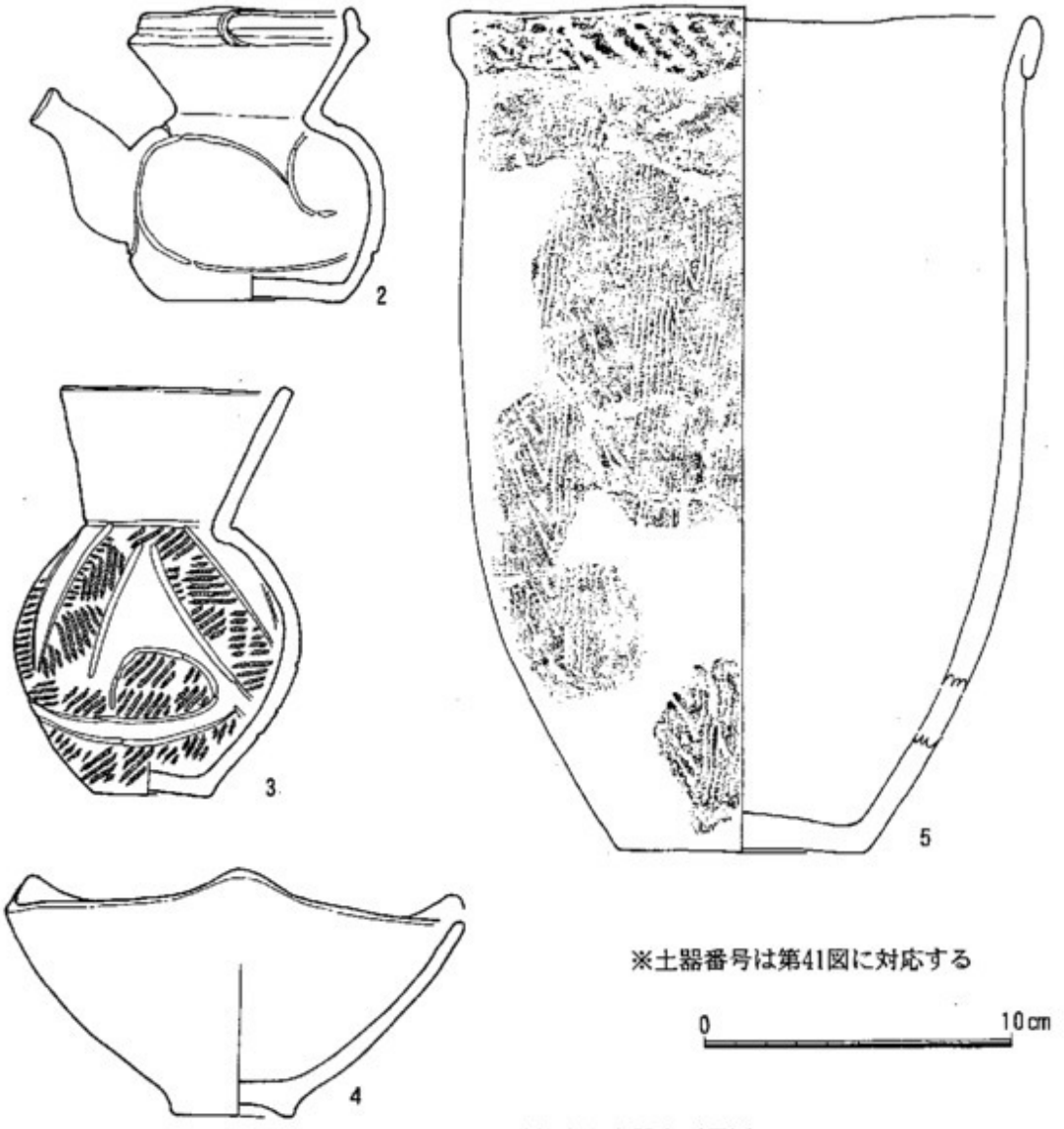
1類：無文の土器（第40図4、第49図167～第50図188）

深鉢形土器、鉢形土器、ミニチュア土器が見られ、前二者は平口縁を呈する。器内外面とも磨きの調整が施されている。胎土に砂粒を含み、焼成は良好なものが多い。第40図4は三つの山形突起を持つ鉢形土器で、器高8.2cm、口径15.0cmを測る。胎土に細かな砂粒を含む。焼成は良好、色調は褐灰色を呈する。

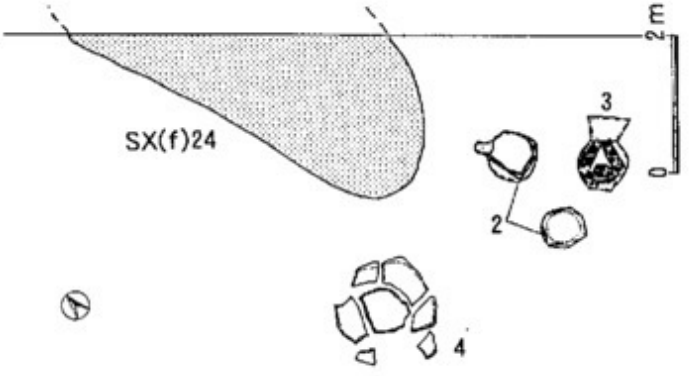
2類：縄文の土器（第50図189～第55図320）



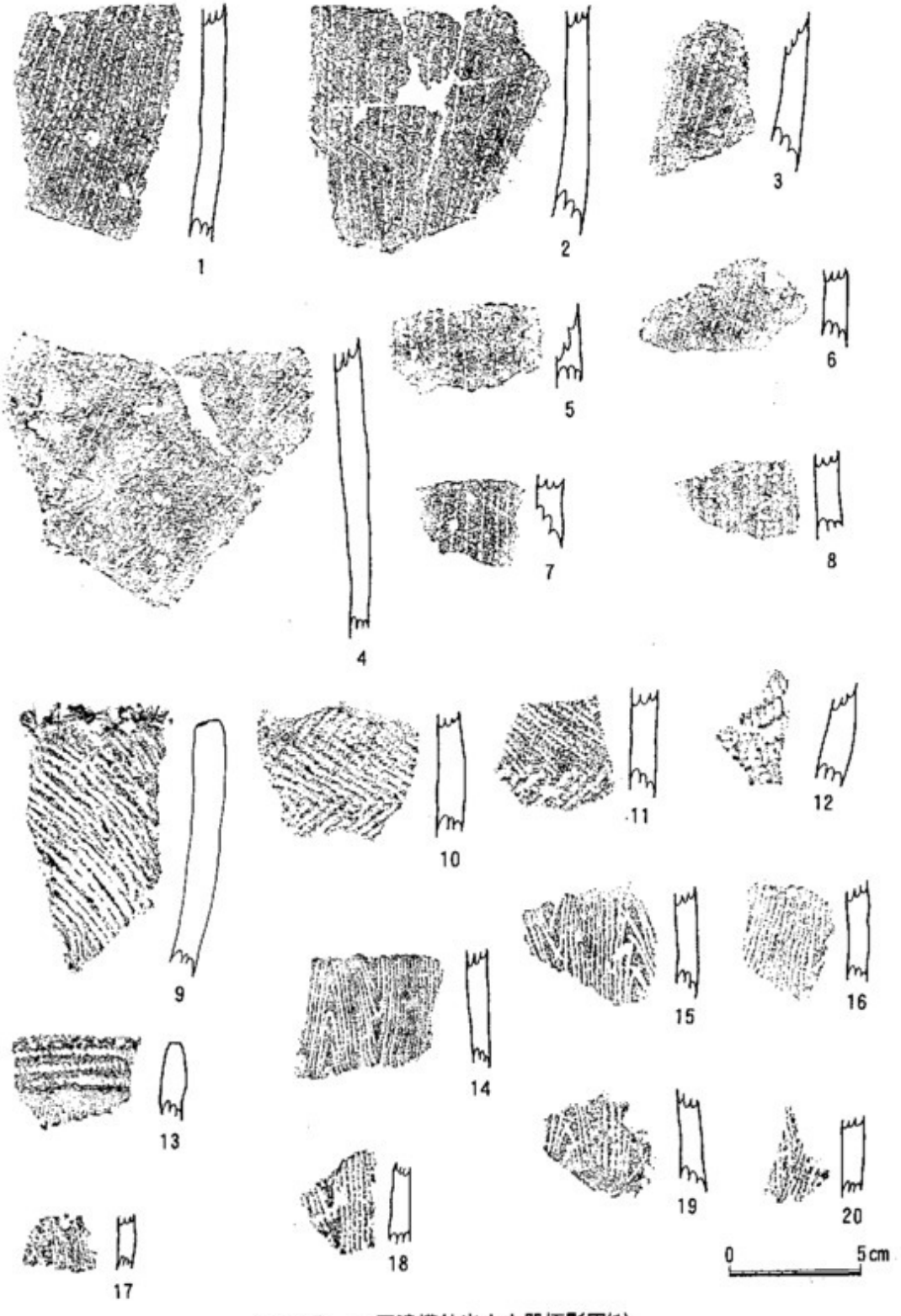
第39図　G4区遺構外出土土器実測図(1)



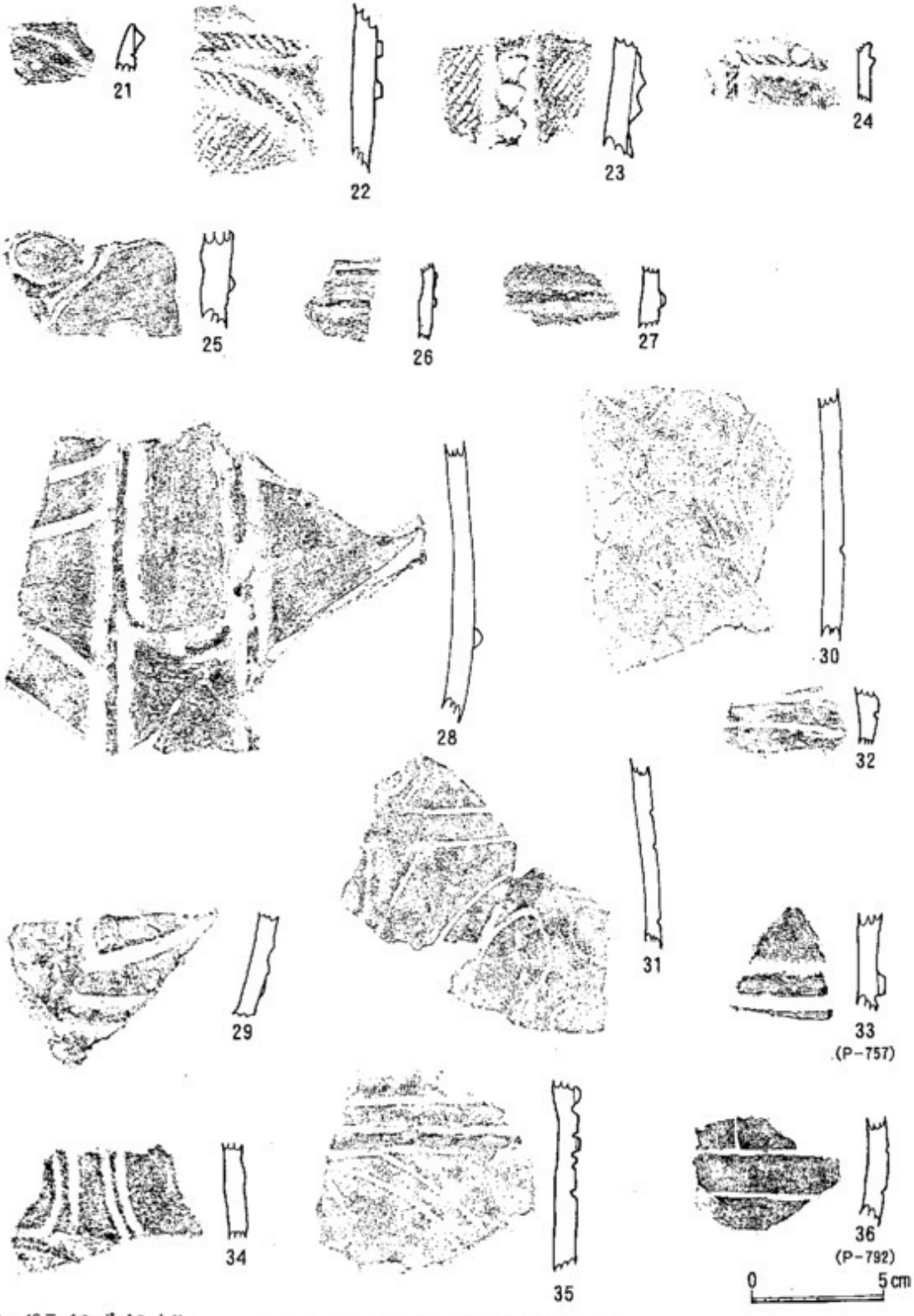
第40図　G₄区遺構外出土土器実測図(2)



第41図　完形土器出土状況

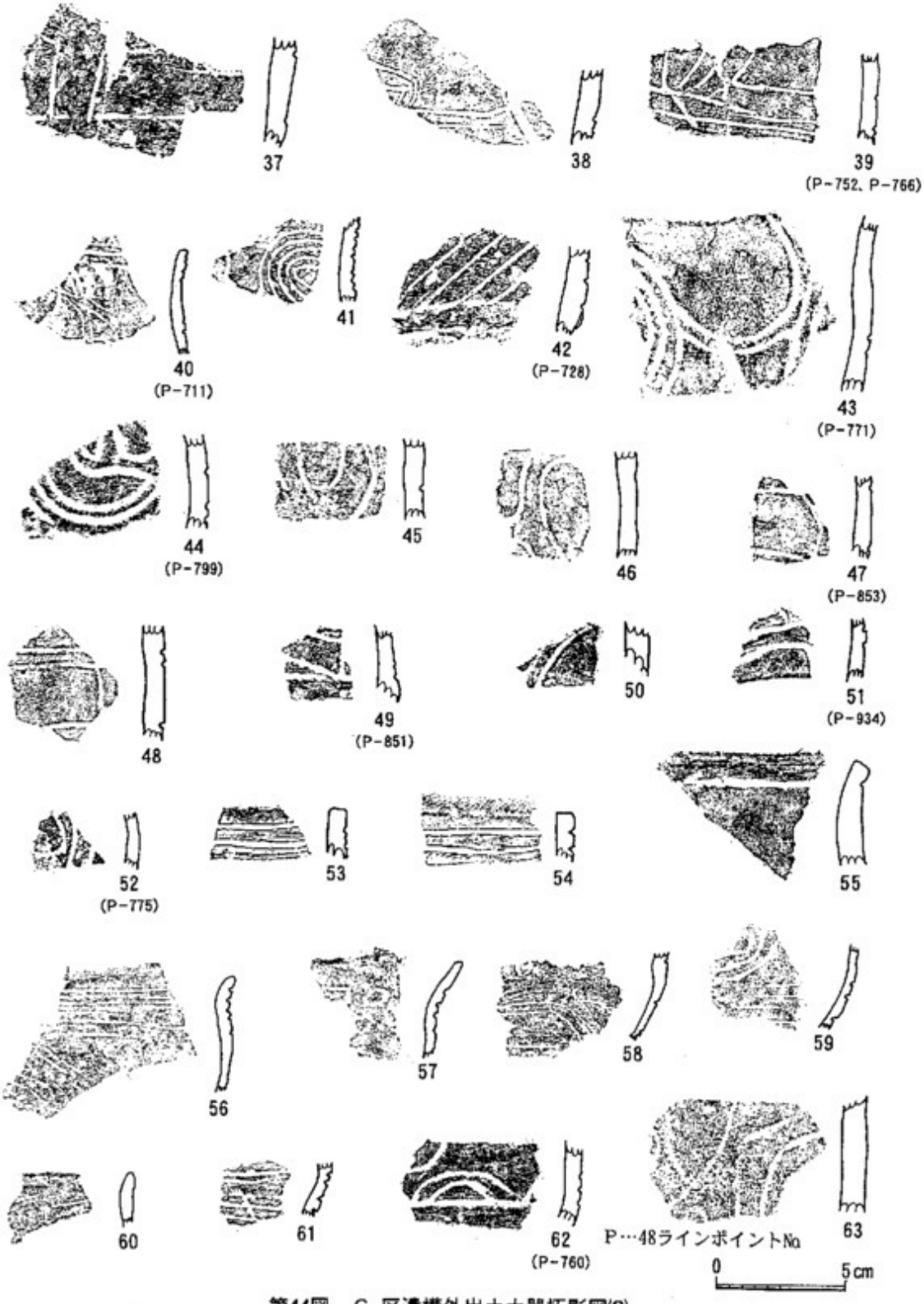


第42図　G₄区遺構外出土土器拓影図(1)

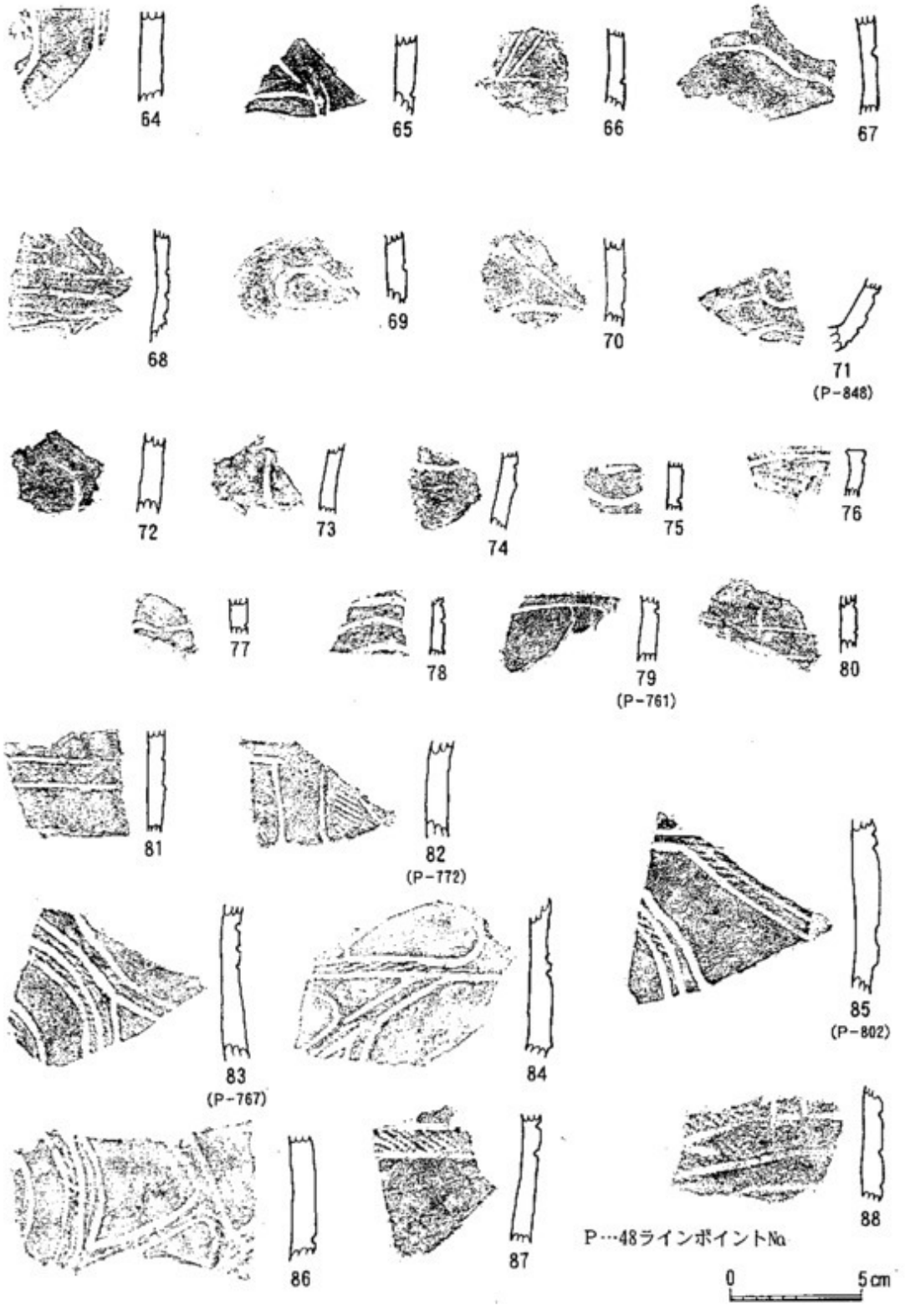


P…48ラインポイントNo.

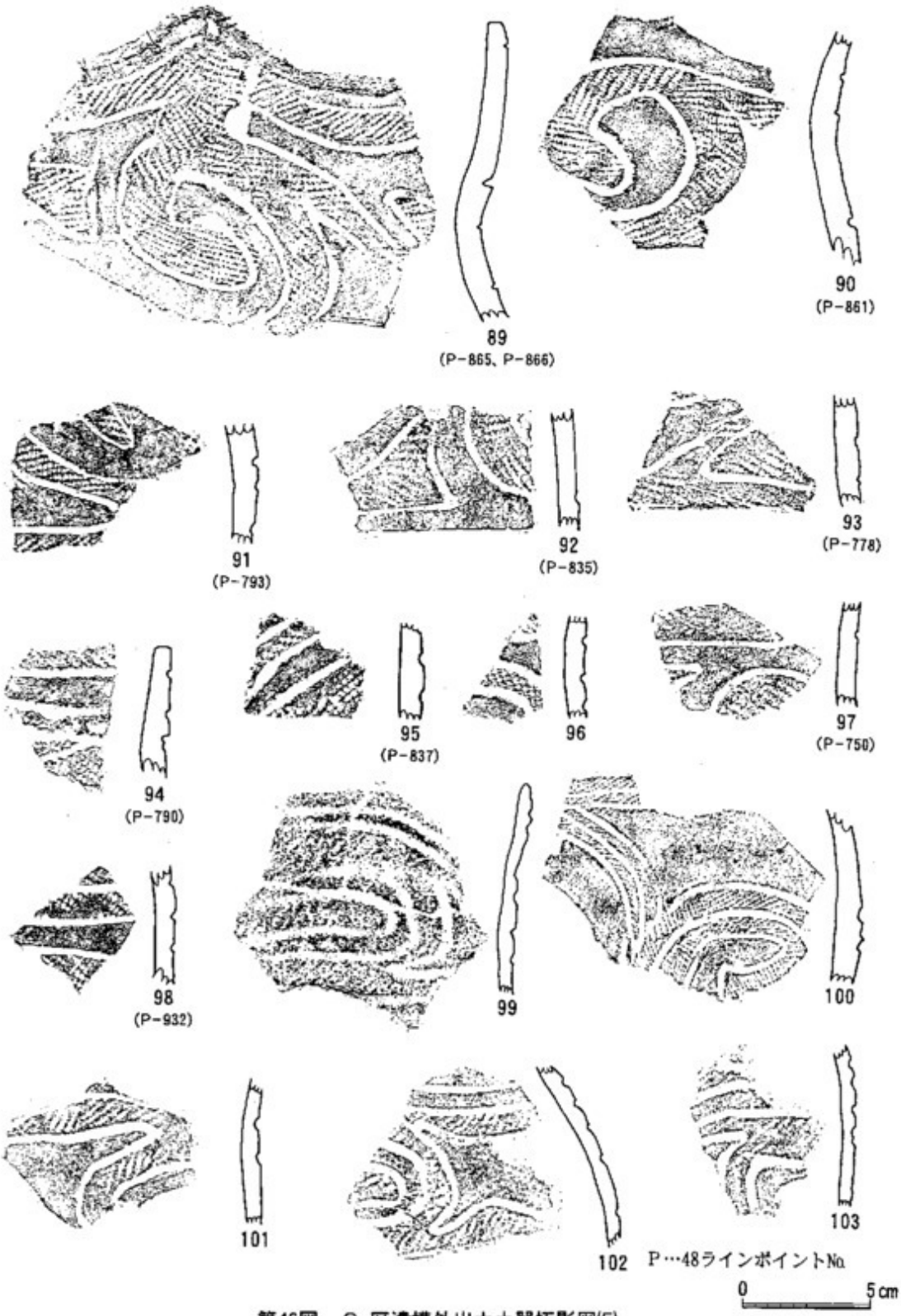
第43図　G₄区遺構外出土土器拓影図(2)



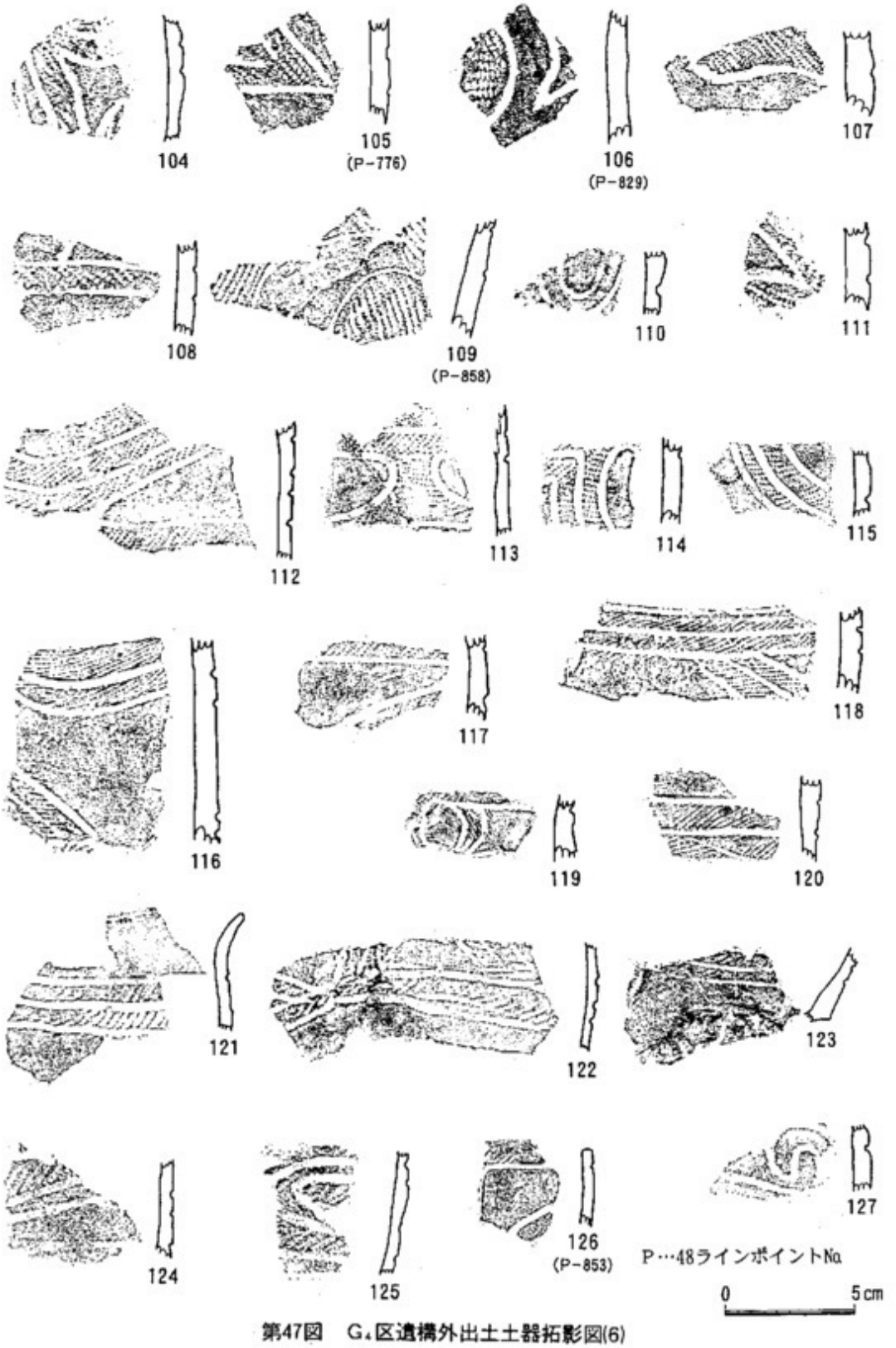
第44図　G₄区遺構外出土土器拓影図(3)



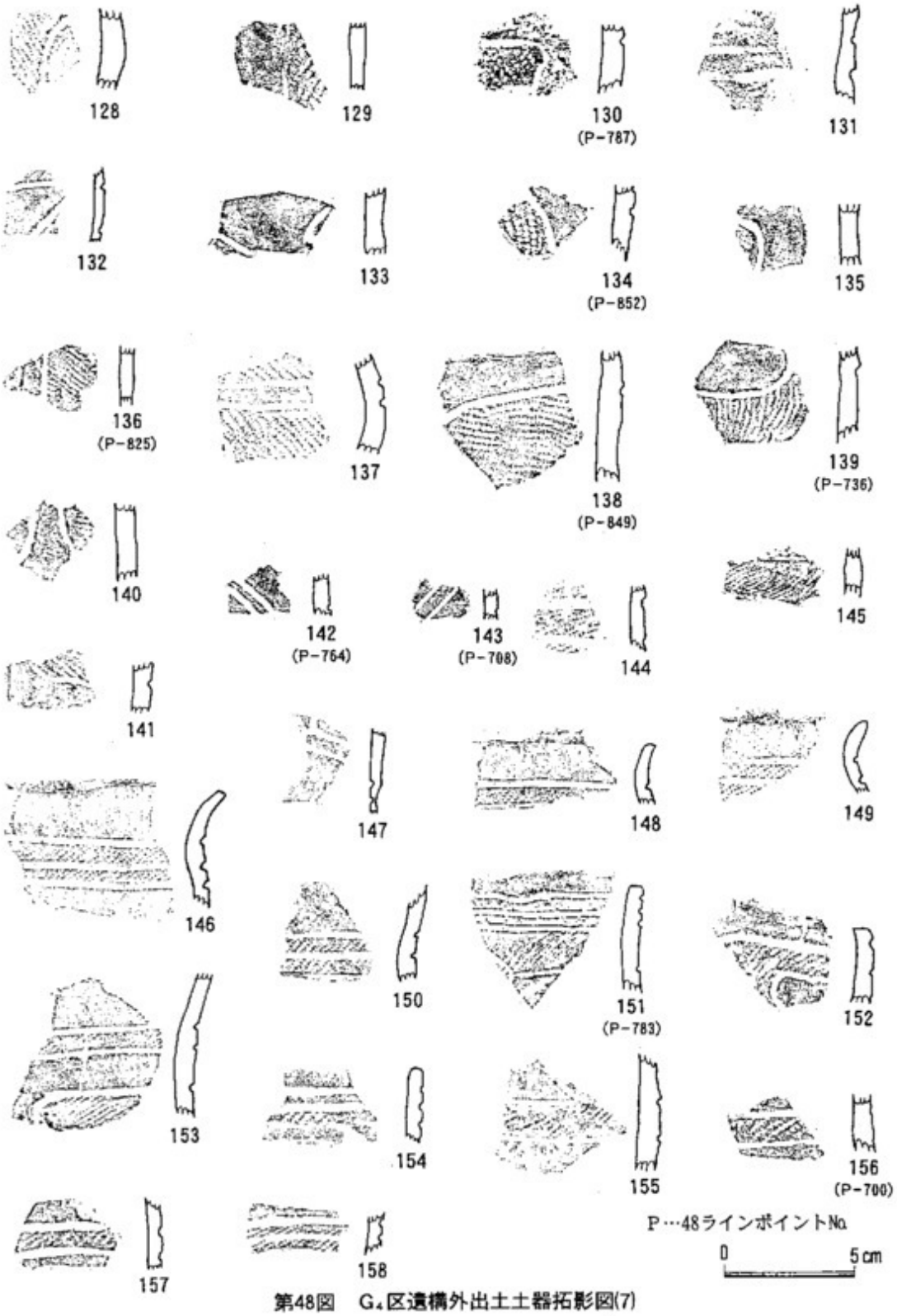
第45図　G₄区遺構外出土土器拓影図(4)



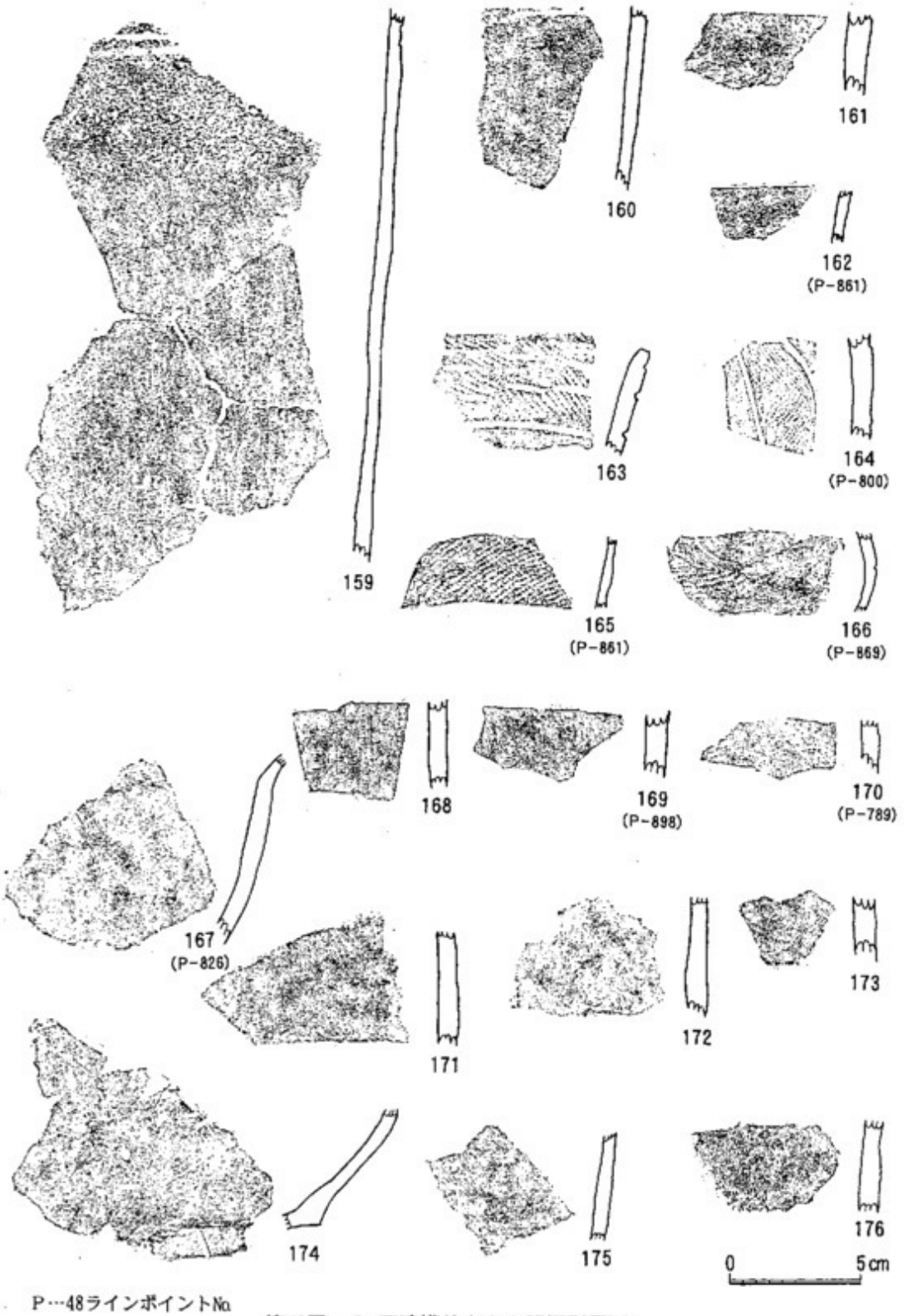
第46図　G4区遺構外出土土器拓影図(5)



第47図　G₄区遺構外出土土器拓影図(6)

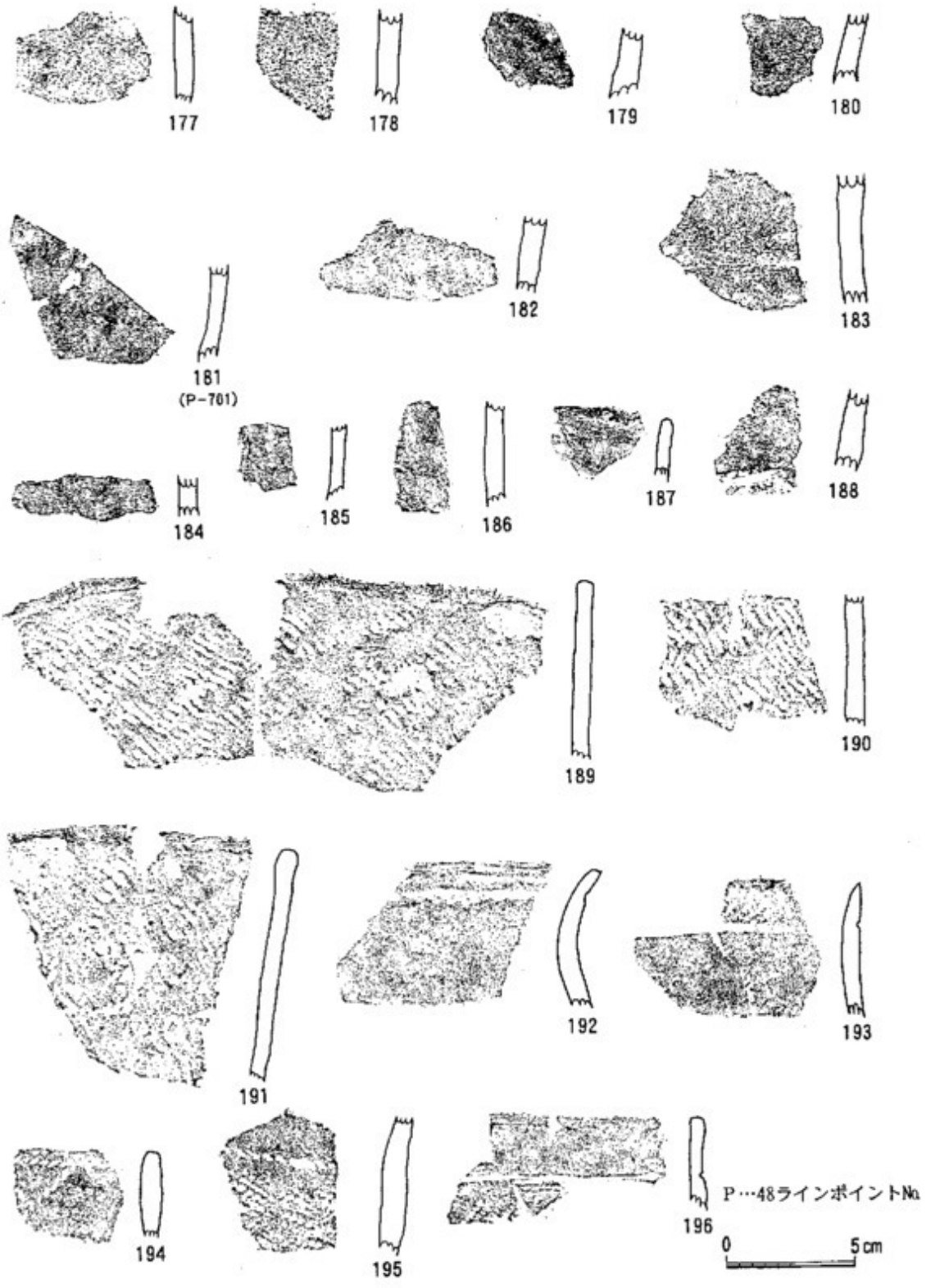


第48図　G₄区遺構外出土土器拓影図(7)

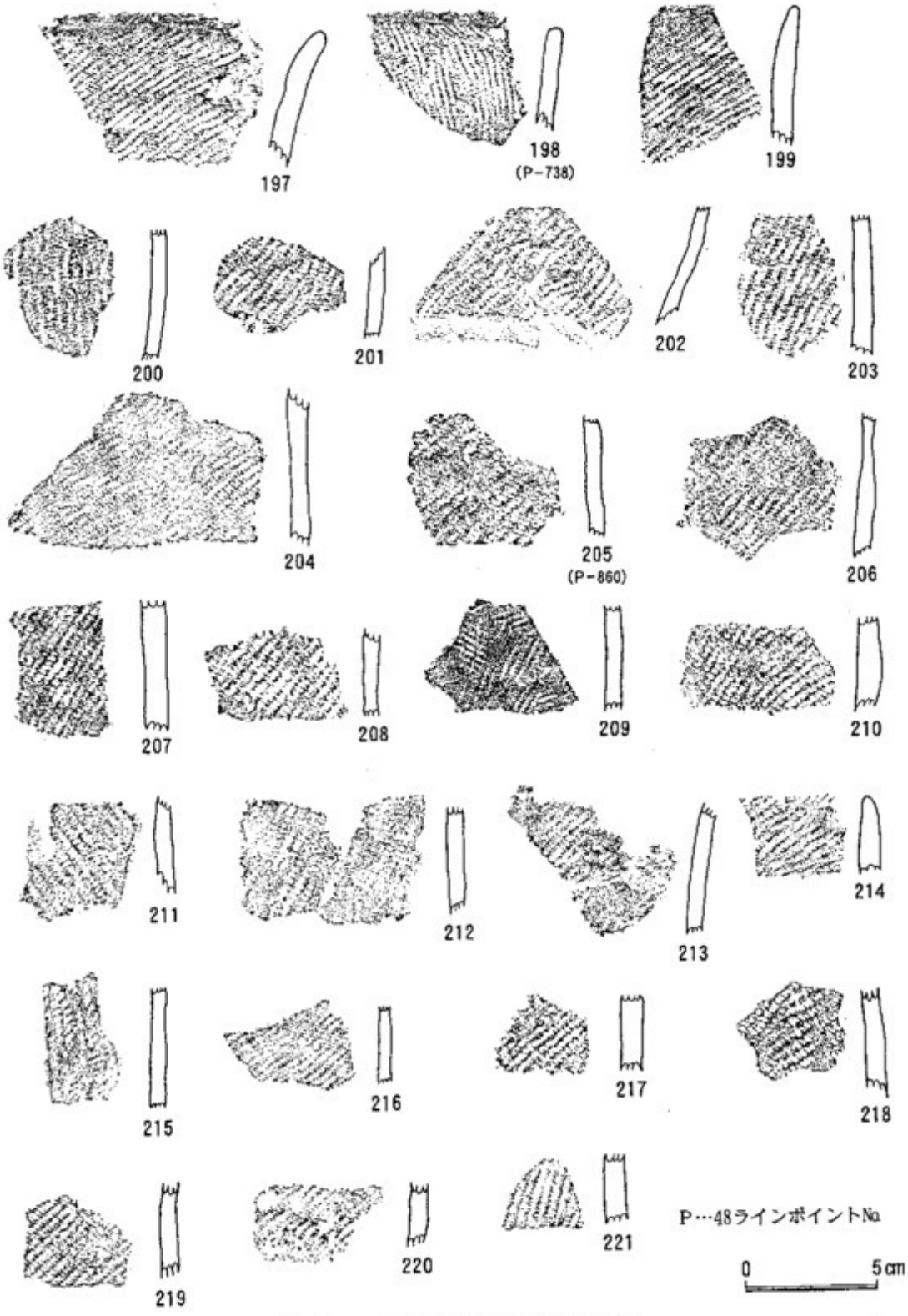


P…48ラインポイントNo.

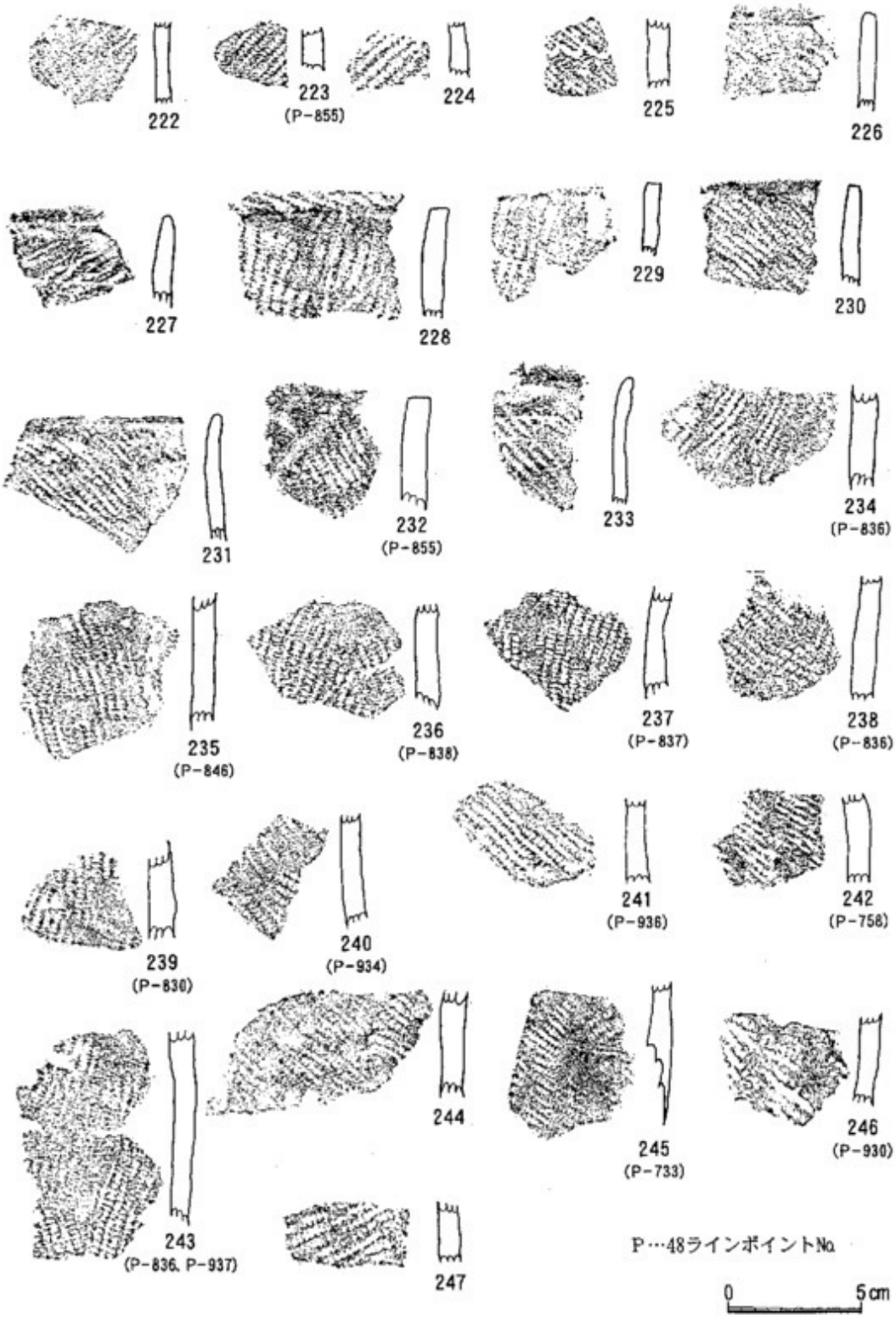
第49図　G₄区遺構外出土土器拓影図(8)



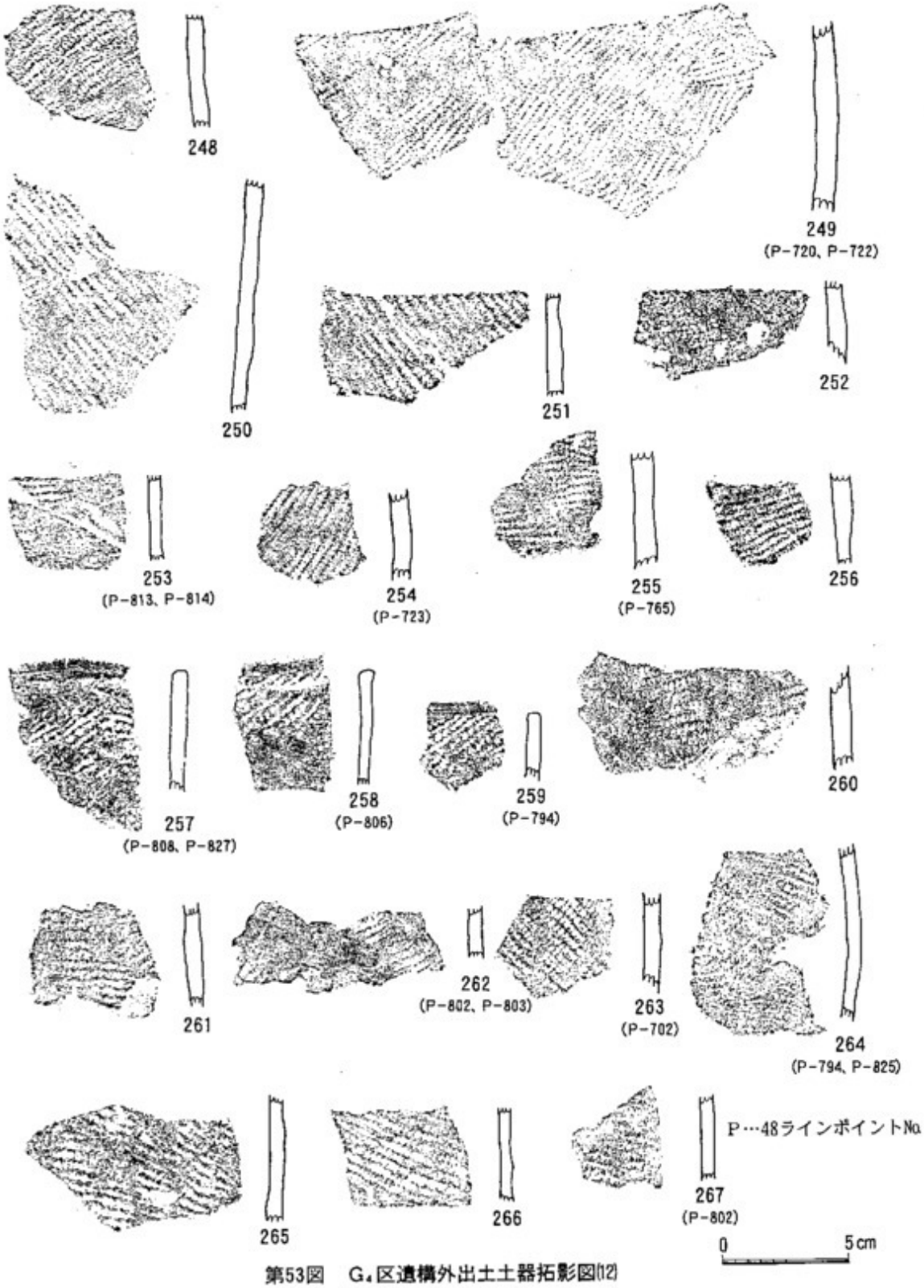
第50図　G₄区遺構外出土土器拓影図(9)



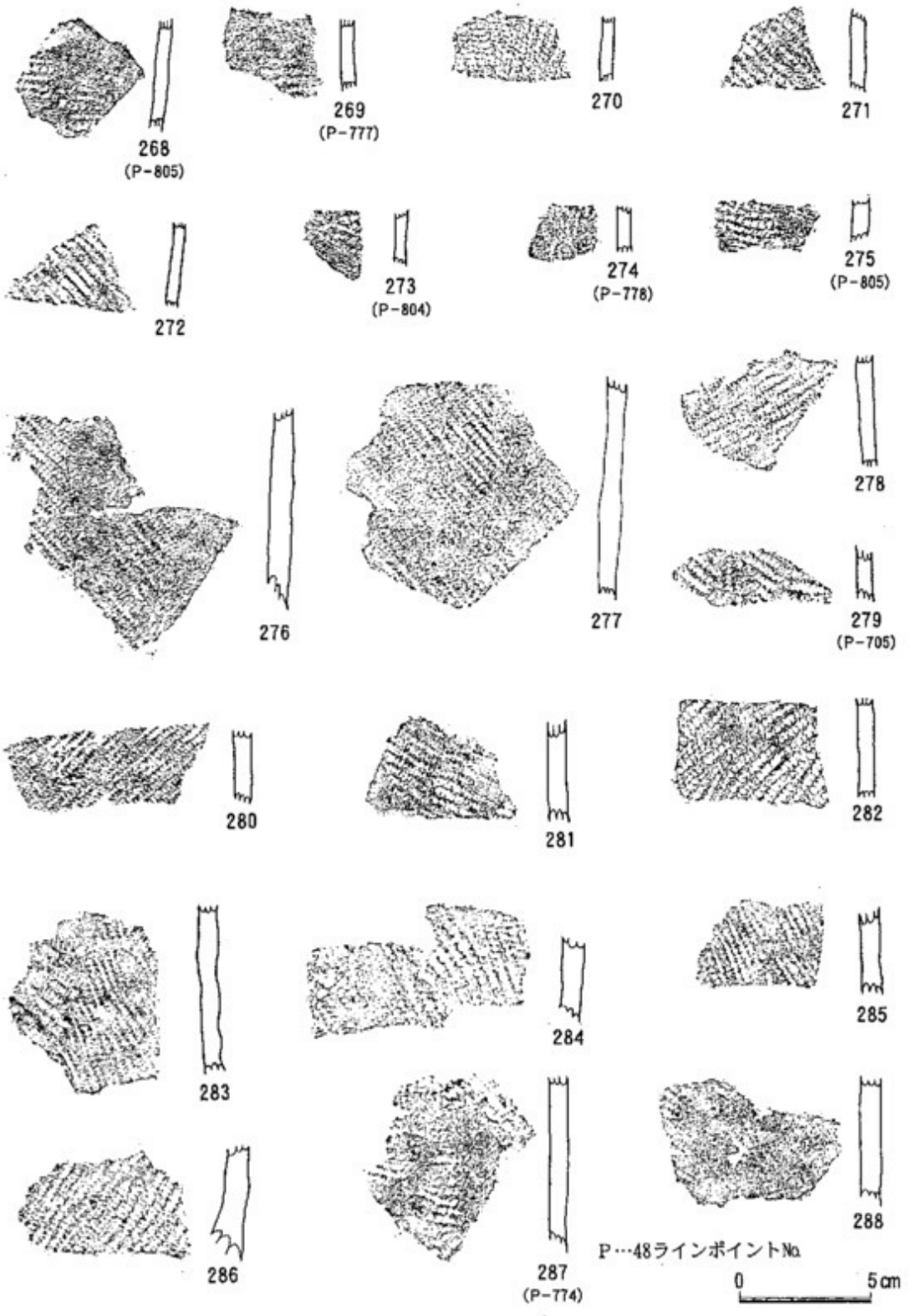
第51図　G₄区遺構外出土土器拓影図(10)



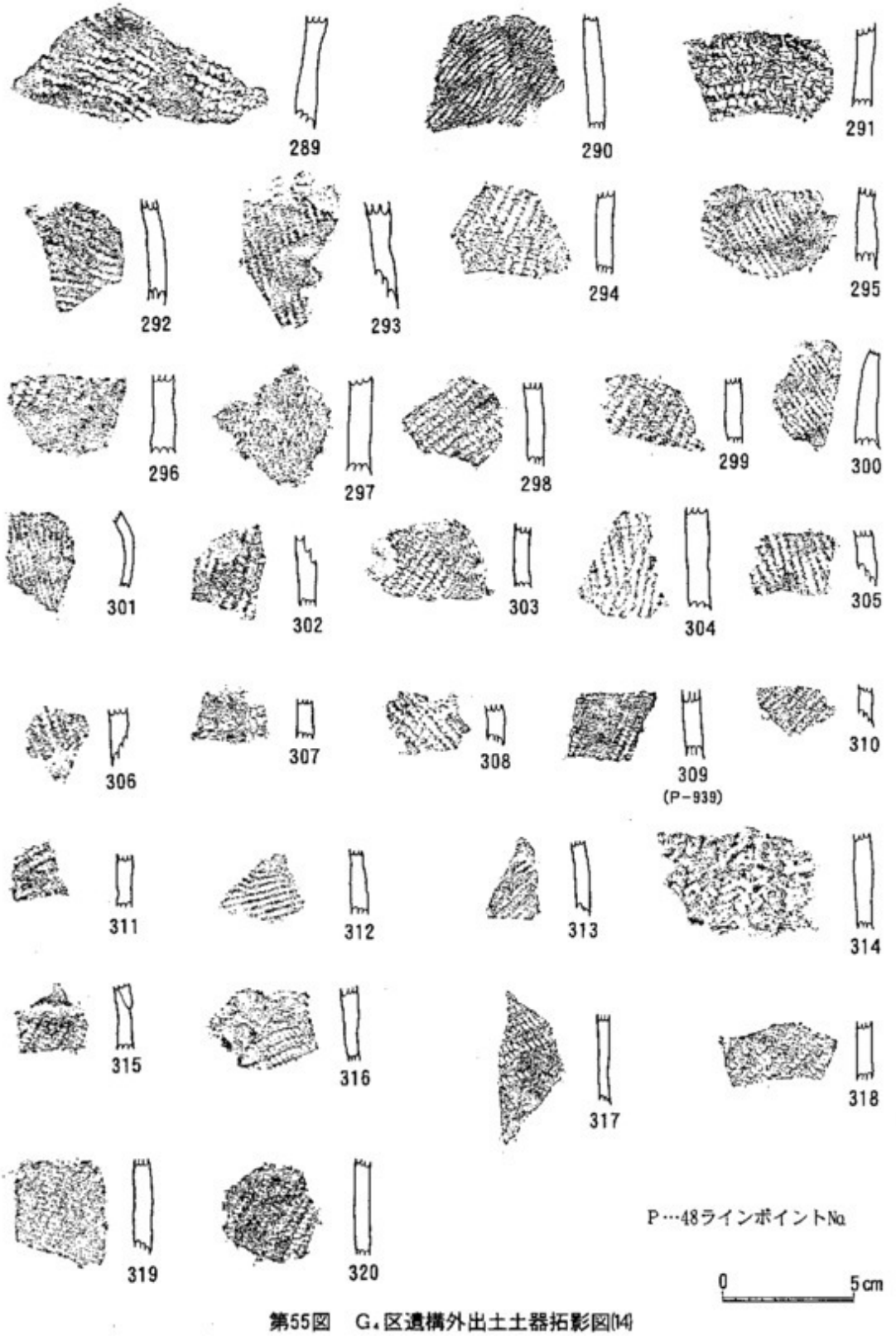
第52図　G₄区遺構外出土土器拓影図(11)



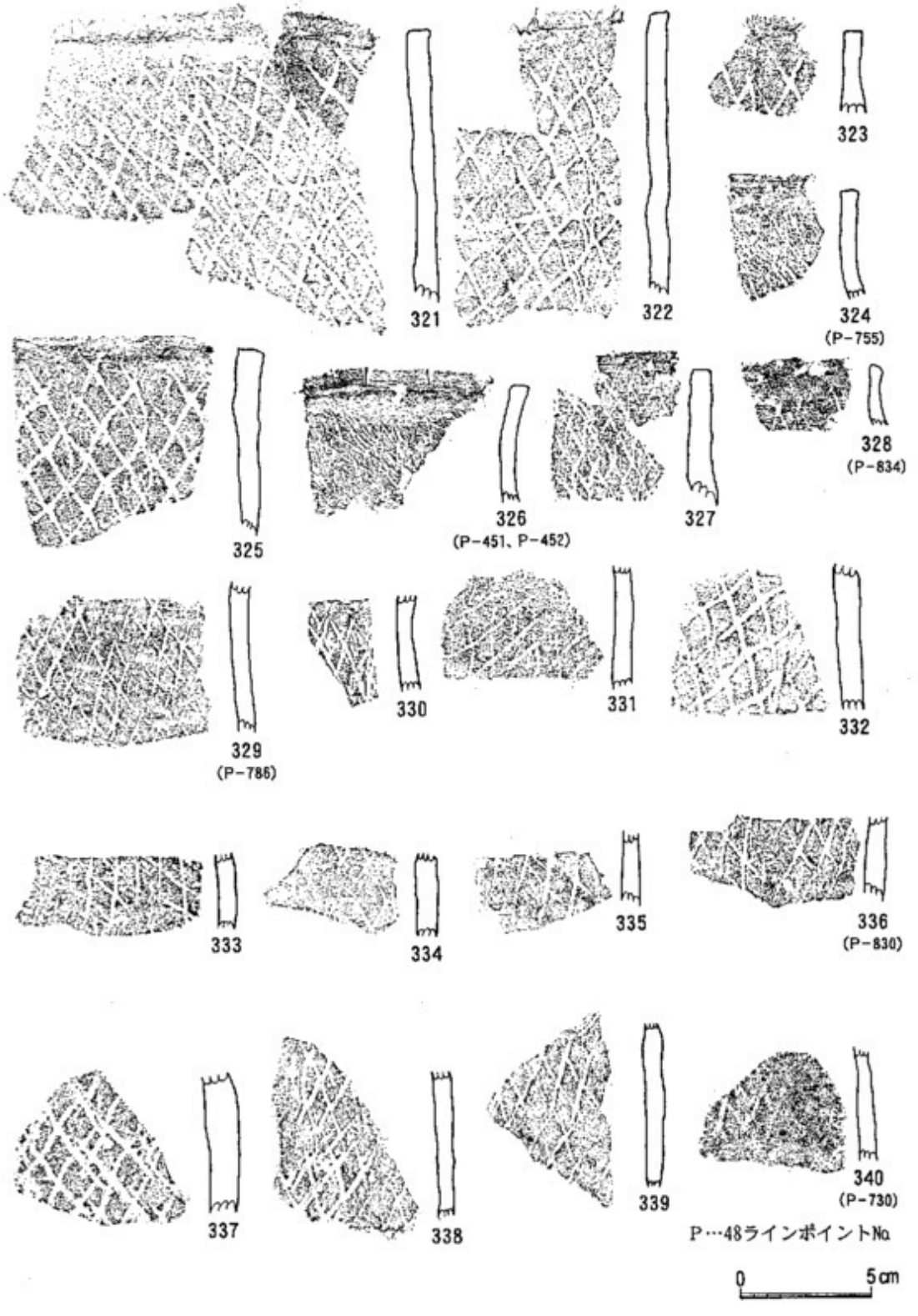
第53図　G₄区遺構外出土土器拓影図(12)



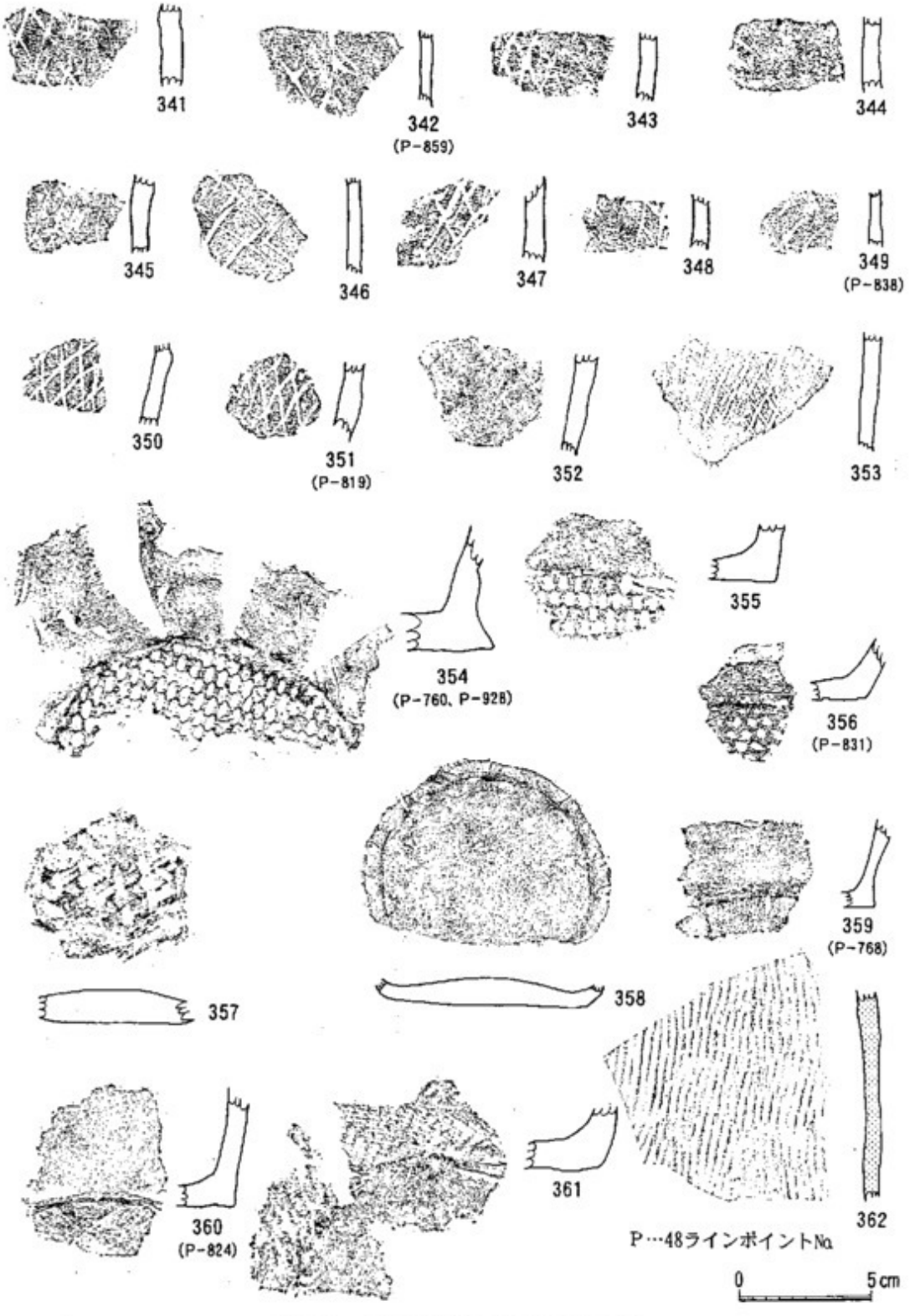
第54図　G₄区遺構外出土土器拓影図(13)



第55図　G4区遺構外出土土器拓影図(14)



第56図　G.区遺構外出土土器拓影図(15)



第57図　G₄区遺構外出土土器拓影図(16)

本類には無節、単節、複節の縄文が施文されたものを一括した。

a：無節の縄文が施文されたもの（第50図189～191）

無節の縄文が施文されたものを一括した。これまでに深鉢形土器、鉢形土器、壺形土器が見受けられた。本地区では平口縁を呈する深鉢形土器以外の土器は見受けられなかった。

第50図189～191は同一個体で、撚りのあまいR縄文が横位方向に回転施文されている。口唇部は丸みを帯びる。第１号土坑から同一個体の土器破片が出土している。胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。色調は灰白色を呈する。

b：単節の縄文が施文されたもの（第50図192～第55図314）

単節の縄文を施文されたものを一括した。本地区で出土した土器の中で最も量が多い。これまでに深鉢形土器、鉢形土器、壺形土器が見受けられたが、本地区では深鉢形土器以外のものは見受けられなかった。口縁部が平口縁となるものが多い。

192～196は縄文圧痕文、沈線文を境界文としたもので口縁部は無文化される。194は境界文間に同一原体を押圧し、三角形文を施文している。

縄文が口唇部から施文されたものは、平口縁または極めて緩やかな波状口縁を呈し、その断面は丸みを帯びるものや箱形となるもの、鋭利となるものが見られる。縄文は基本的に横位方向に回転施文されている。第51図197～第53図253はＲＬ縄文、第53図254～第55図314はＬＲ縄文が施文されている。胎土に砂粒を含む。焼成は良好～良で、色調は灰白色、にぶい黄褐色、浅黄橙色、灰黄褐色などを呈する。

c：複節の縄文が施文されたもの（第55図315～320）

複節の縄文が施文されたものを一括した。深鉢形土器が主体となり、LRL縄文が多く見受けられる。胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。色調は灰褐色、黄橙色、にぶい黄橙色を呈する。

３類：撚糸文の土器（第56図321～第57図353）

撚糸文が施文された土器を一括した。平口縁を呈する深鉢形土器が主体となり、口唇部断面が箱形を呈するものが多い。文様が口唇部直下から、わずかに無文帯を残すものが多く、文様は底部付近まで施文される。本地区からは網目状撚糸文以外の撚糸文系の文様は見受けられなかった。胎土に砂粒を含む。焼成は良好～良で、色調は浅黄橙色、灰白色、にぶい黄橙色を呈する。

その他の土器（第57図354～362）

縄文土器底部、須恵器破片を図示した。354、357などには網代痕が観察される。362は須恵器甕の胴部破片で、外面に叩き、内面には指頭痕がみられる。（藤井安正）

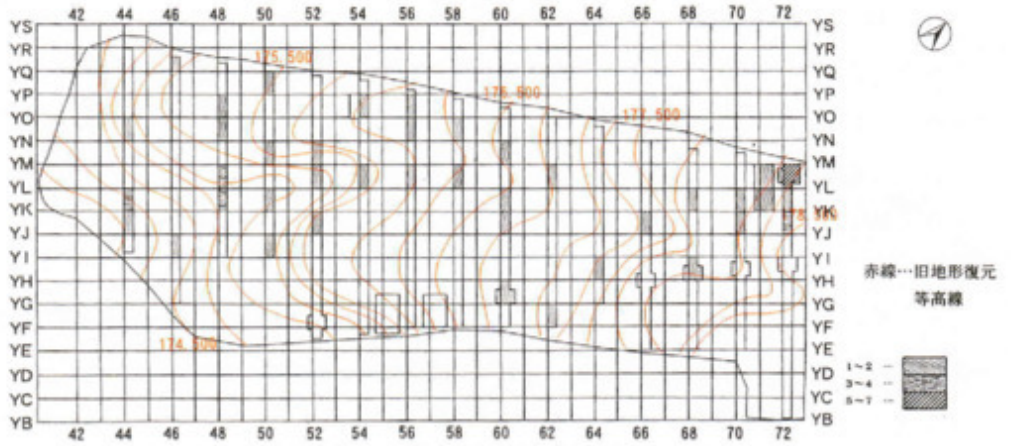
(2) 石　　器

G_4区遺構外から出土した石器は、剥片石器20点、礫石器39点の計59点である。また、剥片は52点出土している。遺物の分布は、調査区北側と南西側に集中し、Ⅲa層からⅢd層にわたる遺物包含層のなかでも、Ⅲb層からⅢd層に集中している。石材一覧表では、石器と剥片に分け、各層からの出土状況と各石材の種類別割合を表にしている。石器の分類については、これまでの調査に準じ、形態別に類別、細分した。

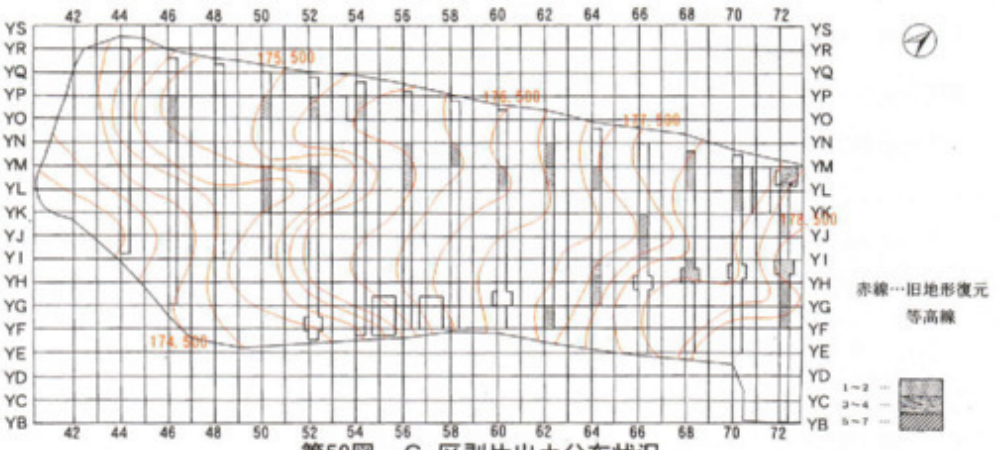
石器、剥片の出土分布状況は、第58図、第59図のとおりである。

石　　鏃（第60図、PL19）

基部形態などからこれまで２群６類に分類されている。本調査区からは１点出土し、石材は



第58図　G_4区出土土器分布状況



第59図　G_4区剥片出土分布状況

硬質頁岩であった。

1群…有茎石鏃で、基部形態から以下のように細別される。

a…平基有茎石鏃で、本調査区からは1点出土した。側縁部は直線的で、全面に丁寧な剥離調整が見られる。大きさは、長さ3.4cm、幅1.3cm、重さ1.4gを測る。(1)

b…凹基有茎石鏃で、基部に抉れをもつ。本調査区からは出土しなかった。

c…凸基有茎石鏃で、基部が突出している。本調査区からは出土しなかった。

2群…無茎石鏃で、基部形態から以下のように細別される。

a…平基無茎石鏃で、基部が直線的である。本調査区からは出土しなかった。

b…凹基無茎石鏃で、基部に抉れをもつ。本調査区からは出土しなかった。

c…尖基石鏃で、基部が尖るいわゆる柳葉形のものである。本調査区からは出土しなかった。

d…円基石鏃で、基部に丸みをもつ。本調査区からは出土しなかった。

石　錐（第60図、PL19）

形態により3群に分類される。本調査区からは1点出土し、石材は硬質頁岩であった。

1群…つまみ部と錐部との境目が丁寧なもの

2群…つまみ部と錐部との境目が不明瞭なもの

3群…剥片の一部に錐部を作り出しているもの

出土した1点はつまみ部が欠損しているため分類できなかった。錐部の一方にのみ刃部を作り出し、主要剥離面に一次調整が残る。残存する錐部の大きさは、長さ4.3cm、幅1.4cm、厚さ1.0cmである。(3)

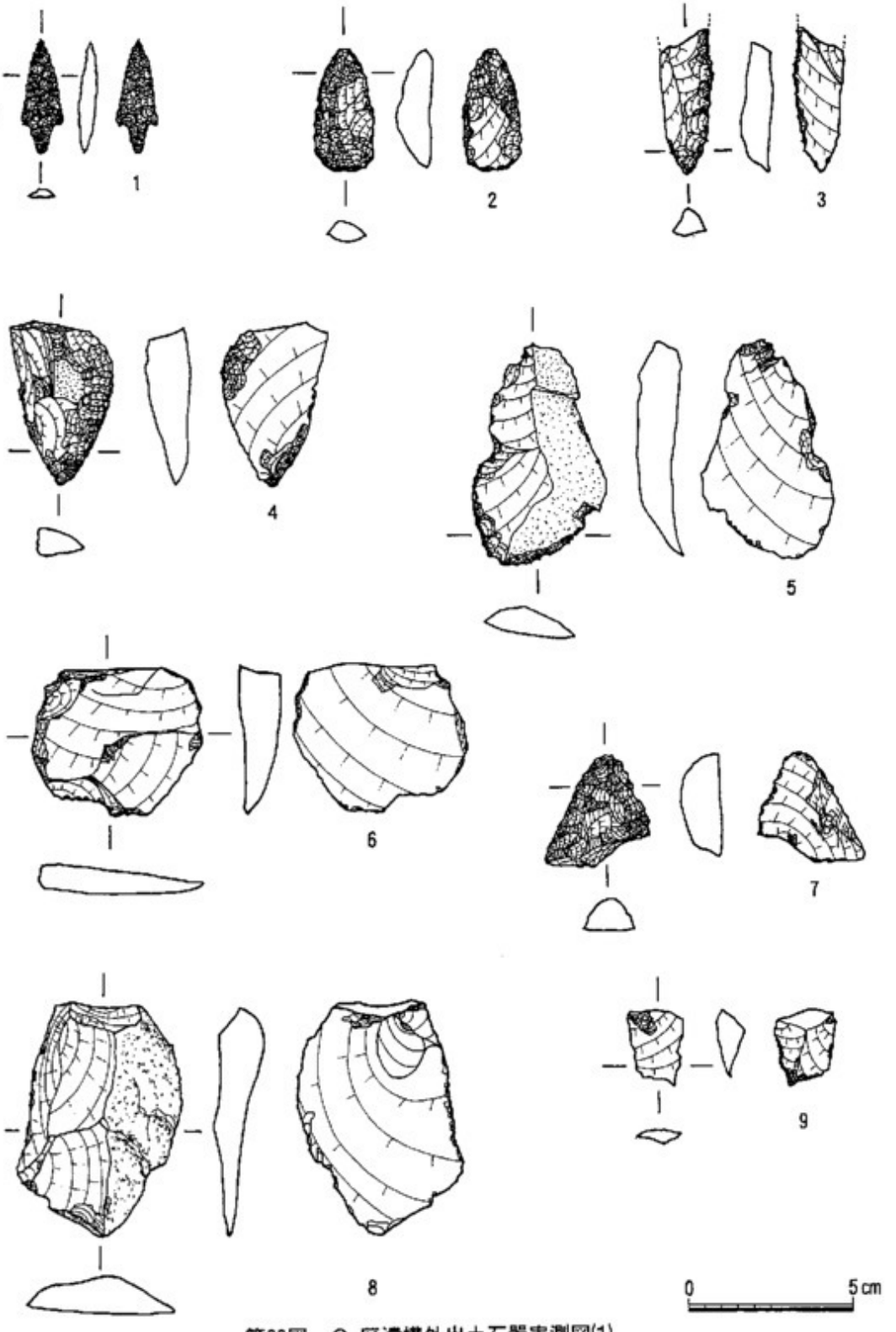
石　匙（第60図、PL19）

形態により2群に分類される。本調査区からは1点出土しており、石材は硬質頁岩である。

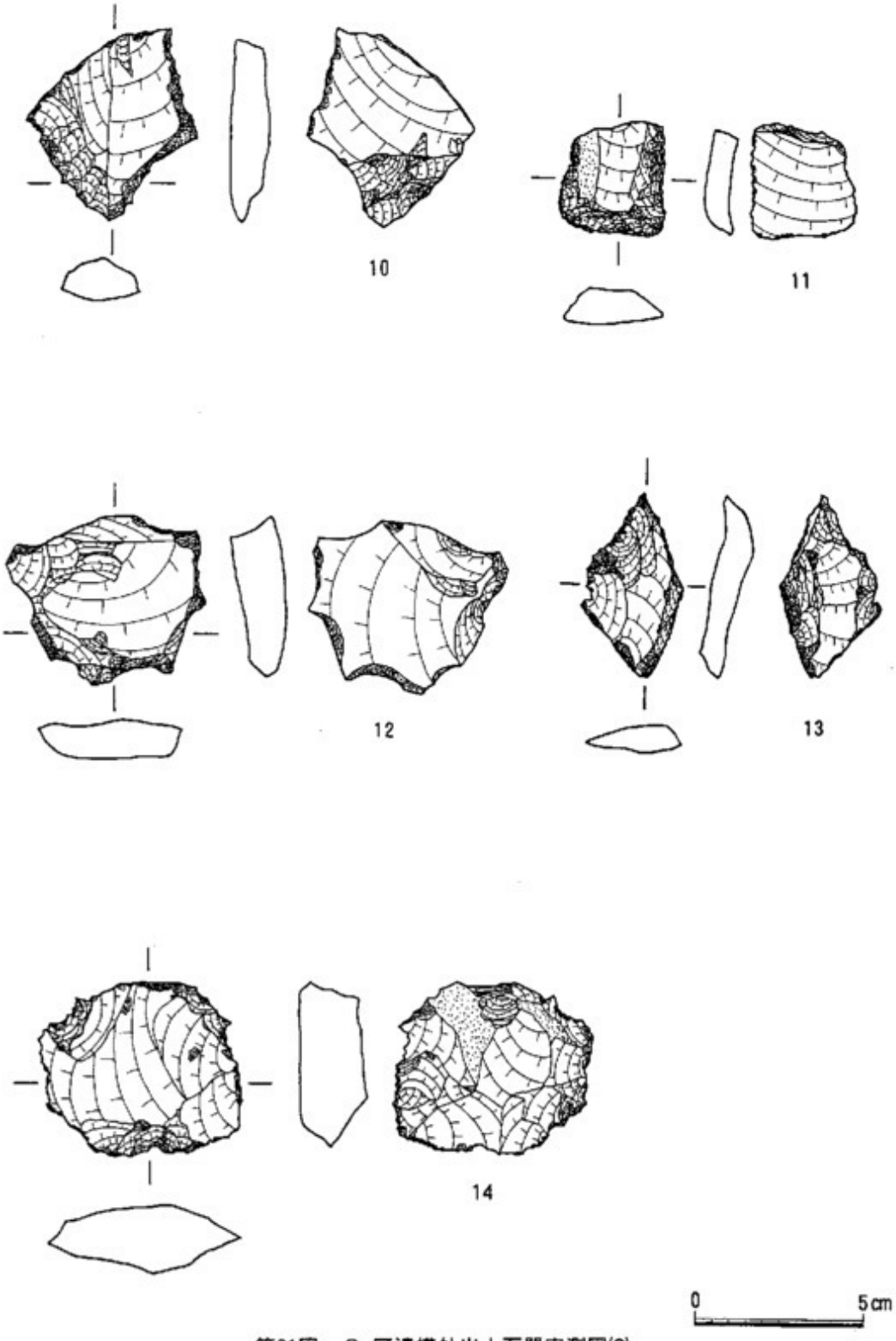
1群…基部に対して刃部の幅が広くなる、撥状のものである。本調査区からは出土しなかった。

2群…基部に対して刃部の幅がやや広くなる、台形状のものである。本調査区からは1点出土した。剥離調整はやや粗く、一次調整が残る部分がある。大きさは、長さ3.6cm、幅1.8cm、重さ6.5gを測る。(2)

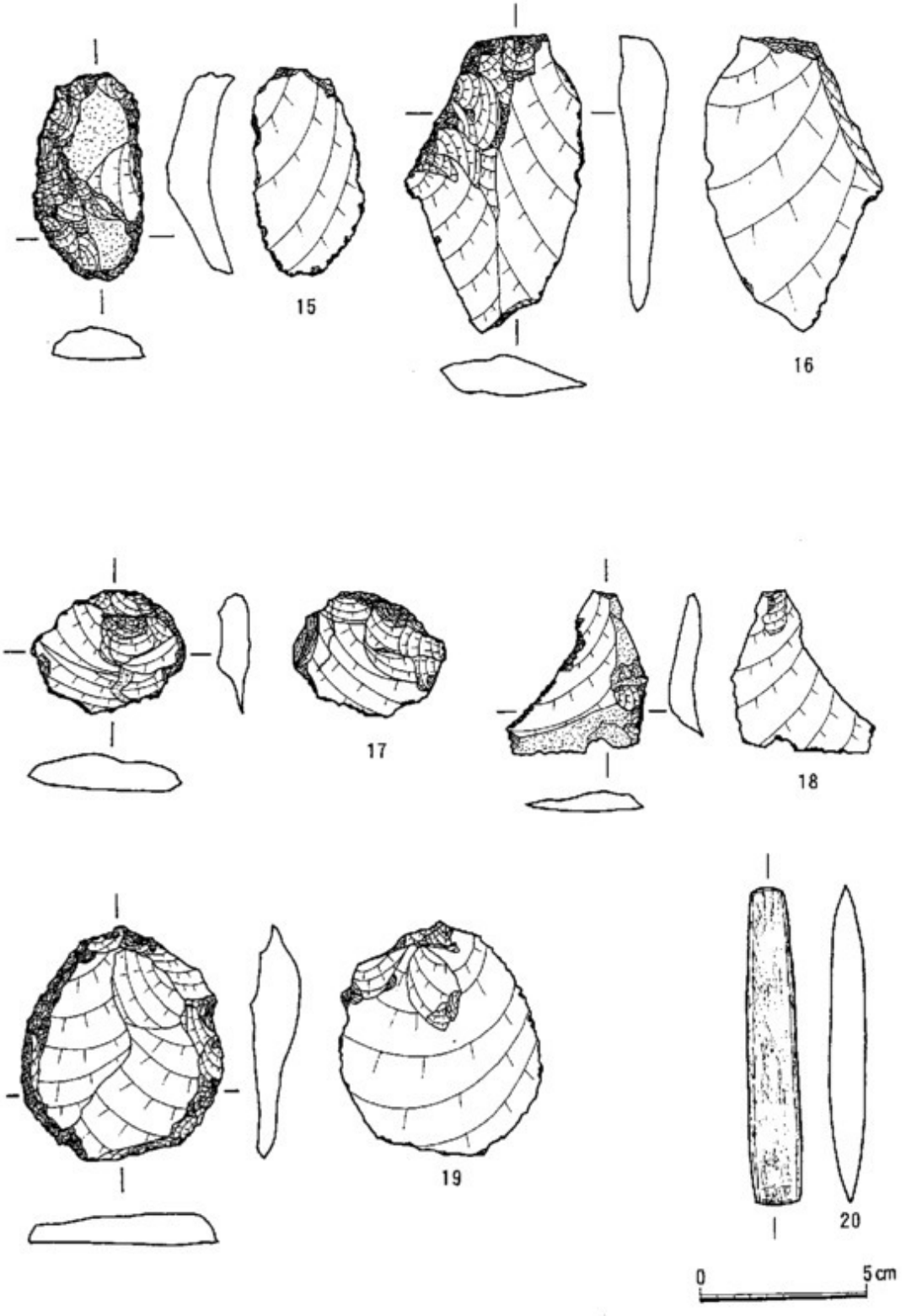
掻　器（第60図～第62図、PL19）



第60図　G₄区遺構外出土石器実測図(1)



第61図　G₄区遺構外出土石器実測図(2)



第62図　G₄区遺構外出土石器実測図(3)

打面を上にして、主要刃部の作り出される位置や刃部の形態別に5群に分類される。本調査区からは16点出土し、石材は、硬質頁岩が15点、黒色頁岩が1点である。

1群…主要刃部が一側縁に限定されるもので、本調査区からは14点出土した。大きさは、長さ2.2～8.9cm、重さ2.4～58.0gを測り、形態に規則性はみられない。(4～6、8～10、12～19)

2群…主要刃部が二側縁に及ぶもので、本調査区からは1点出土した。大きさは、長さ3.3cm、重さ9.6gを測る。(7)

3群…主要刃部が三側縁に及ぶもので、本調査区からは1点出土した。大きさは、長さ3.3cm、重さ13.3gを測る。(11)

4群…主要刃部が側縁全体に及ぶもので、本調査区からは出土しなかった。

5群…刃部に抉れをもつもので、本調査区からは出土しなかった。

二次調整は側縁部に限られるものが多く、背面からの剥離調整が施されるものもみられる。

石　斧（第62図、PL19）

本調査区からは小型定角式磨製石斧が1点出土した。全体に丹念な研磨が施され、刃部には使用による剥離がみられる。長さ9.8cm、重さ33.5gを測る。石材は蛇紋岩である。(20)

敲　石（第64図37、39～42、44、45、PL19）

本調査区からは7点出土した。円礫や扁平な川原石の一部がうち欠かれたもので、ほとんどがこぶし大の大きさである。石の先端部や側縁部に敲打痕がみられるものが多く、大きく打ちかかれているものもみられる。

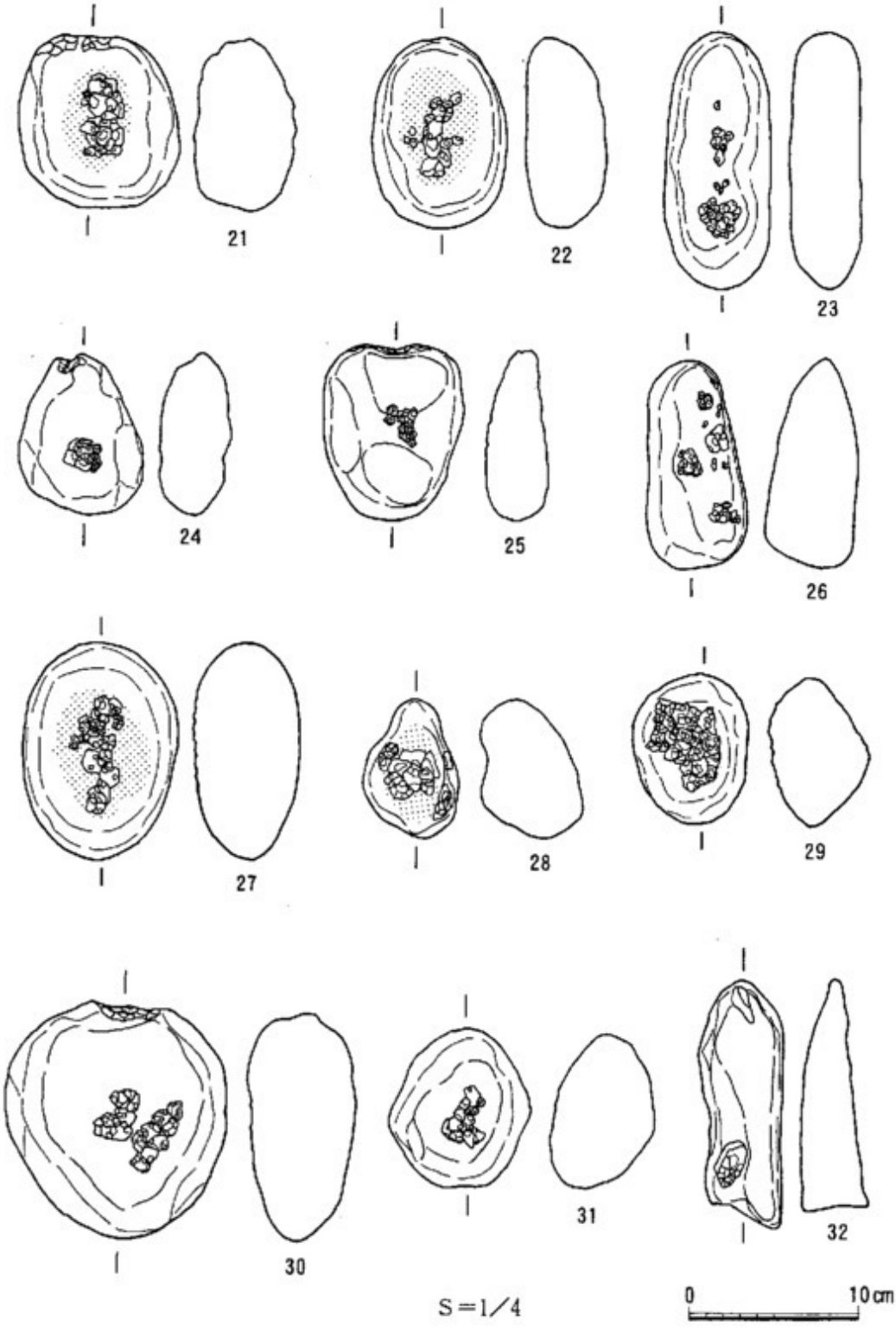
大きさは、長さ6.4～15.4cm、重さ80.6～1128.2gである。

石材は、泥岩2点、凝灰岩1点、流紋岩1点、泥質凝灰岩1点、砂質凝灰岩1点、火山礫凝灰岩1点である。

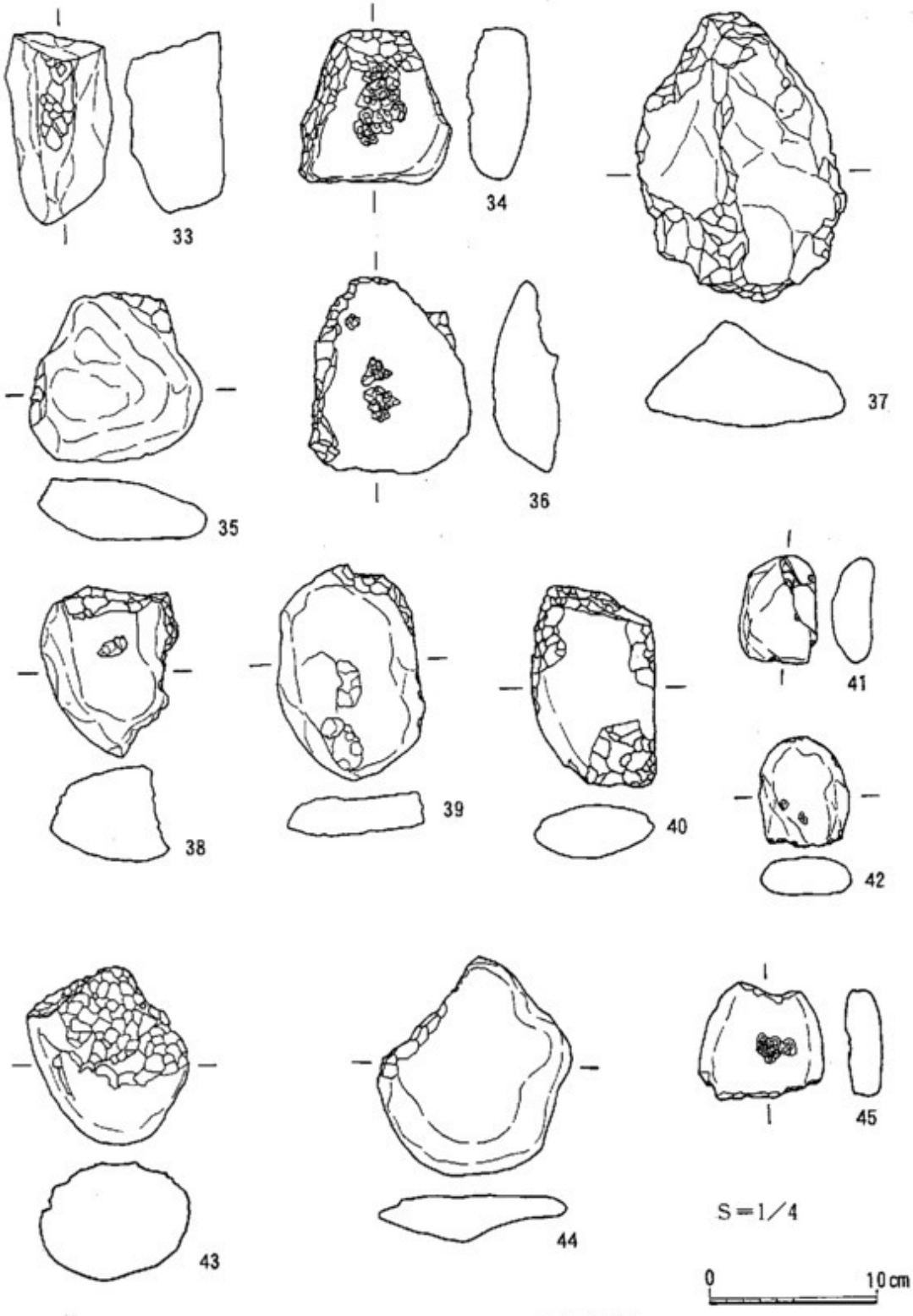
凹　石（第63図、第64図33～36、38、43、第65図46～56、PL19）

本調査区からは29点出土した。円礫や扁平な川原石が多く、こぶし大のものがほとんどである。使用痕である凹は平坦面に残っているものが多い。磨り痕がみられるものもある。(21、22、27、28、47、49、52、56)。また、凹石から敲石へと転用されたものもみられる（21、25、30、34)。大きさは、長さ6.9～15.1cm、重さ154.5～1607.9gである。

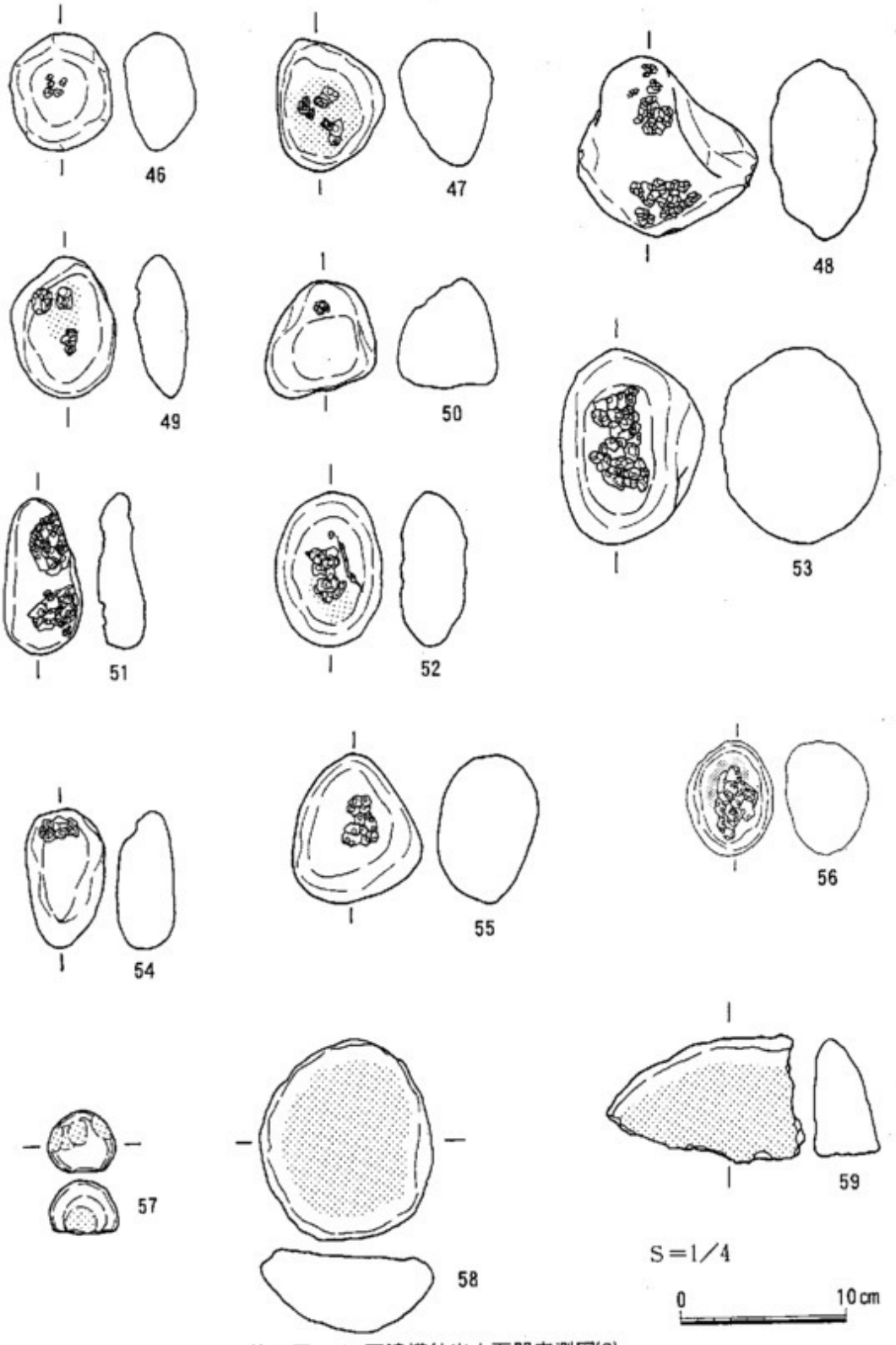
石材は、石英安山岩が11点、砂質凝灰岩4点、軽石質石英安山岩2点、安山岩1点、安山質溶岩1点、凝灰岩1点、石英安山質凝灰岩1点、凝灰質泥岩1点、石英安山質溶岩1点、石英安山質泥岩1点、火山礫凝灰岩1点、泥質凝灰岩1点、石英閃緑玢岩1点である。



第63図　G₄区遺構外出土石器実測図(4)



第64図　G_4区遺構外出土石器実測図(5)



第65図　G₄区遺構外出土石器実測図(6)

第3表　石材一覧表

石器石材一覧表

石材	個数	層位別個数															比率(%)
		Ⅲa上	Ⅲa中	Ⅲa下	Ⅲb上	Ⅲb中	Ⅲb下	Ⅲc上	Ⅲc中	Ⅲc下	Ⅲd上	Ⅲd中	Ⅲd下	Ⅳ上	Ⅳ中	Ⅳ下	カクラン	
硬質頁岩	18				2	1	1	1	5	1	3	1	1		1		1	30.5%
珪質頁岩	0																	0.0%
黒色頁岩	1						1											1.7%
赤色頁岩	0																	0.0%
砂岩	0																	0.0%
安山岩	2						1				1							3.4%
石英安山岩	11					1	2	2	1		2	3						18.6%
石英閃緑玢岩	1												1					1.7%
緑色片岩	0																	0.0%
緑色凝灰岩	0																	0.0%
砂質凝灰岩	5			1			2						1			1		8.5%
軽石質凝灰岩	0																	0.0%
泥質凝灰岩	2							1	1									3.4%
凝灰質泥岩	2					1		1										3.4%
安山岩質溶岩	2							2										3.4%
凝灰岩	3		1		1			1										5.1%
火山礫凝灰岩	2								1		1							3.4%
軽石質泥岩	0																	0.0%
スコリア	1												1					1.7%
泥岩	2										1		1					3.4%
流紋岩	1												1					1.7%
蛇紋岩	1									1								1.7%
軽石質石英安山岩	2									1	1							3.4%
石英安山岩質凝灰岩	1						1											1.7%
石英安山岩質溶岩	1								1									1.7%
石英安山岩質泥岩	1												1					1.7%

制片石材一覧表

石材	個数	層位別個数															比率(%)
		Ⅲa上	Ⅲa中	Ⅲa下	Ⅲb上	Ⅲb中	Ⅲb下	Ⅲc上	Ⅲc中	Ⅲc下	Ⅲd上	Ⅲd中	Ⅲd下	Ⅳ上	Ⅳ中	Ⅳ下	カクラン	
硬質頁岩	47		6		4	1	7	1	1		7	4	7	2			7	88.7%
珪質頁岩	3					1	2											5.7%
黒色頁岩	2						1				1							3.8%
赤色頁岩	0																	0.0%
砂岩	0																	0.0%
安山岩	0																	0.0%
石英安山岩	0																	0.0%
石英閃緑玢岩	0																	0.0%
緑色片岩	0																	0.0%
緑色凝灰岩	0																	0.0%
砂質凝灰岩	0																	0.0%
軽石質凝灰岩	0																	0.0%
泥質凝灰岩	0																	0.0%
凝灰質泥岩	0																	0.0%

石　　皿（第65図59、PL.19）

本調査区からは１点出土した。欠損品であり、扁平な川原石を使用し、縁をもたないものである。石材は、安山岩質溶岩である。

磨　　石（第65図57、58）

形態により２分類される。本調査区からは２点出土した。石材は、スコリア１点、凝灰質泥岩１点である。

１群…円形や楕円形の礫を使用するもので、本調査区からは2点出土している。

58のように扁平な面を使用するものが多いが、57のように球形の石のほぼ全面を使用するものもある。

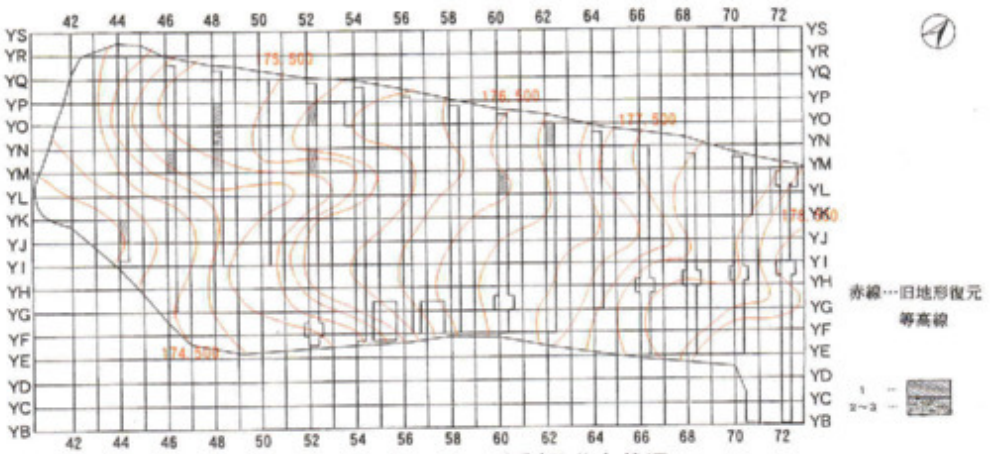
２群…三角柱状の礫の稜部分を使用するものである。本調査区からは出土しなかった。

本調査区遺構外から出土した石器・剥片の石材割合は、硬質頁岩が59％と多く、石英安山岩が10％、砂質凝灰岩が４％、珪質頁岩・黒色頁岩が各３％、安山岩・泥質凝灰岩・凝灰質泥岩・安山岩質溶岩・火山礫凝灰岩・泥岩・軽石質石英安山岩が各２％、石英閃緑玢岩・スコリア・流紋岩・蛇紋岩・石英安山岩質凝灰岩・石英安山岩質溶岩・石英安山岩質泥岩が各１％である。

⑶　土 製 品

Ｇ４区から出土した土製品は、土偶１点、装飾品１点、土器破片利用土製品７点、その他の土製品１点である。調査区北東側から西側にかけての台地縁辺部に集中する傾向がある。

出土分布状況は、第66図のとおりである。



第66図　G₄区土製品分布状況

土　偶（第67図２）

調査区南西部YP－48グリッドから出土した。板状の土偶の体部上半部である。左肩上部と、胴部下半部が破損している。沈線で中央に正中線を表し、それに直交するように２本の沈線が平行に側縁部まで施されていた。肩部は、体部をつまみ出すことによって作られ、斜めに貫通孔が穿たれている。

装 飾 品（第67図３）

調査区南西部YO－48グリッドから出土した。破損しているが、方形の装飾品であると推測される。沈線により文様が描かれ、側縁部には斜行した貫通孔を有する。焼成は良好である。

土器破片利用土製品（第67図４～10）

土器破片を打ち欠き、研磨することにより整形しているものである。形態的に円形、三角形、方形に分類される。本調査区からは円形が５点、三角形が２点出土している。側面全体を研磨しているものが多い。大きさは、３～５cmのものが多い。

その他の土製品（第67図１）

調査区南西部YO－48グリッドから出土した。円形の土製品で、一部破損している。平面中央の穴は貫通しておらず、穴の底部分がわずかに残っている。また、側縁部に径１cm程の貫通孔を有する。焼成は良好である。

(4) 石 製 品

G区から出土した石製品は、板状石製品１点、軽石石製品１点、その他の石製品１点である。石製品は、調査区全域からまばらに出土している。

出土分布状況は、第68図のとおりである。

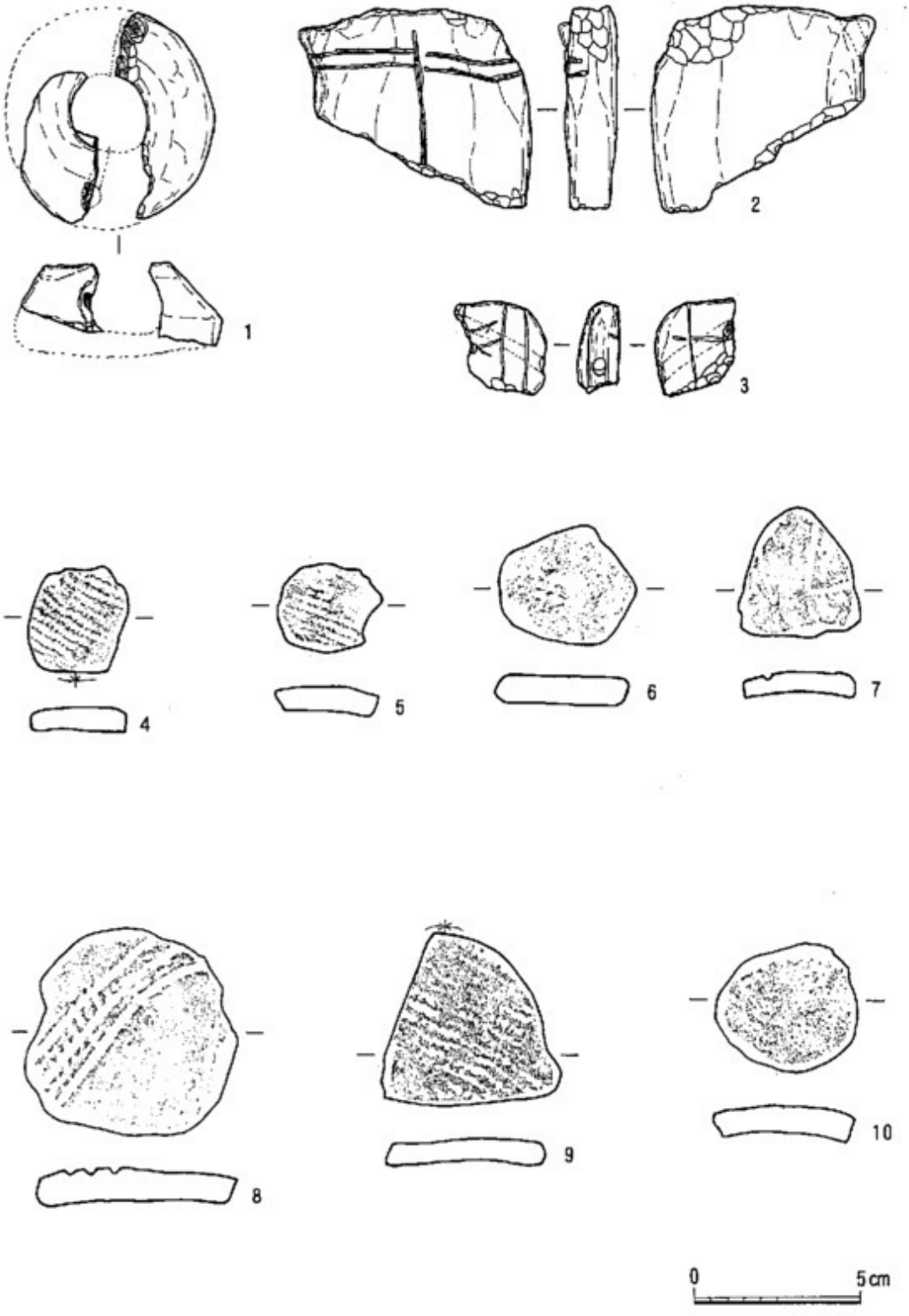
板状石製品（第69図２）

土器破片利用土製品と同様に、打ち欠き、研磨することにより整形しているものである。

調査区南西側YL－50グリッドから出土した。二側面を打ち欠き整形している。大きさは、長さ3.5cm、厚さ0.8cm、重さ13.8cmである。石材は、凝灰質泥岩である。

軽石石製品（第69図１）

多孔質で加工の容易な軽石を円形に整形したものである。　調査区南西側YO－44グリッド

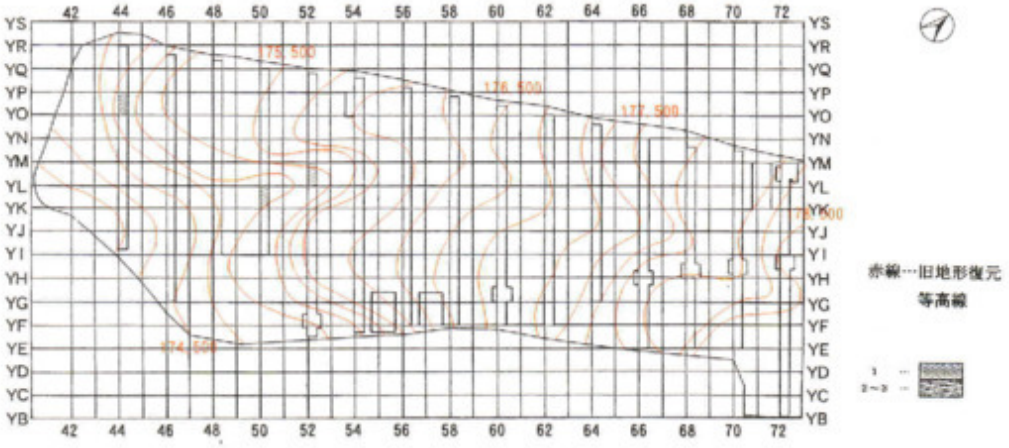


第67図　G₄区遺構外出土土製品実測図・拓影図

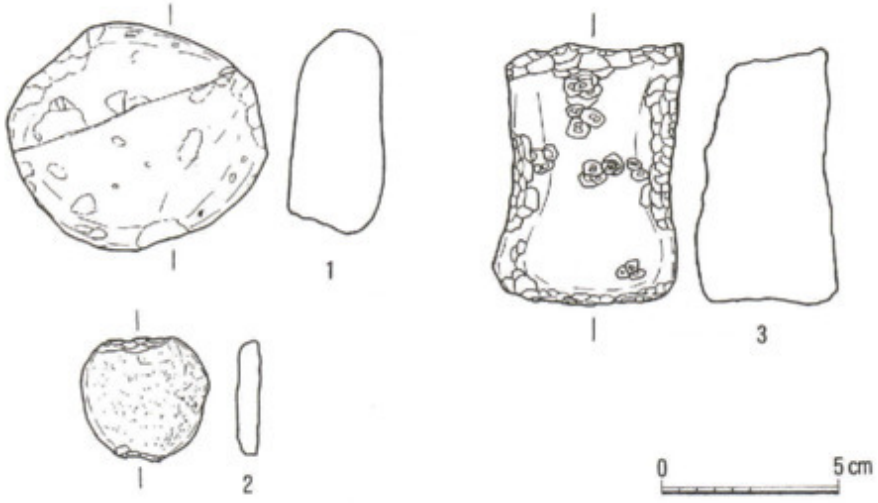
から出土した。側縁部全体が研磨されている。大きさは長さ5.9cm、厚さ1.5cm、重さ74.1gである。石材は軽石質泥岩である。

その他の石製品（第69図3）

調査区南西部YM－52グリッドから出土した。「Ω」状の石で、先端部や側縁部を打ち欠いて整形しており、平坦部にも若干打ち欠いた痕跡がみられる。用途は不明である。大きさは、長さ7.2cm、幅5.0cm、重さ161.6gである。石材は泥質凝灰岩である。（三浦貴子）



第68図　G₄区石製品出土分布状況



第69図　G₄区遺構外出土石製品実測図

第Ⅳ章　G_4区歴史時代検出遺構と出土遺物

G_4区において確認された歴史時代の遺構は、焼土遺構５基である。調査区北東部から南西部にかけて検出された。

１．焼土遺構

第８号焼土遺構（第70図）

調査区北東部YK～YJ－62グリッドに位置し、火山灰直下のⅢa層上面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は126×86cmを測り、焼土は18×15cmを測る。焼土隣接部から炭化材が検出された。採取し、分析したところ、クリ材であることが判明した。（第Ⅴ章参照）

構築時期は平安時代と考えられる。

第９号焼土遺構（第70図）

調査区中央北寄りYL－60グリッドに位置し、火山灰直下のⅢa層上面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は49（推定値）×47cmを測り、焼土は28（推定値）×21cmを測る。遺物は出土しなかった。

構築時期は平安時代と考えられる。

第10号焼土遺構（第70図）

調査区中央北寄りYM－60グリッドに位置し、火山灰直下のⅢa層上面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は162×61cmを測る。焼土は30×24cmを測る。遺物は出土しなかった。

構築時期は平安時代と考えられる。

第13号焼土遺構（第70図）

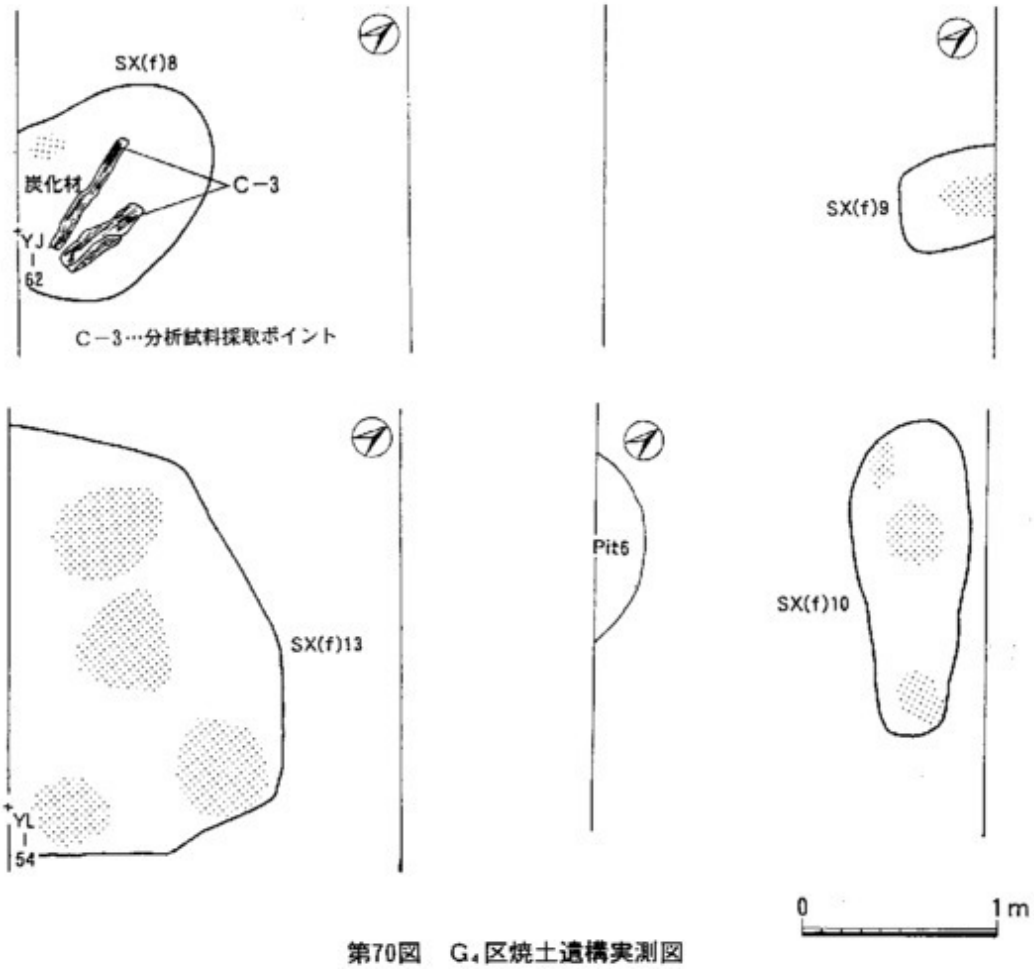
調査区南西部YL～YM－54グリッドに位置し、火山灰直下のⅢa層上面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は236×178cm（推定値）を測る。焼土は61×45cmを測る。遺物は出土しなかった。

構築時期は平安時代と考えられる。

第22号焼土遺構

調査区南西部YK－48グリッドに位置し、Ⅲa層土層断面で確認した。規模は不明である。焼土厚は4cmを測る。遺物は出土しなかった。

構築時期は平安時代と考えられる。　（三浦貴子）



第70図　G₄区焼土遺構実測図

第Ⅴ章　自然科学的調査

調査結果　大湯環状列石第２０次発掘調査　Ｇ４区遺構内出土炭化材の同定

秋田県鹿角市立十和田中学校　山谷昌久

1．樹種同定方法

出土した４種類の炭化材は、すべてのものが軟化し非常に脆くなっているため、徒手切片法を用いての切片の作成は困難だった。

そこで、試料の表面の土を洗い落としたあと、割れてできた断面を実体顕微鏡で観察した。

2．炭化材の特徴

構成要素　４種類とも道管要素がはっきりと確認できる。

木口面

道管の配列が環孔状	No.1	No.2	No.3	NO.4	・・・・	①
① 孔圏外の小道管は火炎状配列	No.1	No.2	No.3	NO.4	・・・・	②
② 広放射組織あり	No.1	No.2	No.3		・・・・	③
② 広放射組織なし	NO.4				・・・・	④
③ 孔圏は連続している	No.1	No.2	No.3	→ クリ属		
④ 孔圏外の小道管は小さく、多数が複合する	NO.4			→ コナラまたはミズナラ		

3．白い塊について

不明。

水に入れると簡単にくずれ、黒っぽい色になる。これを静かに水洗いすると、細かい粒が残る。この粒を顕微鏡で観察すると、無色鉱物の割合が非常に多い。

含まれる鉱物のほとんどが、形がくずれている。

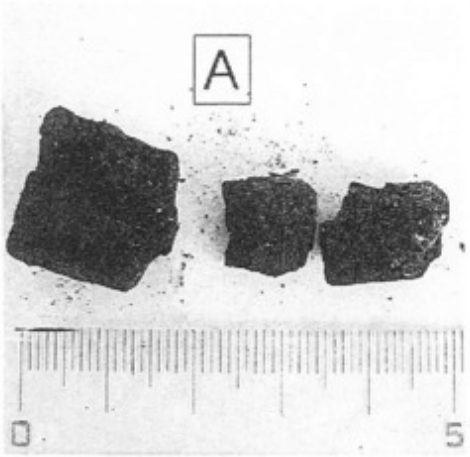
これらのことから、粘土や泥など水中で堆積したものに由来するのではないかと考えられる。ただし、材質が一様でないこと、内部に繊維状のものが見られること、不規則なすきまが見られること、出土した場所などから、何らかの形で加工されたものである可能性が非常に高い。

炭化材一覧

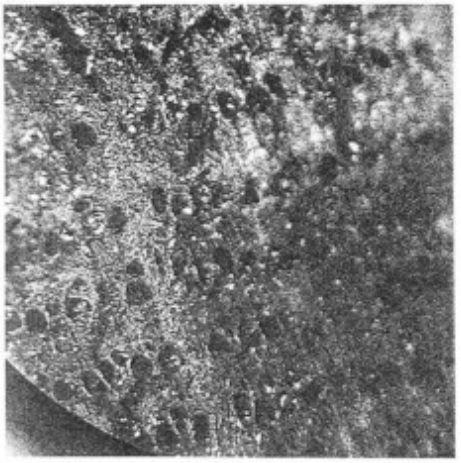
No.	遺跡名	遺物番号・遺構・グリット	科	属	種
No.1	０３大Ｇ４	C-3・SX(f)8(平)・YK-62	ブナ科	クリ属	クリ
No.2	０３大Ｇ４	C-4・Pit2・YH-62	ブナ科	クリ属	クリ
No.3	０３大Ｇ４	C-5・SK4 底部・YN-60	ブナ科	クリ属	クリ
No.4	０３大Ｇ４	C-1・S11 床上・YM-72	ブナ科	コナラ属	コナラ

白い塊

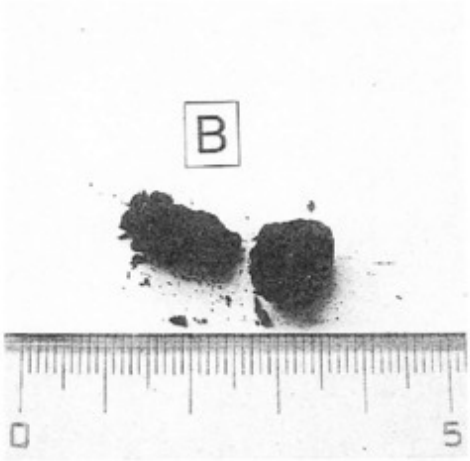
	遺跡名	遺物番号・遺構・グリット	種類
1	０３大Ｇ４	C-2・SK5 床上・YK-52	不明



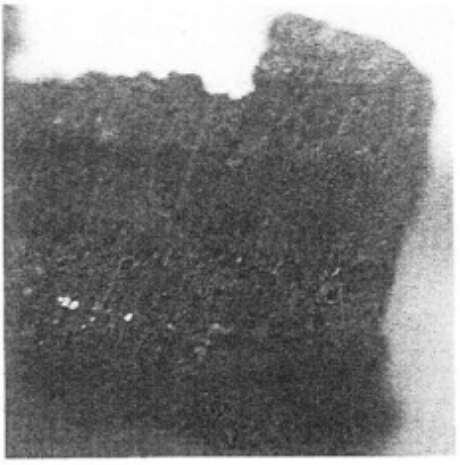
No.1　クリ炭化材



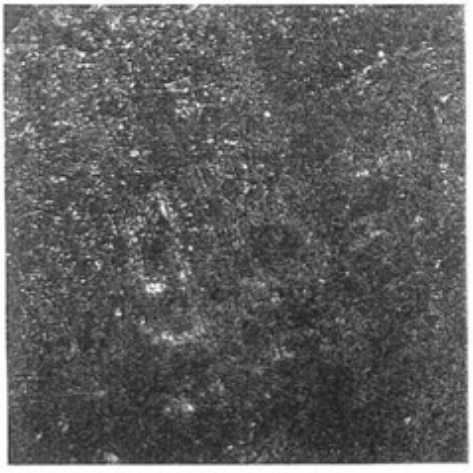
No.1　クリ柾目面



No.2　クリ炭化材



No.2　クリ柾目面



No.3　クリ柾目面

No.4　コナラ柾目面

PL.2　炭化材分析試料

第Ⅵ章　分析と考察

1．鹿角市内発見の後期住居跡の特徴について

(1)　鹿角市内で確認された住居を中心に

鹿角市内では，これまでに70ヶ所余りの遺跡が発掘調査されている。このうち縄文時代の竪穴住居跡が確認された遺跡は29遺跡で，総数268軒に及んでいる。

第４表～第13表は，これまでに確認された住居跡観察一覧で，市内で最も古いものは縄文前期の清水向遺跡（八幡平字玉内）である。中期にはいると住居の確認例は飛躍的に増加する。市内の遺跡で集落の全容を知ることができるものとしては，県内でも最大規模を誇る天戸森遺跡があるが，残念ながらこれ以外に集落（ムラ）全体の様子や住居形態・規模等をうかがいしることのできる遺跡は極めて少ない。

大湯環状列石の発掘調査も本年度で第20次調査を終え，少しづつであるが住居跡が検出され，これまでに15軒が確認されている。それらの構築時期は万座・野中堂環状列石それに後続する環状配石遺構群の構築時期である後期初頭～中葉に位置付けられるものであるが，断片的でその全容すらはっきりとしていない。

この項では，市内で確認された後期遺跡・住居跡を中心に概観し，それぞれの特徴を摘出し，後期集落，住居跡の解明の一助としたい。

(2)　市内の後期住居の立地，形態と規模

ア：立地

赤坂Ｂ遺跡：　鹿角市花輪字福士に所在する。縄文時代の住居跡６軒（後期前葉３軒，晩期１軒，時期不明２軒）のほか土坑，フラスコ状土坑等が確認された。後期集落は福士川を見下ろす「馬の背状」の段丘南側の縁辺部に位置する。遺跡の東側は奥羽山脈を背景にするが，西側は鹿角盆地に向け開口し眺望も良く，生活環境としては最良の地といえる。

赤坂Ａ遺跡：　赤坂Ｂ遺跡と同じ段丘に所在し，同遺跡から福士川を400m程遡った南向の斜面に位置する。縄文時代後期中葉の住居跡５軒，不明１軒，フラスコ状土坑，土坑等が確認されている。立地的には赤坂Ｂ遺跡と同じ条件下にあり，生活環境としては最良の地といえる。

大湯環状列石Ｆ$_1$区：　万座環状列石の北北西側の台地縁辺部に位置する。縄文時代後期前葉の住居跡４軒，土坑，フラスコ状土坑が確認されている。同地区の西側斜面には湧水があり，生活環境としては最良の地といえる。

Ｄ$_9$区：　Ｆ$_1$区とは小さな沢を挟んだ南側に立地する。住居跡（後期前葉７軒，

第4表　市内で検出された竪穴住居一覧(1)

番号	遺跡名	遺構名	構築時期	形態	規模(cm・㎡) 長軸	短軸	面積	炉の形態	炉の位置	柱配置	特殊な遺構
1	居熊井	SI01	中期末葉～後期初頭	楕円形	330	285	7.28	複式炉	南西壁際	住居内に1個	なし
2	歌内	SI43	中期末葉	楕円形	400	318	10.00	地床炉	中央	対の6本	長軸部に貼出
3	鳥居平	SI29	中期末葉	円形	324	313	8.04	地床炉	中央	なし	住居北側に石組
4	飛鳥平	SI36	後期末葉	円形	370	344	8.26	地床炉	中央	床面に17個	なし
5	飛鳥平	SI37	中期末葉	円形	595	445	27.34	複式炉	南西壁際	対の4本	なし
6	飛鳥平	SI38	後期中葉	円形		220					
7	飛鳥平	SI39	中期末葉	円形	714	678	38.11	複式炉	北西壁際	対の6本	なし
8	飛鳥平	SI02	後期末葉～晩期初頭	円形	460	370	13.20	土器埋設石囲炉	中央	特定できず	なし
9	北の林I	SI23	中期末葉	円形	631	626	33.00	複式炉	西壁際	対の6本	なし
10	北の林I	SI24	後期初頭	円形	351	324	8.80	石囲炉	南西寄り	住居外に7本	なし
11	北の林I	SI25	中期末葉	楕円形	725	675	35.40	複式炉	西壁際	壁際に7個	なし
12	北の林II	SI01		楕円形	250	224	4.28	石囲炉	北西寄り	確認できず	なし
13	北の林II	SI12	中期末葉	円形	754	632	40.56	複式炉	東壁際	特定できず	なし
14	北の林II	SI14	中期末葉	長円形	325	283	7.98	複式炉	南壁際	特定できず	なし
15	北の林II	SI15		楕円形	700	640	34.20	複式炉	南西壁際	特定できず	なし
16	上葛岡I	SI01	中期末葉	楕円形	595	454	23.40	複式炉	南壁際	対の4本	なし
17	上葛岡II	SI01(新)		不正楕円形	354	289	7.59	石囲炉（円形）	西寄り	確認できず	なし
18	上葛岡II	SI01(古)		不正楕円形	354	289	7.59	複式炉	西壁際	確認できず	炉西側に立石
19	上葛岡II	SI02		不正楕円形	452	308	11.40	石囲炉	南寄り	特定できず	なし
20	上葛岡II	SI03						石囲炉	東寄り		
21	小豆沢館	SI06		円形	290	266	6.21	石囲炉（コ字状）	西寄り	壁際に小柱穴	なし
22	案内II	SI01	後期末葉	楕円形	320	268		地床炉	中央	壁際	なし
23	案内II	SI02		楕円形	316	298		地床炉	中央	確認できず	なし
24	案内II	SI03	後期後葉	楕円形	311	265		地床炉	中央	壁際	なし
25	案内II	SI04	後期後葉	楕円形	525	350		地床炉	中央	壁際	なし
26	猿ケ平I	SI01	後期初頭	円形	373	338	10.30	石囲炉（コ字状）	西壁際	住居内外を一巡	なし
27	猿ケ平II	SI01	後期～晩期	円形	330	312	8.19	地床炉	中央	炉・壁間を一巡	なし

第5表　市内で検出された竪穴住居一覧(2)

番号	遺跡名	遺構名	構築時期	形態	規模(cm・㎡) 長軸	短軸	面積	炉の形態	炉の位置	柱配置	特殊な遺構
28	猿ケ平Ⅱ	SI02(A)		不整円形	380	348	10.62	石囲炉(方形)	西寄り	壁際	なし
29	猿ケ平Ⅱ	SI02(B)						地床炉	東寄り	壁際	なし
30	猿ケ平Ⅱ	SI03	中期末葉～後期初頭	円形	428	394	13.00	石囲炉(方形)	北東寄り	南東側に2個	なし
31	猿ケ平Ⅱ	SI04		円形	298	288	6.58	地床炉	中央	特定できず	なし
32	猿ケ平Ⅱ	SI05	中期末葉	円形	592	540	24.75	複式炉	北西壁際	特定できず	なし
33	猿ケ平Ⅱ	SI06		円形	354	320	9.37	地床炉	北寄り	対の4本	なし
34	猿ケ平Ⅱ	SI07		円形	300	290	7.29	地床炉	中央	確認できず	なし
35	猿ケ平Ⅱ	SI08(A)		円形	395	370	11.62	地床炉	北東寄り	特定できず	なし
36	猿ケ平Ⅱ	SI08(B)						地床炉	北寄り	特定できず	なし
37	案内Ⅲ	SI08		円形	408	399		石囲炉	東寄り	壁際に6本	なし
38	案内Ⅲ	SI04		円形	380	334	10.82	石囲炉(円形)	西寄り	確認できず	西側床面に埋設土器
39	案内Ⅲ	SI05		円形	469	468	17.18	石囲炉	南東側	特定できず	なし
40	案内Ⅲ	SI03		円形	(3.80)	(3.30)	(8.90)	石囲炉	中央	壁際	なし
41	案内Ⅲ	SI34		円形	412	402	11.71	石囲炉(方形)	中央	壁際	なし
42	案内Ⅲ	SI36		楕円形	417	364		石囲炉	南東側	壁際	なし
43	中の崎							石囲炉			
44	妻の神Ⅲ	SI42		不製円形	243	197	5.10	石囲炉(円形)	南東寄り	特定できず	なし
45	妻の神Ⅲ	SI43		不整円形	435	425	15.50	石囲炉(円形)	南東寄り	壁際	なし
46	案内Ⅰ	SI01		不整円形	240	220	4.05	石囲炉(方形)	北寄り	確認できず	なし
47	案内Ⅰ	SI02		楕円形	440	336	10.62	石囲炉(方形)	西寄り	壁際	なし
48	案内Ⅰ	SI03		円形	435	410	15.45	石囲炉(方形)	北壁に接す	特定できず	なし
49	案内Ⅰ	SI04		(円形)				石囲炉(方形)	北壁に接す	特定できず	なし
50	案内Ⅰ	SI05		(円形)						特定できず	なし
51	案内Ⅰ	SI06	中期末葉	楕円形	395	310	9.72	複式炉	西壁際	対の6本	なし
52	妻の神Ⅱ	SI04						石囲炉(円形)		確認できず	
53	妻の神Ⅱ	SI05		不整円形	370	336	9.55	石囲炉(円形)	西寄り	確認できず	なし
54	妻の神Ⅱ	SI25									

第６表　市内で検出された竪穴住居一覧(3)

番号	遺跡名	遺構名	構築時期	形態	規模(cm・㎡) 長軸	短軸	面積	炉の形態	炉の位置	柱配置	特殊な遺構
55	妻の神Ⅱ	SI37									なし
56	妻の神Ⅱ	SI38						石囲炉	不明		なし
57	案内Ⅴ	SI04	晩期					石囲炉（円形）			周囲に11個の角礫
58	案内Ⅴ	SI17	晩期	(円形)	450			石囲炉			なし
59	案内Ⅴ	SI111	中期末葉	円形	295	283	7.85	石囲炉（方形）	南西寄り	特定できず	なし
60	案内Ⅵ	SI101						石囲炉			
61	案内Ⅵ	SI106	後期?	楕円形	366	322	10.10	石囲炉（方形）	南西寄り	特定できず	なし
62	案内Ⅵ	SI107						複式炉		確認できず	
63	案内Ⅵ	SI112	後期末葉～晩期	楕円形	345	265	7.10	地床炉	中央	確認できず	なし
64	案内Ⅵ	SI119	後期?					石囲炉	中央	確認できず	なし
65	玉内	SI121	中期末葉	円形	380			複式炉	南壁際	特定できず	なし
66	玉内	SI122									
67	清水向	1号	前期	円形				石囲炉	中央	壁際	なし
68	清水向	2号	前期	円形				石囲炉			
69	黒森山麓	1号	中期末葉	円形	径7～8m			石囲炉（複式炉）	南壁際	特定できず	なし
70	黒森山麓	2号	中期末葉					複式炉	南壁際	特定できず	なし
71	黒森山麓	3号	中期末葉	楕円形	径5.5m～			複式炉	南壁際	対の6本	炉内に埋設土器
72	黒森山麓	4号	中期末葉	円形	径8～9m			複式炉	南壁際	対の8本	石棒が立つ
73	黒森山麓	5号			径7m程			石囲炉（方形）	南側	特定できず	
74	下内野Ⅱ	01号	中期末葉	楕円形				複式炉		特定できず	
75	下内野Ⅱ	02号	中期末葉	楕円形	256	235	4.67	石囲炉（円形）	ほぼ中央	壁際	なし
76	下内野Ⅱ	03号	中期末葉	楕円形				石囲炉（円形）	ほぼ中央		
77	下内野Ⅱ	04号	中期末葉	楕円形				石囲炉（円形）	北寄り	特定できず	
78	下内野Ⅱ	05号	中期末葉	楕円形				石囲炉（方形）	北寄り	特定できず	
79	赤坂B	SI01		方形	308	300	8.40	石囲炉	中央	四隅	なし
80	赤坂B	SI101	後期前葉	円形	308	290	6.15	石囲炉（方形）	ほぼ中央	対の4本	床に「ニ字」の組石
81	赤坂B	SI102	後期前葉	円形	415	375		石囲炉（方形）	北西寄り	壁際	

第７表　市内で検出された竪穴住居一覧(4)

番号	遺跡名	遺構名	構築時期	形態	規模(cm・㎡)			炉の形態	炉の位置	柱配置	特殊な遺構
					長軸	短軸	面積				
82	赤坂B	SI103	晩期	円形	540	540	20.80	石囲炉（円形）	中央	主柱穴と壁柱穴	東側に張出施設
83	赤坂B	SI104	後期前葉	円形	317	310	14.80	石囲炉（方形）	中央	壁際	なし
84	赤坂B	SI106		円形	400			石囲炉（円形）	ほぼ中央		なし
85	赤坂A	SI03	後期中葉	円形	372		9.78	地床炉	南西寄り	特定できず	南側に出入口
86	赤坂A	SI11	晩期	円形	386		10.50	石囲炉	中央	主柱穴と壁柱穴	
87	赤坂A	SI13	後期中葉	楕円形	506	420	14.3	石囲炉（楕円形）	南寄り	壁際	南側に出入口
88	赤坂A	SI14	後期中葉	楕円形	628	474	20.25	地床炉	中央	壁寄り離れ一巡	南側に出入口
89	赤坂A	SI17	後期中葉	楕円形	465	402	12.54	地床炉	中央	特定できず	
90	赤坂A	SI18	後期中葉	円形	380		9.64	地床炉	南寄り	特定できず	南側に出入口
91	天戸森	SI09	中期後半	楕円形	396	341	10.10	地床炉	西寄り	壁際	なし
92	天戸森	SI15	中期後半	楕円形		10.30		石囲炉（楕円形）	西壁際	対の６本	なし
93	天戸森	SI16	中期後半	楕円形	502	438	15.40	複式炉	東壁際	対の４本	なし
94	天戸森	SI19	中期後半	楕円形	258	218	4.20	石囲炉（コ字状）	南東寄り	特定できず	なし
95	天戸森	SI22	中期後半	楕円形	475	390	15.8	複式炉	北東壁際	壁際	なし
96	天戸森	SI23	中期後半	楕円形	328	236	5.70	石囲炉（コ字状）	南東寄り	特定できず	なし
97	大湯F1	SI403	後期前葉	楕円形	300	280	5.12	石囲炉（方形）	東寄り	住居外に一巡	東壁にコ字組石
98	大湯F1	SI405	後期前葉	円形	270	270	5.50	石囲炉（円形）	南寄り	対の４本	東壁際に４個の礫石
99	大湯F1	SI408	後期前葉	円形	330	310	8.21	石囲炉（円形）	ほぼ中央	対の４本	南東壁際に３個の礫石
100	大湯F1	SI410	後期前葉	楕円形	270	230	4.40	石囲炉（円形）	若干北寄り	対の４本	なし
101	大湯D9	SI01	後期前葉	円形	360			石囲炉（円形）	ほぼ中央	壁際	
102	大湯D9	SI02	後期中葉	円形	420			石囲炉（方形）	南寄り	壁際	壁際に特殊組石
103	大湯D9	SI03	後期前葉	円形	370			石囲炉（円形）	やや東寄り	壁際	
104	大湯D9	SI04	後期前葉	円形	290			石囲炉（円形）	西側壁寄り	確認できず	
105	大湯D9	SI05	後期前葉	円形	294			石囲炉（円形）	ほぼ中央	壁際	
106	大湯D9	SI06	後期前葉	楕円形	284			石囲炉（円形）	ほぼ中央	壁際	
107	大湯D9	SI07	後期前葉	楕円形	500	400		石囲炉（円形）	やや西寄り	壁際	
108	大湯D9	SI08						確認されず			

第８表　市内で検出された竪穴住居一覧(5)

番号	遺跡名	遺構名	構築時期	形態	規模(cm・㎡)			炉の形態	炉の位置	柱配置	特殊な遺構
					長軸	短軸	面積				
109	大湯Ｂ2	ＳＩ01	後期中葉	楕円形	470	320	11.80	地床炉	中央	壁際	なし
110	大湯Ｂ2	ＳＩ02	後期前葉	円形	440	440	15.20	石囲炉	やや西寄り	対の４本?	張出施設
111	大湯分布	1号	後期前葉	円形	300			石囲炉（円形）	中央	壁際	
112	御休堂	2号	中期末葉～後期初頭	円形	288	280	5.52	石囲炉（方形）	北東寄り	壁際	なし
113	御休堂	5号	中期末葉～後期初頭	円形	281	250	4.25	石囲炉（方形）	やや南寄り	５本柱	なし
114	御休堂	6号	中期末葉～後期初頭	円形	275	257	5.13	石囲炉（方形）	やや東寄り	対の４本	
115	天戸森	1号	中期後葉	円形	420	402	11.64	石囲炉（円形）	南東寄り	対の４本	テラス
116	天戸森	2号	中期後葉	円形							
117	天戸森	3号	中期後葉	円形	260			石囲炉（楕円形）	南東壁際	壁際	
118	天戸森	4号	中期後葉	円形	360					検出できず	なし
119	天戸森	５Ａ号	中期後葉	円形	364	342	8.48	複式炉	南西壁際	対の４本	なし
120	天戸森	５Ｂ号	中期後葉	円形	368	354	9.36	複式炉	南西壁際	対の４本	なし
121	天戸森	6号	中期後葉	楕円形	588	500	19.36	複式炉	北壁際	対の６本	なし
122	天戸森	7号	中期後葉	楕円形	600	450		複式炉	南西壁際	対の４本	なし
123	天戸森	8号	中期後葉	楕円形	563	440	14.96	複式炉	南西壁際	確定できず	なし
124	天戸森	9号	中期末葉	円形	988	904	73.28	複式炉	南西壁際	対の４本+1本	なし
125	天戸森	１０号	中期後葉	隅丸方形	332	284	7.28	確認できなかった		特定できず	なし
126	天戸森	１１号	中期後葉～末葉	円形	429	424	10.29	複式炉	南西壁際	特定できず	なし
127	天戸森	１２号	中期後葉	隅丸方形	596	520	26.08	複式炉	南西壁際	対の６本+２本	なし
128	天戸森	１３号	中期後葉～末葉	隅丸方形	400	374	10.52	複式炉	南壁際	方形配置の８本	テラス
129	天戸森	１４号	中期後葉	楕円形	570	470	19.40	複式炉	東壁際	対の６本+１本	なし
130	天戸森	１５号	中期後葉	楕円形	360	300	6.84	複式炉	南壁際	確定できず	なし
131	天戸森	１６号	中期後葉	楕円形	667	571	23.88	複式炉	南壁際	対の６本+１本	なし
132	天戸森	１７Ａ号	中期末葉	楕円形	500	493	16.20	複式炉	南壁際	対の４本	なし
133	天戸森	１７Ｂ号	中期末葉		368	286		石囲炉	南東寄り	確認できなかった	なし
134	天戸森	１８号	中期後葉	楕円形	560	485	17.96	石囲炉	若干南寄り	対の４本+２本	なし
135	天戸森	１９号	中期後葉	楕円形	483	374	11.72	石囲炉（円形）	南寄り	４本	なし

第９表　市内で検出された竪穴住居一覧(6)

番号	遺跡名	遺構名	構築時期	形態	規模(cm・㎡)			炉の形態	炉の位置	柱配置	特殊な遺構
					長軸	短軸	面積				
136	天戸森	20号	中期中葉	隅丸方形	348	334		検出されなかった		4本	なし
137	天戸森	21A号	中期後葉	円形	350	345	10.16	検出されなかった		4本	なし
138	天戸森	21B号	中期後葉	円形	282	266	4.96	複式炉	南西寄り	壁際	なし
139	天戸森	22号	中期後葉	円形	368	345	10.04	複式炉	北壁際	対の4本	なし
140	天戸森	23号	中期後葉	円形	364	326	8.24	石囲炉	東壁際	4本柱	なし
141	天戸森	24号	中期後葉	楕円形	417	350	9.44	石囲炉	西寄り	4本柱	なし
142	天戸森	25号	中期末葉	楕円形	1424	1046	99.68	石囲炉+地床炉	南壁際	対の10本	テラス
143	天戸森	26号	中期中葉	円形	237	234	3.92	検出されなかった		確定できず	なし
144	天戸森	27号	中期後葉	楕円形	390	301	8.08	石囲炉	若干南西寄り	確定できず	テラス
145	天戸森	28号	中期後葉～末葉	楕円形	360	286	7.48	石囲炉（楕円形）	やや南東寄り	4本柱	なし
146	天戸森	29A号	中期中葉	楕円形	948	768	54.56	複式炉	南壁際	対の10本	なし
147	天戸森	29B号	中期後葉	円形	746	702	37.08	石囲炉	若干南西寄り	壁際	なし
148	天戸森	30号	中期後葉～末葉	円形	326			石囲炉（方形）	ほぼ中央	確定できず	なし
149	天戸森	31号	中期後葉	円形	344	340	7.52	複式炉	東壁際	壁際・住居外	なし
150	天戸森	32号	中期後葉	楕円形	430	391	11.68	複式炉	北西壁際	対の4本	なし
151	天戸森	33号	中期後葉	円形	438	409	12.80	地床炉	やや南東寄り	4本柱	なし
152	天戸森	34号	中期末葉	円形	436	424	13.84	複式炉	東壁際	対の6本	テラス
153	天戸森	36号	中期後葉	円形	326	277	5.88	石囲炉	やや南西寄り	5本柱	なし
154	天戸森	37号	中期後葉	楕円形	580	404	19.04	地床炉	やや南東寄り	対の6本	なし
155	天戸森	38号	中期後葉	円形	387	356	10.16	石囲炉（楕円形）	やや南西寄り	5本柱	なし
156	天戸森	39号	中期中葉	楕円形		392		重複により消失		4本柱	なし
157	天戸森	40号	中期後葉～末葉	円形	485	466	14.16	複式炉	西壁際	対の6本	テラス
158	天戸森	41号	中期後葉	五角形	326	242	4.56	検出されなかった		角隅に5本	なし
159	天戸森	42A号	中期後葉	楕円形	1660	8.74	118.09	複式炉	南壁際	対の14本	なし
160	天戸森	42B号	中期中葉～後葉	楕円形	1010	730	53.89	検出されなかった	なし	対の6本	なし
161	天戸森	43号	中期後葉	楕円形	742	600	30.44	複式炉	南壁際	対の6本+1本	なし
162	天戸森	44号	中期後葉	円形	344	303	7.48	検出されなかった		4本柱	

第10表　市内で検出された竪穴住居一覧(7)

番号	遺跡名	遺構名	構築時期	形態	規模(cm・m²) 長軸	短軸	面積	炉の形態	炉の位置	柱配置	特殊な遺構
163	天戸森	45A号	中期後葉	楕円形	1136	865	79.76	複式炉+地床炉	北西壁際	対の10本	なし
164	天戸森	45B号	中期後葉	楕円形	1036	740		複式炉+地床炉	北西壁際	対の10本	なし
165	天戸森	45C号	中期後葉	楕円形	760	740		地床炉	南東寄り	対の6本	なし
166	天戸森	46号	中期後葉	円形	319	312	6.68	地床炉	ほぼ中央	5本柱	なし
167	天戸森	47号	中期後葉	不整楕円形	596	424	18.64	地床炉	やや南寄り	対の6本	なし
168	天戸森	48号	中期後葉	楕円形	306	240		石囲炉	ほぼ中央	特定できず	なし
169	天戸森	49号	中期後葉～末葉	円形	276	272	4.76	複式炉	西壁際	5本柱	なし
170	天戸森	50号	中期後葉	楕円形	312	268	5.60	地床炉	やや南西寄り	対の4本	なし
171	天戸森	51号	中期後葉	楕円形	378	327	7.84	石囲炉（コ字状）	やや南寄り	確定できず	テラス
172	天戸森	52号	中期後葉	円形	354	352	8.56	石囲炉（楕円形）	やや西寄り	4本or5本柱	なし
173	天戸森	53号	中期後葉	楕円形	370	313	7.16	複式炉	やや東寄り	対の6本+1本	なし
174	天戸森	54号	中期後葉	円形	436	426	11.92	複式炉+地床炉	西壁際	対の4本	なし
175	天戸森	55号	中期後葉	円形	288	261	4.84	石囲炉（U字状）	やや南西寄り	特定できず	なし
176	天戸森	56号	中期後葉	不整円形	288	281	5.60	地床炉	やや西寄り	対の2本+2本	なし
177	天戸森	57号	中期中葉	不整円形	418	392	11.40	検出できなかった		検出できなかった	なし
178	天戸森	58号	中期後葉～末葉	隅丸方形	1248	800	79.84	石囲炉	西壁際	対の8本	なし
179	天戸森	59号	中期後葉	円形		9.28		地床炉	やや北寄り	対の6～8本	なし
180	天戸森	60号	中期末葉	楕円形	564	470	19.08	複式炉	南壁際	対の4本+1本	テラス
181	天戸森	61号	中期末葉	円形	468	444	11.88	複式炉	東壁際	対の4本	なし
182	天戸森	62AB号	中期後葉	楕円形	672	526	26.40	石囲炉（楕円形）	西寄り	対の6本	テラス
183	天戸森	62C号	中期後葉	円形	311	300	6.20	検出されなかった		4本柱	なし
184	天戸森	62D号	中期後葉	楕円形	392	352		検出されなかった		対の6本	なし
185	天戸森	62E号	中期後葉	円形	382	354	8.96	複式炉?	東壁際	5本柱	テラス
186	天戸森	62F号	中期後葉～末葉	楕円形	288	260	5.16	複式炉	北壁際	対の2本	なし
187	天戸森	63号	中期後葉	楕円形	316	270	6.00	複式炉	東壁際	4本柱	なし
188	天戸森	64号	中期中葉	楕円形	690	480	25.88	検出されなかった		4本柱	なし
189	天戸森	65号	中期後葉	楕円形	802	601	34.52	石囲炉（コ字状）	やや北寄り	対の4本	テラス

第11表　市内で検出された竪穴住居一覧(8)

番号	遺跡名	遺構名	構築時期	形態	規模(cm・㎡)			炉の形態	炉の位置	柱配置	特殊な遺構
					長軸	短軸	面積				
190	天戸森	66号	中期末葉	楕円形	421	328	10.52	石囲炉	やや南寄り	1本確認	なし
191	天戸森	67号	中期後葉	円形	490	459	16.68	複式炉	南西壁際	確認できなかった	なし
192	天戸森	68号	中期後葉	隅丸方形	483	371	14.92	地床炉	ほぼ中央	4本柱	なし
193	天戸森	69号	中期中葉	楕円形	390	315	9.52	地床炉2基	北西・南東	対の6本	なし
194	天戸森	70号	中期末葉	不整円形	497	474	20.12	複式炉	南壁際	対の4本	なし
195	天戸森	71A号	中期末葉	円形	480	472	14.84	複式炉	南壁際	対の6本	なし
196	天戸森	71B号	中期後葉	楕円形	786	568	23.52	複式炉	東壁際	対の8本	なし
197	天戸森	71C号	中期後葉	楕円形	468	324	11.20	地床炉	やや東寄り	対の4本	なし
198	天戸森	72号	中期後葉	楕円形	356	394	10.96	地床炉+土器片囲炉	北寄り・北東壁	5本柱	なし
199	天戸森	73号	中期中葉～後葉	円形	240	240	3.96	検出されなかった		1本確認	なし
200	天戸森	74A号	中期後葉	楕円形	490	390	14.28	石囲炉	やや南寄り	6本	なし
201	天戸森	74B号	中期後葉	楕円形	646	447	19.12	石囲炉	やや南寄り	対の8本	なし
202	天戸森	75号	中期後葉	隅丸方形	386	368	11.60	地床炉	ほぼ中央	4本柱	なし
203	天戸森	76号	中期中葉	楕円形	306	273	5.32	地床炉	ほぼ中央	1本確認	なし
204	天戸森	77A号	中期後葉	楕円形	414	320	9.84	石囲炉	やや南寄り	壁際	なし
205	天戸森	77B号	中期後葉	楕円形	556	386	17.12	石囲炉	やや南寄り	対の4本	なし
206	天戸森	78A号	中期後葉	楕円形	242	268	424	石囲炉（楕円形）	ほぼ中央	確認できなかった	なし
207	天戸森	78B号	中期中葉	楕円形	640	504	28.36	地床炉	やや東寄り	対の6本	テラス
208	天戸森	79号	中期中葉	楕円形	460	312	10.52	地床炉	やや南寄り	対の8本	なし
209	天戸森	80号	中期後葉	楕円形	434	344	11.36	地床炉	ほぼ中央	対の6本	なし
210	天戸森	81号	中期後葉	不整楕円形	360	280	7.24	検出されなかった		特定できず	なし
211	天戸森	82号	中期後葉	円形	396	386	11.08	地床炉	ほぼ中央	特定できず	なし
212	天戸森	83号	中期後葉	円形	416	412	13.08	石囲炉（方形）	ほぼ中央	対の4本+1奔	なし
213	天戸森	84号	中期後葉	楕円形	872	784	50.56	地床炉	ほぼ中央	5本柱	なし
214	天戸森	85A号	中期後葉	楕円形	1068	514	50.52	石囲炉（方形）	やや南寄り	対の10本	なし
215	天戸森	85B号	中期後葉	楕円形	1068	475				対の12本	なし
216	天戸森	85C号	中期後葉	楕円形	939	432				対の10本	なし

第12表　市内で検出された竪穴住居一覧(9)

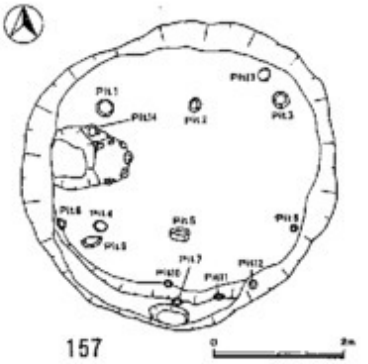
番号	遺跡名	遺構名	構築時期	形態	規模(cm・㎡) 長軸	短軸	面積	炉の形態	炉の位置	柱配置	特殊な遺構
217	天戸森	85D号	中期後葉	楕円形	888	370				対の10本	なし
218	天戸森	85E号	中期後葉	楕円形	888	340				対の10本	なし
219	天戸森	86号	中期後葉	楕円形	681	447	24.76	石囲炉（楕円形）	やや東寄り	対の8本	なし
220	天戸森	87号	中期中葉	楕円形	1600	844	109.60	土器埋設炉	やや北東寄り	対の12本	なし
221	天戸森	88A号	中期中葉	楕円形	360	320	7.76	検出されなかった		特定できず	なし
222	天戸森	88B号	中期後葉	楕円形	566	360	15.86	石囲炉（楕円形）	やや東寄り	対の6本+1本	東壁に張出
223	天戸森	89号	中期後葉	円形	298	279	6.36	地床炉	ほぼ中央	4本柱	なし
224	天戸森	90号	中期後葉	円形	319	291	6.80	土器埋設炉	やや南寄り	5本柱	なし
225	天戸森	91号	中期後葉	円形	374	360	8.80	地床炉	やや南西寄り	特定できず	なし
226	天戸森	92号	中期後葉	円形	300	283	6.12	検出されなかった		特定できず	なし
227	天戸森	93号	中期後葉	楕円形	380	426	12.64	検出されなかった		特定できず	なし
228	天戸森	94号	中期後葉	楕円形	252	218	4.20	検出されなかった		4本柱	なし
229	天戸森	95号	中期後葉	楕円形	411	321	9.32	地床炉		特定できず	なし
230	天戸森	96A号	中期後葉	楕円形	288	233	5.16	検出されなかった		特定できず	なし
231	天戸森	96B号	中期中葉～後葉	方形	456	320	12.08	地床炉	やや北寄り	特定できず	なし
232	天戸森	97A号	中期後葉	円形	311	281	6.28	地床炉	ほぼ中央	4本柱	なし
233	天戸森	97B号	中期中葉～後葉	楕円形	450	334	10.96	地床炉	やや南東寄り	4本柱	なし
234	天戸森	98号	中期後葉	円形	352	326	8.24	地床炉	ほぼ中央	特定できず	なし
235	天戸森	99A号	中期中葉～後葉	円形	360	330	9.24	地床炉	やや南寄り	対の2本	なし
236	天戸森	99B号	中期中葉～後葉	ホタテ貝形	430	330	12.74			対の2本	なし
237	天戸森	100A号	中期中葉	楕円形	1615			地床炉	北壁際		なし
238	天戸森	100B号	中期中葉～後葉	楕円形	352	262	6.52	検出されなかった		対の4本	なし
239	天戸森	100C号	中期後葉	楕円形	562	420	20.12	地床炉	やや南東寄り	対の4本+2本	なし
240	天戸森	101号	中期後葉	楕円形	960	636	47.76	複式炉	東壁際	対の8本	テラス
241	天戸森	102号	中期後葉～末葉	楕円形	417	366	9.12	複式炉	東壁際	対の4本	なし
242	天戸森	103号	中期後葉	楕円形	455	378	12.68	複式炉	南壁際	対の4本	なし
243	天戸森	104号	中期末葉	楕円形	414	374	10.60	複式炉	南壁際	対の4本	なし

第13表　市内で検出された竪穴住居一覧(10)

番号	遺跡名	遺構名	構築時期	形態	規模(cm・㎡) 長軸	短軸	面積	炉の形態	炉の位置	柱配置	特殊な遺構
244	天戸森	105A号	中期後葉	円形	342	360	9.36	検出できなかった		対の4本	なし
245	天戸森	105B号	中期後葉	円形	390	366	10.52	検出できなかった		4本柱	なし
246	天戸森	106号	中期中葉	隅丸方形	1202	682	74.88	地床炉	やや北寄り	対の12本	埋設土器
247	天戸森	107号	中期後葉	楕円形	482	356	12.40	検出できなかった		対の6本+2本	
248	天戸森	108号	中期後葉	円形	374	384	10.52	複式炉	南東壁際	4本柱	テラス
249	天戸森	109号	中期後葉	楕円形		858		地床炉	やや東寄り	対の8本	なし
255	天戸森	110A号	中期後葉	楕円形	1266	560		石囲炉（円形）	ほぼ中央	対の10本	なし
256	天戸森	110B号	中期後葉～末葉	円形				石囲炉（楕円形）	ほぼ中央	検出できなかった	なし
257	天戸森	111号	中期中葉～後葉	円形	260	245	4.48	石囲炉（円形）	ほぼ中央	4本柱	なし
258	天戸森	113号	中期後葉	方形	276	237	5.64	土器片囲炉	ほぼ中央	特定できず	テラス
259	天戸森	114号	中期後葉	楕円形	1640	740	119.99	地床炉	北壁寄り	対の8本	
260	天戸森	115号	中期後葉	円形	370	374	9.92	複式炉	南壁際	対の4本	テラス
261	天戸森	116号	中期後葉	円形	720	736	41.60	複式炉・地床炉	南東壁際・北寄り	対の6本	なし
262	天戸森	117号	中期後葉	楕円形		530		地床炉	やや南寄り	対の4本	改築あり
263	天戸森	118号	不明	不明							
264	天戸森	119号	中期中葉～後葉	円形	233	225	3.52	地床炉	ほぼ中央	検出できなかった	
265	天戸森	120号	中期中葉	方形	385	380	12.44	土器埋設炉	ほぼ中央	四隅	なし
266	天戸森	121号	不明	楕円形	382	345	9.92	検出できなかった		対の4本+2本	なし
267	天戸森	122号	中期後葉	円形	345	333	6.88	検出できなかった		4本柱	なし
268	天戸森	123号	中期後葉～末葉					土器埋設炉			

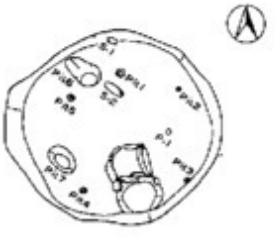
※　遺構名、構築時期、形態、規模については各報告書に掲載されているものを採用した。
※　参考にした報告書については割愛した。間違いがあれば執筆担当者の入力ミスである。

256
天戸森（ＳＩ110Ｂ）

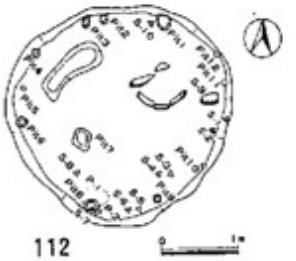


157
天戸森（ＳＩ４０）

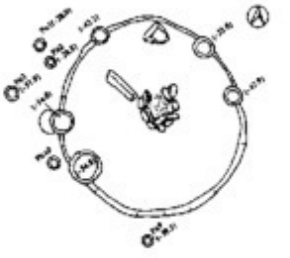
1
居熊井（ＳＩ０１）



113
御休堂（ＳＩ０５）

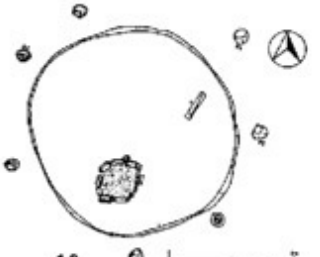


112
御休堂（ＳＩ０２）

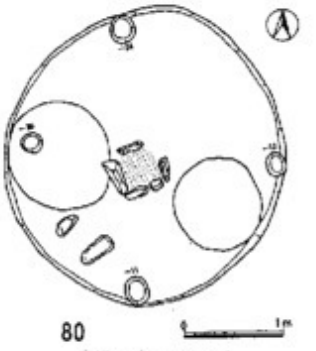


75
下内野（ＳＩ０２）

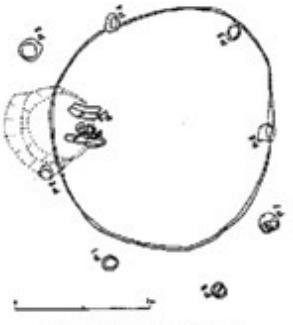
6
飛島平（ＳＩ３８）



10
北ノ林Ⅰ（ＳＩ２４）



80
赤坂Ｂ（ＳＩ１０１）



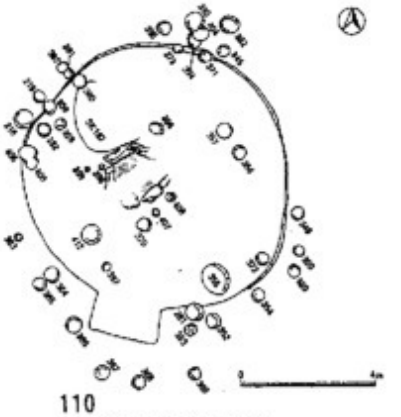
26 鎌ケ平Ⅰ（ＳＩ０１）

※番号は第４表～
13表に対応する
※実測図は収載
報告書から

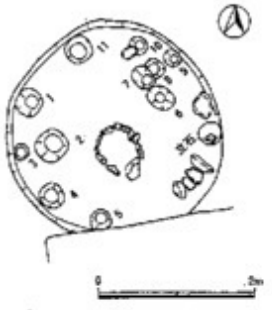
83
赤坂Ｂ（ＳＩ１０４）

第71図　市内遺跡確認住居(1)

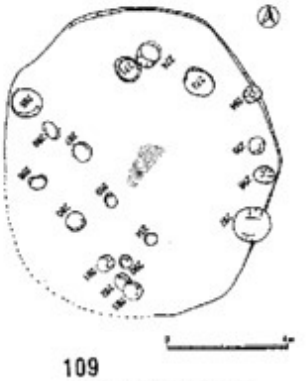
97
大湯F1区（SI403）



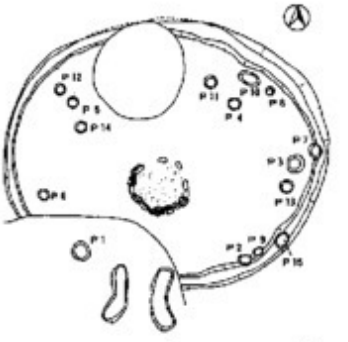
110
大湯B2区（SI02）



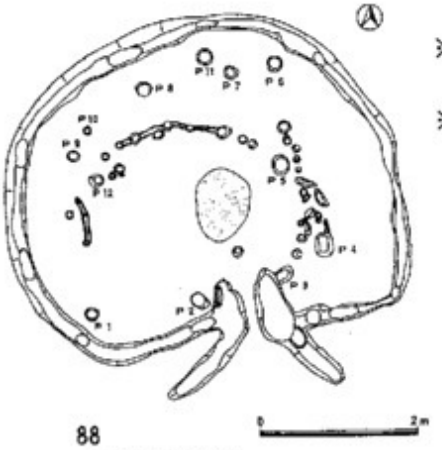
98
大湯F1区（SI405）



109
大湯B2区（SI01）

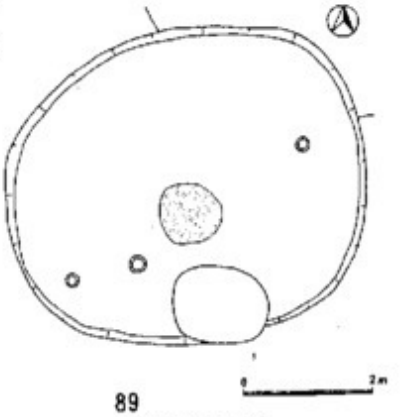


87
赤坂A（SI13）



88
赤坂A（SI14）

※番号は第４表～
13表に対応する
※実測図は収載
報告書から



89
赤坂A（SI17）

第72図　市内遺跡確認住居(2)

第14表　住居平面形態の分類

平面形 住居構築時期	円形（略円形）	楕円形	その他 不明
中期末葉から初頭	３０．112．113．114	1	
後期初頭	１０．２６		
後期前葉	８０．８１．８３．９８．９９ 101．103．104．105．110．111	９７．100．106．107．109	
後期中葉	８５．９０．102	８７．８８．８９	
後期後葉		２４．２５	
後期末葉	4	２２	
後期末葉～晩期	8	６３	
後期初頭から末葉	６１		６４．

データ検体数：３７軒

中葉１軒、不明１軒）、フラスコ状土坑等が確認されている。本年度の調査によって後期前葉の住居が２軒追加された。

中小坂遺跡：　鹿角郡小坂町中小坂に所在する。調査の結果縄文後期後半の住居跡３棟、配石遺構、土坑が確認された。住居は小坂川の支流である苗代沢川の谷間に形成された東西に長く、南側を向く段丘で、前後に山地地形が迫っており、日照条件は決して良好と言えない。

イ：平　面　形

第14表は、鹿角市内で確認された縄文時代中期末葉から後期末葉の住居跡37軒（各報告書で構築時期を明示しているもの）に対して平面形態を分類したものである。

この表からは、中期後半まで住居平面形態が楕円形を基調として推移してきたものが、円形へ移行していくかのように看取される。しかし、天戸森遺跡をみても中期末葉まで楕円形・円形が共存している傾向があることから、一概に楕円形から円形へという移行は成り立たず、共存という過程をたどると言ったほうがよい。中期と後期の住居の相違点として、①柱配置、②長軸（主軸）方向の２点の違いが挙げられる。

①柱穴配置：　中期の円形・楕円形住居とも長軸（主軸）方向に対して、２～５対の対称的な柱配置を示す。しかし後期初頭～前葉の住居の場合、円形のものは対の４本または住居外を一巡するものがみられるが柱配置を特定できないものがある。

一方楕円形のものは床面の壁際に沿うといった特徴を持っている。

さらに、中葉になると住居ほぼ中央に設けられた炉を囲むように方形配置の主柱と床面壁際（壁から離れる場合もある）に設けられた壁柱が特徴となる。

②長軸方向：　後期中葉の楕円形住居を例にとると出入口と炉を結んだラインは短軸線上に乗ってくると言う特徴を持つ。

ウ：規模・面積

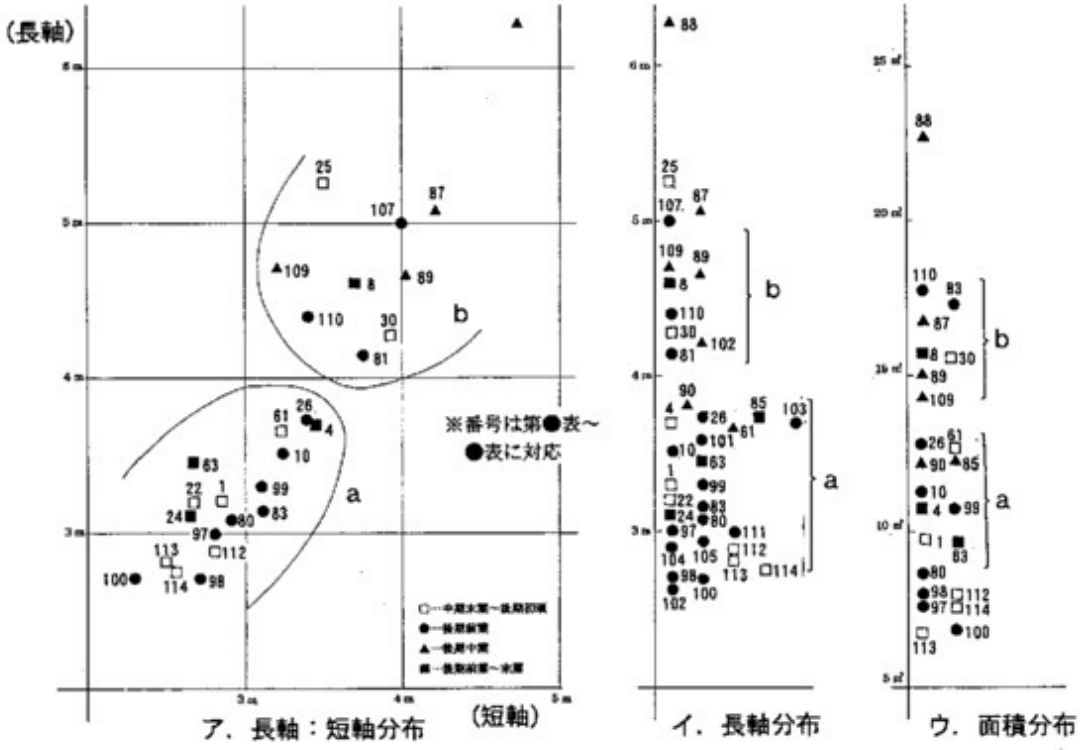
第73図ア～イは、規模（長軸と短軸の座標：長軸座標：面積）をあらわしたものである。

ア図・イ図からは直径４ｍを境として２つのグループに区分される。グループａには中期末葉から後期前葉の大方のものが含まれ、平面形は円形を基調とし、規模が小型のものである。一方、後期中葉には、直径4.5ｍを測る中型のものや、№88のように大型と呼んで良いものが出現し、平面形態は楕円形を基調とする。

第73図ウは、面積分布を示したもので、ア・イ図と同じように№88が突出するが14m²を境に2つのグループに区分される。クループａには中期末葉から後期前葉のもの、グループｂには後期中葉のものが分布している。

エ：炉の形態と位置

第15表は、各時期の炉の形態別を表化したものである。天戸森遺跡の例から中期末葉まで複



第73図　市内縄文中期末葉～後期末葉住居の相関図

第15表　炉の種類分類

形態 / 時期	地床炉	石　囲　炉					土器埋設石囲炉
		複式炉	石囲炉				
			円　形	楕円形	方　形	コ字	
中期末葉～初頭		1			30		
後期初頭			10.			26.	
後期前葉			98. 99 100. 101 103. 104 105. 106 107. 110 111		80. 81 83. 97 102. 112 113. 114		
後期中葉	85. 88 89. 90 109			87.			
後期後葉	24. 25.						
後期末葉	4. 22.						
後期末葉～晩期	63.						8
後期初頭～末葉			64		61		

データ検体数：３７軒

式炉、石囲炉、地床炉が共存することが調査によって判明している。

複式炉は後期初頭の居熊井遺跡の事例を最後に消滅し、地床炉も減少する傾向を示す。後期初頭に至ると石囲炉が主流となり、その形態は円形と方形が主体となる。炉が構築される位置は住居床のほぼ中央もしくは若干壁際にずれてくる。

中葉になると地床炉が主体となり、この流れは後期後半まで続き、石囲炉から地床炉に移行する事例は、赤坂Ａ遺跡のＳＩ13（No.87）とＳＩ17（No.89）との重複関係が示している。なお、炉の構築される位置は後期前葉の傾向を踏襲している。

オ：特殊な遺構

住居跡内で確認される特殊な遺構として上げられるのが、中期では長軸線上に穿たれた「特殊ピット」がある。晩期の市内事例としては、赤坂Ｂ遺跡で確認された祭壇状の施設がある。後期の遺跡である大湯環状列石や赤坂Ｂ遺跡からは、住居壁際に川原石を「コ字状」または数個を平置きした施設が確認されている。設置される場所に一定の決まりを有していない。内部に焼土が認められないこと、構築材である石に熱を帯びた形跡がないことから炉の機能を有し

第16表　参考住居一覧

番号	所在地	遺跡名	遺構名	構築時期	形態	規模（m・㎡）			炉の形態	炉の位置	柱配置	特殊な遺構
						長軸	短軸	面積				
1	二ツ井町	烏野	S I 521	中期後葉～後期初頭	楕円形	7.80	7.00	42.60	石囲炉＋地床炉	石囲炉は壁際近く	対の8本＋1本	
2	八戸市	丹後谷地	15号	後期前葉	楕円形	4.70	4.00	10.03	地床炉	やや東寄り	整理	
3	八戸市	風張I	1号	後期前葉	ほぼ円形	3.56	3.14		石囲炉	やや南西寄り	特定できず	
4	青森市	小牧野	1号	後期前葉	不整円形	4.56	4.07	13.60	石囲炉	東寄り	4本柱	
5	青森市	小牧野	2号	後期前葉	円形	5.29	5.06		地床炉	やや東寄り	8本の主柱と壁柱	周堤（テラス）
6	八戸市	丹後谷地	21号	後期中葉以前	円形	6.16	5.80	23.60	地床炉	やや南東寄り	特定できず	
7	八戸市	丹後谷地	20号	後期中葉以前	不整円形	7.30	6.60	31.60	地床炉	やや東寄り	6本の主柱と壁柱	出入口
8	小坂町	中小屋	S I 11	後期後半	円形	4.33		12.1	地床炉	ほぼ中央	6本の主柱	
9	大館市	岸沢	S I 01	後期後半	略円形	6.56	6.30		石囲炉	ほぼ中央	主柱は確定できず 壁柱	
10	八戸市	風張I	6号	後期後半	ほぼ円形	7.14	5.87		地床炉	ほぼ中央	4本の主柱と壁柱	出入口
11	八戸市	風張I	36号	後期後半	円形	4.30			石囲炉	やや南東寄り	主柱と壁柱	出入口・周溝

番号は第74図に対応する。

いたと考えにくく、「特殊な施設」として報告されている。

この施設を「特殊」とする拠り所は、その出現が後期前葉に限定され、事例が極めて少ないこと、これに大湯環状列石では列石との関連を加えて祭祀的な要素の強い施設と考えているが、第二の道具（祭祀関連遺物）の出土と言った物証的な根拠に乏しい。

(3) 市外の後期住居の立地、形態と規模

第16表は、比較資料として掲載した。その概要を列記する。

・平面形……　中期末葉から後期後半にかけて、住居平面は円形・楕円形を基調とする。

・柱配置……　二ツ井町烏野遺跡で確認された住居の柱配置は中期末葉～後期初頭といいながらも中期の柱配置を顕著に残している。後期前葉に入ると何種類かの柱配置を経て、中葉には方形配置の主柱と壁に沿った副柱へと移行する傾向にある。

・長軸方向…　後期前葉のものは長軸方向、中葉～後葉は単軸方向を意識する。

・規　模……　後期前葉は小型のもの、中葉～後葉は大型化する。

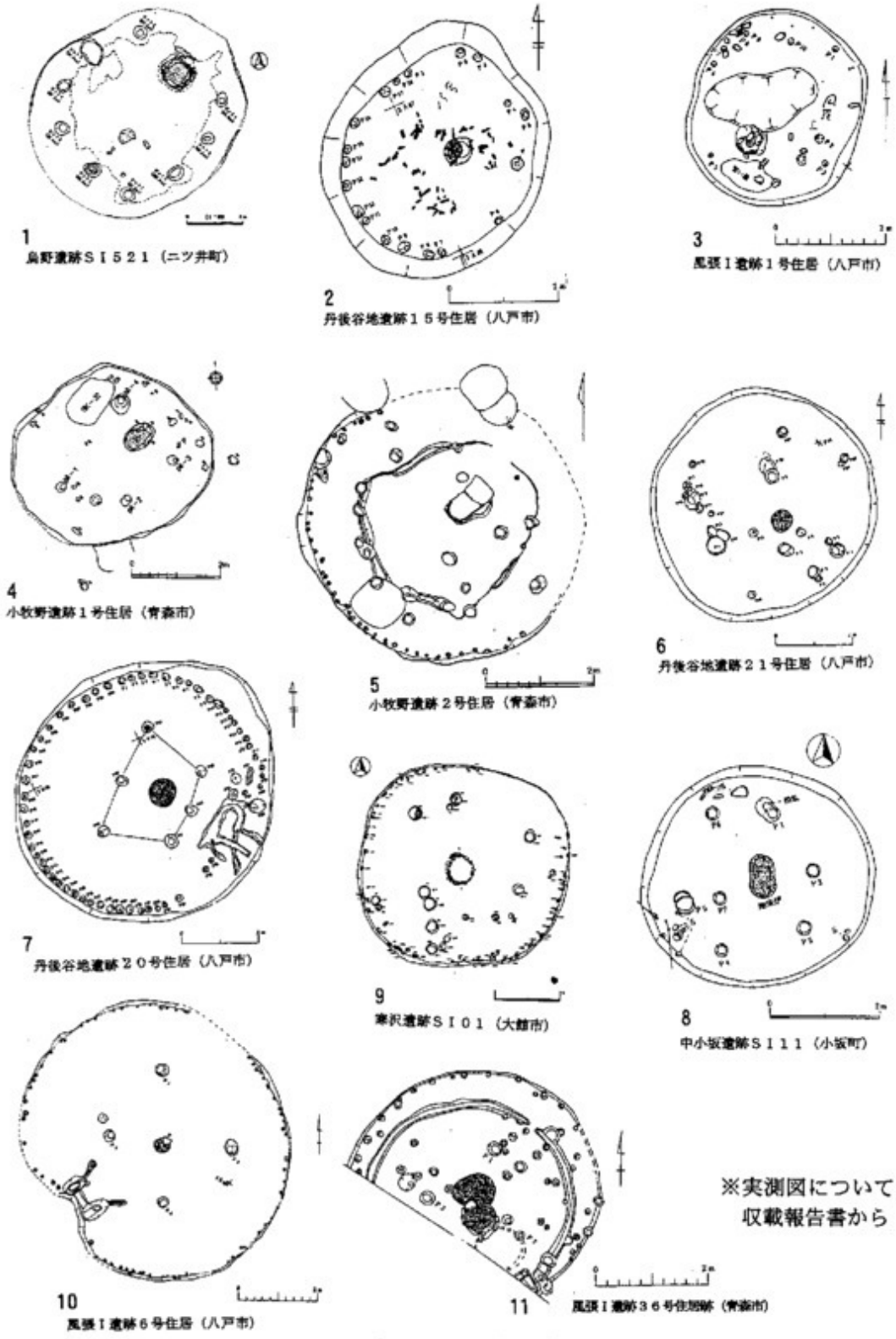
・炉の形態…　炉は後期前葉では石囲炉、中葉には地床炉が多くなる。

・炉の位置…　後期前葉のものは住居ほぼ中央または若干壁際に位置、中葉～後葉はほぼ中央に位置する。

(4) 小　結

鹿角市内で発掘調査が行われた後期遺跡、確認された後期住居跡を中心にその概要をまとめた。事例が極めて少なく、且つ、その事例の多くが大湯環状列石の発掘調査で得られたものであることから市内で確認された後期住居跡に共通する特徴と言いがたいが、後期前葉と中葉の特徴的な事項を第17表にまとめた。

大湯環状列石で確認された後期前葉の住居跡は、項目で上げた特徴を兼ね備えているが、一方後期中葉の住居跡は立地以外の項目内容を満たしていない。赤坂A遺跡で確認された住居は集落そのものを構成するものとして、大湯環状列石の住居は、祭祀（祈りとマツリ）を中心と


1
烏野遺跡ＳＩ５２１（ニツ井町）
2
丹後谷地遺跡１５号住居（八戸市）
3
風張Ⅰ遺跡１号住居（八戸市）
4
小牧野遺跡１号住居（青森市）
5
小牧野遺跡２号住居（青森市）
6
丹後谷地遺跡２１号住居（八戸市）
7
丹後谷地遺跡２０号住居（八戸市）
9
寒沢遺跡ＳＩ０１（大館市）
8
中小坂遺跡Ｓ１１１（小坂町）
10
風張Ⅰ遺跡６号住居（八戸市）
11
風張Ⅰ遺跡３６号住居跡（青森市）
※実測図については
収載報告書から

第74図　参考住居跡

第17表　後期初頭～中葉住居の共通事項一覧

	後期初頭から前葉	後　期　中　葉
遺跡の立地	台地縁辺部に立地する。中小坂遺跡以外は前方に開けた景色が展開する 住居跡の分布範囲が狭く、小規模集落が想定される	
住　居　跡		
平 面 形	円形及び楕円形を基調とする	楕円形の比率が多くなる
柱 配 置	炉を囲むように対の４本柱 壁際に配置	ほぼ中央に位置する炉を囲み、方形配置の主柱と壁際に配置された補助柱
長軸方向	長軸方向を意識	短軸方向を意識 （出入口と炉を結んだラインが長軸方向と直交する）
規　模 面　積	直径４ｍ未満が大半を占める	やや大型となる
炉の種類	石囲炉が主体（円形や方形）	地床炉が主体
炉の位置	床のほぼ中央または若干壁際に寄る	床のほぼ中央または若干壁際に寄る
特殊施設	壁際に石を「コ字状」に配置、数個の石を平置した施設を有する。 出現割合は低い。	特殊施設とは言いがたいが出入口が明確にされる。
条件を満たす市内の遺跡	大湯環状列石 赤坂Ｂ遺跡	赤坂Ａ遺跡

して営まれた遺跡の一端を構成する施設としての性質を反映しているものだろうか。

これまでに行われた調査によって万座環状列石北西側～西側台地縁（F_1区・D_9区）を中心に後期前葉～中葉の住居跡が13軒（前葉12棟・中葉１棟）、野中堂環状列石周辺で２軒（前葉１棟・中葉１棟）の住居跡が確認され、いずれの地域の住居跡も２つの環状列石とそれに続く環状配石遺構の構築（存続）時期と時期を同じくしている。このうち後期前葉の構築時期を与えた住居が同時に存在したものか、時間差を持って継続されたものかは土器形式・様式が一様であり、しかも重複も示しておらず変遷がはっきりとしない。

市教委では大湯環状列石で住居跡が確認されて以来、後期に入ると拠点的な集落が後退し、集落が小規模化・分散化するという研究成果を背景に、２つの環状列石とも配石遺構数基～十数基で構成される12～13の小塊（集落を構成する家族に対応）から成り立っていること、さらに出入口施設により万座環状列石は３～４つの小塊からなる大塊（数家族が集合した集落）に区画されること、確認された住居跡数からここで生活したであろうと思われる延人数と列石を構成する配石墓数より推察すると片寄りが生じることから、環状列石の構築に携わってきた集落は複数とし、列石を管理と祭祀を司る集落以外はわずかに離れた地に所在すると見解を示してきた（第３図）。その候補となる遺跡については第Ｉ章２「大湯環状列石周辺の遺跡」に上げ、その概要を記した。

現在確認されている万座環状列石の北西側（F_1区）・同西側（D_9区）の住居群（集落）は

列石を管理し，祭祀を司る集落に当るのだろうか。列石構築当初から特殊施設を持った住居跡1軒を含む数軒で構成される小さな集落が存在したという前提のもとに推測すると、①各群で確認された住居に重複がみられないことから，万座・野中堂環状列石を管理し，祭祀をつかさどる集落が西側台地に入り込んだ沢を挟みF$_1$区とD$_9$区に同時存在した。②F$_1$区の住居群がD$_9$区に移行し（この逆もありうる），2つの環状列石の管理と祭祀を司る。という仮説を提示することができる。

しかし，上記の仮説を立証していくためには，特殊住居であること，住居の構築時期，環状列石との関連をはっきりとさせるとともに，祭祀遺跡と密接に関連する他集落の検証が必要となってくる。（藤井安正）

2．トレンチ掘り調査の利点から

特別史跡大湯環状列石では遺跡の解明が進んだこと，環境整備事業に必要な資料が得られたことから，第17次調査より，それまでの面的な発掘調査から遺跡の保護を最優先としたトレンチ掘り（溝掘り）を多用した調査へと移行した。そのため，当該年度の調査区全体の遺構・遺物の分布状況及び各遺構の全容についてはやや不明確さが残るものの，反面，遺構確認面・構築時期，遺構の堆積状況等の遺構精査に必要な残存する資料が増加したことから，面的な調査と比較し，遺構構築面がより明確になる等の情報が得やすい利点を生んでいる。

本調査区でも，この利点から多数の情報を得ることができ，本項では成果の一つといえる，G$_4$区検出第1号竪穴住居跡の堆積土状況についての考察を述べたい。

3．G$_4$区検出第1号竪穴住居跡の堆積状況について（第75図）

本竪穴住居跡は，人為的に埋められた遺構であり，残存する堆積土状況から本住居跡の埋土方法をつかむことができた。以下各段階ごとに記述する。

第Ⅰ段階

第Ⅰ段階は，住居の大半が埋められるが，特に壁が崩壊しないように，先に壁際が重点的に埋められている。覆土は，住居の中央部付近では，薄くなっており，破棄され床面に散乱した炉の石や「コ」の字状施設の石が見えなくなる程度の厚さで終えられる。

第Ⅱ段階

第Ⅱ段階は，「コ」の字状施設を保護するかのように，施設部付近を住居が掘られた面まで先に埋められる。また，第Ⅰ段階で埋め残されていた壁部がこの段階で全て埋められ，住居としての形態はほぼ無くなる。

この第Ⅱ段階で特に注目されることは，埋土に混入している完形復元土器の出土状況である。

埋土は、住居内に流れ込むにように埋められ、土器は、埋土中で上から押しつぶされた状態で確認された。また、土器は胴部下半から底部では埋土上位で出土し、土器上部は、埋土の流れに添うように、散乱しながら埋土下位で出土した。このことから、「コ」の字状施設付近を埋めるためにこの土器（深鉢形土器）が利用され、埋めている途中に、この土器を意識的に投げ込んだものか、誤って落とした可能性が考えられてくる。

さらに、本段階の堆積土の３層が他の堆積土に比べ硬くしまっている点に注目する。その要因として、早い段階に埋められたこの部分を利用して土を中に運ぶための通路的に利用したために、踏み固められ硬くしまった可能性が考えられるのではないだろうか。堆積土中の土器が押し潰されていた状態で、堆積土に添って流れるように見つかったことからも、そのことがいえる。

さらに、住居が構築された配置を考慮すると、北西側には間近に台地縁辺部が迫っており到底この部分に埋め戻し用の土をストックすることは不可能であり、かつ、南西側には第２号住居跡が近接している。これらを考慮すると、埋め戻し用の土は住居跡北東および東側から土を運んでこなければならない。となると、効率よく土を運んでくることが出来るのは、比較的遺構が多く検出した昨年度調査地であるD$_9$区から土を運んでくることが最良の方法である。これらのことから、早く埋められた同部を利用して、住居を埋め戻してたことはほぼ明確といえよう。３層が坂道のような埋土の投げ込まれかたを呈していることからもこのことが納得できる。構築面から床面まで比高差約50cmを要し、第Ⅰ段階で20cm程既に埋められているものの、住居内の埋土の頻繁な土運びやならしを考えると、出入りのための作業道的なものは必要になるだろう。

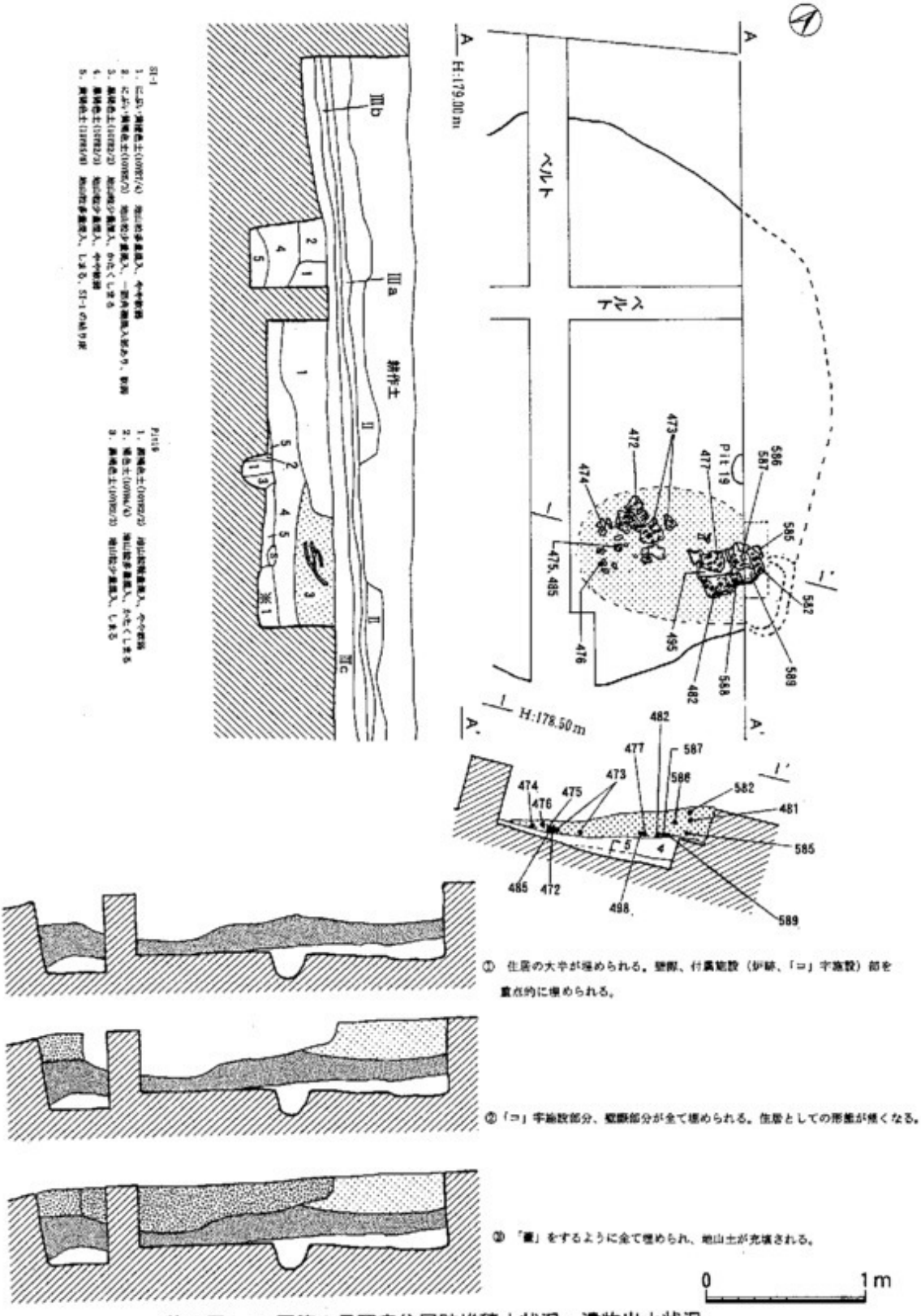
第Ⅲ段階

最終となる第Ⅲ段階は、黄色の地山土を使用して上部が平坦になるように埋める。

この地山土が充填されている状況は、あたかも蓋をするかのような様相を呈していた。

第１号竪穴住居跡は、単なる廃棄のみのために埋め戻されたのではなく、埋め戻し方法が決められていたことが明確となった。これらの特殊な埋め戻し状況が確認されたことや、「コ」の字状施設を強く意識した埋め戻し方法が観察されたこと等から、本住居跡では廃棄するための祭祀的な儀式があったと考えられ、このことから、特殊な住居（施設）であったものと判断される。

本来、住居跡の遺構精査は、確認面において予想される形態に合わせ、住居の中央部を中心に「十字」のベルトを残しながら掘り下げ、堆積状況等を把握する方法をとるが、本調査のようにトレンチ部分に遺構が確認されることにより、より残存部（ベルト部分）が増えることとなる。そのため、本遺構精査のように遺構埋め戻し状況の事例とともに、それに共判する遺物



第75図　G₄区第１号竪穴住居跡堆積土状況・遺物出土状況

(土器) の混入状況等のより詳細な手がかりをつかむことができたこともトレンチ掘りの利点といえよう。

4．遺跡全体の旧地形と遺構の選地について

特別史跡大湯環状列石の調査は、鹿角市が主体となってから本年度で第20次（20年目）を迎え、これまでに蓄積された各種資料も膨大なものとなった。

本分析では、20年目の節目の報告書として、これまで調査を行った調査区全体図面を基本として、旧地形と各遺構配置との関連を考察した。旧地形については既に平成10年度より行っている遺跡の環境整備事業でも地形復元工事として反映されている。また、地形と遺構の関連についても、これまでも機会あるごとに各年次報告書で述べてきたが、本分析は、それらのデータを全て考慮した最新資料となる。なお、本分析では一本木後ロ配石遺構の存在するA区を除いて考察することとする。本文の各々の遺構については、縄文時代のものを一括して考察した。

① 縄文時代後期前葉の旧地形

遺跡内の地形は、整備前の現況ではほぼ平坦であったが、調査の結果、大湯環状列石の構築時期である縄文時代後期前葉期においては、かなり起伏にとんだ地形であったことが判明した。

確認された旧地形は、台地北西側・南西側・南東側・北東側から万座・野中堂環状列石へと延びる４つの沢と点在する小丘部によって複雑な地形を構成している。台地全体は南西側へと傾斜し、高地部と低地部の比高差は８ｍである。

調査で検出した遺構は、それぞれ遺構の性格、用途を考慮し構築場所の選地を行っていたものと判断され、特に、重要遺構は微高地部に構築される傾向にある。

各遺構の選地要素は以下のとおりである。

② 万座環状列石と周辺遺構

万座環状列石は、微高地（標高180.75m）が最大幅で広がる中央付近に構築されている。同列石は、これまでの調査から同列石を中心として遺構の配置が規則的（環１～環４）になることが判明しており、遺構構成としては、最大規模のものである。このことから、万座環状列石は構築当初からおおよその遺構配置計画がなされ、構築条件を満たす同部分が選地されたものと考えられる。また、D_8区の調査では、微高地部の最頂部のみを多少削平する小規模な整地を行っていたことを確認している。

なお、万座環状列石と関連ある環状配石遺構、土坑等もこの地形的条件を同じくする。

③ 野中堂環状列石と周辺遺構

野中堂環状列石は、万座環状列石の載る標高180.75mラインの微高地よりやや低くなる標高179.50mラインに構築されている。万座環状列石側から望観すると、野中堂環状列石付近はや

や窪んだように見え、比高差は約1.25mとなる。

本来、この付近の地形は周囲の等高線の状況から南東側台地縁辺部に向かい、緩やかに傾斜し、万座環状列石と同様な構造を示す野中堂環状列石を構築するための条件を満たさない地点である。しかし、調査によって、同地点の等高線が極端に広がり、遺構構築に必要な平坦部が確認された。これは、野中堂環状列石の周囲で行った第18次調査で明確となった、同列石構築の際の整地によるものと判断される。

このように、整地の状況が等高線上に現れる類例としては、大規模な整地が行われていたことで注目されている、秋田県鷹巣町「伊勢堂岱遺跡」、青森県青森市「小牧野遺跡」がある。

④　野中堂配石遺構

野中堂環状列石南側では、野中堂配石遺構が検出している。この区域は、南東側の沢部にあたり、野中堂環状列石付近では最も低地部であり、環状列石と関連の強い遺構の地形的構築条件を満たしていない。さらに、同遺構に近接して焼土遺構が多数確認され、地形的に遺跡内の流水路である区域で火を使用することは、不都合が生じるであろう。これらの遺構選地理由については、文末のまとめで述べたい。

⑤　万座配石遺構

万座配石遺構は、万座環状列石南側の小丘部に構築され、環状列石と関連のある遺構の構築条件を満たしているものと思われる。しかし、本遺構は通常考えられる小丘部の頂上部に構築されず、小丘部の傾斜地に構築されている。同地点頂上部は標高181.25mと同遺跡では比較的高地であることから、当初より遺構配置計画がなされていたことを前提に考察すると、遺構を構築する際に環状列石と関連ある全ての遺構がおおよそ同じ標高に構築されるような配慮があったことを伺わせる。

⑥　フラスコ状土坑

フラスコ状土坑は、その用途により構築地点がほぼ２通りに区分けされる。

両環状列石周囲に集中するものと、F_2区のように小丘部の頂上部に集中して構築されるものである。環状列石周囲のものは、本来の貯蔵穴目的（まつりのための）と同時にその他の用途（土坑墓としての転用等）の利用目的も合わせて構築されているもので、列石の構成要素に含まれるものである。小丘部に集中するものは食料等の貯蔵を主な目的で構築され、構築地点も保存物が自然的（水等）な影響を受けにくい、小丘部の頂上部が選地条件となる。

⑦　Ｔピット

Ｔピットは、台地各区域から延びる沢部に構築される。これは、Ｔピットが落とし穴としての用途があることから、動物の習性（沢部が獣道となる）を考慮したものである。

各沢部ごとによって、Ｔピットの沢の流れに対する長軸方向や規模の違いがあることから、

動物の習性と合わせ、各沢を利用する動物の種類の違い、狩猟方法にあわせてそれぞれのTピットの構築方法を工夫していたものと考えられる。

⑧　竪穴住居跡

竪穴住居跡は、万座環状列石北西側台地縁辺部に集中する。これは台地斜面の湧水地を意識しているものであろう。

なお、野中堂環状列石では周囲で竪穴住居跡が２軒確認されているが、このことが何を意味しているのかは、野中堂環状列石南側台地縁辺部の調査を待って考察していきたいと思う。

⑨　歴史時代の遺構

歴史時代になると、地形はほとんど平坦になり、地形と遺構配置の関連は薄くなり、むしろ地理的環境との関連が強くなる。そのため歴史時代の遺構の大半が、万座環状列石北西側台地縁辺部の台地斜面の湧水池を囲むように集中する。

遺跡内ではそれまでの縄文時代と様相が変わり、「集落」が作られるようになる。集落構成は、湧水地を中心に居住域があり、北側台地縁辺部に墓域（円墳）が構築されている。また、道路状遺構や焼土遺構も南西側台地縁辺部に確認され、歴史時代には台地北西側から南西側にかけての広範囲に生活域が広がっている。また、現県道迂回路計画のための試掘調査では、遺跡東側台地縁辺部でも、台地斜面の湧水地付近に歴史時代の竪穴住居跡の一部が確認されたことから、台地斜面に点在する湧水地付近に歴史時代の集落がひろがるものと考えられる。

⑩　ま　と　め

各遺構の配置と地形との関連から大湯環状列石における遺構の選地を考察した結果、同台地を利用するに当たり、相当綿密な配置計画があったことがわかった。

基本的条件としては地形的条件である。環状列石等の主要遺構は微高地部の平坦部に構築され、多少の高低差はあるもののほぼ標高を同じくしている。次に、「湧水地」を考慮した配置である。本遺跡は「大規模なマツリの場」であるが、マツリを行うためにも水は重要である。このことから、湧水地からかけ離れた区域には主要な遺構は構築されていない。野中堂環状列石が広大な台地が広がる中で、整地してまでも湧水地に近い同地点に構築しなければならなかった事実からもそれがいえる。また、同列石南側に確認された、野中堂配石遺構と焼土遺構においても地形的に不利な条件下でもその場でなければならなったことからもそのことがいえよう。また、遺構の各配置間の規則的な距離も遺構配置決定の重要な事項であることがいえる。大湯環状列石を構成する主要遺構である、万座環状列石、野中堂環状列石、大環状配石遺構、万座配石遺構は、ほぼ同間隔で配置されていることに気付く。

さらに、万座環状列石と大環状配石遺構の中間部には環状配石遺構が構築されている。

また、野中堂環状列石側では、南側で野中堂配石遺構が構築され、その中間には、焼土遺構群域がある。

なお、野中堂環状列石と野中堂配石遺構との距離は、万座環状列石と環状配石遺構との距離間とほぼ同間隔である。野中堂配石遺構を環状配石遺構の配置に当てはめ推測すると、野中堂環状列石と野中堂配石遺構との距離間隔を同じくして更に南側に関連する遺構（大環状配石遺構に相当する）が検出される可能性が予想されてくる。

大湯環状列石での遺構構築は、これらの条件を生かし、綿密な計画で規則的に配置されていたことがわかった。そして、本台地は、これらの条件を全て満たしており、周辺に造り出されている同様な台地と比較しても、最も優れた絶好の場であった。また、歴史時代の湧水地を中心した集落としての遺構配置と比較し、縄文時代の遺構配置は、湧水地を意識してはいるものの、生活の場としては効率が悪く、むしろ、マツリの場としての場の規則的な区画配置を重要視していることが伺える。これらのことから、第19～20次調査で住居跡が比較的多数検出されたものの、この台地は、生活の場としてではなく、祭祀の場としての利用目的が強いものであったことが明確となった。

5．G4区遺物集中域の土器破片分布状況について

本調査では、これまでの調査で課題となっていた大湯環状列石出土土器の細分の手がかりを得る方法として、詳細データを採取した遺物集中域と調査区全域での大まかなデータを合わせ、各層序ごとの土器破片分布状況の分析を試みた。なお、同類の分析は第17次調査でも試みたが、同調査区が野中堂環状列石隣接地の遺構密集地であったため好結果を得ることができなかった。

本調査区では、これまでの遺物廃棄域とは状況の異なる、沢部に遺物を廃棄するという通常、集落を主体とする遺跡で検出される「捨て場」的な廃棄場が確認されたことから、好結果がでるものと期待し、再度、各層序ごとの土器破片分布状況の分析を試みた。

なお、分析資料採取地点は沢部であるが第76図で示すように、遺物が自然に流入したものであれば、沢部の最深部にたまるはずであるが、浅い部分でも多量に出土していることから、人為的に廃棄されたものと判断した。

土器破片の出土状況では、Ⅲｃ層からの出土量が最も多く、Ⅲｂ層、Ⅲｄ層、Ⅲａ層と続く。出土量の各層の傾向は、Ⅲｄ層面が遺跡の主要面であり、それ以降遺跡の利用がⅢａ層面まで継続的に利用されていることに起因する。なお、基本層序については、色別、混入物、堅さ等で分層し、現時点ではⅢｄ層が縄文時代後期前葉の面、Ⅲｃ層が縄文時代後期中葉の面、Ⅲｂ層～Ⅲａ層が遺物包含層として捉えられている。

土器の分類は、本報告書の細分に準じた。分析結果は以下のとおりである。

Ⅰ　群（早　期）

出土量は少ない。Ⅲｄ層からⅢｃ層での出土が見られ、Ⅲａ層～Ⅲｂ層からの出土はほとんどない。

Ⅱ　群（前　期）

Ⅰ群よりは出土量が多い。Ⅰ群と同様な傾向を示すが、Ⅰ群に比べⅢｄ層面での出土量が多い。

Ⅲ群１類（隆沈線）

出土量は少ない。Ⅲａ層のみの出土である。

Ⅲ群２類－ａ類（沈線縦方向）

出土量は増える。Ⅲａ層～Ⅲｄ層の各層からほぼ同一量出土している。

Ⅲ群２類－ｂ類（沈線横方向）

出土量は増える。Ⅲｄ、Ⅲｃ層からの出土が多く、Ⅲａ・Ⅲｂ層からの出土は減少する。

Ⅲ群３－ａ類（帯縄文縦方向）

出土量はやや増える。各層からほぼ同一量出土し、遺物集中域の48ラインではⅢａ層から出土せず、Ⅲｂ層からの出土は減少する。

Ⅲ群３－ｂ類（帯縄文横方向）

出土量は相当量増え、Ⅴ群に次ぐ。Ⅲｃ層からの出土が極端に増える。

Ⅲ群４類（帯縄文広）

出土量は少ない。Ⅲｃ層のみの出土である。

Ⅳ群１類（帯縄文）

調査区からの出土はなかった。

Ⅳ群２類（沈線）

遺物量は極端に少なく、遺物集中域の48ラインⅢｂ層からの出土である。

Ⅴ　群　（地文等）

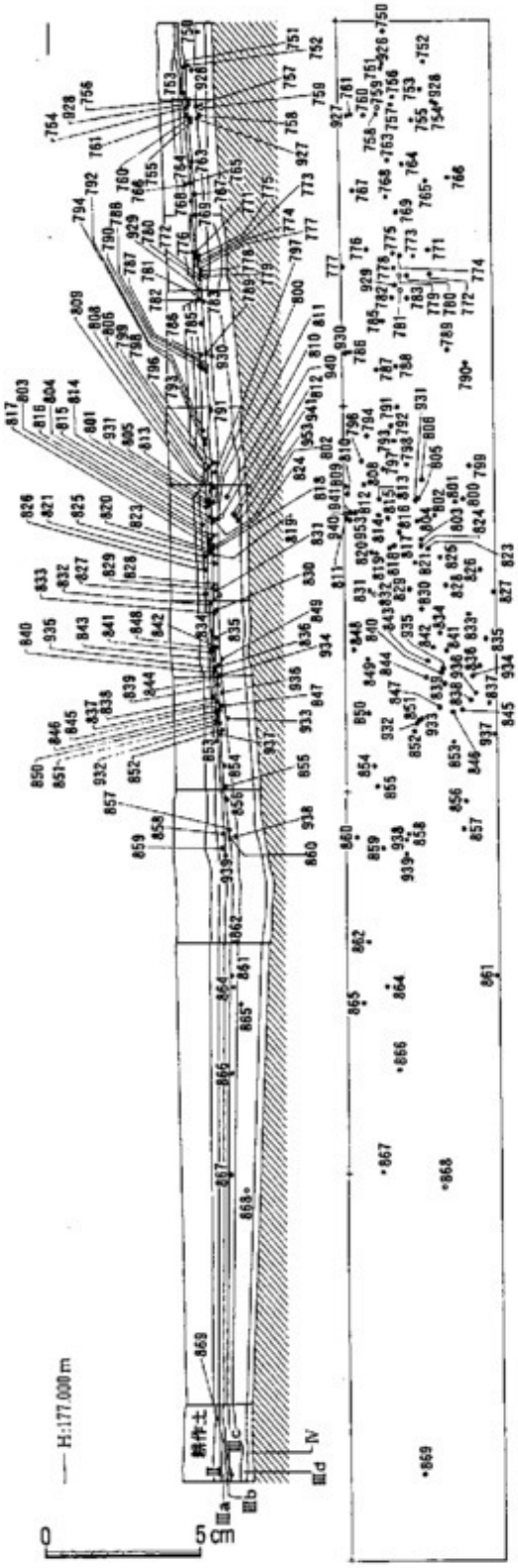
出土量が最も多量である。各層からの出土があり、特にⅢｃ層に多くⅢｂ層ではその数が減少してくる様相を示している。主文様が施されない地紋のみ等のため詳細時期不明としていたが、Ⅴ群の時期は縄文時代後期前葉が主で、中葉にかかる時期まで使用されていたと考えられる。

Ⅰ・Ⅱ群はⅢｄ層～Ⅲｃ層での出土が多く、早期、前期の土器であるため、上層（Ⅲａから Ⅲｂ層）での出土は少なくなる。Ⅲ群２－ａ・ｂ類の沈線類はともに同様な傾向がみられ、Ⅲｄ層からの出土が多く、Ⅲ群２－ａ類の沈線文様の縦方向がやや出土量が多くなる。帯縄文が

主体の土器であるⅢ群３－ａ・ｂ類は、縄文時代後期前葉の土器群であるが、Ⅲｄ層からⅢｃ層面での出土が極めて多いという出土状況から、縄文時代後期前葉の後半から中葉の前半までの時期を絞り込むことができると考える。特に、ｂ類の帯縄文の横方向の出土が多い。Ⅳ群２類は縄文時代後期中葉の土器群で、遺構集中域の48ラインで１点出土したのみであるが、出土地点はⅢC層上層面であり、基本層序の時期区分と合致する。これまで時期を特定できなかったⅤ群の土器は、Ⅲｄ層からⅢｂ層面での出土みられ、特にⅢｃ層からの出土が極めて多い。このことから、Ⅴ群の土器は少なくとも縄文時代後期前葉から中葉に位置づけられるものと考えられる。

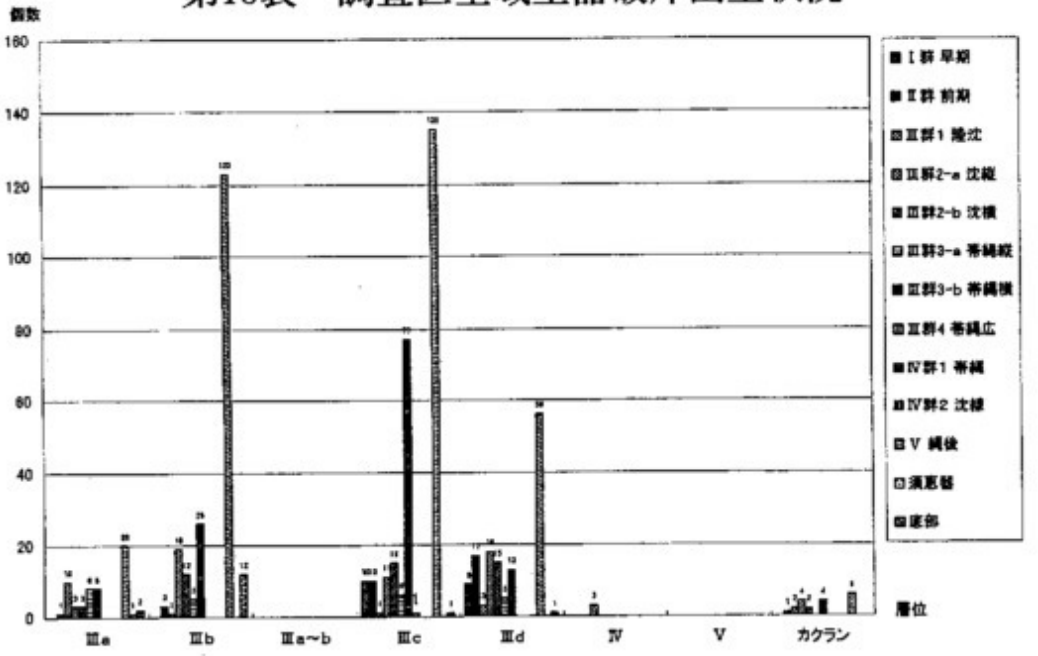
以上、本調査区における各層ごとの土器型式分析を試みた結果、少なからず各層序ごとの土器分類出土傾向をつかむことはできたのではないかと思われる。

今後もこれらの分析データを蓄積し、課題となっている大湯環状列石出土土器の細分を行う一助となることを期待し、粘り強く分析を行っていきたいと考える。　　（花海義人）

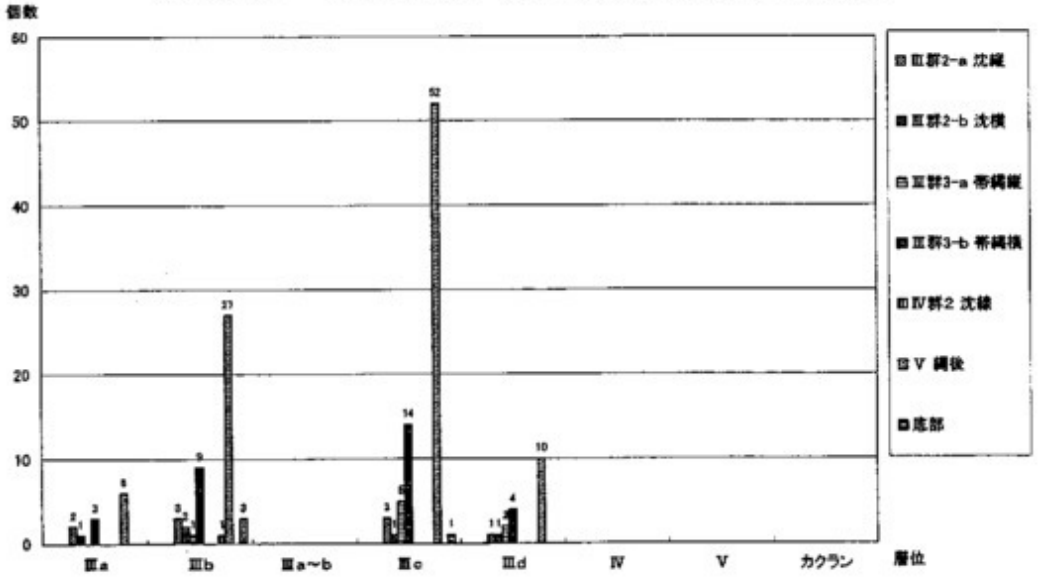


第76図　G₄区48トレンチ出土遺物分布

第18表　調査区全域土器破片出土状況



第19表　G$_4$区48ライン土器破片出土状況



第Ⅶ章　調査のまとめ

特別史跡大湯環状列石は、鹿角市十和田大湯字万座・野中堂・一本木後口に所在し、野中堂、万座２つの大規模な環状列石を主体とする縄文時代後期前葉から中葉の遺跡である。

昭和59年より進めてきた調査も本年度（平成15年度）で第20次を迎え、これまでの調査から、野中堂・万座環状列石の周辺から祭祀的な遺構・遺物が多数確認されてきたことから、大規模な「マツリと祈りの場」であることがわかってきた。

本調査では、万座環状列石西側台地縁辺部に調査区（G_4区）を設定し、昨年度第19次調査D_9区で検出した竪穴住居跡等の遺構・遺物の分布状況及び地形の把握を目的に行った。

１．縄文時代の遺構について

調査の結果、縄文時代の遺構では竪穴住居跡２軒、柱穴状ピット15個、焼土遺構19基、Ｔピット２基、フラスコ状土坑１基、土坑６基、礫群が確認された。

①　竪穴住居跡

調査の結果、竪穴住居跡の北西側台地縁辺部での範囲をほぼ確定できた。検出した２軒の竪穴住居跡は、Ⅲd層上面（縄文時代後期前葉の生活面）から掘り込まれ、未調査部があるものの、おおよそ円形プランのものである。２軒の竪穴住居跡とも中央部に石囲炉の痕跡と考えられる掘り込みや石を設置した抜き取り痕を確認したが、石囲炉としての原形はとどめておらず、本来残るはずの灰もみられないことから、住居使用後石囲炉部は意図的に廃棄されたものと考えられる。

第１号竪穴住居跡は、第６次F_1区で確認された第403、405号竪穴住居跡と同様に壁際に「コ」の字状の付属施設をもつものである。「コ」の字状の付属施設は、住居跡東側の壁際で確認され、深さ約10cm程の掘り込みをもち、扁平な川原石を「コ」の字状に配置しているもので、使用されている石材は石英閃緑玢岩、凝灰岩で、火を受けた痕跡がみられた。また、掘り込み部においても堆積土上部に微量であるが焼土粒の混入が認められたことから、「コ」の字状施設と「火」との関連が考慮される。さらに、施設付近の床面からミニチュアの壺形土器が見つかっていることから、ミニチュア土器の祭祀的要素の強い性格を加味し、本竪穴住居跡の「コ」の字状施設では、火と関連ある「マツリ」の儀式が行われていたものと推測される。本施設は、竪穴住居跡中央部の炉跡と比較すると、炉跡は原型をとどめることなく破棄され、灰も確認されないのに対し、ほぼ原形を残し、施設と関連の強い遺物と判断されるミニチュアの壺形土器も廃棄されずに置かれていた。「コ」の字状施設の性格については、第６次F_1区調査時では、「出入口」、「祭壇」的施設として捉えられていたが、本調査の同施設出土状況から住居使用後も廃棄することの出来ない重要な施設であった可能性が強くなったといえる。

本竪穴住居跡は、人為的に埋められたものであるが、特に埋土上部には、住居を覆うように黄褐色の地山土が多量に充填されていた。確認面であるⅢｄ層上面でも黄褐色の円形プランが明確に確認され、これらの状況から、住居廃棄時に蓋をするような行為があったものと考えられる。

本竪穴住居跡は、祭壇的要素の強い「コ」の字状施設が付属され、住居跡廃棄時に炉部も廃棄し、蓋をするような埋土の痕跡等がみられたことから、住居使用後の廃棄時に廃棄するための特別な儀式的行為があったことを伺わせる。これらのことから判断し、本住居跡の性格は通常の居住用としてではなく、むしろ祭祀的な儀式を行った特別な「施設」であったものと考えられる。

また、本竪穴住居跡の堆積土状況と遺物混入状況から、住居跡の埋め戻し状況の解明と土器の利用方法に多用な例があることを解明する一つの手がかりをつかむことができたことは、トレンチ調査の利点であるといえよう。

第２号竪穴住居跡は、およその規模は把握したものの、形態・性格等は不明であるが、本住居跡も第１号竪穴住居跡同様、中央部で確認された炉跡は崩壊していた。

② 柱穴状ピット

柱穴状ピットは、調査区北東部から南部で確認された大型のピットと調査区西端部で検出された小型のピット群が主である。

調査区北東部から南部で確認された大型のピットは、ほぼ一列に並ぶように確認されている。第11号、１号、２号ピットはそれぞれ約11mの等間隔で、第３号、４号、５号ピットはそれぞれ約10mの等間隔で構築されている。しかし、第２号及び第３号ピット間は18.75mの間隔があり、それぞれのピット間の距離と比較し間隔が空いていたことから、この間の調査区域を拡げ、ピットの有無を確認したが、ピットは検出されなかった。このことから、第11号～１号～２号と第３号～４号～５号ピット間を意識的に間隔を広げた可能性が考慮される。

また、ピットがさらに南側へと延びる可能性があることも考慮し、６個のピットの延長線上に調査地を広げピットの有無を確認したが、本調査区内でのピットの南側への広がりはないことがほぼ明確となった。

これらのピットの用途、性格については第19次調査区D_9区で確認され、本調査区検出の６個のピットの北側延長上に存在する第18号ピット、本調査区中央部で検出した同規模の第６号ピットとの配置を加味し、来年度調査予定の南側隣接地の調査結果を待ち、明確にしたいと考える。

調査区西端部で検出した６個の柱穴状ピットは、建物跡の存在が推測されるものであるが、本調査において、これらの柱穴状ピットが建物跡を構成するものかを判断するまでには至らな

かった。しかし、万座環状列石北西側台地縁際（D_1区）にも建物跡が確認されていることから、南西側台地縁辺部にも環状列石と関連ある遺構が広がることが明確となった。

③ 焼土遺構

焼土遺構の確認状況は、調査区北側から南西部の台地縁辺部でほぼ全域にまばらに確認され、構築面もⅢａ～Ⅲｄ層とまばらである。特に、焼土遺構と構築面を同じくする竪穴住居跡、柱穴状ピット、土坑等の遺構検出区域付近に多く集中する傾向がみられ、焼土遺構の配置はこれらの遺構と関連が深いものと思われる。この傾向を考慮すれば、焼土遺構の確認域で遺構等が検出していない区域でも、未調査地に関連ある遺構が存在する可能性が示唆される。

第24号焼土遺構の構築時期は、確認面から縄文時代後期中葉であり、近接する区域から縄文時代後期中葉の壺形土器、注口土器、浅鉢形土器が出土している。これらの土器は、本焼土遺構と関連の強いものと判断される。昨年度の調査地であるD_9区でも焼土遺構に伴う土器が検出していることから、この区域の特徴の一つとして、火と土器の関連が強い行為が行われていた区域であったことが推測させられる。

④ Ｔピット

Ｔピットは、調査区北部の台地縁辺部で検出し、調査区南西側から延びる沢を意識して構築されたものと考えられる。構築時期は基本層序による確認状況から縄文時代後期前葉以前のものと判断され、昨年度調査区のG_4区で検出したＴピットと同時期に構築されたものと考えられる。

⑤ 土　坑

土坑は６基確認され、円形、楕円形のもので、人為的な堆積状況が確認された。

第１号土坑は上部に石を伴うもので、配石墓と考えられる。上部で確認された約20cm大の川原石の中央部には、人為的な凹があり、赤色顔料の付着が観察された。土坑半部のみの精査であったが、土坑内には赤色顔料の混入は確認されなかった。

第８号土坑は第21号柱穴状ピットと重複し、本土坑が新しく、多量の剥片がかたまって出土した。本土坑の性格は、剥片を埋納もしくは貯蔵目的に構築されたものと想定できる。

その他の土坑では、性格・用途を決定付ける資料は確認できなかったが、第４号土坑は底部中央に炭化材（クリ）、第５号土坑の底部中央には火をうけた白色粘質土の塊がみられた。

⑥ 礫　群

礫群は、調査区北西側の焼土遺構付近で確認された。礫の中には、焼成が観察されるものもみられ、焼土遺構との関連が考えられる。

また、礫は遺物が多量に出土した沢部でも散在しており、64ラインの沢部では、礫群に混入して黒鉱がみられた。黒鉱は本来台地上に存在しないものであることから、他の場所から持ち

込まれたものと思われる。石質鑑定の結果、黒鉱は鉱山地帯に囲まれた鹿角市内で採取できる種類のものであることが判明。環状列石を構成する石材である石英閃緑玢岩の原産地である諸助山が鉱山地帯であることから、同地点からの流動が示唆される。

2．縄文時代の遺物について

本調査区より出土した遺物は、遺構内・外で縄文時代の土器破片638点、復元土器６個、石器59点、剥片52点、土製品10点、石製品３点であった。大半を出土地点を記録して収納した。

本調査では、遺跡内での遺物の廃棄域がこれまで明確となっていた環状列石周囲（環４）の廃棄域の他、遺跡内にもう一区域存在することが判明した。本調査区においては、遺跡南西側から北東側に延びる沢部が確認され、この沢部に今回出土した遺物のうち特に、土器破片、石器のような日常的な遺物が集中していた。

遺物の出土状況は、分析と考察等でも述べたように、沢部に自然的に流れ込んだものでなく、沢の一番深い部分よりやや浅い部分にも多数みられることから、人為的に沢部に遺物を廃棄したことが判明している。これまでは大湯環状列石の同心円構造の規則的配置の中に遺物廃棄域が捉えられていたが、大湯環状列石でも他の集落的要素の強い遺跡（青森県三内丸山遺跡）同様に、沢部のような自然地形を利用した遺物廃棄域の存在を確認できたことは、今後の調査目的の一つである、大湯環状列石の「場」の利用方法を考察する上で、貴重な資料を得ることができたといえる。また、同時に昨年度述べたように、この区域にやや生活色の濃い区域も混在していたことがほぼ明らかとなった。

出土した土器破片は、縄文時代前期から後期中葉のもので縄文時代後期前葉以前の土器破片、復元土器の資料の増加と、Ｔピットのように、土層断面から大湯環状列石の構築時期より古い時代に構築されたことが確実に判断される資料と、昨年度調査成果と合わせ考察すると、本遺跡周辺は、これまで捉えられていた縄文時代後期前葉から中葉よりさらに長い期間台地を利用していた可能性が考えられてくる。

土製品、石製品の出土状況は、土器破片、石器とほぼ同様な状況であるが、土製品は、台地縁辺部寄りの焼土遺構付近や小規模な柱穴状ピット群の周辺に集中する傾向にあることから、祭祀の場としての範囲がこの区域にも及ぶものと思われる。

3．旧地形について

調査の目的の一つである旧地形の把握では、調査区中央部を北西側にやや蛇行するように流れる沢部を確認することができた。本沢は、昨年度の調査区G_3区で確認された台地縁辺部南西側から延びる沢と平行するように延びている。沢は調査区南西側では深く、北東側ではやや浅くなる。本調査で出土した遺構外遺物の大半は本沢部で出土し、特に南西側の深い部分に集中する傾向がみられ、自然的に流入したものでなく、人為的に廃棄されたものと判断された。

これまでの調査では、沢部にはTピットが構築される例が多かったが、本調査で確認された沢部にTピットは検出されなった。このことから、本沢部は遺物の捨て場として使われていたものと考えられる。竪穴住居跡、柱穴状ピット等の遺構は、大半が微高地に構築されているが、沢部に構築されているものもみられる。

調査区は全体的に南西側に斜行し、その標高差は約4.5mを測り、勾配率は約３％となる。

４．歴史時代の遺構・遺物について

歴史時代の遺構では、焼土遺構５基、須恵器１点が検出している。

焼土遺構は調査区中央部付近で、十和田ａ降下火山灰直下で確認されている。焼土の検出している部分は、縄文時代後期前葉の復元旧地形では沢部分にあたるが、歴史時代の遺構構築面ではほぼ平坦となっているため、遺構と地形的な関連は薄いものと判断される。

第77図遺跡全体図で示すように、本遺跡は歴史時代の遺跡との複合遺跡となっており、本調査地においても歴史時代の遺構分布が広がることがわかった。

須恵器は調査区南西端の第18号焼土遺構付近で出土した。　　（花海義人・三浦貴子）

参　考　文　献

戸　沢　充　則　編　「縄文時代研究事典」東京堂出版　1994年

加　藤　晋　平　ほか　「縄文文化の研究」雄山閣出版　1994年

秋田県教育委員会　「桐内Ｂ遺跡・桐内Ｄ遺跡
一森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘報告書Ⅴ—」2001年
「東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅰ
—居熊井遺跡・湯瀬館遺跡・大地平遺跡・上山田遺跡・堂の上遺跡・上葛岡Ⅲ遺跡—」1981年
「国道103号線バイパス工事関連遺跡発掘調査報告書」1981年

青森県教育委員会　「大鰐町砂沢平遺跡
—東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書—」1980年
「大平遺跡発掘調査報告書
—東北自動車道建設予定地内埋蔵文化財発掘調査—」1980年
「大石平遺跡Ⅲ」1987年
「十腰内(1)遺跡
—県営津軽中部広域農道建設事業に伴う遺跡発掘報告—」1999年

青森市教育委員会　「小牧野遺跡—発掘調査報告書Ⅰ～Ⅷ」1996～2003年

八戸市教育委員会　「牛ヶ沢(4)遺跡
—石灰石採掘表土堆積場設置事業に伴う第３次試掘調査—」1995年
「牛ヶ沢(4)遺跡Ⅰ
—石灰石採掘表土堆積場設置事業に伴う第１次試掘調査—」1997年
「牛ヶ沢(4)遺跡Ⅱ
—石灰石採掘表土堆積場設置事業に伴う第２～４次試掘調査—」2001年

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
「手代森遺跡発掘調査報告書
—北上川水系大沢川の河川改修工事に伴う事前緊急発掘調査—」1986年

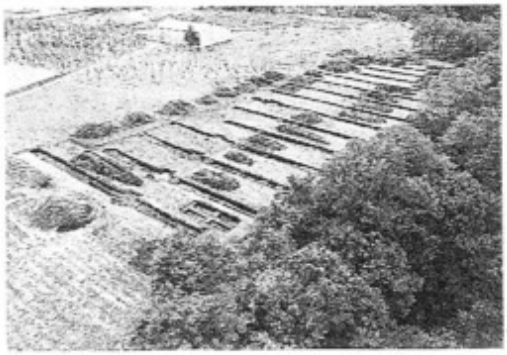
報告書抄録

ふりがな	とくべつしせきおおゆかんじょうれっせきはっくつちょうさほうこくしょ (20)
書名	特別史跡　大湯環状列石発掘調査報告書 (20)
副書名	
巻次	
シリーズ名	鹿角市文化財調査資料
シリーズ番号	74
編著者名	藤井安正、花海義人、三浦貴子
編集機関	鹿角市教育委員会（生涯学習課）
所在地	〒018－5292　秋田県鹿角市花輪字荒田４番地１
発行年月日	西暦2004年３月31日

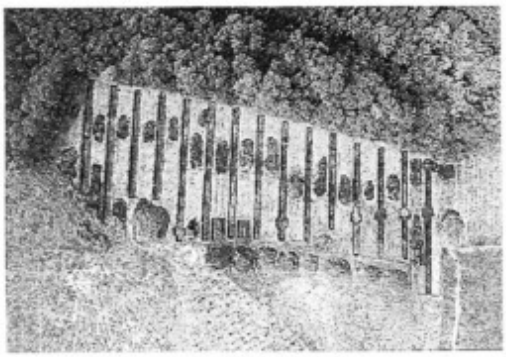
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
特別史跡 大湯環状列石	秋田県鹿角市 十和田大湯 字万座 字野中堂 字一本木 後口	05209	123	40度 16分 20秒	140度 48分 49秒	2004. 5.12 ～ 2004.10. 3	1,485㎡	史跡環境整備事業に伴う万座環状列石西側台地縁辺部の遺構分布、地形の把握

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
特別史跡 大湯環状列石	環状列石	縄文時代後期	竪穴住居跡 土坑 Tピット フラスコ状土坑 柱穴状ピット 焼土遺構 礫群	縄文土器 (後期) 石器 土製品 石製品	環状列石を中心に広がるマツリと祈りの場 平成10年度から14年度に第Ⅰ期環境整備事業を実施 平成15年度からは第Ⅱ期環境整備事業がスタート

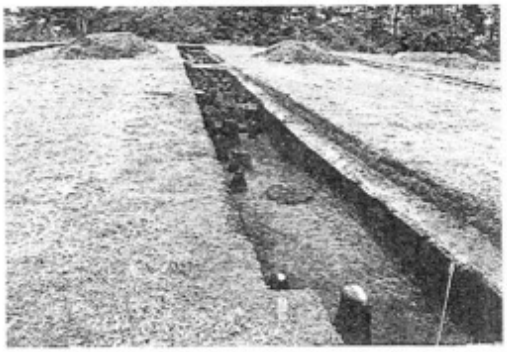
PL 3　大湯環状列石全景



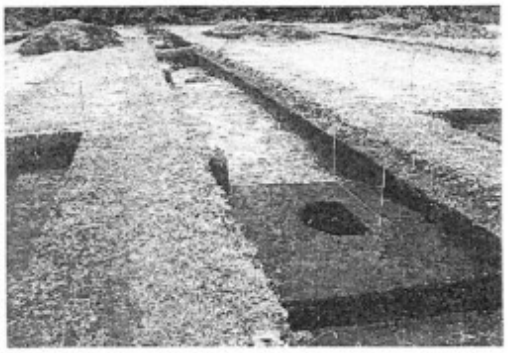
調査区全景　N→S



調査区全景（真上）

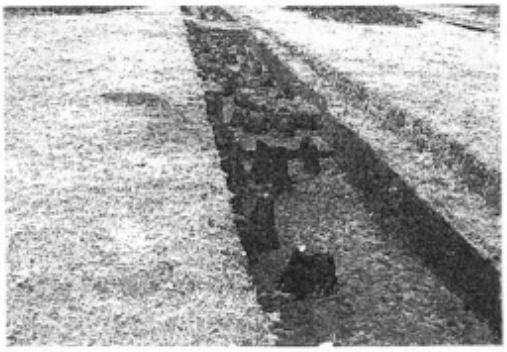


48トレンチ　SE→NW

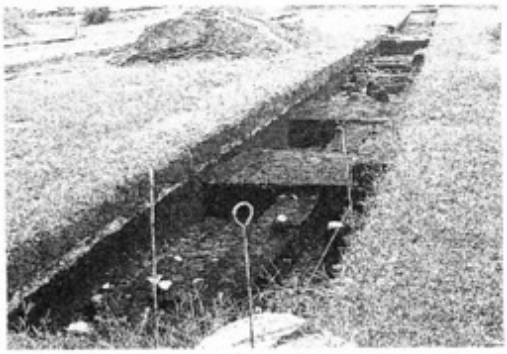


56トレンチ　SE→NW

70トレンチ　NW→SE



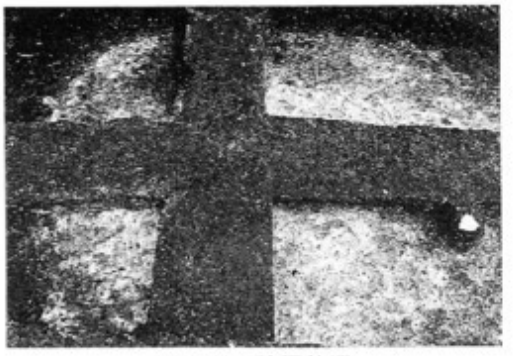
48トレンチ礫群



68トレンチ　NW→SE

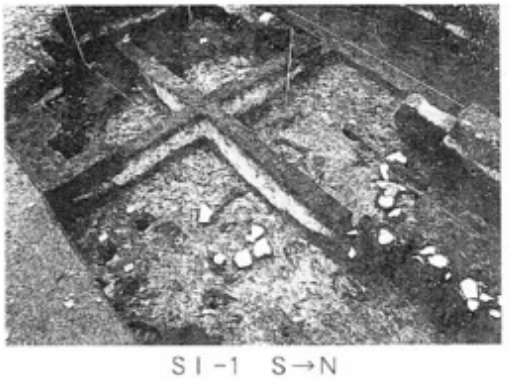
58トレンチ　沢部　確認状況

PL 4　G_4区全景、G_4区遺構確認状況、48トレンチ礫群



SI-1　確認状況

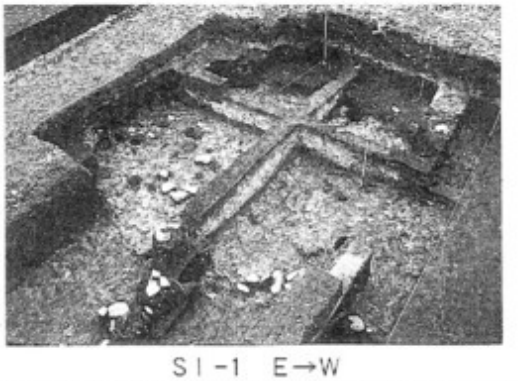
SI-1　出土土器確認状況



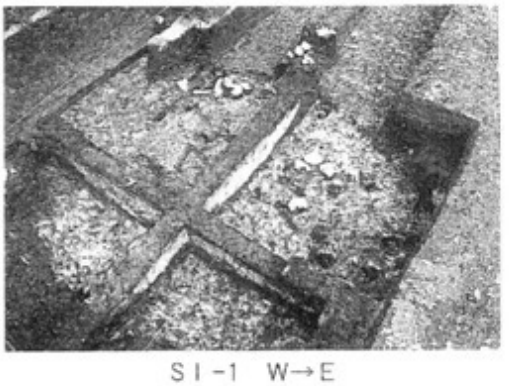
SI-1　S→N

SI-1　コの字状遺構

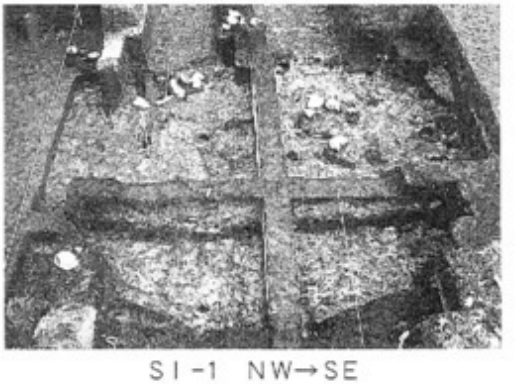
コの字状遺構確認状況



SI-1　E→W



SI-1　W→E

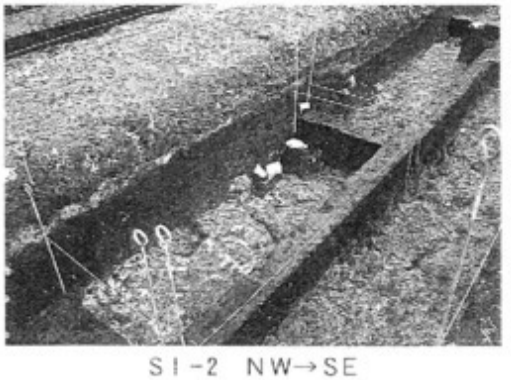


SI-1　NW→SE

PL 5　第1号竪穴住居跡

SI-1　覆土出土土器確認状況

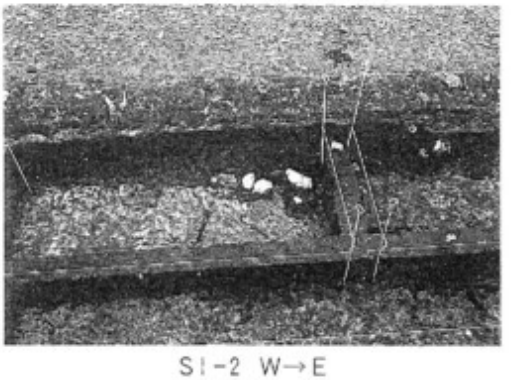
72トレンチ　NW→SE



SI-2　NW→SE

YL−50　遺物出土状況

SX(f)24・SI-2炉跡

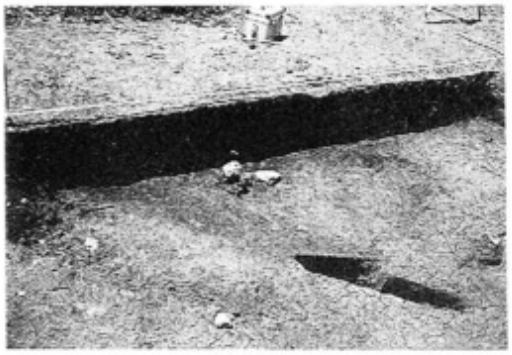


SI-2　W→E

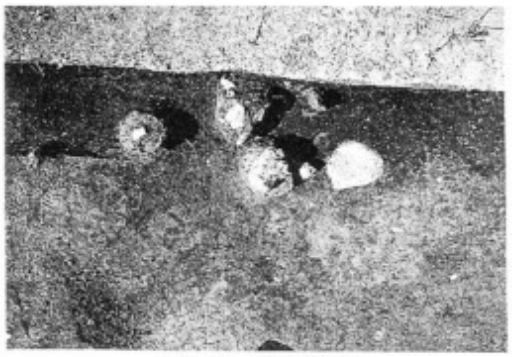
54トレンチ　NW→SE

発掘作業風景（SI-1）

PL 6　G₄区54トレンチ・72トレンチ、第1・2号竪穴住居跡、遺物出土状況、作業風景

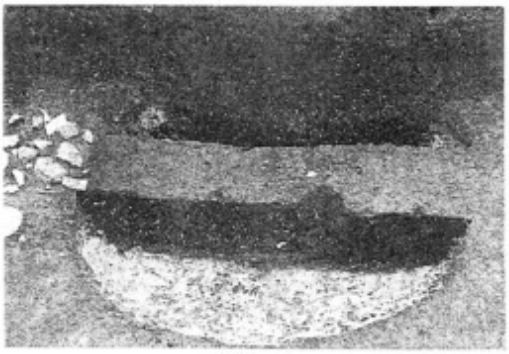


SK(T)2

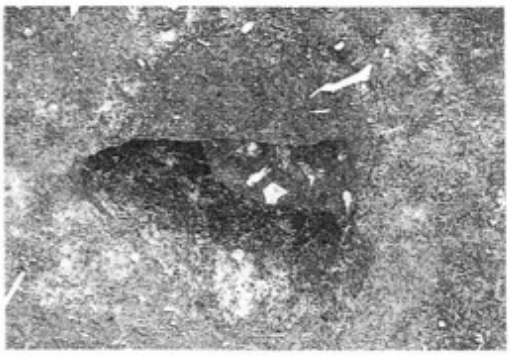


SK-1　確認状況

SK-1

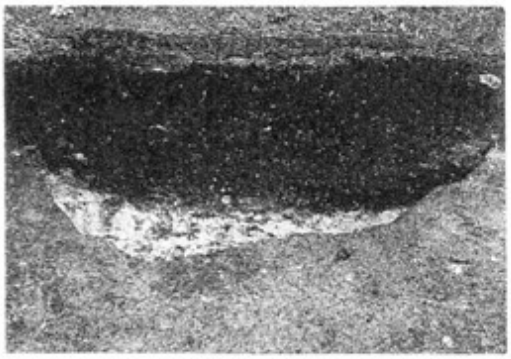


SK-4



SK-8　剥片出土状況

SK-8　Pit21

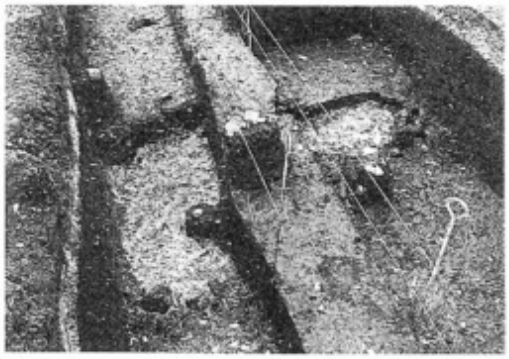


SK-5

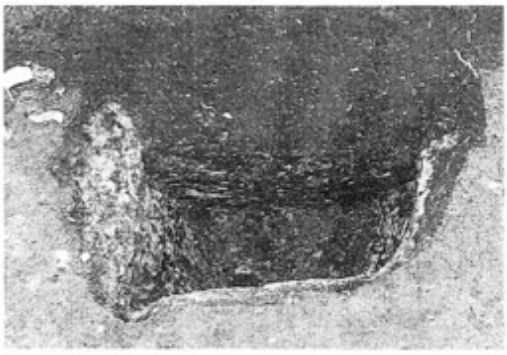
SK(F)9

PL 7　ピット、フラスコ状土坑、Tーピット、土坑遺構確認状況

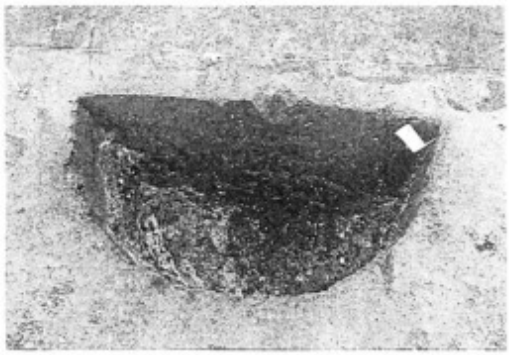
SK(T)3



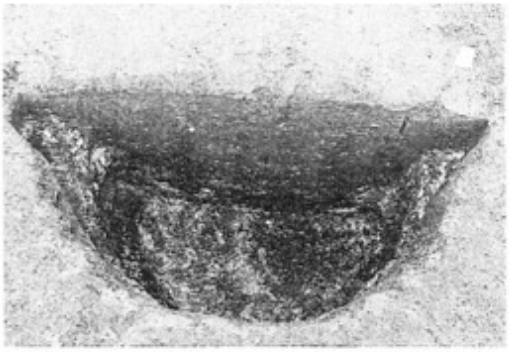
SK-6、SK-7



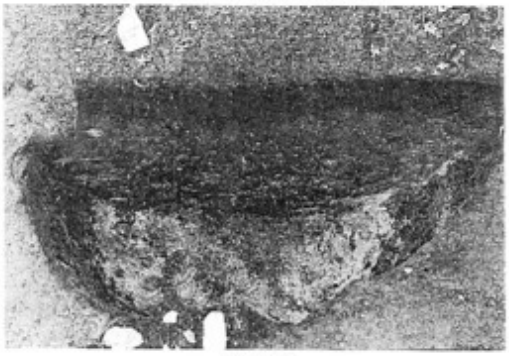
Pit 2



Pit 4 中位柱痕確認状況

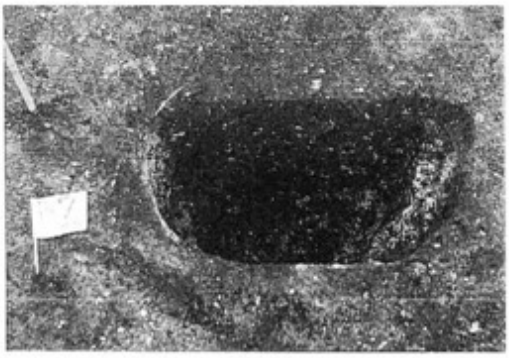


Pit 4 下位柱痕確認状況



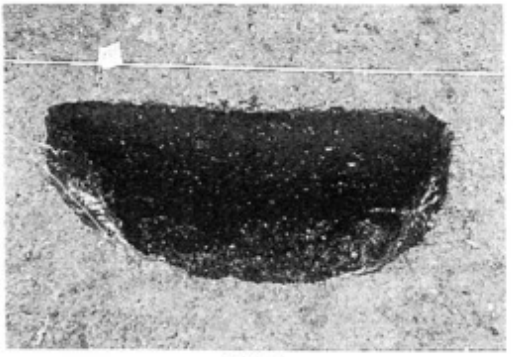
Pit 11

YP－53～54小ピット群

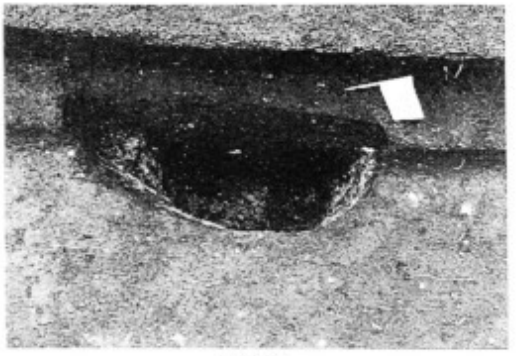


Pit 7

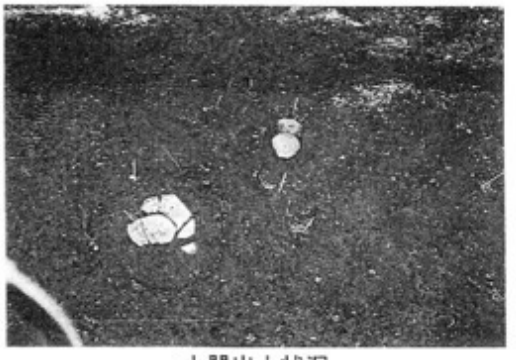
PL 8　ピット、Tーピット、土坑遺構、小ピット群、柱痕確認状況



Pit 3



Pit 12



土器出土状況

土器出土状況

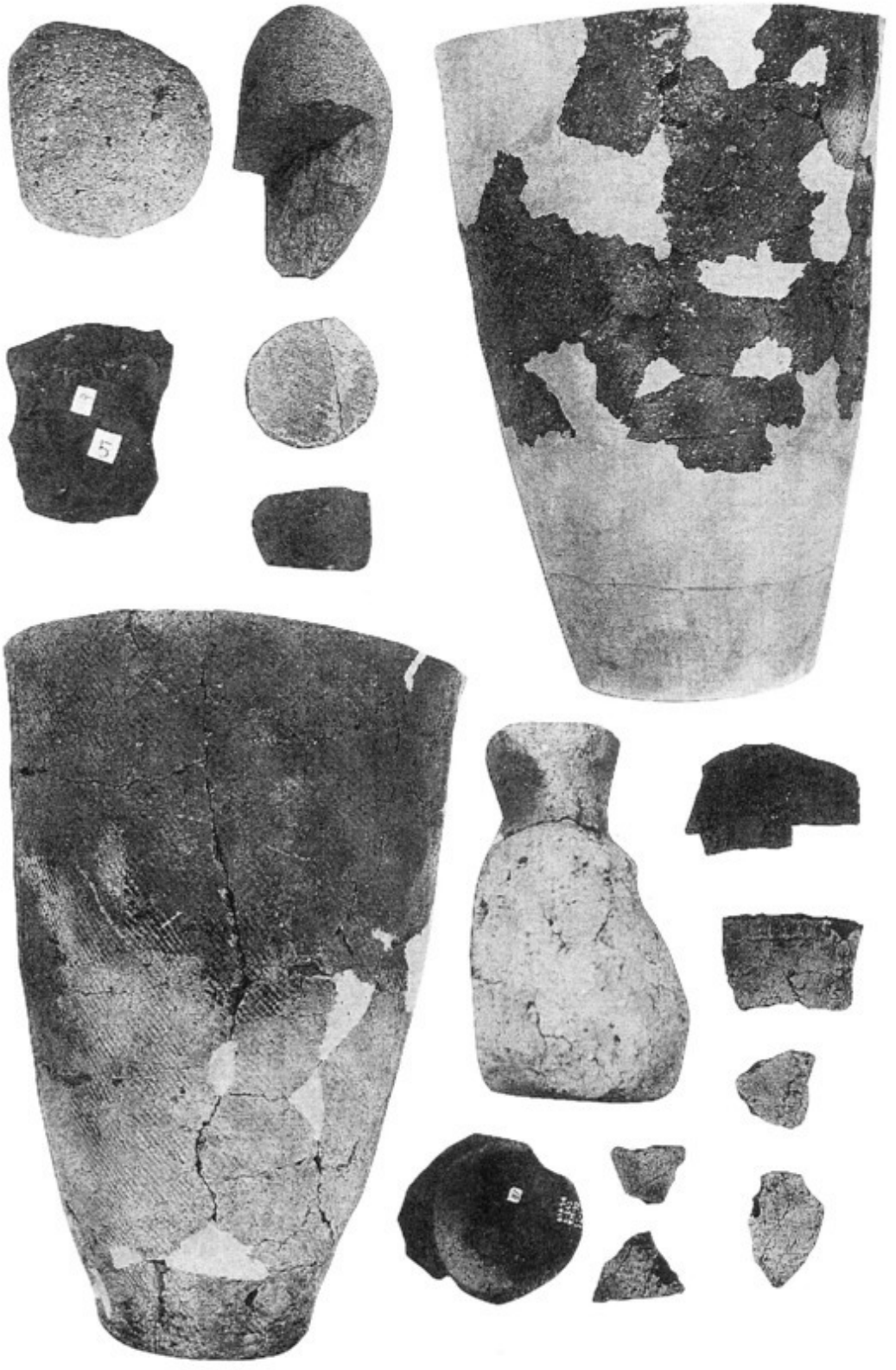
56トレンチ　NW→SE

YQ・YP－56　礫群

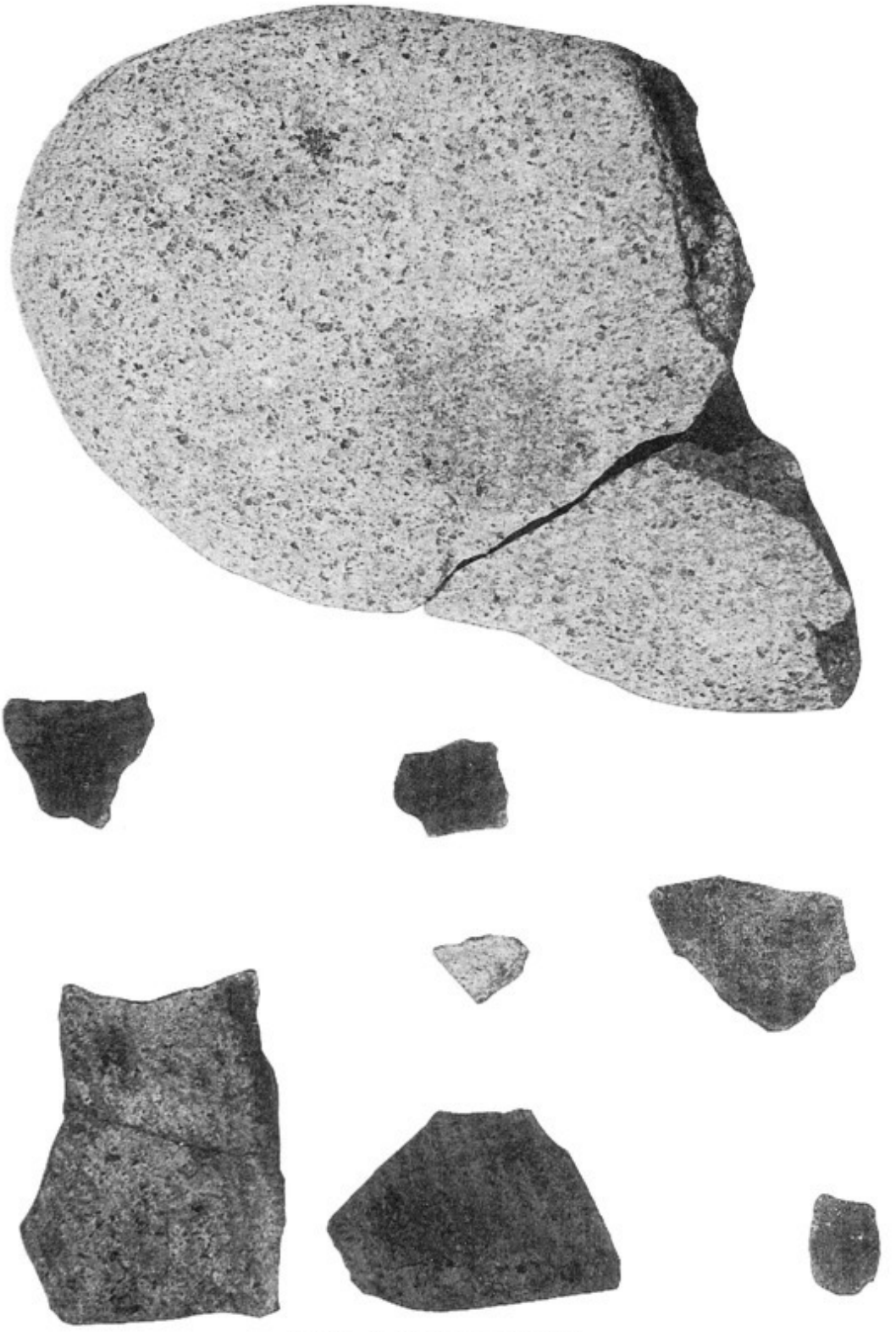
三浦貴子現地説明会(初デビュー)

ストーンサークル館　万座ホールでの説明

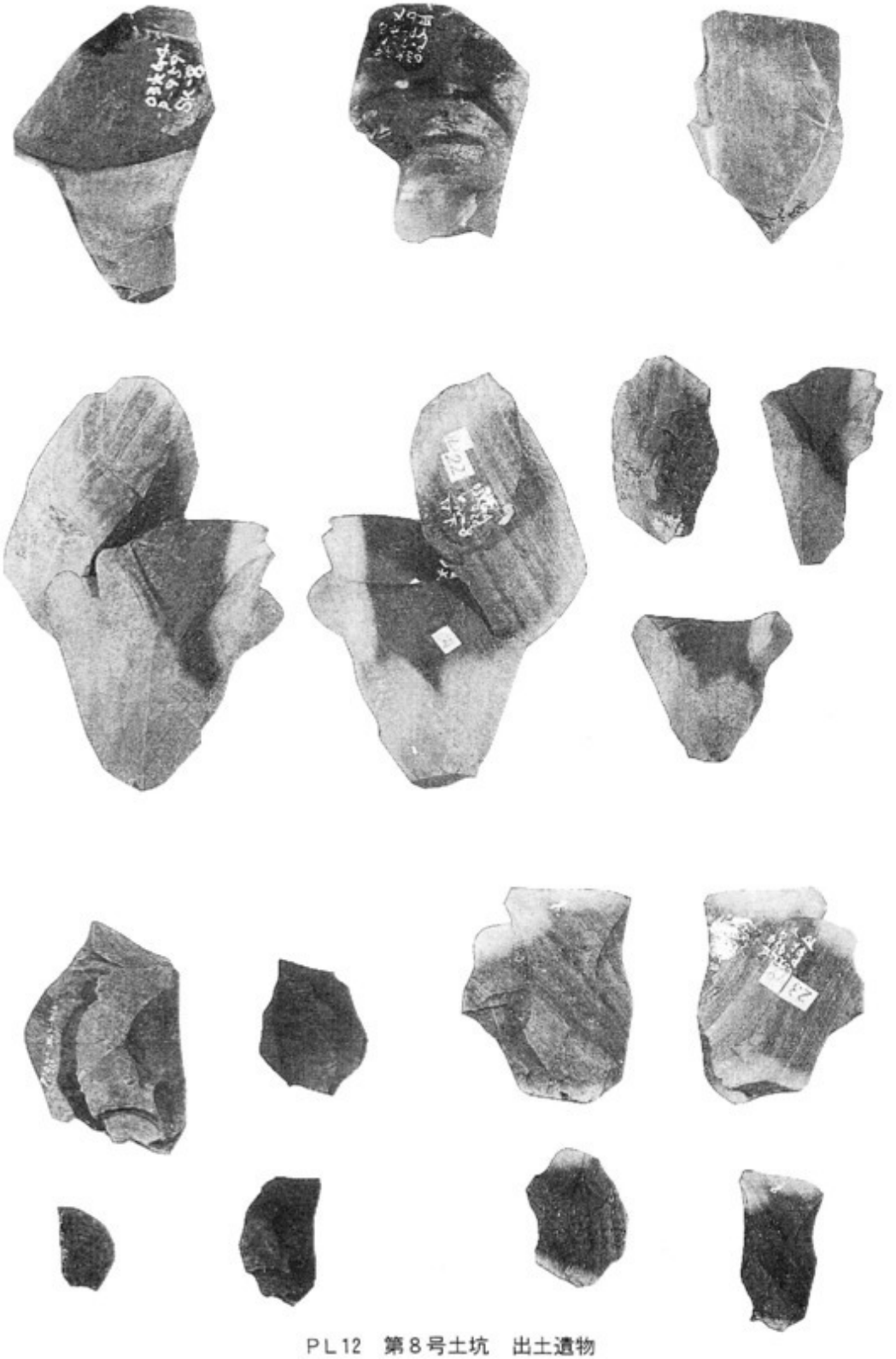
PL 9　ピット、遺物出土状況、56トレンチ、礫群、現地説明会風景



PL10　第1号竪穴住居跡出土遺物

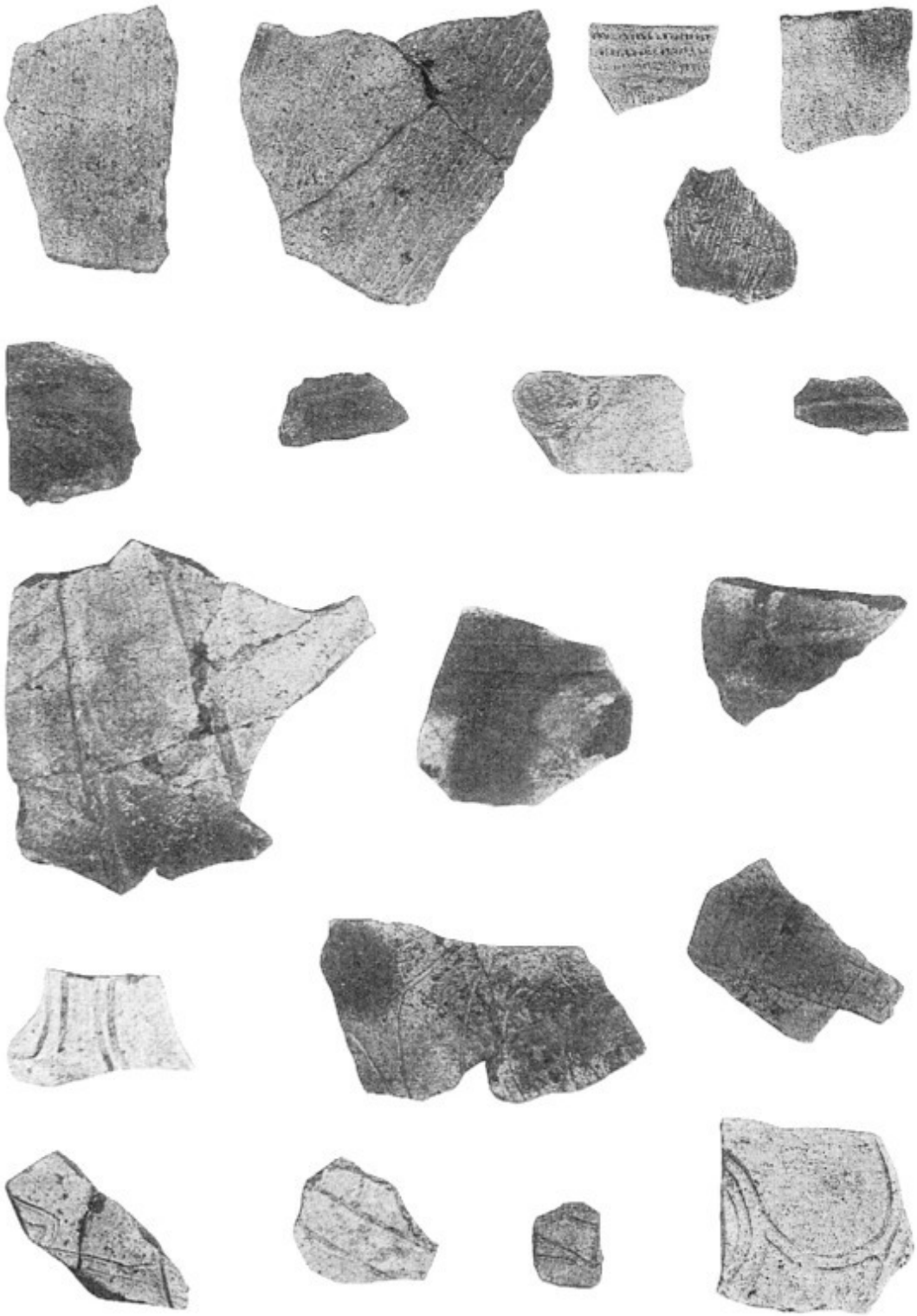


PL11　第1号土坑　出土遺物

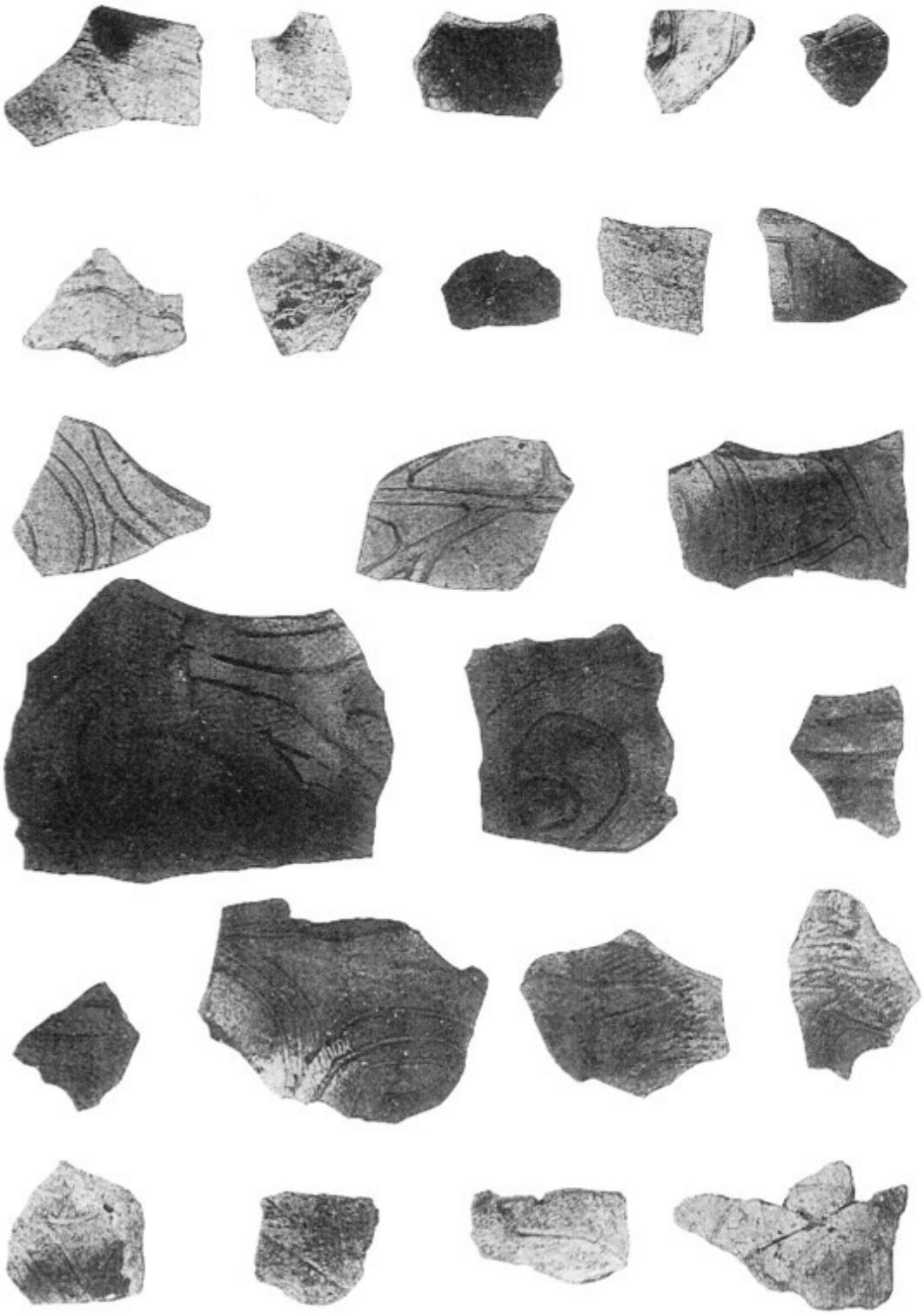


PL12　第8号土坑　出土遺物

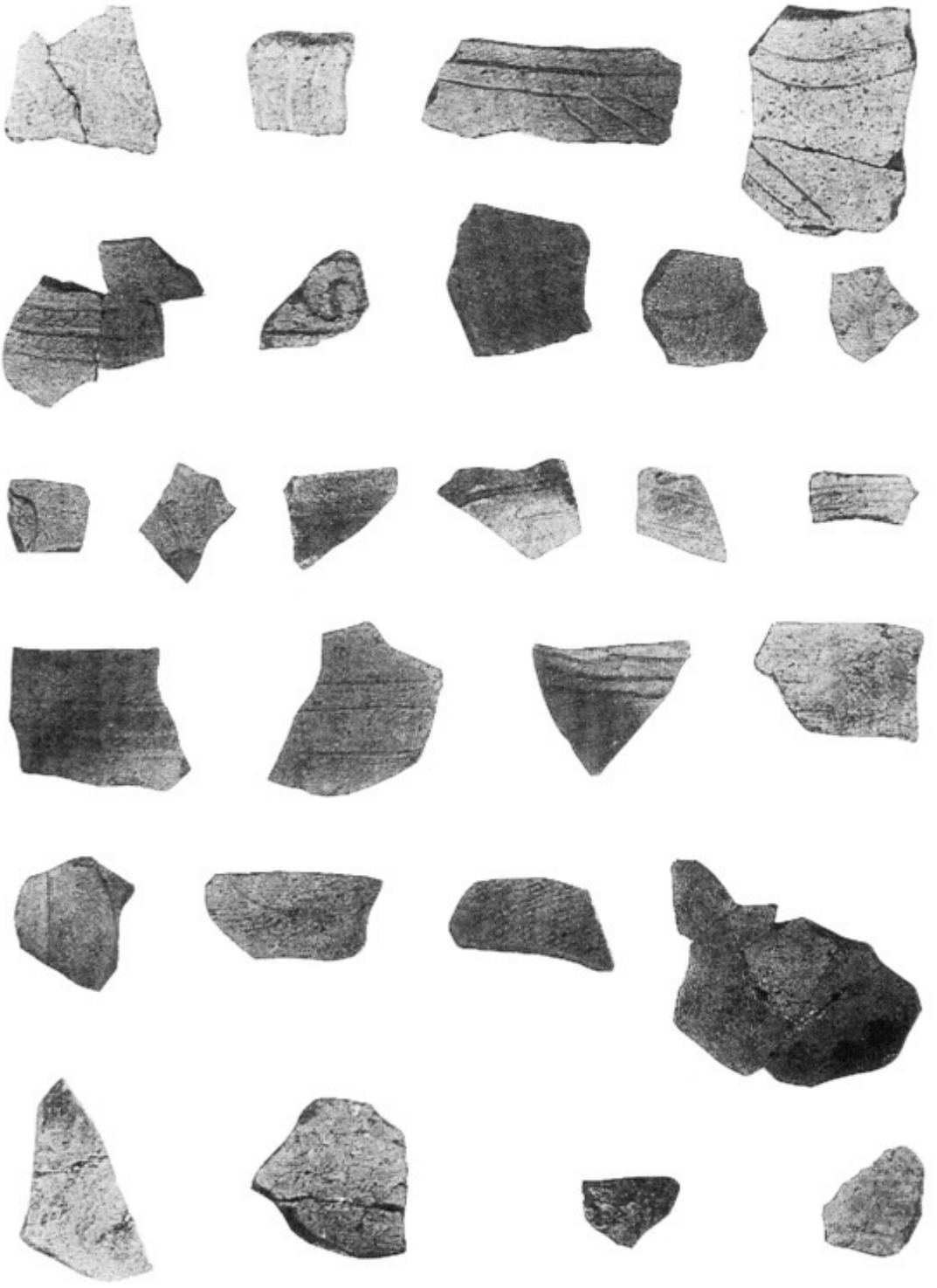
PL 13　遺構内外出土遺物(1)



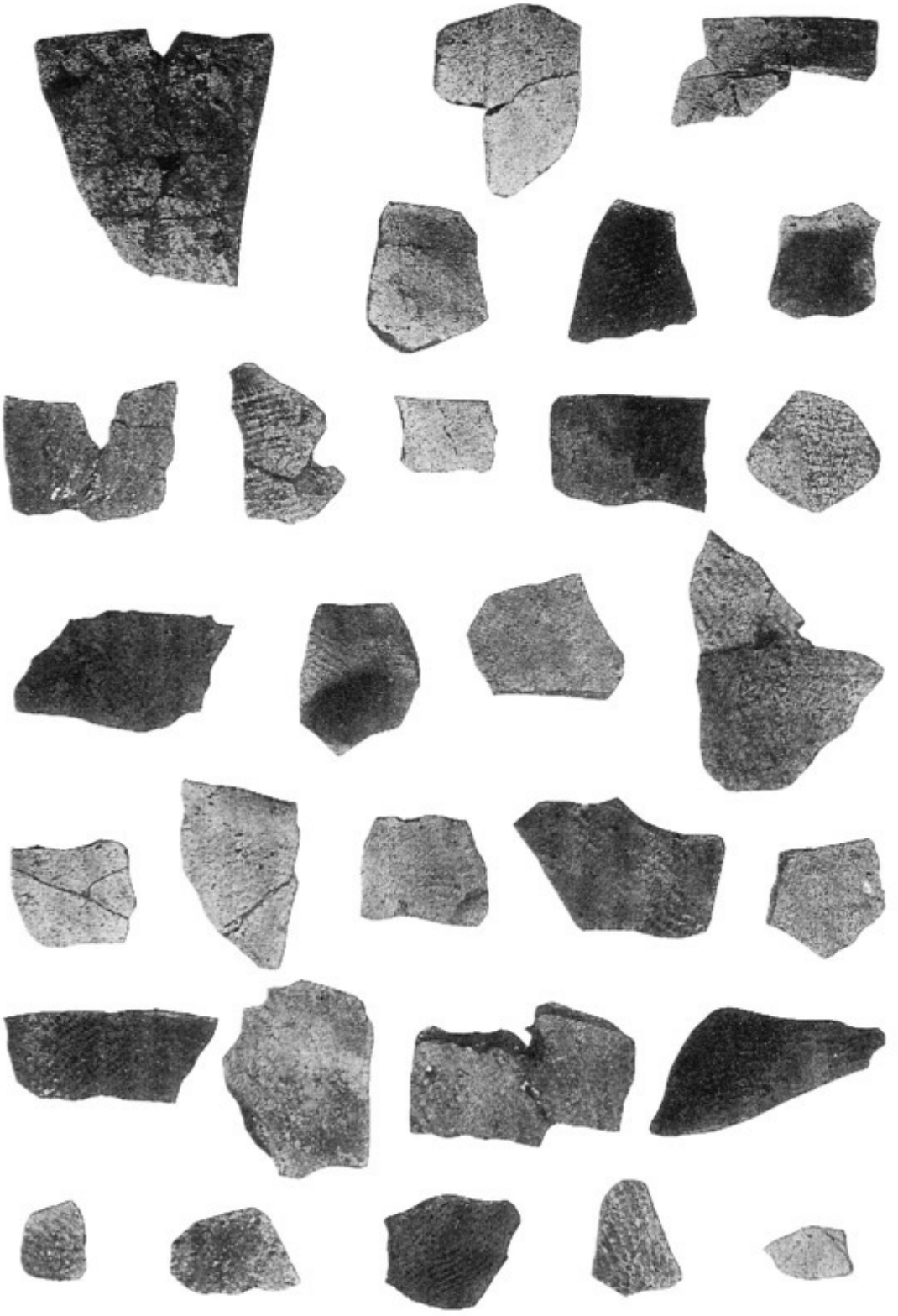
PL14　遺構外出土遺物(1)



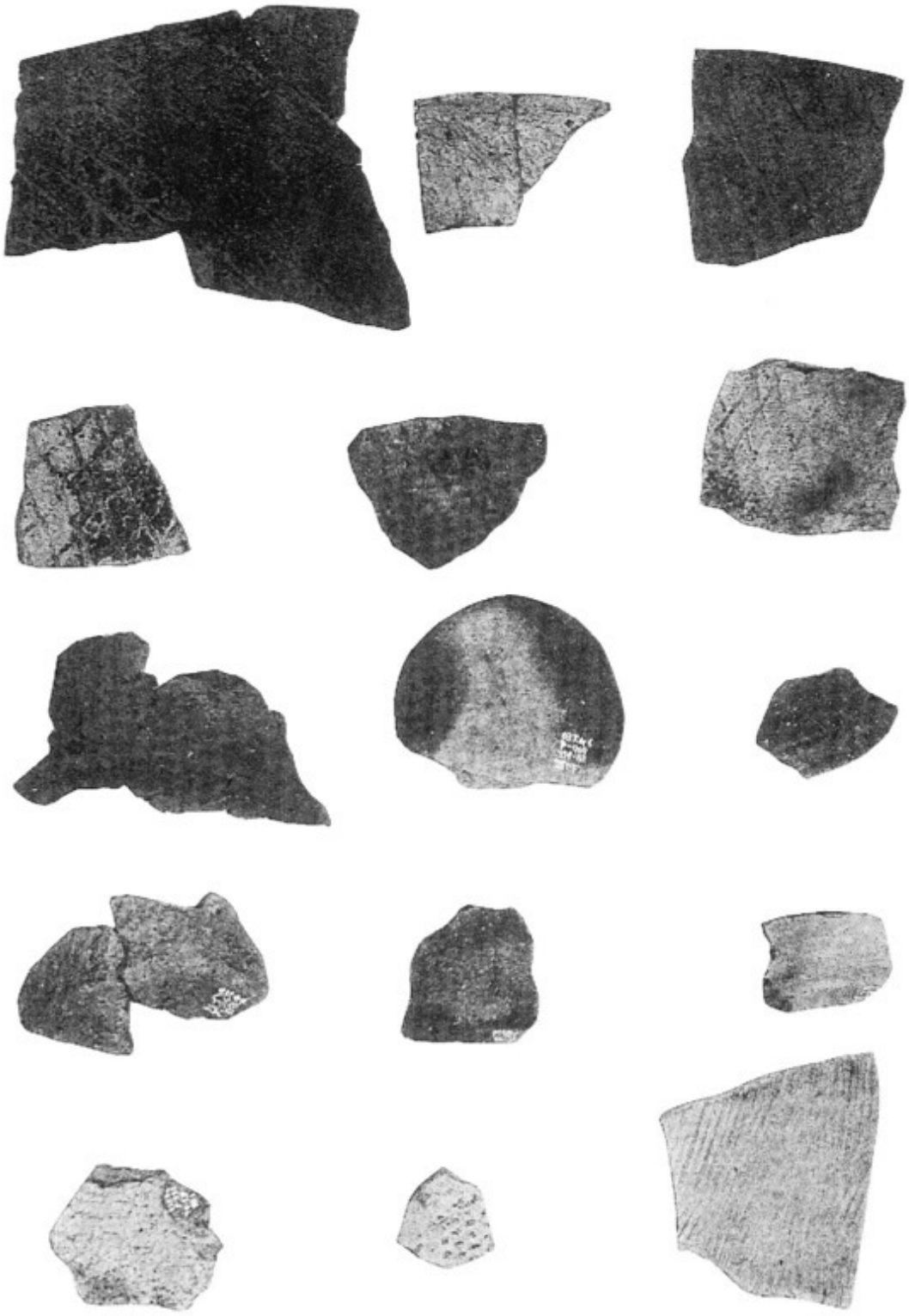
PL15　遺構外出土遺物(2)



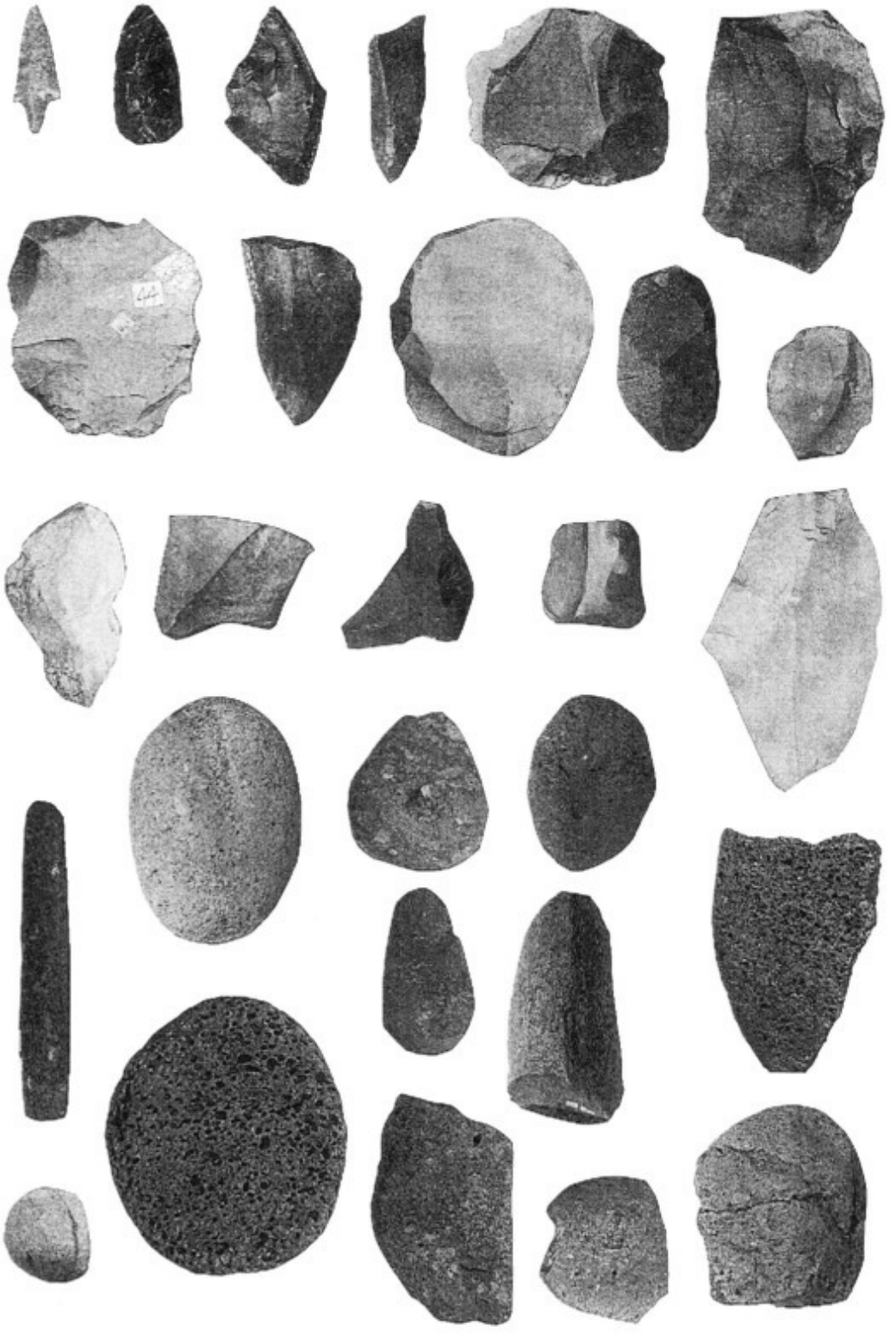
PL16　遺構外出土遺物(3)



PL 17　遺構外出土遺物(4)



PL18　遺構外出土遺物(5)



PL19　遺構内外出土遺物(2)

PL 20　遺構外出土遺物(6)

鹿角市文化財調査資料74

特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書（20）

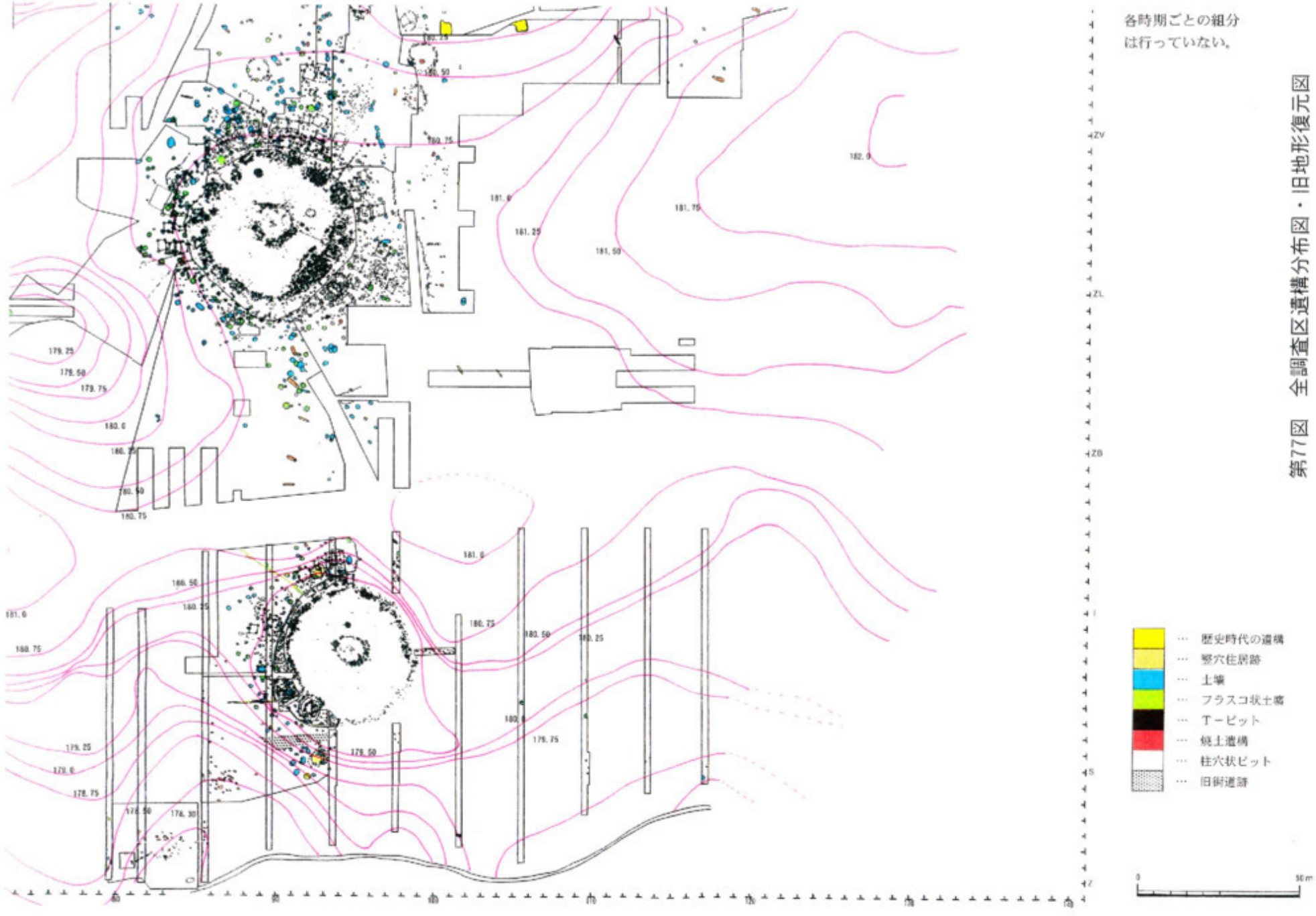
発行年月日　平成16年３月31日
発　行　者　鹿角市教育委員会
郵便番号 018－5292
秋田県鹿角市花輪字荒田４番地１
電　話　0186－30－0294
（生涯学習課文化財班）
印　刷　所　㈲大館孔版社
郵便番号 017－0042
秋田県大館市字観音堂316－1

鹿角市調査資料74
大湯環状列石発掘調査報告書(20)

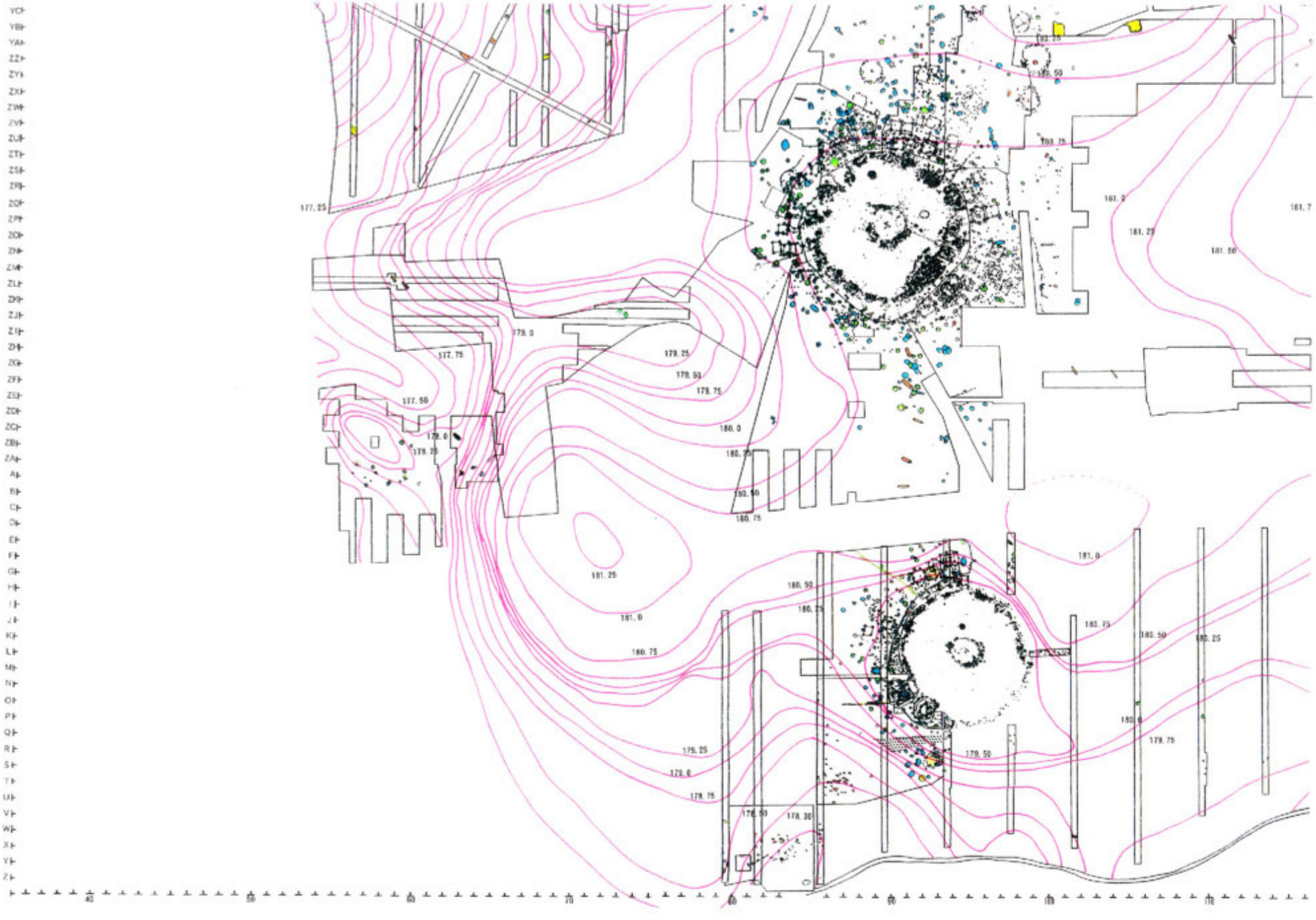
赤線…縄文時代後期前葉
Ⅲd層上面旧地形復元
等高線

※遺構については、
各時期ごとの組分
は行っていない。

第77図　全調査区遺構分布図・旧地形復元図



第77図　全調査区遺構分布図・旧地形復元図


177.25
177.75
177.50
179.0
179.25
179.50
179.75
180.0
180.25
180.50
180.75
181.25
181.0
181.50
181.75
175.25
179.50
178.75
178.50
178.30
40
50
60
70
80
90
100
110